

第一篇 西山石窟各説

— 圖版卷首、二三 —

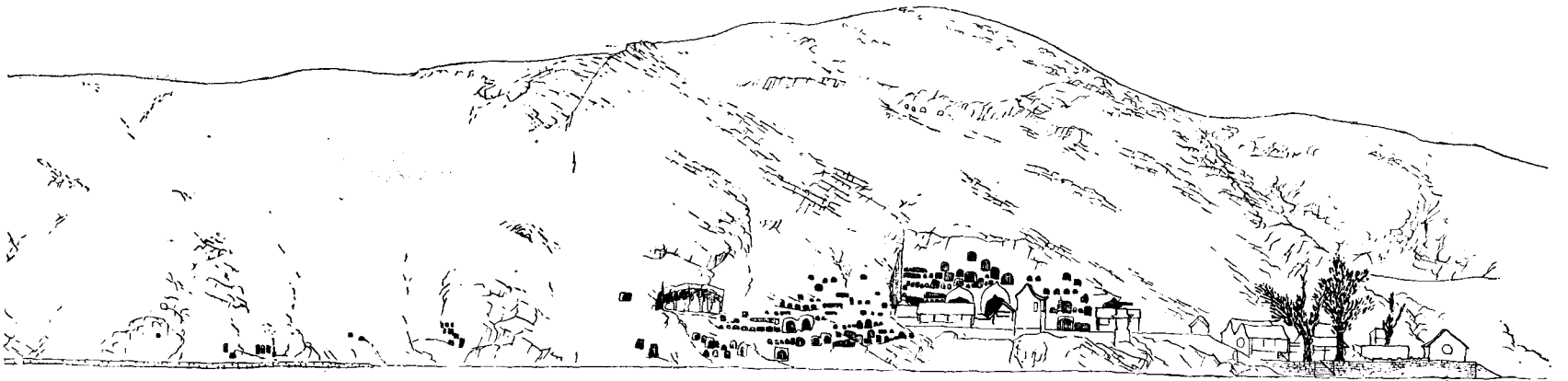
龍門街を南に下ると、一二町麥畑があつて、いよいよ伊闕の關口にさしかゝる。東西にほゞ同高の岩山が相對してゐる。いま西側を西山、東側を東山とかりによんでゐるが、西山には北魏以來の諸石窟があり、唐の石窟も敬善寺、萬佛洞、奉先寺などの主要なものがたちならび、東山には則天武后ごろの石窟四五と、白樂天で有名な香山寺とがある。^{第三}
圖

古來帝都を守る要衝であるから、春秋時代からすでに關塞を置いて守り、その後もつねにこれにならふ。北魏にも關口の關を置いて帝都のかためとしたことは、太和年間の造像記^{錄文九八二}五八一にみえてゐるし、また正始間の造像記^{錄文九八四}九八四にもあることである。²⁾北魏は洛陽に都をさだめると、まづこの西山に石窟を營んだが、隋唐時代はこれをうけついたのである。西山の石窟は東面して口をひらき、その下を河にそうた道が走つてゐる。石窟の連續はおよそ南北十町にわたつてゐるが、大體において南北の二區に分けられる。北から數へて第一洞から第六洞までが北の一群をなし、第七洞から第二十一洞までが南の一群をなしてゐる。³⁾いま石窟北群の北頭に潛溪寺といふ寺がある。こゝに齋祓洞（第一洞）、賓陽三洞（第二、第三、第四洞）の諸石窟があり、やゝはなれて敬善寺洞（第五洞）、摩崖三佛（第六洞）等がある。南群の中心はどこからも見える奉先寺（第十九洞）で、その左右下方に諸石窟が口をひらいてゐる。いま奉先寺の下、唐字洞（第十八洞）の前に橋があつて、こゝで伊水を越えるやうになつてゐる。

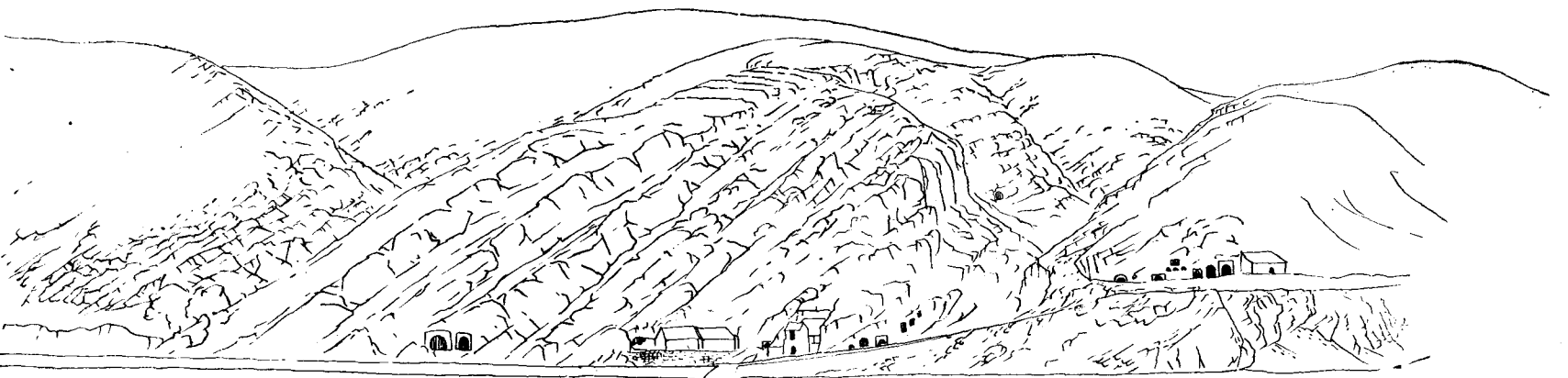
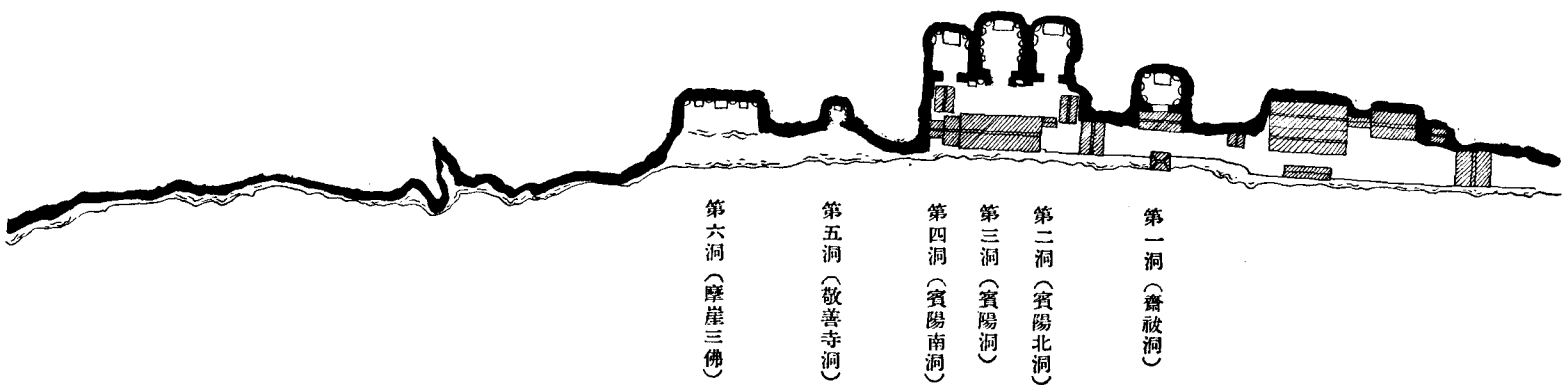
¹ 北魏の帝都は漢魏晉の洛陽で、いま白馬寺驛の東にあり、東西六支里餘、南北九支里餘、いまその故址がある。隋唐の洛陽は西十八里の地へうつり、いまの洛陽城を東北にふくみ、洛水の南北にまたがり、南壁はいまの關帝廟附近に至る。東西十五里餘、南北また十五里餘、いまもほゞその跡をトレースすることができ（第一圖參照）隋杜寶の『大業雜記』（說郭所收）には皇城の正門たる端門から都城南壁正門まで九里、また同じく端門から龍門まで二十里といつてゐる。

² 石刻錄文五八一には北魏遊獵校尉司馬解伯達の造像記で、その文には都館關口遊獵校尉司馬といふ。正光五年の造像記（錄文九八二—九八四）にも關口關曹史とか關口關功曹とかの名稱がみえる。『隋書』卷三〇地理志、河南郡河南縣の條に關官があるのは伊闕關のことであらう。

³ 南群は萬佛洞附近、蓮華洞附近、第十四洞から奉先寺に至る一群、奉先寺以南の古陽洞を中心とした一群にわかれる。



潛溪寺



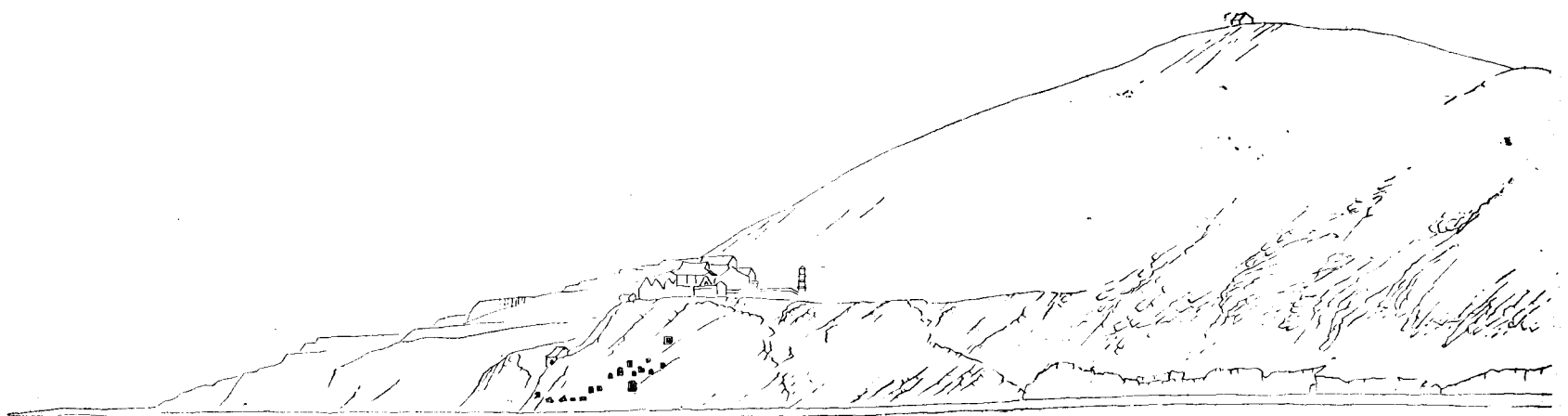
看經寺

萬佛溝

擂鼓臺

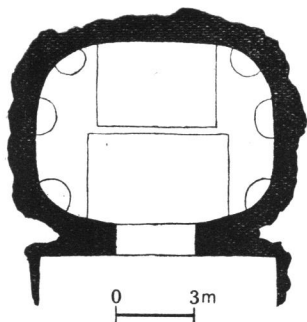


第三圖 (Fig. 3) 龍門西山全圖 香山寺



第四圖 (Fig. 4) 龍門東山全圖

齋祓洞〔第一洞〕

第五圖 (Fig. 5)
齋祓洞平面圖

龍門街を南下して伊闕の闕口に
さしかゝると、この西山の麓に、
泉が湧いてゐて、こゝに寺があり、
これを潛溪寺とよんでゐる。いま
は、まつたく荒れはてゝゐるが、
賓陽洞(第三洞)を中心にして、そ

の前面にいく棟かの堂宇がたちならんでゐる。その北門外に東
面してひらかれたのが、こゝにいふ西山北頭の第一洞、つまり
齋祓洞である。一名こゝを羅鼓洞ともいふ。¹⁾

洞内は左右九メートル四〇に奥行六メートル六六、ほぼ楕圓
形をなし、天井は圓天井で、高さ約一〇メートル六〇。²⁾ 第五
尊の坐佛は大きく中央につくり、左右の壁に二羅漢、二菩薩、
二神王の像をほる。面相、姿態が端麗であつて、隋、もしくは
初唐の作風をしめす。³⁾ 第六 本尊はまるい大きな面貌に脣あつく、

眼も大きく、鼻梁よくとほり、肩はやゝ角ばつて、衣は兩肩か
ら全身をおほうて、臺座の上にふかくたれ、いはゆるもかけ座
の形式をとつてゐる。襞は丸味のある、しかし襞展する断面を
もつてゐる。右手をあげ五指をのばし、左手は膝の上にさし出し小指と薬指とを折つてゐる。光背は蓮瓣と七佛のみ
ややあきらかで、身光の火焰は細線のほりがあるが、よく見えない。³⁾

兩脇侍菩薩は端麗な優れた彫刻である。⁴⁾ 第七 右脇侍は蓮實のやうなものと飾環¹⁾をもち、左脇侍は拂子と水瓶とをも



第七圖 (Fig. 7) 齋祓洞右脇侍

第六圖 (Fig. 6) 齋祓洞本尊坐佛

¹ 羅鼓といふのは泉水の音に對する擬聲である。この下にも泉水がわきでゐるから、こゝを羅鼓洞とよぶのも、あながち所以なきことではないとおもはれるが、關百益の『伊闕石刻圖表』には摩崖三佛より南で泉のわいてゐる自然の裂罅をさして羅鼓洞とよんでゐる。そしてこの方が一般におこなはれてゐるらしい。第一洞を羅鼓洞とよぶのは大村氏以外にみられない。

² 關野貞、常盤大定兩博士『支那佛教史蹟』第二冊大正十五年刊、七一頁。

³ これに比較されるべき佛像は隋代と推定されてゐる山東益都の駝山第三洞、雲門山第一洞 (O'Steen Chinese Sculpture, Pl. 338, 347) 初唐の山東歷城、神通寺の諸大佛 (『支那佛教史蹟』第一冊、圖版七四、七五) 等であらう。

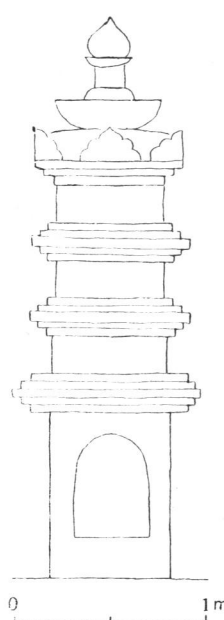
⁴ こゝでかりに飾環とよんだものは北魏から北齊隋頃の菩薩像のもちものとしてふつうなもので、てうど尖拱のやうなかつかうをした鑲で、いつもたれた手の方にさげてゐる。しかし、その實何であるかはよくわからないのである。

⁵ 拂子、つまり麈尾である。麈尾と水瓶とをもつた菩薩像は、すでに雲岡石窟にもあらはされてゐる。おそらく觀音像であらう。本尊もまた賓陽北洞などと同様に阿彌陀像であらう。

つてゐる。⁵⁾ その形式は、瓔珞や肢體のやゝ硬いあつかひとともに、なほ北朝末の形式を踏襲してゐる。⁶⁾ 羅漢像二、神王像二も雄勁で、なかなか優秀な作である。

關野博士は、伊闕佛龕碑によつて、これを魏王泰の造像とするから、したがつて貞觀十五年頃の造營といふことになるのであるが、これはもつとも穩當な解釋であると思ふ。くはしいことは伊闕佛龕碑のところて述べたい。

洞外石塔 洞外上方に獨立した石塔がある。⁷⁾ 三層塔上に大きな基壇と覆鉢をもつてゐる。やゝねは三段、のきも三段、都合五段の段成で、上下に遞減してゐる。この段成のやゝねは、初層のみ高い塔身と相まつて、塼築の塔形を反映してゐるものである。頂上には塔身ともみえる大きな基壇があつて、その上にうけばながあり、そして簡略な相輪部となる。



第八圖 (Fig. 8)
齋鞍洞外石塔

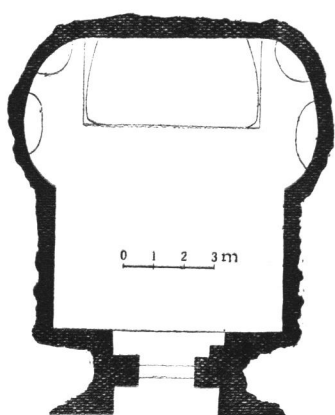
かやうな塔形は龍門にも獅子洞外浮彫^{第三十圖} 第十四洞外浮彫^{第五十圖} にも類例があり、おそらく初唐、盛唐の造建であらう。⁸⁾

賓陽北洞 (第二洞)

潛溪寺の中心をなす三洞は、ほゞ同大の石窟で、相ならんでゐる。むかしの伊闕三龕はこれであり、いまはまた賓陽三洞とよぶこともある。

その北洞が、こゝにいふ第二洞である。

左右七メートル八七、奥行九メートル七〇。¹⁾ ほゞ方形プランの奥壁に大きな龕がある。天井はまるく、窟頂中央に蓮華文があり、周



第九圖 (Fig. 9) 賓陽北洞平面圖

賓陽北洞 (第二洞)



第十圖 (Fig. 10) 賓陽北洞左脇侍諸像

⁶⁾ 脇侍菩薩もやはり山東益都の駝山第二洞、雲門山第一、第二洞に近似してゐる。(O. Siren: *ibid.* Pl. 327, 328, 329) また隋開皇の年號ある莊嚴の豐富な觀音像にはこの脇侍菩薩に似た一群の形式があり(たとへば大村西崖氏『支那美術史彫塑篇』圖版二八三)、もつてこの種菩薩像の年代を推定する資料とすることができよう。

⁷⁾ この大きな覆鉢基壇が塔身にみえ、ちよつと四層塔ともみえるが、造建者は三層塔のつもりであらう。

⁸⁾ この塔が初唐、盛唐に盛行したこと、塼築塔の形制を反映してゐることについては水野『房山雲居寺石塔記』(東方學報、京都第五冊副刊、房山雲居寺研究)昭和十年刊、をみよ。

¹⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊、七二頁。

²⁾ 門口左右の神像はごくあさい彫りである。肥満した體軀に甲冑をつけ、魁偉な容貌をあらはしてゐる。その作ゆきをみると、隋代もしくは初唐の製作とみられる。北魏の製作とはどうしても考へられない。右方の像は右手に金剛杵のごときものをもつてゐる。左方の像は何ももつてゐないが、一對の金剛力士像をあらはしたものであらう。

³⁾ これはごくあさい彫りであり、また表面が粗で、未完成のごとくみえる。つくられた時代については、北魏ともいひきれないし、さうかといつて唐代だともいひにくい。洞内の様子からいつて、前壁門

圍に飛天があり、天蓋様の裝飾もある。²⁾ 第九
圖

石窟奥壁は左右にやゝふくれてくぼみ、深い龕形をなし、中央に坐佛、左右に二羅漢あり、また左右壁にまはつて二菩薩の像がたつ。⁹⁾ 前壁入口の左右に神王の像があり、左右壁の腰壁には賓陽洞のごときうすい浮彫の神像をおのおの五體配してゐる。しかしこれは賓陽洞のごとき十神でなく、奏樂の天人像であるかも知れない。その高さは約九六センチ。

佛像是一般に雄偉にして、隋もしくは初唐の作風をしめす。⁴⁾ 本尊坐像の面貌は齋祓洞などやや趣をことにし、たとへばこの像の方が頸ははるかに太い。しかし、その頰から顎にかけての豊かで強い感じや、どこかに硬い表現は共通してゐる。



第十一圖 (Fig. 11) 賓陽北洞本尊坐佛

¹⁰⁾ 右手はあげ、その薬指、小指をまげ、左手は前に出し、掌を下に垂れ、小指と薬指はまげてゐるらしい。衣の褶はやゝ顯著でなく、いはゆるもかけ座もない。脇侍菩薩や羅漢像は本尊よりも、より以上に第一洞の菩薩ににてゐる。¹⁰⁾ たゞ左脇侍が明白に寶冠上に化佛をもち、觀音像であるらしいのは、前者とちがふところである。おそらく本尊は阿彌陀像であらう。

光背の蓮華文や唐草文や火焰はほとんど線刻のやうなもので、天井の裝飾とともに萎縮して、⁵⁾ 作ゆきは上々といひがたい。床にも賓陽洞と同様に蓮華文の浮彫裝飾があるが、その形式はまつたく隋唐の式¹¹⁾ 影である。また闕の上にも唐草文様が磨滅しながらのこつてゐる。⁶⁾ 拓影上部に三角形と垂幕との天蓋様の裝飾もあるが、萎縮してゐる。窟頂はほぼ完全なドームである。

この窟は全體に壁面があらけづりのまゝのこされて、どことなく未完成の觀をあたへる。それに窟頂などは正しい球形に近く、その點は賓陽洞など、大いにちがつてゐる。おそらく北魏の未完成窟を利用し、唐初に造營したものと⁷⁾ 思はれる。賓陽洞を念頭におきつゝその主要な部分に尊像をほりつけたものであらう。

洞外、第三洞との中間に北齊の造像碑がある。簡単な碑形で、螭首も粗略な作である。その北側にあるのはこの造像記の佛龕であらう。五尊の坐佛であるが、はなはだおぼつかない作である。垂衣の下に蓮瓣の座がみえ、基壇には香爐を中心にして獅子、力士像がある。

口左右の神像と關係があるやうにみえる。

⁴⁾ 本書一〇頁註(3)參照。

⁵⁾ 中央に二重の蓮華文を配し、まわりに飛天を配した上に、その下ばに天蓋様の裝飾をつくつたところは、まつたく賓陽洞、および賓陽南洞と同じである。しかし、いまは後世の加飾のために模糊としてゐてよくわからない。たゞその意匠構成の賓陽洞との一致からいへば、北魏のときの作とも考へられるが、はつきりとはいへない。

⁶⁾ 闕の唐草文様も、床の唐草文様と同様で、賓陽洞の床文様とはあきらかに相違する。いつの作とは明確にいへないが、北魏の作でないことはたしかであらう。しひてその年代を考へれば、おそらく隋代か、初唐ごろのものであらう。

⁷⁾ これを唐初といふのは伊闕佛龕碑を考慮にいれてのことである。

⁸⁾ この碑は、シャヴァンヌには大唐貞觀十五年正月廿一日の洛州郷城老人造像碑(錄文八四四)としてゐる。洛州郷城老人造像碑は、『中州金石考』には「大齊□□年正月廿一日」とし、『金石萃編』卷二七には北魏太和十七年とし、『潛研堂金石文跋尾』卷一には北齊の碑としてゐるが、なほ貞觀の刻ではないかと疑つてゐる。シャヴァンヌはこれにしたがつたまでゝあつて、とにかく、この碑についてはいろいろと説がある。しかし、われわれがこの碑を現地に見たときには末尾につきの一句があつて、

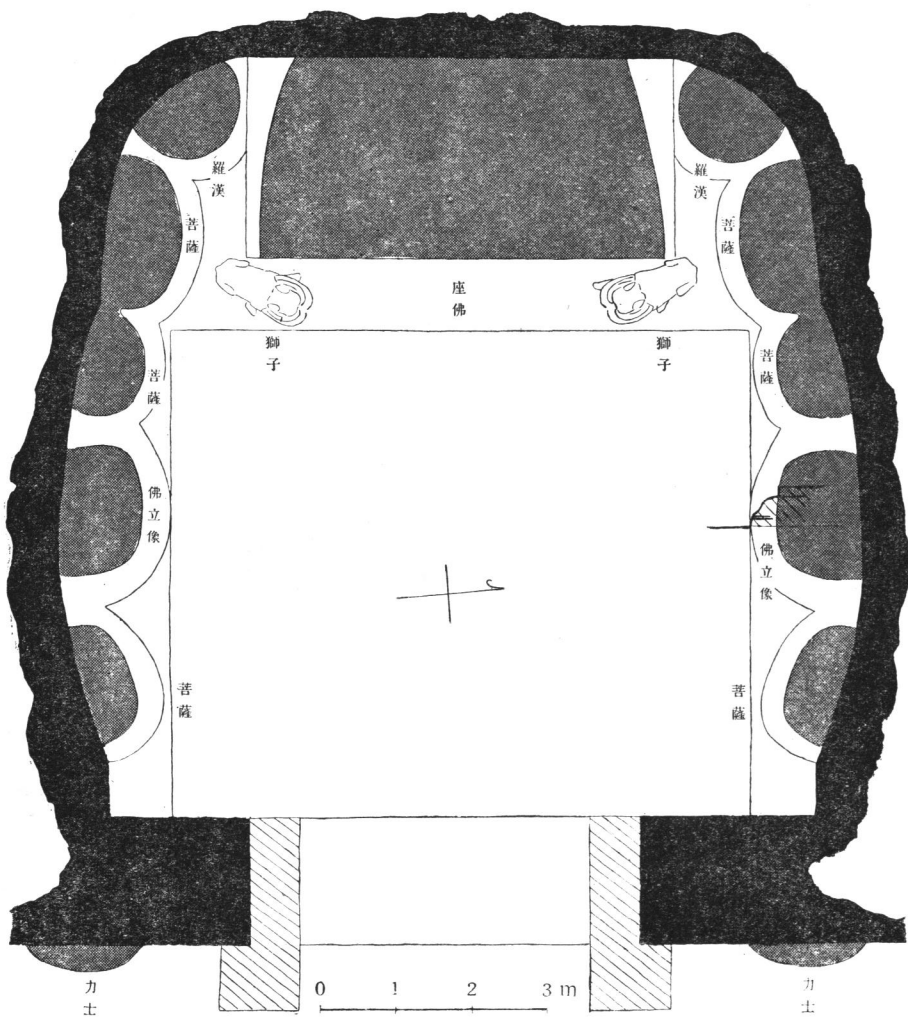
同此、云不、名昭、一下齡、大齊大、亥八、日丙、ともかく北齊の碑ではあるが、日付がちがひ、末行の文字もちがひ、別の碑であるとおもふ。たしかなことはいま何ともいへないから、記して將來の調査をまつほかはない。大はおそらく天保か、天統で、それに亥の年にあたるものは天保六年(西曆五五五)か、天統三年(西曆五六七)のいずれかである。

賓陽洞〔第三洞〕

— 圖版四 —

第二洞にすぐ隣接する第三洞はいはゆる賓陽洞である。賓陽洞の名はいづから起るか知らないが、この窟は龍門諸窟中もつとも完備した大窟といつてよい。すなはち同じ北魏の大窟であつても、古陽洞、蓮華洞などでは、窟の統一といふ點で最初からの一貫した企畫がみられず、最初未完成であつたものを、あとから完成させたともいひうるが、また、むしろ後人が勝手のやり方でつぎへつぎへと改造してゆくうちに、つひにその造像が全壁におよんだといふありさまである。さきに企畫されたこと、たとへば左右壁や前壁の龕配分のことなどを考慮して、それに調和するやうにつくるといふことは、ほとんど試みられてゐない。²⁾しかるに賓陽洞は、この大きな洞窟が統一的な計畫の下に、完全に遂行されたものとして注意されるのである。この窟の天井、奥壁、左右壁、前壁は佛像彫刻とともに大規模な統一的事業として完成され古陽洞とか蓮華洞とかのごとく、左右壁の統一のない佛龕の配置とは、はなはだ趣を異にしてゐる。このやうな大規模の事業は當然、北魏帝室の發願を以ては考へがたい。³⁾たゞ惜しいことには、民國二十四年頃、大なる破壊をかうむつて、優秀な彫刻が少からず害せられたのである。

賓陽洞（第三洞）



第十二圖 (Fig. 12) 第三洞賓陽洞平面圖

¹ もと洞口のそとにさらに塼築の入口をつけ、その額に賓陽洞とほつた石があげてある。また左右に嵌入した石に「香林別自開陽谷」「德水相連繞化城」といふ聯がほつてある。

² 本書四〇頁以下、蓮華洞、八七頁以下、古陽洞を参照せよ。

³ 賓陽洞が北魏帝室の造營になることについては後に詳論したい。本書第三篇龍門石窟總論のうち龍門石窟三所の項（一二六、一二七頁）参照のこと。

「外壁」 さて石窟の入口は割合に大きく、幅五メートル三〇ばかりあるが、いまは後世にきづかれた塼築によつてせめられ、わづかに三メートル九〇しかない。したがつて、入口の拱門はこの塼築のかげにかくれてよくみえない。たゞこの尖拱の額はこの塼築の上にあらはれてゐて、外縁に火焰の彫刻があること、また拱梁にそつてめづらしく波狀の唐草文帯のあることなどがわかる。⁴⁾

この拱端から左右に屋根形が彫つてあつて、その下に巨大な力士像がある。左の力士はよくのこつてゐる。^四 右の力士は破損してゐる。左の力士は頭部をやゝ右に向けて、洞窟拱門の方を斜ににらみ、上半身をその方にのり出してゐる。頭上に短い筒形の三面冠をいたゞき、ひたひはひろい。面相表現は北魏式のきはめて強いかたちをしめし、眉から目へかけて彫法の立體的な迫力と、顔面全體の抽象的な硬さとは、特殊な精神的内容をあらはしてゐる。上層の齒列はあらはに、唇をかみしめ、頸部は至つて短い。斜の顔があらはす立體的な面相に比して、體軀は平面的である。左手は腰のあたりで劍か、棒のやうなものを握りしめてゐる。おそらく金剛杵 *vajra* であつて、右手は開いて胸におく。この像は金剛力士 *Vajrapani* であらう。兩手ともその指のあらはし方は素朴である。肩にはひれ形の肩衣がひるがへつてをり、そのすそは前にたれ下つて、腹の下でX字形に交つてゐる。下端のとがつた板狀の頸飾をつけ、衣文の襷はごく薄い平面的な浮彫で、断面に丸味なく、平板をかさねたやうな彫法である。そしてその衣文はしづかにうしろに流れ、たくましい足くびに至つてゐる。かくてこの像は立體的な上半身に變化をあらはし、平面的な下半身を單純にしたが、これは北魏力士像の一般的特徴をなすのである。

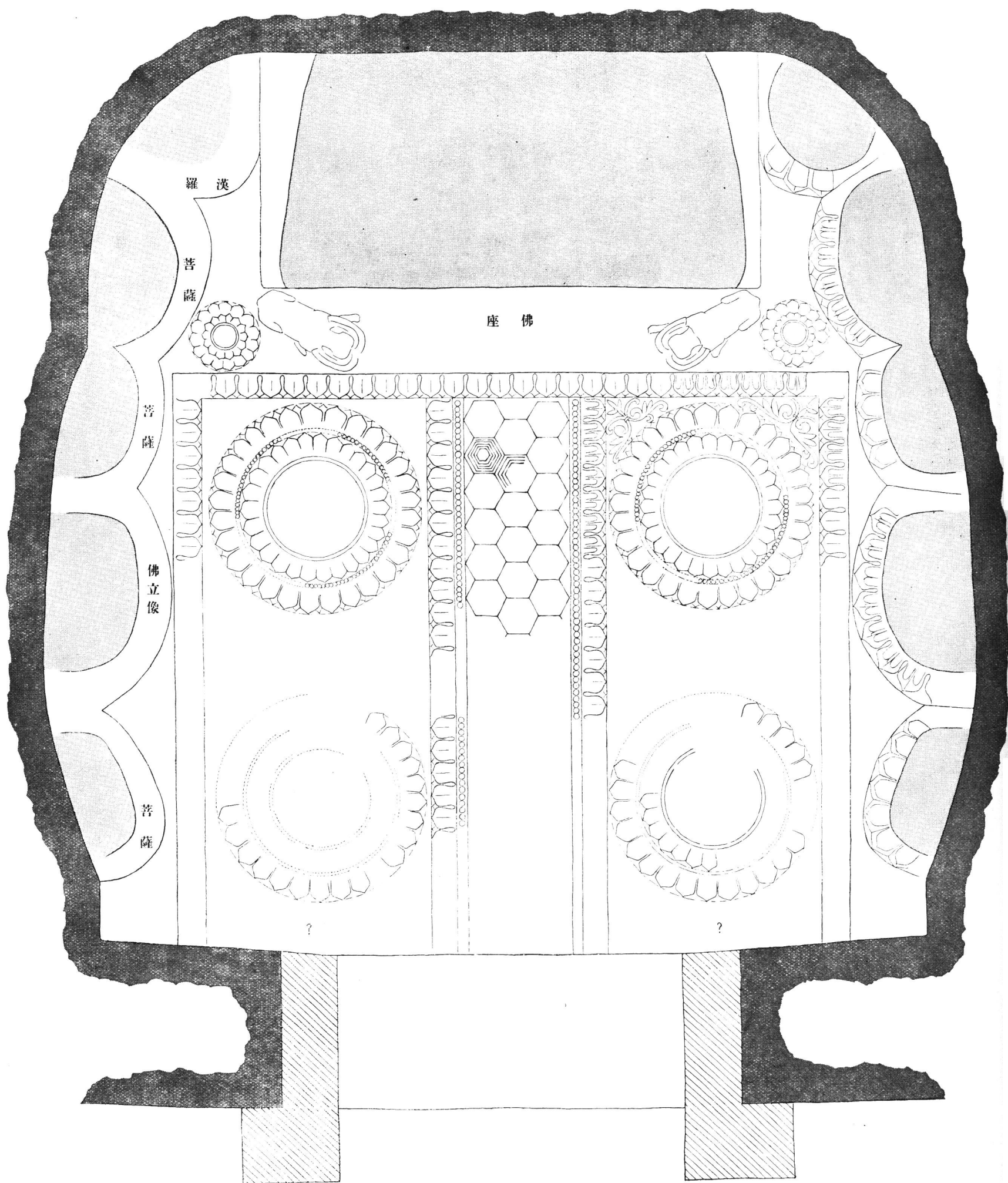
外壁右方力士像の外側に隣して、いはゆる伊闕佛龕碑^五がある。

「平面」 入口の幅五メートル二四、石窟の奥行は約六メートル——正確にいふと右方が六メートル、左方が六メートル六〇ある——幅は奥で七メートル七〇ある。^{第十圖} すなはち幅の方がやゝひろい長方形をなす。これより奥に深さ四メートル八〇の龕形あり、左右に深さ一メートル四〇あまりの龕形があり、この三つの龕形が渾然と融合して、完好なひとつの圓頂石窟を形成してゐる。龕の部分にあたつては、どれも一センチばかり高く、低いながらも一種の寶壇である。正面奥壁は、中央に幅五メートル七五、奥行三メートル八〇の方座をつくり、佛坐像を安置し、左右に二羅漢、二菩薩をそれぞれ蓮座の上につくり、また本尊寶座の前には全長一メートル五〇におよぶ石の獅子一對をほりだしてゐる。^{九上} 左右壁の龕にあたる部分もやはり、一センチ上り、その上にそれぞれ佛立像を中心とした三尊像を配してゐる。

⁴ 火焰と唐草文の結合した拱額はほかに全く類例がない。

⁵ 兩方とも頭部は破損してゐる。比較的頭は小さく、體軀はほそい。腰をおとし、前の脚をはつてゐるすがたは、慄慄さうである。頸の毛は胸からわかれて、左右にあがり、はねをならべたやうにさばいてゐる。古陽洞の獅子よりもはるかにすどい。

⁶ この種の唐草文様を石窟の床に見ることは、すでに同年の調査で知られてゐた。すなはち、南響堂山第五洞がその例である。(長廣、水野『響堂山石窟』圖版二三、六三)しかし、それは賓陽洞よりもおくれた北齊時代のものであつた。ところが昭和十三年、われわれの第一回雲岡石窟調査において、はからずもこれに酷似する床の唐草蓮華文、龜甲文を、雲岡第九洞、第十洞前の發掘によつて發見した。これこそこの賓陽洞床唐草の直接の源流をなすものである。その文様の要素のみならず、構成までが一致してゐるのは注意される。水野『雲岡石窟調査記』(東方學報京都第九冊)参照。



0 1 2m

第十三圖 (Fig. 13) 賓陽洞床浮彫文樣圖

中央の、ひろい床の面は一面にあさい浮彫の文様がある。^{第十}すなはち、周縁に一條の蓮瓣並列帯——三一センチ——あり、中央に、參道のごとき一條の帯あり、龜甲文をいれる。龜甲文帯の左右には、それぞれ、せまい連珠文帯をへて、蓮瓣文帯がある。そして、そのそとのひろい區域には、それぞれ前後に二個の華麗な蓮華文をつくる。^{一八}蓮華文は蓮瓣を二重にし、その中間にせまい連珠文の帯をつくる。子房内部には、いま磨滅してよくわからないが、おそらく盤龍の文様をいれたらしい。そして圓い蓮華文がのこす四方の隅角は、二枝にわかれた忍冬唐草でうめてゐる。^六いま入口にちかい前方部は磨滅してゐるのでよくわからないが、もと一面にあつたことは確實で、あたかも華麗な花文様の絨毯をしきひろげたごときものであつたらう。なほ、一段高い寶壇の上にもかうした文様はつくられ、獅子の兩側には直徑八一センチの蓮華文、その間には流水渦文があり、その渦文の中心には水禽や、游泳してゐる人物などをあらはしてゐる。つまり、淨土の蓮池にかたどつたわけであらう。^{圖版九上左、拓影一九三五}

〔天井〕 天井は不規則ながら、前述のごとく穹窿頂をなし、中央に菊の花のやうな二重蓮瓣の蓮華をいたゞく。^{第十}内部には多數の子房をあらはし、中心にはやゝ大きな圓形の穴がある。奥壁本尊の光背は高く窟頂の蓮華に達し、これにむかつて飛んでゐる奏樂の天人を、左右にそれぞれ四人つくり、また別に供物をさゝげた剃頭圓光の飛天を二人左右に配してゐる。^{圖版六、七}蓮華のほり、は、蓮華洞天井のそれのごとく強く凸出せず、むしろあさい浮彫であるが、その織麗さにおいてははるかにこの方がすぐれてゐる。天人の肢體もまた自然で、蓮華洞のそれのごとく特にひきのばされたやうな迹がない。これらの天井浮彫はもと美しく彩色されてゐたらしいが、いまのこつてゐるものは、かならずしも當初の色彩ではない。

〔後壁〕 後壁は龕のやうにくぼみ、實座上には結跏趺坐した巨大な佛像があり、左右に二羅漢二菩薩を侍立させ、いはゆる五尊像の形式をとつてゐる。本尊は、頭髮が波形で、額せまく、眉の弧線大きく、目尻が左右に長くひき、上下の臉は大きく、鼻はやゝ不細工にひろい。^{圖版八}しかし、もつとも顯著な事實は目と眉とのへだゝりがはなはだ大きいことである。そしてこのことは、この佛の面相をひどく非現實的な、神祕的なものにしてゐる。この目と眉とのへだたりの大きいことは、一方では眉の弧線を大きく美しく張るのに効果があり、他方では目の細い割に兩臉の厚つばいことを印象づける役目をなしてゐる。要するに、顔面の輪郭に比して眉目・鼻が大きくあらはされ、この像を拜するものに眉目の秀でてゐること、鼻の大きいことを強く印象させる。いひかへれば、この龍門佛像中の代表作は、北魏龍

7 雲岡の佛像は同じ北魏佛でも、これとはちがつた眉目をもつてゐる。雲岡の比較の後期のものでも、これほどには誇張されてゐない。

8 この並行弧線もひきのばせば圓圈となる。頭光のそれとともに壁畫であればくまどりであらはされるところである。或はさういふところにこの意匠の源流があるのかと思ふ。

9 左右二人の脇侍羅漢を老若二體につくることは隋唐時代では一般に行はれた。龍門齋戒洞、賓陽北洞もさうであつた。そしてそれが北魏にまで遡ることが明らかとなつた。蓮華洞の脇侍二羅漢も老若の二體につくつてゐる。隋唐の造像記ではこれをはつきりと阿難といひ迦葉といつてゐる。たとへば奉先寺大盧舍那佛像龕記（錄文八〇五）開皇二年吳野人妻桑勝馨等造四面十二龕像（開封河南博物院藏）また西魏大統十七年馬信緒寧等造像碑（Ch. F. Kelley, *A Chinese Buddhist Stèle of the Wei Dynasty in the Collections of the Art Institute of Chicago*, Chicago 1927）等である。また單に二聖僧など、いつてゐる場合もある。たとへば道宣の『集神州三寶感通錄』や西京法海寺僧惠簡造彌勒像記（錄文一八）しかし、いまこれを北魏のものについて確めることはできぬが、同様とみてさしつかへあるまい。ただし、付法藏第一の大迦葉と付法藏第二の阿難とが、あるひは教團の上首たる大迦葉と釋尊に常隨給侍した阿難とが、釋迦の弟子中の弟子として、一般聲聞を代表してあらはされたことは至極もつともと考へられる。阿難（Ananda）は釋尊のいとこで、若かつたし、また容姿も端麗のきこえが高かつた。大迦葉（Mahākāśyapa）は弟子中の最年長であつたし、最初に佛の衣鉢をうけつたものでもあつた。



第十四圖 (Fig. 14) 賓陽洞天井蓮華及飛天圖

門の佛像彫刻がいかに眉目の表現を特殊化したかを察せしめるに足るものである。⁷⁾ 兩肩はやさしくやゝなで肩であるが、肩幅は堂々としてよく面相にかなつてゐる。衣は兩肩をおほひ、垂下した衣文の平行線はきつちりと折り目正しく、胸はうすく腹の方が出てゐる。右手は胸にあげ、左手は胸より下げてゐる。掌の部分がやゝ大きく、かつ厚味があり、指は多少柔軟さをねらつてゐるが、まだ石彫の硬さが克服されてゐない。裳の衣文は臺座前に垂れさがり、いはゆるもかけ座の形式をとつてゐる。

このすぐれた本尊坐佛には、また、よくこれに應ずるすばらしい光背がある。^{六―八 圖版} 巨大な火焰の舉身光は、その光端が窟頂の蓮華文にまでのび、後壁一面をおほつてゐる。火焰は漢代以來盛行した鳥頭様の曲線を巧みにつかふ。また佛頭をとりまく圓形の頭光は、瓣の多い複瓣蓮華文を中心にして、二三の圓圈、さらに華麗な波狀唐草文帶をめぐらせてゐる。頭光と身光との間にできるやゝ三角狀の餘白には、うちより火焰、つぎに並行弧線、最後に挺出する蓮枝上に坐して佛に讃仰供養する天人をかさねてゐる。これらの裝飾は彩色がほどこされ、その効果は燃えあがる一種の精神的昂揚である。しかもその激しさのなかにしづかに古拙の微笑をたゞへて、永遠を見つめてゐる本尊がいますことを想像されたい。

左右の比丘像は本尊光背の外區火焰中に侍立し、その高さは本尊の腕あたりにつく。^{一〇 圖版} 左は年老いた比丘、右は若い比丘形で、それぞれ迦葉と阿難とをあらはしたものとみとめられる。^{九)} 眉目はながく、口唇には古拙的微笑をたゞへ、本尊に一致する。頭部やゝ大きく、頸は細い。兩手は胸のあたりにあげ、香爐のやうなものをもつてゐる。兩肩から兩腕、さらに兩脇にゆるく垂れさがつた衣文の線はやはらかく美しい。

左右の脇侍菩薩は本尊火焰光背の外に接して、侍立する。^{一〇 圖版} 頭部は破壊をうけてゐるが、關野博士の寫真によれば丈高い寶冠をいたゞき、體軀に比べて頭部がいちじるしく大きい。衣文の上に肩から連珠の寶飾をかけてゐる。このことは左右壁の脇侍菩薩にはみられない。本尊脇侍はその大きさ、寶珠飾、また複瓣の蓮座などによつて、左右壁の脇侍より區別される。火焰光背は寶珠形で頭部に比して小さい。^{七 圖版}

この脇侍菩薩と比丘像との中間、及びその光背の上部、すなはち奥壁本尊光背と左右壁本尊光背との間の空白には、薄浮彫によつて小さい合掌讃仰の天人や比丘が一面に彫られ、華麗をきはめたのであるが、今日では心なき暴民のために破壊され、むごたらしい鑿迹が見るものゝ心を傷ましめるのみである。^{六 圖版}

「左右壁」 左壁と右壁とは全く同一の三尊佛がある。佛立像を本尊とし、左右に二菩薩をおく。天井に接する

¹⁰ この連銭文横帶は當時の建築ではちやうどなげしにあたるものである。服虔などのいはゆる壁中の横帶(『漢書』卷九七下注)である。漢代の壁中横帶が金塗の金具でかざられ、また玉璧、明珠、翠羽を嵌入したことは村田治郎博士のすでにとかれたところである。しかもその金塗金具、つまりは壁中の横帶に璧を嵌入したさまが、あたかも列錢のごとき狀態であつたことは班固の「西都賦」の「金釵に璧を銜み、是れ列錢なり」とある句によつて察せられる。(村田博士「支那垂木瓦序説」夢殿、第十九卷)したがつてまた、それが列錢をもつてなげしの意匠としたこと、あたかも漢の列錢文の導にみるがごとき場合も考へられるので、これをその一例とみることができよう。

¹¹ この種の服裝をもつ佛立像のうちで、雲岡第十六洞大佛と第六洞上層の佛立像とを比べると、後者が龍門寶陽洞のこの像にはなほだ近いことがわかる。

¹² 宋晁良耶舍譯『觀無量壽經』に「頂上には毘楞伽摩尼寶、以つて天冠となす、その天冠の中に一の立化佛あり、高さ二十五由旬なり」といふより、寶冠に化佛のあるのもつて觀世音菩薩とし、また同經によつてその對者を大勢至菩薩とし、また中尊を阿彌陀佛とする。しかし、嚴密にいへば、この化佛は坐佛であつて、立佛でない。また對者の左菩薩も寶冠上に大勢至のシンボルなる寶瓶を見ない。したがつて、この中尊を阿彌陀佛と斷ずるにはなほ多少の疑問あるのをまぬがれぬ。

¹³ 釋迦、阿彌陀、彌勒をかくのごとく三方に配する像式が、兩魏齊隋時代にひろく行はれたことについては、かつて論じたことがある。上掲『響堂山石窟』三三、三四頁。しかし、それが、こゝまで遡りうるかどうかは、どうも疑問である。

第十五圖 賓陽洞浮彫行列圖



(關野博士撮)

(Fig. 15)

第十六圖 寶陽洞脇三尊佛



(塚本博士撮)

(Fig. 16)

一帯には、奥本尊の光背わきから脇本尊の上をとほつて、前壁へまはる天蓋風の浮彫装飾がある。^{六、七} 天蓋はわが國法隆寺金堂の天蓋とほゞ同じやりかたである。まづ連銭文の横帯¹⁰があり、それに二段になつた鱗狀の垂下物があり、さらに三角形の垂飾がある。三角形垂飾の下地には、規則正しい襞をもつた短い幕が下つてゐる。そして鱗狀、および三角垂飾には、ひとつひとつ線刻の蓮華文がある。連銭文の横帯の上には、火焰珠と蓮枝とが交互に配置されてゐて、朱、綠青、黃土等の彩色が華美にほどこされてゐる。

本尊立像は大きく、堂々たる作で、龍門における北魏佛の代表的形式である。^六 奥本尊と同系統の作風をしめし、顔はやゝ丸く肩幅もひろい。この立像が特に横にひろい感をあたへるのはそのためである。手は腹部にあつて、上下をさし、薄板をかさねたやうな衣が、この腕から、また肩から、やゝ下びらきに垂下してゐる。堂々たる本尊の體軀をすつかりつゝみながら、衣文のはしが各所にしめしてゐる銳角的な表現は、自由空間を利用した立體的な彫刻といふより、平面描寫風な、どこかに立方體風¹¹な、したがつて抽象的なものたらしめてゐる。そしてこの抽象的な、銳い精神的な表現は、雲岡第六洞上層の佛立像からの展開である。¹¹ この本尊の光背もまたよく奥本尊の光背に一致してゐる。たゞちがふことは周縁の火焰がやゝこまかなことゝ蓮枝に讃仰の化生がゐらないことである。

この本尊大光背はよく脇侍の寶珠形光背を包攝し、そこに左右の脇侍菩薩が侍立する。¹² 図版一〇 この小脇侍は全體で四體ある。いづれも酷似し、寶冠丈高く、目鼻たちとほり、頸に飾をつけ、兩肩に天衣をたれ、下裳は自然に裾ひろがりになつてゐる。光背は寶珠形、火焰と蓮華で、簡單で小さい。注意すれば右壁右脇侍の寶冠上には化佛がある。もしこれによつて、¹² この像を觀音像と斷ずれば、左脇侍は大勢至菩薩、右壁本尊は阿彌陀佛といふことになる。そして奥本尊は左右の阿難迦葉の聲聞形から、一應釋迦佛と考へられやうから、左壁本尊はさしづめ彌勒佛であらうか。¹³ しかし、それにしても、この三佛並置の形式は直接には雲岡石窟に傳統を有するものである。いま雲岡石窟の三佛が三釋迦佛と考へられるとき、¹⁴ 一應こゝも三釋迦佛と解釋する方が穩當なやうにおもふ。

「前壁」 他の三面とちがつて、前壁は垂直の平面である。嚴密にいへば、これから少しはみ出して、左右の壁にくひ入つてゐるわけであるが、こゝに賓陽洞で有名な浮彫の傑作がある。われわれはこれに多大の期待をかけて、龍門に行つたのであつたが、驚いたことにはこれらの浮彫はすつかり、搔きとられ、一面に見る生々しい鑿迹にわれわれの心は完全にうちのめされた。¹⁵ これは惡魔のしわざだ。やりばのない憤懣に一日を心苦しくすごしたことは、いまなほ忘れることができない。¹⁵ いまわれわれは不完全な古い寫眞や拓本にたよつて、考察をすゝめなければならぬ。そ

¹⁴ 雲岡石窟の三佛形式についてはフーシェ (A. Foucher) シャヴァンヌ (E. Chavannes) 兩氏に説があるが、われわれはそれとは別の理由から三釋迦佛と解してゐる。いづれ詳論の機をえたいとおもふが、上掲『響堂山石窟』三三頁参照。

¹⁵ この浮彫はいまアメリカに渡つてゐる。そしてまだ目の目を見ないどころか倉庫にしまはれたまゝになつてゐるといふ。それは、支那人の對米感情を慮つてのことらしい。これは不幸この上ないことである。さしあたり支那人が氣を大きくもつてこの浮彫がアメリカの博物館の適當な位置にすゑられることがのぞましい。さらに、それにもまして、のぞましいことは支那の治安が恢復して古蹟の保存がゆきとゞき、龍門の監理も充分になつて、そしてこの浮彫が再びもとの賓陽洞で見出されることだ。これは不可能な夢でない。

¹⁶ この圖は大橋孝吉氏をわづらはして作成した。いくらかあいまいなところがあるのは、寫眞の不十分な資料で無理に書いてもらつたので、決して大橋君の責任でないことをこゝにこゝとわつてをぐ。

¹⁷ E. Chavannes: *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*, tome I, p. 330 におつて、この浮彫行列が伊闕佛龕碑の魏王泰とその二夫人をあらはしてゐるものと解してゐるが、それはいふまでもなく誤である。

¹⁸ この形式のくりがたはその當時の佛像臺座にしばしば見られる。殊に金銅佛の臺座に多い。これがのちになると、のんびりしたかうざまらしいかうざまに變化する。北魏正光三年金銅三尊佛立像臺座 (O. Sién, *Chinese Sculpture*, Pl. 154) 開皇十三年范母等造阿彌陀像臺座 (Ibid. Pl. 316) 唐乾元元年金銅棺臺座 (Ibid. Pl. 421) とを比較せよ。

¹⁹ 維摩の方便の病によつて、これをみま

のためにまづ全體の構圖を復原して見た、それが第十八、十九圖¹⁶⁾である。

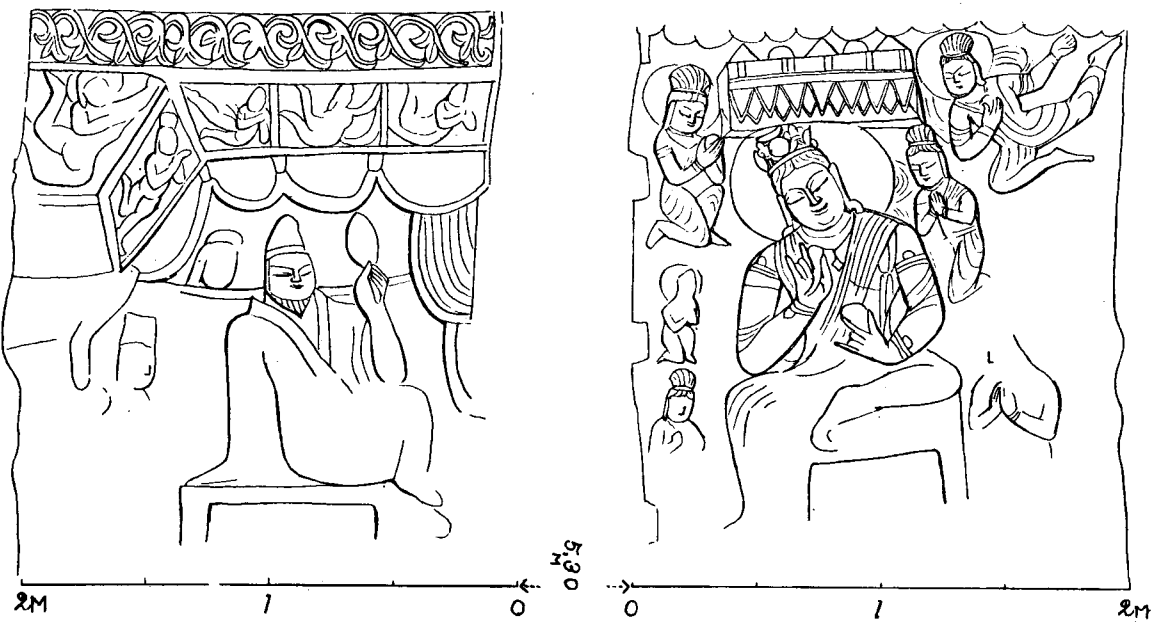
これによれば、腰壁の上が上中下の三段にわかれてゐる。上段は維摩居士、文殊菩薩の對問、中段は佛本生譚、下段は帝王后妃の行列、¹⁷⁾腰壁は十神である。それは一樣にごく薄い浮彫である。それによつて當時における繪畫の一斑も推察されるといふものである。

第一、維摩文殊對問圖

入口の兩側に相對してゐる。右は几帳のうちにゐる維摩居士、左は往訪の文殊菩薩である。維摩のかたはらには侍女様のものが前にひとり後にふたり、文殊菩薩のかたはらには羅漢らしいものがふたり、力士らしいものがひとり立ち、右上の隅には合掌せる天人らしいものがみえる。

維摩は在家の居士である。冠帶をつけた長髯の老人であらはされるが、その維摩がいまは病氣である。右手に羽扇をもち大きな米俵のやうな枕によりかゝつてゐる。ゆつたりと身體にかゝつた衣裳が、流麗な襞をつくつて長く斜に流れてゐる。几帳の臺座には火焰様のかうざまがくりぬかれ、¹⁸⁾几帳の屋根には寶珠と化佛のあるアカンサス様のものが交互にならぶ。垂幕のいく段にも區切られた弧線のリズムは自由で美しい。右の上隅に蓮座にのつた二つの几帳が見えてゐるのは、文殊にしたがつて來た諸衆のために三萬二千の几帳が飛び來るところである。左の方を大きく、右の方を小さくしたことは、その下を脇佛の光背で切りとつたこととともに、陸續として飛來する三萬二千の几帳を想像せしめ、すこぶる動的な印象をあたへる。

文殊菩薩は簡単な頭冠、瓔珞で、蕭洒たるかつかうである。いま釋尊にえらばれて病中の維摩をとふ。こゝでは蓮座上に坐し、手を胸邊にとめてゐるが、かすかにあとへひいてゐる衣端には、その



第十七圖 (Fig. 17) 雲岡第七洞前壁維摩文殊對問圖

た文殊菩薩との間に問答がかはされる。この問答によつて空の理をいいたものである。大乘教理の劇的な表現である。この光景は和辻哲郎博士「日本に於ける佛教思想移殖史」(昭和七年刊、岩波哲學講座所収)によく要約されてゐる。なほ水野「雲岡石窟とその時代」(昭和十四年刊)第六章第二節を見よ。

²⁰⁾ 雲岡第六洞前壁は屋形龕の中に、佛座像を中心として維摩と文殊の像をはつてゐる。第一洞前壁は右方の佛龕に瘦せこけて肋骨をあらはにした病身の維摩をほり左方の佛龕に文殊菩薩をいれてゐる。第七洞前壁は同様であるが、維摩居士は衣冠をつけてゐる(第十七圖)、小石窟の場合には雲岡第三十一洞入口前壁があげられ、佛龕としては第三十二洞右壁をはじめとしていくつもある。なほわが國では法隆寺の塔中に塑像のものがある。

²¹⁾ 雲岡石窟における維摩文殊像は第一洞、第二洞、第六洞、第七洞すべて前壁の入口左右にある。この寶陽洞の浮彫はこの雲岡石窟の傳統をうけつたものと思はれる。また獨立した浮彫像は雲岡第十四洞右壁にある。

²²⁾ 天龍山石窟では東魏頃の第二洞左壁、第三洞前壁に見出される。「支那佛教史蹟」第三冊圖版三五)

²³⁾ 東魏武定元年邑義五百人造像碑浮彫(秋山光夫氏「北魏像碑の維摩變相圖に就いて」(考古學雜誌、第二十六卷十號)

O. Kummel, Jörg Trübner, Zum Gedächtnis, Berlin 1930, Tafels 62, 63)

藤木正一氏藏三尊佛背面線刻 (東方文化研究所資料)

フリア美術館所藏三尊佛背面線刻 (O. Siren, Chinese Sculpture, Pl. 140)

盧商會保管 (孝昌三年)三尊佛背面面彫 (Ibid. Pl. 153)

Van der Heydt 氏藏 天平三年五尊佛背面浮彫 (Ibid. Pl. 177)

フィラデルフィア大學博物館藏 天保二年佛像浮彫 (Ibid. Pl. 233)

盧商會保管 天保八年碑像

來訪の動作がしめされてゐる。上に鱗状の天蓋があり、寶珠が飛んでゐる。かたはらの比丘力士等は、隨行してその問答を聞かうとする八千の菩薩、五百の比丘、百千の天人をあらはしたものであらう。

この話はもとより『維摩詰所說經』（姚秦鳩摩羅什譯）三卷によつたものである。¹⁹⁾『維摩經』が六朝時代にさかんに行はれたことはいふまでもないが、これに關する圖像もさかんにつくられた。²⁰⁾たとへば龍門では第十四洞左右龕、蓮華洞諸龕に、雲岡では第一、第二洞、第六洞、第七洞などに、²¹⁾天龍山では第二、第三洞、²²⁾さらに北魏北齊の碑像類にもしばしばもちひられた。そして、その場所は石窟の入口とか佛龕の上がもつとも多く、敦煌千佛洞の唐宋石窟で前壁左右、あるひは龕上左右に多く描かれたのもこの傳統をうけついでものである。²⁵⁾

第二、本生圖

右方は須大拏太子の本生、左方は薩埵太子の本生である。

須大拏太子は葉波國に生れ、布施を好んだが、國の至寶たる白象を乞はれるまゝに一梵志に與へたことから、つひに檀特山に追放されることとなつた。それで妃および二兒をとまひ山にむかふのであるが、途中また婆羅門の乞ふにまかせ、順次馬、車、二兒、妃とあらゆるものを與へてすこしも惜しむところがない。いま浮彫左端の人物は太子の父母か、それとも國の重臣²⁶⁾かで、太子と妃が正に辭別してゐるところである。つぎはいよいよ車馬を與へてしまつて、やむなく徒歩で山中に入る光景である。おのおの一兒をいだいて山にむかつてゐる。こゝからこの時代特有の描法による重疊たる山嶽がそびえ、樹木がたちならぶ。そしてそれを境として、つぎの場景にうつるのである。これから婆羅門が二兒を乞ひうけ、天王釋が婆羅門に化し妃を乞ひうけるのであるが、この浮彫に二兒が歩行し、妃が合掌してゐるのは二兒を手ばなしたときのことであり、その前に杖をついて立つてゐるのは天王釋らしい。²⁷⁾右端の仙人は太子が山中で會つたといふ壽五百歳の阿州陀道人²⁸⁾であらう。

須大拏太子本生譚は西秦聖賢譯『須大拏經』、吳康僧會譯『六度集經』卷二、吳支謙譯『菩薩本緣經』卷上にてゐるが、そのはなしはほゞ一致してゐる。²⁹⁾これを石窟にほるものはほとんどないが、敦煌千佛洞第三百三十五洞前壁に描かれた壁畫はこの前驅をなすものであり、³⁰⁾碑像類にあらはされたものも一二例あり、³¹⁾宋雲の旅行記にもその遺跡をのべてゐるから、當時においてもひろく知られてゐたはなしであらう。³²⁾

つぎに摩訶薩埵のはなしは、餓虎投身のはなしとしてわが國の玉蟲厨子にもあらはされて有名である。摩訶薩埵は摩訶羅陀王の王子として生れ、兄ふたりとともに竹林中に入り、一虎とその七子が飢餓のために死に瀕してゐるのを見て、憫れみをおぼえ、みづからその餌食とし相果てるといふすぢである。左の方に山嶽と樹木とを北魏風にあらは

(ibid. Pl. 235)

などがあげられる。

²⁴ 敦煌千佛洞において維摩文殊像が石窟前壁入口の左右に描かれたことは第一洞 (Pl. XD) 第八洞 (Pl. XV, XX) 第五二洞 (Pl. LXXXVII, XCD) 第七四洞 (Pl. CXXXII) 第八四洞 (Pl. CLXXIV, CLXXV) 第一一七洞 (Pl. CCIII, CCXII) である。(P. Pelliot, *Les grottes de Touen-houang*, Paris 1920-1924) 龕上に描かれた例は第六七洞 (Pl. XCVII) にある。たゞ第一四九洞 (Pl. CCCCX-IV) のみはその左壁に描かれてゐる。

²⁵ この維摩文殊像は唐代寺院でも盛んに描かれたことは張彥遠の『歷代名畫記』卷三にもみえる。なほ松本榮一博士『敦煌畫の研究圖像篇』一四三—一六四頁参照
²⁶ シャヴァンヌはこれを父王と重臣とらふふう²⁷に解してゐる。(E. Chavannes, *Mission archéologique*, p. 329)

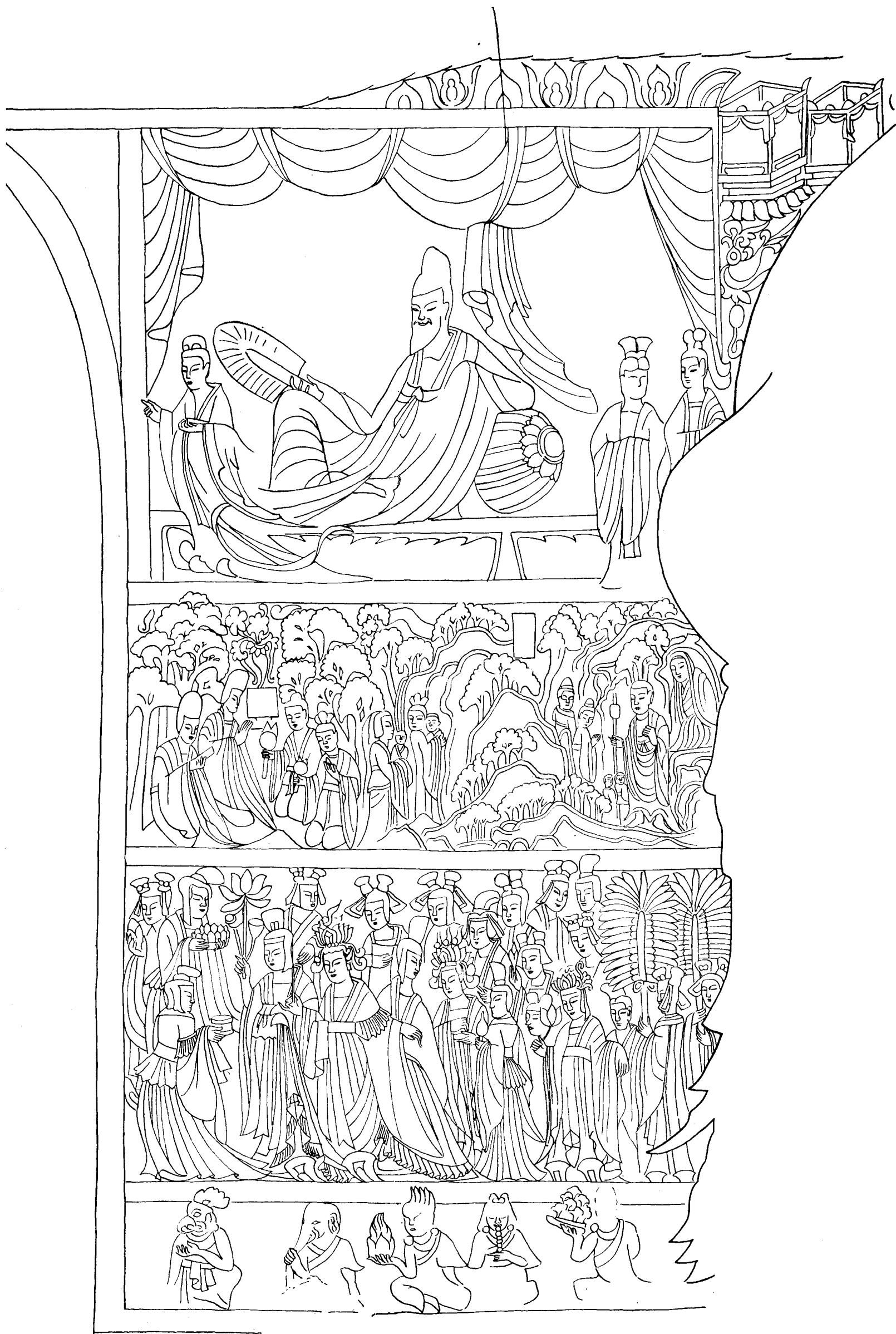
²⁷ シャヴァンヌはこれを婆羅門と解してゐる。(E. Chavannes, ibid. p. 329)

²⁸ 『須大拏經』には「山上に一道人あり、阿州陀と名づく。年五百歳絶妙の徳あり、太子禮をなしとまりてまうやへ……」といふ。

²⁹ そのほか南方所傳では Wessantara 本生譚として傳つてゐる。(E. B. Cowell, *The Jataka*, Cambridge 1907; Vol. VI, p. 246 sq.) 支那佛教史蹟第二册七五頁に海中より摩尼珠をえたはなしと解してゐるのは誤である。シャヴァンヌはすでに須大拏本生と解してゐる。

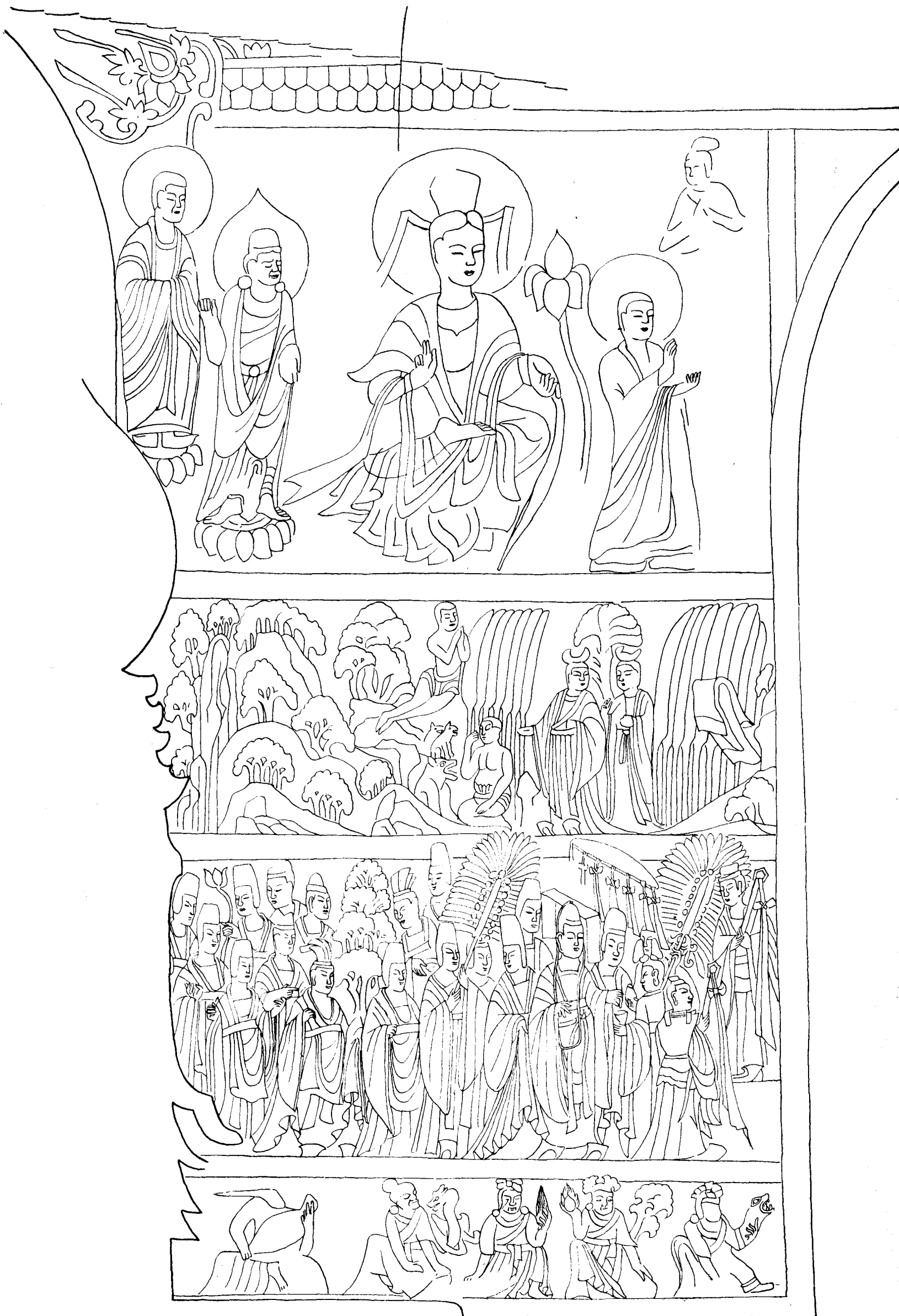
³⁰ P. Pelliot, *Les grottes de Touen-houang*, Paris 1920-24. Pl. CCLXXXII.
³¹ 須大拏本生をあらはしたものはつぎの三例である。

東魏武定元年道俗九十人等造石像碑背面線刻 (E. Chavannes, *Mission archéologique*, Pl. CCLXXXIV)
北齊天保八年神像 (O. Siren, *Chinese Sculpture*, Pl. 234)
北魏孝昌三年三尊佛背面面影 (ibid. Pl. 153)



(Fig. 18)

第十九圖 賓陽洞前壁浮彫全圖 (二)



(Fig. 19)

し、右の方には竹林をあらはす。衣冠をつけて立つてゐるのはふたりの兄、はだかて坐つてゐるのは摩訶薩埵である。その衣類はぬいで右端の竹林にかけてゐる。ところが餓虎はあまりの饑飢におとろへて、目の王子を害するだけの氣力が無い。口を開いた一虎、そのまへに二小虎がうづくまつてゐる。そこで太子は乾竹にて頸を刺し、山上より餓虎のまへに身を投ずる、その場面がまた上の方にあらはされてゐる。はだかて合掌したまゝとび下りつゝある姿である。³³⁾

これも有名ななしで、諸種の經典にあらはれてゐるが、もつともよくこの圖に合致するものは北涼曇無讖譯の『金光明經』である。三人の王子をいふものは一二あるが、竹林のことは全くほかの經典にみえない。³⁴⁾ 圖様もたゞの繪としては類例が多いが、石窟内にほどこされたものとしては、たゞ敦煌千佛洞の第三百三十五洞があげられる。³⁵⁾

かうしてみると敦煌千佛洞第三百三十五洞は、須大拏本生といひ、摩訶薩埵本生といひ、ともに賓陽洞本生譚の先驅をなすものである。この第三百三十五洞の造建年代はなほよくわからぬが、北魏を降らぬことは確實であり、ことによると四百年代にまで遡りうるものでないかと思ふ。この敦煌石窟の前壁は右に大きく摩訶薩埵の本生があり、左に大きく須大拏太子の本生がある。しかも、その下にひとつひとつ區切られてはゐるが供養者の列像があり、またその下に諸神像を配してゐる。かうした全體の配置をみると、正にこの賓陽洞前壁の前身なることがうかゞはれる。しかし、これをその表現形式の上でくらべると、こちらはいちじるしく簡略になつてをり、圖様の構成は全くちがふ。かなり纖細な浮彫ではあるが、圖柄はどつしりとして落つきがある。

第三、帝王皇妃供養圖

左は帝王、右は皇妃の供養行列圖をつくる。帝王、皇妃供養圖といふのは、後述するやうにこれが帝室の造營とみとめられるからで、要するに當時の王侯貴族の風俗をうつしたものにほかならぬ。

入口の方にむかふ行列。大きくつくられた冕冠の帝王を中心として、かいぞへの二人、羽葆をもつた二人、御蓋をもつた人物。太刀をもち柄櫛鎧をつけた二人は先驅し、冠帶の十數人はあとから扈從する。あくまで帝王が浮彫面構成の中心である。左手の二指で侍者の捧持する香をつまんでゐるやうにみえる。侍者は身長を順次にひくゝし、最後には、後列の方の人物によつてまた高くなつてくる。從者たちは多く紗帽をつけてゐるが、武弁のものもある。帝王の冕冠から前後の紗帽へと漸次にひくゝなつてゆくこの群像の諧調は、群像下半身になびく平行線の衣文のそれともにきはめて美しい。顔はおほむね前方にむかつて、行列はその方向にすゝんでゐる、斜にさしだされた羽葆や御蓋もその行進を物語つてゐる。たゞ、ところどころにうしろむきの人物があつて、その單調さをやぶつてゐる。

³²⁾ このうちもつとも詳しいのは、楊街之の『洛陽伽藍記』卷五で、「王城の西南五百里に善持山あり……山頂東南に太子石室あり、一口にして兩房、太子の室前十歩、大方石あり、太子常にその上に坐せりといふ、阿育王塔を起し、之を記す、塔南一里、太子草庵の處あり、塔を去ること一里、東北へ山を下ること五十歩、太子の男女が樹を遶つて去らず、婆羅門が枝を以つて之を鞭うち流血して地に灑ぐところ、その樹なほ存す、血をそぐの地、いま泉水となる、室の西三里に天帝釋化して獅子となる、路に當つて蹲坐し、嬖婁を遮るところ、石の上に毛尾爪の跡がいまことごとく炳然たり、阿周陀窟および門子が父母を養育するところ、みな塔記あり、」

³³⁾ 北涼曇無讖譯『金光明經』第四捨身品による。次第にして漸く一大竹林に到る、鵞を憩め止息す、……その時王子摩訶薩埵は還りて虎の所に至り、身の衣裳をぬぎ竹枝の上におき、……即ち身を放ち餓虎の前に臥す、このとき王子が大悲力をもつてするの故に虎よく爲すところなし、……即ち乾竹をもつて頸を刺し血を出し、高山の上において身を虎の前に投ず……」

³⁴⁾ 『金光明經』のほかの經典では北涼法盛譯『菩薩投身餓虎起塔因緣經』、北魏慧覺等譯『賢愚經』卷一「摩訶薩埵以身施虎品」、吳康僧會譯『六度集經』卷一「吳支謙譯『菩薩本行經』卷下後漢竺大力、康孟詳譯『修行本起經』等がある。

³⁵⁾ P. Pelliot, *Touen-houang*, pl. CCCLXXX

³⁶⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊圖版一〇六。E. Chavannes, *ibid.*, pl. CCLXXI, CCLXXII, CCLXXVI.

³⁷⁾ *Marble Relief from a Northern Chi Cave Temple* (The Connoisseur, August 1939) p. 94.

皇妃の行列も入口にむかふ。蓮華のやうな大きな髪飾をつけた皇妃を中心に、かいぞへの二人がそのかたはらにゐる。その前にはふりむいて香匣、あるひは蓮瓣様のものを捧ずる小さい侍女があり、なほあまつた左上の空白には蓮華の蕾をもつた双髻の童女がある。なほこれよりあとに順次小さくなる華冠の貴女をふたりつくり、それにそうて小侍女を配し、最後の右端に羽葆をもつたふたりの童女をつくる。その一人は左前をむいてゐるが、その一人は左奥の方をむいてゐる。しかし、その前列の頭と裳がしめすゆるやかな行進の諧調は帝王圖にもまさつて美しい。ことに胸高くむすばれた帯は裳の襷をより長くみせ、ゆるやかな諧調の基本となつてゐる。なほ上部の空白には多数の双髻童女をいれて、結局は二十数名の群像が彫りだされたのである。

これに類した貴人供養圖は鞏縣石窟寺第二、第三、第五洞前壁³⁶⁾にあり、傳響堂山の斷石にもあるが、碑像類にもすくなく散見する³⁸⁾。しかし、それらはいづれも大きさにおいておとり、また複雑さにおいておとつてゐる。奥へ奥へとかさねて行つた立體的な構成や、變化ある圖像の配置、しかも中心像への見事なる統合は他のいづれよりもすぐれてゐる。またその彫りのするどさにおいては鞏縣、響堂山のそれとちがふ。思ふに敦煌第三百三十五洞前壁のごとき供養者の散漫な並列像に端を發した供養者群像は、こゝに至つてこのやうな豪華な立體的な構想に到達したのであらう。

第四、十神圖

左右の腰壁に五體づゝあり、すべて簡素な頸飾と衣裳をつけ、うづくまつてゐる。右端からいふと、山嶽をさゝげた山神王、珠玉を吐く珠神王、火珠を手にした火神王、象頭の象神王、雞頭の鳥神王、左端からいふと、風袋をもつた風神像、龍をとみなふ龍神王、水珠をもつた河神王、樹木を背にした樹神王、獅子頭を手にした獅子神王³⁹⁾。圖版すべてこれらの神名は東魏武平元年賂子寬等七十人造像の基壇によつて知られるが、彫りかたはすつかりちがひ、これの薄肉彫であるに對し、それは線彫的で圖像の背景はくぼめてあるが、圖像の面は一樣に平らである。この十神の圖像は北齊、北周時代にはさかんに使用された。雲岡石窟ではこの例を見ぬが、敦煌千佛洞にある北魏窟の腰壁神像は、あるひはこの源流をなすものであらう。

伊闕佛龕碑

賓陽洞外右方、賓陽南洞との中間に、いはゆる伊闕佛龕碑がある。^{圖版五 拓影一} 高さ二メートル八八、幅一メートル九〇⁴⁰⁾。龜趺はいまほとんど破損し、螭首はなほのこつてゐる。やゝ硬直してゐるが、その雄渾の氣はおほひがたい。螭首の上さらにやねをほり、碑面の保護と裝飾とをかねてゐる。碑面はいまかなり荒れて全面に小龜裂をみるが、この碑

38 たとへば北魏正光六年曹□僧造像臺座(O. Sheng ibid. pl. 151)をみよ。うすい面彫であるが、供養者の行列がみえる。

39 『響堂山石窟』三二、三三頁。

40 E. Chavannes, ibid. p. 331 には高さ二メートル八八、はゞ一メートル六四といふ。

41 第四頁註(18)参照。

42 岑文本(西曆五九四—六四四)といふ人は『舊唐書』卷七〇にその傳記があるが、文辭をよくし、貞觀中中書舍人となり、のち中書令となつた。太宗の高句麗征伐に従軍して、幽州で歿した。

43 褚遂良(西曆五九六—六五八)はひろく文史に通じ、また書に巧みであつた。『舊唐書』卷八十にも「尤も隸書に工みにして父の友歐陽詢甚だ之を重す」といつてゐる。虞世南の死後、太宗はともに書を論ずべき人なきをかこつたに對し、魏徵は褚遂良を推薦し、「褚遂良は筆を下せば遒勁にして、甚だ王逸少の體を得たり」といつてゐる。また太宗が王羲之の書蹟をひろく天下に集めたときには、一々これが眞偽を辨じてあやまりがなかつたといはれてゐる。貞觀中諫議大夫となり、高宗即位して、尙書右僕射となつたが、武后冊立に關し、諫争して貶せられ、顯慶三年愛州刺史で卒した。時に年六十三。この碑を書いた貞觀十五年は四十六歳のときであつた。

44 魏王泰の傳は『唐書』の卷七六にある。文學をこのみ、ひろく士をあつめ、自分の府に文學館をおいたし、またみづからは『括地志』の著者でもあつた。

太宗

——魏王泰(六一八—六五二)

文德皇后(六〇一—六三六)

こそは宋の歐陽修以來歴代の著録に記されたものであつて、ひろく知られてゐる。いま末尾缺損して年月、撰者、書家の名をみないが、もとは貞觀十五年十一月、岑文本撰⁴²⁾、褚遂良書等の文字があつたものらしい。細くするどい文字で、いくらか隸體をふくんでゐる。題額にはたゞ「伊闕佛龕碑」といふのみである。

文は佛德を讃し、文德皇后を追慕してゐる。太宗の第四子、文德皇后の子、魏王泰の建てたものである。⁴⁴⁾ 文德皇后は貞觀十年六月に薨じ、この碑はその十五年^{西曆六四一}に建てられた。その文に、「王は乃ち心を罄して喜捨を宏うし、藏を開いて龜貝を散ず、楚の般はその思を竭し、宋の墨はその奇を騁す、絶壁を玉繩の表に疏し、而して靈龕星のごとく列し、□石を金波の外に彫り、而して尊容月のごとく擧る、或は舊によりて嚴を増し、或は維れ新にして妙を極む」といふから、舊窟を修理し、新窟をつくつたものと思ふ。もしそれをこの潛溪寺一帯にもとめるとすれば、前者は賓陽三洞で、後者は齋祓洞であらうか。⁴⁵⁾ 賓陽洞[第三洞]は唐初の修理と見るべきものはないが、賓陽南、北洞は構造と裝飾の様式が錯綜し、一時の作でないことはほゞ明らかであるから、このときに大修理をしたものと見られる。大修理といつても、それは未完成窟を繼承し、ほゞ今日の狀態に完成せしめたものと見るべきである。それで魏王泰の新窟と考へられるものは、どうしても齋祓洞以外にないことになる。もし、さうだとすれば、第一洞は魏王泰が貞觀中の造營で、賓陽南、北洞はその補修の作と解せられる。

洞外佛龕

洞外左方に南面してひとつの佛龕がある。五尊坐佛の龕であるが、高さ一メートル、はゞ七三センチある。幔幕と鱗狀裝飾のある天蓋をもち、その上に忍冬唐草かざりの尖拱があり、この組合せはめづらしい。^{拓影} 龕の左右には力士があり、下に香爐と獅子がある。造像の全體から隋頃の佛龕と考へられるのであるが、この種の天蓋をもつた龕としてはその終末にちかいものであることが注意をひく。

賓陽南洞〔第四洞〕

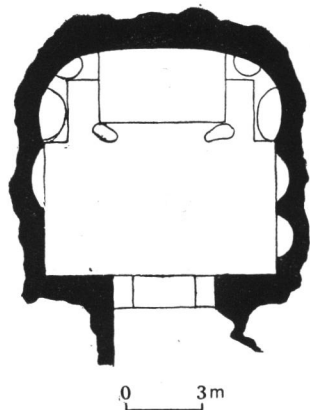
賓陽洞に南接するほゞ同大の石窟である。左右九メートル四〇、奥行九メートル〇九の方形、それに奥の方はふく

⁴⁵ 又那の學者たちは歐陽修以來、この碑を賓陽三洞の造建をいふものと解した。シャヴァンヌもこれにしたがつてゐる。

Chavannes, *ibid.* p. 330. 武攀龍「重修賓陽洞記」にはすでに北魏の造建としたといふが、この記はまだみたことがない。(錢王偉「洛陽龍門」前掲)。民國末になると許同宰でも關百益でもみな北魏の作とするやうになつた。

大村氏は「支那美術史彫塑篇」二二〇—二二三、四七八、四七九頁において、關野、常盤兩博士は「支那佛教史蹟」第二冊七二—七九頁において、賓陽三洞創建をいふものでなく、齋祓洞の創建をさすものであることを辨じたが、前者は賓陽南北洞をも北魏の作と解し、後者はこれを隋時の造建と解釋した。

⁴⁶ こゝに大業十二年四月十五日の觀音菩薩龕があることは「支那佛教史蹟」第二冊七五頁にみえる。だからこの龕もまたそのころの作であらう。大業十二年觀音菩薩とは、すなはち錄文七の成都縣季子資造觀音像記にいふところの佛龕がそれである。いま石刻錄では敬善寺洞に入り、沙畹ではN洞、すなはち石牛溪にいれてゐるが、「伊闕石刻圖表」には賓陽洞としてゐる。なほシャヴァンヌには開皇十五年行參軍裴慈明造阿彌陀像記(錄文六)顯慶元年王政則及妻支氏造像記(錄文八六—)顯慶四年比丘尼石靜業吳□藏造像記(錄文八六七)等をこゝにありとてゐる。「石刻圖表」もまたこれらを賓陽三洞中にかぞへてゐる。



第二十圖 (Fig. 20)
賓陽南洞平面圖

れて龕のやうになり、こゝに本尊以下の五尊が配置されてゐる。¹⁾天井はま
るく、頂上に蓮華があり、まはりに北魏式の飛天がある。しかし、圓頂は整正
で、正しい球形をなしてゐる。

本尊は大きく、結跏趺坐、衣端を臺座の上にたれてゐる。衣文は至つて寫實
的で、その断面は波状をなす。面貌は大きく、脣はあつち。右手は掌をたて、
ひらき、左手は中指以下を屈し前にひらいてゐる。²⁾その作風は山東益都雲

門山第一洞本尊にもつともよく似てゐる。³⁾光背は唐草裝飾の發達したもので、周縁の火焰とともに線刻である。左右

の菩薩もどつしりとした體格で、肩がはつて北朝風のおもかげ
をのこしてゐる。⁴⁾下裳のひだは垂直にたれ、瓔珞も重々し

くたれてゐる。面相も大きく、右菩薩の寶冠には寶瓶をつけて
ゐる。寶冠中に寶瓶をみるのは大勢至菩薩と考へられるから、

その對者は觀世音菩薩であり、この點からいへば本尊は阿彌陀
佛と推定される。⁵⁾光背はごく浅い彫りで、よく見えない。本尊

との間には、右に阿難、左に迦葉の像がある。第一洞と第二洞
とのいちじるしい佛像の一致を思へば、それとこの石窟の佛像

とはかなりちがつてゐることが注意される。硬直した體軀、や
や平板な衣文、菩薩天衣の飄轉などを見るとこの像の方がいく

らか古式に屬するものと考へられる。もし、雲門山第一洞との
類似をもとにしていへば、この五尊像は隋代にできたものでは

ないかと思はれる。雲門山第一洞の佛像は隋の開皇十七年頃と
推定されてゐる。

この石窟はなほ前壁入口の左右に力士の像があり、本尊の脚
下に一對の石獅子がある。⁶⁾この石獅子は第三洞の獅子と全

くちがひ、のび上つたやうに蹲踞してゐるが、寫實的に非常に
すぐれ、慄悍な體軀はなほ北朝風の倣を多分に藏してゐる。



第二十二圖 (Fig. 22) 賓陽南洞右脇侍



第二十一圖 (Fig. 21) 賓陽南洞本尊坐佛

1 この數字は『支那佛教史蹟』第二冊、七
二頁による。

2 『支那佛教史蹟』第四冊、圖版七七。

3 『觀無量壽經』に「この菩薩の天冠に五百
の寶華あり、一一の寶華に五百の寶臺あ
り、一一の臺の中に十方諸佛の淨妙國土
の廣長の相皆中において現す、頂上の肉
髻は盞頭摩華のごとし、肉髻の上におい
て一の寶瓶あり、諸の光明を盛りて善く
佛事を現す、餘の身相は觀世音の如く、
等しくして異なることなし」といふ。

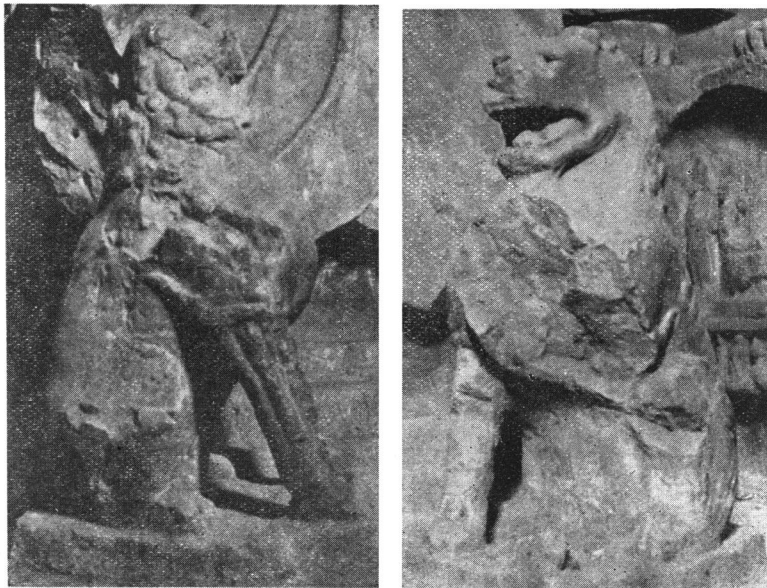
4 本書一六頁註(8)參照。

5 雲門山第一洞の佛像が、隋の開皇十七年
頃に擬定されるのは、この附近の小佛龕
に開皇十七、十八、十九年頃のものがあ
るからである。『支那佛教史蹟』第四冊、
一一三頁。

左右の壁は一面に追刻の大小佛龕がある。それらはいずれも隋唐のものであつて、そのうちには隋大業十二年梁佩仁の釋迦像^{文録八二〇}などがあつて、この石窟が隋代すでに開かれてゐたことが證明される。北壁には大きな佛龕として五尊坐佛龕、三尊坐佛龕、五尊倚像龕、一尊立像龕等があつて、その立像龕はいはゆるグプタ式の薄衣をまとつた佛像であつて、そのかたはらに貞觀二十二年河南縣思順坊老幼等の造彌勒像記^{錄文八〇四}をもつた碑形がある。この造像記には「この下や、東にあり」との文句が見えるので、これは右の五尊倚像龕に關するものであることがわかる。この五尊倚像龕は左右に高肉彫の力士像があり前に香爐と獅子がある。獅子はたひらにうづくまつて、ごく自然な姿勢をしてゐる。南壁には脇菩薩のすぐわきに、やゝ大きな五尊坐佛の龕があり、その蓮華座の左右に躍動した力士形があるのはめづらしいし、上方に二飛天のあるのもめづらしい。力士像はそれぞれ二枚の蓮華を手にもつてゐる。その下には平凡な香爐と供養者と獅子とからなる一帯がある。^{圖版一二上}

なほシャヴァンヌの記述するところによると多數の唐代紀年佛龕がこの石窟内にある。⁸⁾ 貞觀十五年の六種を最多とし、歷年造像がおこなはれ、永徽、顯慶、龍朔、麟德、乾封に至つてやんでゐる。そのうち貞觀末から永徽にかけての時期がもつとも活潑であつて、またこの時期にもつとも重要な佛龕がいとなまれたやうである。だからこの石窟は、著手はすでに北魏のときにあつたらしいが、後壁諸尊は隋代になり、周壁の諸佛龕は主として大業末から貞觀、永徽にかけて大規模のものがつくられ、その後高宗時代まではひきつゞき小規模な佛龕がいとなまれた。そうして則天武后以後になると、もはや、その小龕造建もあまり行はれなくなつたものゝやうである。

敬善寺洞〔第五洞〕



第二十三圖 (Fig. 23) 賓陽南洞獅子像

6 『支那佛教史蹟』第二冊七二頁は誤つて、これの佛龕を賓陽北洞北壁にありと述べてゐる。

7 したがつて、この倚像佛の彌勒佛であることがわかる。本書三七、三八頁。

8 シャヴァンヌ等によるとこの洞の紀年造像記は

貞觀十五年六種（錄文八二一、九八六、九八七、九八九、九九〇、九九一）

貞觀十六年一種（八二二）

十八年二種（九九三、九九四）

十□年一種（九九五）

二十年二種（八四八、九九五）

二十一年二種（八四九、九九六）

二十二年三種（八〇四、九九七、九

九八）

二十三年三種（八五〇、一〇〇〇、一〇〇一）

永徽元年一種（八五三）

二年一種（八五五）

三年二種（八五六、一〇〇二）

四年二種（八五七、一〇〇四）

顯慶元年一種（一〇〇七）

五年一種（八七一）

龍朔二年二種（一〇一三、一〇一四）

麟德二年二種（八七三、八七四）

乾封元年一種（一〇一五）

二年一種（一〇一六）

三年一種（八七五）

など三十五種におよんでゐる。しかし、その正確な數および所在はわからない。

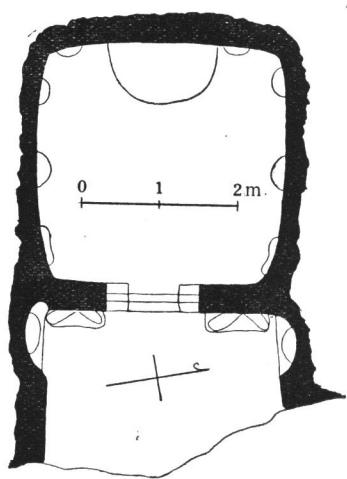
潜溪寺の四窟よりやゝはなれ、河岸より六メートルばかりの高處にある。東面して口をひらき、左右三メートル二四、奥行三メートル一五の小さい石窟である。平面はすみまゐるの方形をなし、天井はやゝまるく、蓮華を中心に飛天を配してゐる。^{第二十}四圖

奥壁には坐佛を中心に左右に小さい菩薩像あり、左右壁になつて羅漢像二、供養者小像二、菩薩像二、甲冑神王像二があり、これらの彫像の間には小さい蓮上菩薩像が連結した蓮枝の上に彫刻されてゐる。本尊、脇侍菩薩等はほとんど完全な丸彫となり、肉付けもゆたかな上にこまやかで、みごとな寫實的風貌を完成し、初唐様式の圓熟をこゝにみることができる。甲冑神王像はやはり寫實的な作であるが、全くひらいた浮彫式の彫法であるのがちがつてゐる。平たい平面のうちに、いくらかおしこめられたといふところから来る一種獨特な力強さがたゞよつてゐる。しかし丸彫、浮彫のいかんをとはず、この石窟の作品は肉づけがこまやかで、均衡がよくとれて、うつくしい。^{第二十五}圖

門口は唐代の石窟によくみるやうに方形で、闕とからみじきとがある。^{第二十六}圖

南面、あるひは北面して二菩薩像がある。

洞外北方に李孝倫撰の「敬善寺石像銘」^{録文}がある。これによつて唐の太宗の妃、紀國太妃韋氏の造建であることが明らかである。紀國太妃韋氏は太宗第十子紀王愔の母である。紀王愔が紀王に封ぜられたのは貞觀十年^{西暦六三六}であつたから、²⁾この石像銘には年號がないが、貞觀十年以後であるは明らかであり、また顯慶三年^{西暦六五八}の「楊眞藏造阿彌陀像并二菩薩像記」^{録文}に³⁾はすでに敬善寺の南西頬につくるといふことばがみえるから、



第二十四圖 (Fig. 24)
敬善寺洞平面圖

敬善寺洞 (第五洞)

敬善寺洞の造營はどうかしても顯慶三年以前でなければならぬわけで、したがつて敬善寺洞の開鑿は西暦六三六から六五八年の間といふことに



第二十五圖 (Fig. 25) 敬善寺洞本尊坐佛



第二十六圖 (Fig. 26) 同神王像

¹ 闕やからるじきをかういふところにつくる例は、さう古くにさかのぼらない。おそらく魏末北齊頃からかとおもふが、石窟にほどこされたものは唐代にもつともふつうにみる形式である。(響堂山石窟四八頁) しかし、木造建築では古くからあつた形式であらう。本書三二頁註(2)参照。

² 『唐書』卷七六にその傳がある。紀王に封ぜられたのは貞觀十年、十七年に襄州刺史となり、永徽元年左衛大將軍を拜し、二年荊州都督となり、邢州刺史に除せられ、文明元年太子太傅貝州刺史となる。垂拱四年越王貞等の叛亂に坐して獄に下り、庶人となり、嶺南に配流され、その途中蒲州で死す。

³ 西頬といふことは他の造像記でもで、くるが、龍門の西山をさすものらしい。だから南西頬は西山でや、南方といふ意であらう。

⁴ 別に總章十二年(西暦六六九)竊公夫人造阿彌陀佛觀音勢至像記(録文二)があるがその所在をつまびらかにしない。二十四字二十三行におよぶ長文の銘であるが、いままでの著録にもない。この銘からいへば相當に大きな龕か、あるひは石窟であらうとおもふが、これにも敬善寺の名が冠してあつて、敬善寺といふものに對して疑問がおこる。敬善寺といふ名が必ずしも第五洞の專名にならないやうにもみえる。しかしいづれこの所在をたしかめなければ、これ以上はつきりしたことはいへない。

なる。しかし、このあたりに永徽の佛龕が多いことをみると、⁵⁾ ほぼ永徽顯慶間—西曆六五〇—六六〇—にできたものとみられよう。それは佛像の様式からいつても貞觀十年—十五年の魏王泰の造像より、はるかに進歩したものであるからである。なほこのことに關聯して、敬善寺といふものを單にこの石窟をさすものとせず、別に佛寺のあつたものと解すれば、この造建も顯慶三年以後たるを保しがたいのであるが、それにしても、いま、この附近に寺院を建立するだけの餘地がないから、しばらく、この敬善寺洞をもつて敬善寺の主體と考へざるをえない。

なほこの洞内に梁文雄母章供養^{錄文九三}、梁文雄父供養^{錄文九四}とあるのは、この太妃章氏の族縁であらうか。

摩崖三佛〔第六洞〕

敬善寺洞の南方、少し高處にある。岩壁を切開くこと十六メートル¹⁾四八。東面する後壁に三體の佛像をきざみ、その間になほ數軀の尊像をほつてゐるが、未完成らしい。こゝは窟形はな

さず、岩を切りおとしたまゝで、その奥をくぼめて佛像を彫つたのである。當初は、もちろん、これをおほふ堂宇を計畫したであらうが、いまはたゞ浅い龕形があるのみである。^{第二十}_{七圖}

中央本尊は高さ四メートルあまり、腰をかけた倚像である。左手は膝頭にふせておき、右手は掌をたて、胸にあげてゐる。溫和な面貌、簡素な衣文で、頭髮の波狀をなすのをみとめるが、なほ仕上げをへてゐないやうな部分が見える。左右の二佛は坐佛で、簡素、溫和の作風がうかがはれるが、頭部、手足はなほ仕上げの彫琢をへてゐない。この中間の立像とおぼしい佛像は頭部のみやゞでき上つてゐるが、左右兩隅の二像はたゞ輪郭をつくるのみで、何像をつくらうとしたかも判明しない。

その作風や場所からおして初唐につくられたものと思ふが、詳細なことはわからぬ。ことになぜ未完成のまゝ放任されたかは永久にのこされ



第二十七圖 (Fig. 27) 摩崖三佛

三〇

⁵⁾ シャヴァンヌ等によると
永徽六年一種(錄文八五九)
顯慶四年二種(一〇、一二)
顯慶五年一種(八六九)
永淳二年一種(八八五)
垂拱二年一種(二三)
天授二年一種(八九〇)
等の造像記がこの附近にあるといふ。

¹⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊八一頁。

²⁾ 前を切りおとしたが、あひなど奉先寺洞に似てゐる。堂宇があつたことは確實であるから、あるひはこれが敬善寺といはれたものかも知れない。

³⁾ この種の像はこの他にもある。破洞附近にあるものは圖版一三右上にもみえる。

⁴⁾ このうちには永徽三年十月の銘をもつたものがあり、(圖版一二右下、向つて左方の佛)これのおこなはれた年代がほぼ推知される。

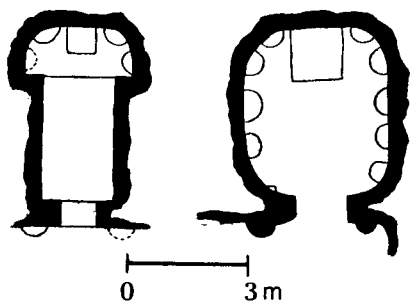
た謎であらう。

摩崖三佛附近 摩崖三佛の下から敬善寺洞の下へかけて、夥しい唐代の佛龕があり、それは潛溪寺の賓陽洞にまでつらなつてゐる。そのうち敬善寺洞の下にある佛龕には、はなはだ特色のある佛像が彫られてゐる。¹⁾ 二下 版 こゝにあげたものは倚像ばかりであるが、この形式の立像もある。²⁾ 面相圓滿にして、胸をはり腰をひいた姿勢に特色があり、また身體にびつたりとまとひついた、うすい衣に特色がみとめられる。衣はからだに密著して、すこしもそのひだがあらはれてゐない。そして、下の肉つきが表面ぢかにあらはれてゐる。背後には椅子のやうになつた光背があり、その形式からすると初唐の製作であらうが、⁴⁾ 中南印度方面の影響が濃厚にみとめられる。⁵⁾

雙 洞 〔第七、第八洞〕

第六洞摩崖三佛のところから道路におり、少し南下すると、すぐ路傍に第七洞、第八洞がならんでゐる。ほと同大の石窟であるが、ひどく破損をうけてゐるので調査をしなかつた。¹⁾ 第二十 關野博士によれば、第七洞はすみまるの長方形で、後壁は佛坐像を中心にした五尊像、左右はそれぞれ別に佛立像、菩薩立像、神王像があり、洞外に力士像をつくる。天井は穹窿で、蓮華を中心に飛天がある。第八洞も長方形の石窟で、奥にくぼんだところがあつて佛倚像の五尊があり、左右壁には千體佛をほる。それで別に千佛寺の名稱がある。

第七洞は洞外右方の力士像のかたはらに、垂拱三年四月²⁾ 西曆 六八七 年の造像記あり、第八洞は門口右側に天授二年³⁾ 西曆 六九一 年の造像記があるといふから、それ以前にでき上つたことはあきらかである。おそらく、この上の萬佛洞(第九洞)と同様に高宗末年につくられたものであらう。⁴⁾



第二十八圖 (Fig. 28) 雙洞平面圖

⁵⁾ 衣がまとひ、衣文のあらはされない佛はサルナートなどの比較的古い佛像にもあり (R. Chanda, *Medieval Indian Sculpture in British Museum*, London 1936, Pl. V, VI.) グプタ朝ではさかんにおこなはれた形式であるが、この面相と姿勢の感じは印度支那あたりの影響のやうにみえる。

¹⁾ 主として『支那佛教史蹟』第二冊八二、八三頁とシャヴァンヌ *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*, pp. 369—373, 1240.

²⁾ 垂拱三年四月の造像記は雙洞のものとしてつぎの二が沙畹にみえる。そのいづれかを指すのであらう。

金莫神造阿彌陀像記(錄文一六五)

孝郎造阿彌陀救苦觀音像等記(一八八)

³⁾ 天授二年の造像記については、沙畹にはつぎの三つがあがつてゐる。そのいづれかであらう。

李居士造像記(錄文一七二) □□羅造像記(一七三) 李大娘二娘造像記(一七四)

⁴⁾ 沙畹等によればこの雙洞には咸亨四年一種(錄文一五九) 垂拱二年一種(一六九) 三年四種(一六五、一六六、一六八、一七八) 天授二年四種(一七二、一七三、一七四、一八九) 天授二年一種(一〇一八) 證聖元年一種(一八〇) 開元五年一種(一八四) があることになつてゐる。その期間は西曆六七三—七二七に至る。

萬 佛 洞 〔第九洞〕

— 圖版一四—二七 —

第九洞は萬佛洞ともよばれ、また永隆洞ともよばれてゐる。それらは周壁に一萬五千の佛像がぎざんであるからであり、あるひは唐の永隆元年にでき上つた石窟であるからである。また別に、つくつた人、智運の名をとつて、智運洞ともよばれてゐる。¹⁾

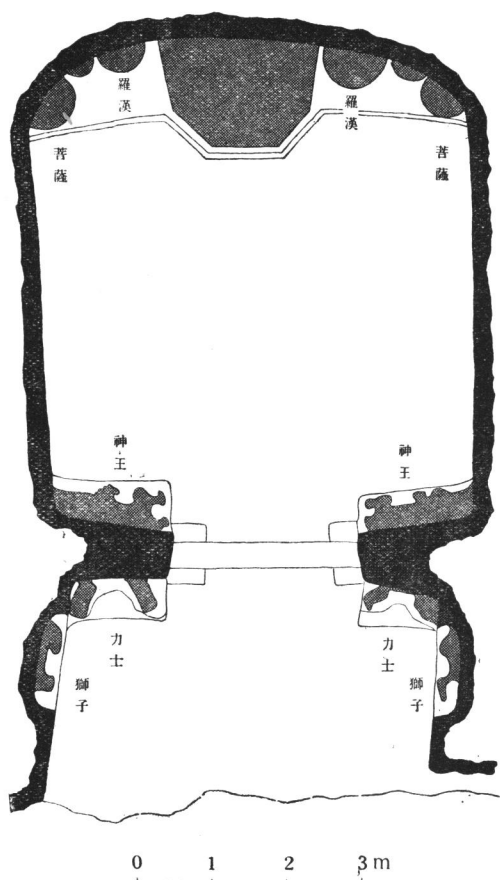
路傍より四メートルほど高い岩壁を方形にほりくぼめ、そのうちに外壁をつくつてゐる。上つてゆくと、こゝにわづかばかりのおどろばがあり、それから入口となつてゐる。²⁾

外壁にきられた入口はすみまゐの長方形で、唐代の石窟にふつう見るところである。それに闕にあたるほり出し、これに直交する隅の横木のやりかたなども、まったく唐代石窟の常法であり、また當代木造建築の法式でもある。³⁾

この左右には裸形の力士像があり、隆々たる筋肉をあらはしてゐる。⁴⁾ きつい腰のほりだしと、ひらたい面貌はこの像の特色である。足下には岩座があり、そとがには南北の壁面に獅子が

ほりこんである。⁵⁾ うづくまつた横向きの獅子で、頭だけを正面にし、そとがはの前肢をあげてゐる。その顔や筋肉のひきしまつたぐあひが、力士形のとりあつかひとよく一致し、二力士、二獅子のとりあはせはまったく緊密で間然するところがない。なほ外壁空隙には多數の像龕があり、優秀な觀世音菩薩の立像⁶⁾ などが見られる。

入口の側面には左側に柄香爐をもつて供養する二人の比丘像⁷⁾ をはじめとして、小さい佛像の龕がある。右の供養比丘像はすぐれた彫刻で、前のものは立つて柄香爐をもち、あとのものは立つて合掌してゐる。豐滿な體軀に圓熟した技法をしめしてゐる。なほ沙門智運が天皇、天后、太子、諸王のために尊像一萬五千の一龕をつくつたといふ造



第二十九圖 (Fig. 29) 萬 佛 洞 平 面 圖

¹⁾ たとへば『支那佛教史蹟』第二冊八三頁には永隆洞といひ、また萬佛洞といふ。大村氏『支那美術史彫塑篇』四八七頁には智運洞と稱す。

²⁾ 河北磁縣南響堂山西方洞(『響堂山石窟』四八頁)、河北房山諸石浮屠(『房山雲居寺の研究』圖版二九—三三)、また滿洲國牡丹江省、牡丹江省東京城の渤海第五宮殿における木造の例(原田淑人博士、駒井和愛氏『東京城、渤海國上京龍泉府址の發掘調査』昭和十四年刊、圖版三四、三五)を参照されたい。この種のやりかたはこれより古い北魏、北齊時代にも適るものであるが、今日のこつてゐる遺品からいふと、この直角に出た角材のあたまには獅子などがつくり出されてゐるのがふつうである。そしてまたこの手法は現代にも及んでゐる。もつとも簡單な例は前記東京城附近の支那家屋(『北滿風土雜記』第五十九、六十圖)にもみられるが、裝飾をほどこした例は北京あたりにふつうで門枕とよばれてゐる(『清代營造則例』民國二十三年刊、圖版二三)。

³⁾ この入口左方の獅子像はいま米國カンサス市ネルソン美術館に保存されてゐる。Langdon Warner, *An Approach to Chinese Sculpture (Studies in Chinese Art and Some Indian Influences)*, London 1938, Fig. 20. また右方の獅子はボストン美術館にある。D. B. Liddle, *A Chinese Stone Lion from Lung-men datable to A. D. 680-700* (Bulletin of the Museum of Fine Arts, Vol. XXXVIII, August 1940).

像記^{一〇}文がこの門口左側にあるといふ^五。右側には倚像の小佛が五十一段にみつしりと並列してゐる。^二圖版 二下 ほりはごく簡單である。その中央の長方形にきりひらかれた五尊像の小龕には、これら小像の中心像とおぼしい同形の、やゝ大きい佛倚像がある。その下の造像銘^{一〇}文には永隆元年^{六六〇}西曆に胡處貞^六といふ人が五百の彌勒像をきざんだことが見えてゐる。この五百の數はほゞ小像の實數にあたつてゐる。彌勒像のかたはらに宋天聖四年^{〇二六}西曆一石道修理の記事がある。^五錄文一三六

「後壁」 主室は左右五メートル八〇、奥行き六メートル六五の長方形で、後壁のくぼまりに五尊像をいれ、前壁の左右隅に神王像をつくり、左右壁は小さい萬佛でぎつしりつまつてをり、ひらたい天井には蓮華文と飛天とがある。^九圖版 二下

後壁の本尊は八角の蓮華座上の坐佛である。^四圖版 一 二五 衣端はわづかに蓮華座の上に見えるのみで、臺座の前をたれおほうてゐない。右手をたひらにあげ、左手をふせて左膝につけ、端正な姿勢である。衣の皺はなめらかで寫實的である。背面はもちろん後壁に接續してゐるが、それにもかゝらず、深くほつてあつて肩の丸味がよくあらはれてゐる。頭部はすこし大きいやうであるが、頭髮部分のとくに大きいところは奉先寺の大佛に一致する。だいたいに奉先寺の大佛にいちばんちかいやうであるが、眼や唇の誇張された曲線は奉先寺のものよりも、賓陽南北洞本尊などにちかく、より古いおもかげをのこしたものだと思ふ。

光背は蓮華と火焰の舟形光背で、その中間の圓圈に七佛の小坐像がならぶ。光背の火焰はあらく、北魏のやうなするどさはない。臺座の蓮瓣はよくしまつてゐる。その胴の隅角には蓮華を支へてゐる裸形の力士が四體ならんでゐる。^{一八}圖版 下

隅の左右脇菩薩は圓い蓮座の上にたち、うちがはに相むかふ。頭部ははやくから失つてゐたらしい。左は拂子風のものと水瓶



第三十一圖 (Fig. 31)
萬佛洞外觀世音菩薩立像



第三十圖 (Fig. 30) 萬佛洞獅子



4 この像は「許州儀鳳寺比丘尼眞智、敬造觀世音菩薩一區、永隆二年（五月八日成）（錄文一二四）の銘が見える。いまは頭部破壊されて、完全な姿はわづかに塚本工學博士の寫眞に見られるのみである（第三十一圖）。

5 『支那佛教史蹟』第二冊、八三頁

6 錄文一〇九には處貞としか見えぬが、この人が胡姓であることはやはり萬佛洞にある調露二年七月十五日の造像記（錄文一〇四）でわかる。なほ同月同日の同人の造像記（錄文一〇三）がひとつあるから、都合三つの造像記がこの石窟内にあるわけで、この石窟の造營と關係のふかい人であつたことがわかる。

7 彌勒佛を倚像にてあらはすことは隋唐代にふつうであつて、それはすでに響堂山の石窟で注意された。（『響堂山石窟』五二、五三頁）。本書三七、三八頁参照。

8 本書一二九頁註(23)参照。

9 このやり方は齋戒洞、賓陽南北洞とちがつてゐる。ふつうにいへば降魔の觸地印 bhūmisparsa Mudra である。

10 さうすれば本尊は阿彌陀佛となるわけである。これは後壁の連枝蓮上の菩薩とも合致するわけである。光背の七佛や、阿難迦葉の二聲聞は本來からは釋迦像に附隨すべきものであるが、これらはいかなる佛にでもあれ、單に佛の莊嚴形式として附加されたとみてよからう。

11 本尊坐佛わきの合掌した蓮上供養菩薩を加へると五十四體になるが、これはいまかぞへぬことにした。

をもち、右は蓮實やうのものと飾環とをもつてゐる。あるひは観音と勢至であらうか。¹⁰⁾これらのもちものは齋祓洞、賓陽南北洞、乃至敬善寺洞の兩脇侍に一致する。頸の璽珞や繁縷な衣文も、その流れをくんでゐるわけであるが、ここでは敬善寺洞のそれとともに、より自然に、やはらかになつてゐて、齋祓洞、賓陽南北洞脇侍の全體——ことに肩、腰、腕——にみるはりはまつたくなつてゐるのである。光背は本尊に一致する火焰と蓮華の寶珠形であるが、隅がけに折れまがつてゐる。

兩菩薩のうちがにはには蓮座上にたつた阿難と迦葉との像がある。^{圖版一六、一七}右の阿難は合掌し、左の迦葉は何か蓮の蕾のやうなものをもつてゐる。からだつきも菩薩のやうにほど自然になつてゐる。大きな圓光にはまつたく裝飾がなく、半分は本尊光背の下に入つてゐる。そして菩薩像との間、兩光背の下にはそれぞれ合掌した、あるひは何か小さいものをもつた供養者の立像がある。ともに雙髻の豐滿な彫像で、な、めむきのすがたである。童形のやうに見えるが、堂々たる面貌と體軀とをそなへて、特別な風格をあらはしてゐる。

これら後壁の諸尊の上には蓮上の菩薩を點出し、その蓮華はたがひに莖をつらねて、本尊光背のうしろにつながつてゐる。^{圖版一八、二三}左右二十六體づゝて、總數五十二體¹¹⁾、すなはち五通菩薩のためにあらはれた阿彌陀佛五十二菩薩像であらう。それでこゝの本尊が阿彌陀淨土の主であることはあきらかであらう。¹⁴⁾とにかく、これら五尊および供養者の造像様式は獅子洞、惠簡洞などと同類であつて、潛溪寺諸洞などよりは一段と進展したものである。敬善寺洞の彫像とともにいはゆる唐代の様式がやうやく確立したことがみとめられる。

「天井」 左、右、前の三壁はほぼ直立してゐるが、後壁は、本尊の光背とともに、いちじるしく前にのめり、一種佛龕の氣持をあらはしてゐる。しかし、これからつゞく天井はまつたく平らである。中央に大きな蓮華文があり、その四隅に飛天が刻まれてゐるが、北魏のときのやうに躍動的な氣分なく、たゞ兩脚をそろへ一直線にのびてゐる。

^{圖版二二}蓮華のまはりには大きな文字が二字三字づゝほつてあつて、つぎのやうによめる。^{錄文二〇〇、圖版二三}

大監／姚神爽。一 内／道場／運禪／師。一／万五／千尊／像。／大唐／永隆／元年／十一／月卅／日成。

これはこの入口左側にあつた石刻文 ^{錄文一〇一、拓影一六二九}

沙門智運。奉爲／天皇天后太子／諸王。敬造一万／五千尊像一龕。

と同じくこの石窟造營の由來を物語るものである。

「左右壁」 左右壁はほぼ垂直である。これをこまかく段にくぎり、五センチ大の小坐佛をぎつしりとならべたも

¹² 道宣の『集神州三寶成通錄』卷中によると五通曼陀羅とよぶ阿彌陀佛五十菩薩像がある。これは昔天竺の鷄頭摩寺の五通菩薩が西方淨土に至り、阿彌陀佛の形像をたれたまはんことを請うたに對し、かれの歸りつく前に「その像はすでに至り、一佛五十菩薩にして、おのおの蓮華に坐し、樹葉上にあり、菩薩は葉を取る、これはその後インドに流布し、明帝のとき支那に傳つたが、あまり流布せず、隋の文帝に至つて明憲なる沙門が北齊の道長法師よりえた一本を出し、爾來支那でもさかんに模寫されたといふ。明帝のはなしは別にしても、道宣（西曆五九六—六六七）のころ、さかんにおこなはれてゐたことがわかつておもしろい。萬佛洞の造營は道宣在世中である。『成通錄』は一佛五十菩薩といひ、宋の非濁の『三寶感應要略錄』にも一佛五十菩薩といふが、『覺禪鈔』卷七（大日本佛教全書第四五卷一七九頁）には「五十二體の佛菩薩」とある。つまり阿彌陀佛と五十二菩薩の意で、この菩薩數と合致する。松本榮一氏『敦煌畫の研究圖像篇』四八〇—八四頁參照。

¹³ 天龍山第九洞『敦煌畫の研究圖像篇』第一三三圖）敦煌千佛洞第一四六洞（*Qian-Houng, Pt. CCCXVIII*）たゞ蓮上の菩薩をあらはしたものととしては、東京故根津嘉一郎氏の蒐集した金銅の像にその一例（研究所資料三五三）がある。

¹⁴ 『支那佛教史蹟』第二冊八三頁にはこの本尊を釋迦佛とするが、それは左右壁の一萬五千佛があるためであらうか。左右の二壁間、光背の過去佛等は元來本尊が釋迦佛にしてはじめて意義を有するものであるが、もうこのころでは單なる佛の侍者、附屬物となりきつてゐて、どの佛にも共通にもちゐられてゐたのである。一萬五千佛、五百彌勒尊はいかなる因縁によるものかわからぬから、これによつて本尊の性格をきめることは困難であらう。

のである。これが石刻にいふ一萬五千の尊像である。右壁をみるに、上下に百四段、一段に八十餘の小佛をきざんであるから、左右壁を合算すると一萬五千はほぼ實數であらう。しかも、下の方のところどころ空格のあるのは正直にこの實數に合致せしめようとした努力ではないかと思ふ。¹⁵⁾ 壁脚三十センチぐらゐのフリーズに十人の樂天と、二人の舞天とをほつてゐる。¹⁶⁾ 左右おのおの五人で、最奥の一人がおどつてゐる。樂天はめいめいきまゝに坐つて、琴とか、琵琶とか、ハープとかを奏してゐる。像は半肉彫で、天衣は線刻にしてその空白いつばいにひろげてゐる。なかなか自然な、かはいゝ作である。ほかに類例をみない。¹⁵⁾ なほ右の萬佛壁のまんなかには佛倚像の長方形の龕があり、その兩わきに調露二年七月十五日奉爲眞瑩師造像記¹⁶⁾ 一〇五文がある。

「前壁」 前壁の二神王ははたして何をあらはしたもののかあきらかでないが、甲冑をつけて、はらばひになつた邪鬼を踏んでゐる。從順さうな邪鬼の座と、いかめしい矮軀とがこの像のもつ特殊な風格である。¹⁶⁾ 二四版

「造營」 かういふわけで、五尊、二神王、二力士、二獅子乃至一萬五千の尊像からなるこの萬佛洞は大監姚神爽と内道場の智運禪師の發願によることであきらかである。¹⁷⁾ 完成を見たのは永隆元年十一月三十日であるが、工を起したのももちろん數年前からであらう。この窟が竣功を見ない同年の七月十五日には、この石窟の要所に別に眞瑩師のために小龕がきざまれたり、¹⁸⁾ 一〇五文また胡處貞の造像がおこなはれたり、¹⁹⁾ 三、一〇四文また玄照の觀音像²⁰⁾ 一〇二文がきざまれたりした。九月三十日にはまた胡處貞によつて入口の側面に五百の彌勒像がつくられ、²¹⁾ 一〇九文また十一月に入つてからもなほ五六の像龕²²⁾ 一〇五文がつくられ、十一月二十九日の造像²³⁾ 一〇四文さへある。十一月三十日に完成してからのちも、この附近にひきつゞき小佛龕が開鑿されたのであつて、十二月卅日の一例²⁴⁾ 一〇六文があり、翌年永隆二年の例は九種²⁵⁾ 一〇七文、翌々年永淳二年の例は三種²⁶⁾ 一〇八文、則天武后の年號をもつものは五種²⁷⁾ 一〇九文ある。

獅子洞〔第十洞〕

萬佛洞のすぐ南下にある小石窟である。洞外に塔があるので塔洞といひ、洞内に獅子がうづくまつてゐるので跪獅

¹⁵⁾ 天龍山第九洞彌勒佛の臺座かうさまのうちに、これにいた樂天がある。(外村太治郎氏「天龍山石窟」大正十一年刊、第四十二圖)時代はほゞ同じであらう。天龍山の瀟洒たる風姿に對し、この方は純樸である。また東京美術學校所藏の天寶九年合家造五尊神像(研究所資料三五〇八)には、また下部かうさまのうちに、可憐な舞踊奏樂の像がある。

¹⁶⁾ 造像者の名が書いてないのは、かへつてこの石窟の造營者と同じであつたからかも知れない。調露二年といふのは永隆元年と同年(西曆六八〇)である。この窟の完成は十一月三十日であるから、その完成をみない造營中の七月十五日、つまり孟蘭盆の供養に、これをほつたものとみえる。

¹⁷⁾ 宋の沙門志磐の「佛祖統紀」卷三九には「永隆元年に沙門智運は洛陽龍門山において、石を鑿り一萬五千佛をつくつた」とあり、卷五三にもほゞ同様のことがでてゐる。

¹⁾ 「支那佛教史蹟」第二冊八四頁。

窟ともいふ。¹⁾あるひはまた單に獅子洞ともよぶ。窟内は幅二メートル三七、奥行一メートル七九。²⁾平面は横にやゝひろい、すみまの長方形で、天井はすこし彎曲するが平天井にちかく、中心に蓮華かざりがある。^{第三十圖}後壁に接して方座の上に本尊をほり、左右に兩菩薩を配する。本尊は頭髮渦卷狀をなし、頭のやゝ大きいところは萬佛洞本尊によく似てゐる。肩、眼瞼、頤の線などもはげしく弧線をえがき、面貌はするどい。潛溪寺附近のものより一段と圓熟した技法をしめしてゐる。^{第三十圖}



第三十二圖 (Fig. 32) 獅子洞平面圖

萬佛洞本尊の手と同様である。體軀はゆたかであるがやゝなで肩で、衣文の線はすこぶる自然である。衣端は臺座の上にたれ下り、唐代に流行したもかけ座の形式をとつてゐる。



第三十三圖 (Fig. 33) 獅子洞本尊坐佛

左右壁のやゝ前方に一雙の獅子をきざんでゐる。^{第三十圖}獅子はうづくまり、尾を後脚にまいてゐる。前肢をつつぱり、胸をはり、はげしい肉の隆起がみとめられる。萬佛洞門口の獅子よりは、はるかに丸味をおび、寫實的である。

壁面にはなほ上元二年^{西曆六七五} および三年、儀鳳三年^{西曆六七八} 垂拱三年^{西曆六八七} 如意元年^{西曆六九二} などの後刻小龕の造像があるから、この石窟の年代も上元二年^{西曆六七五} 以前にさかのぼることがわかる。これはその造像形式の萬佛洞に一致すること、所在萬佛洞に近接することから至極當然であると思はれる。⁴⁾

洞外の南壁には浮彫の五層塔をつくる。^{第三十圖}總高二メートル三六。やゝ高い基壇の上にたつ。初層のみ高く、その他はひくい。やゝはみな三成の階段からなり、軒の部分にもちおくりがまつたくない。略されたのであらう。頂上



第三十四圖 (Fig. 34) 獅子洞右方獅子

²⁾この石窟は充分觀察する餘裕をもたなかつたため、主として『支那佛教史蹟』第二冊八四頁と沙畹三七九—三八四頁の説による。

³⁾四小洞の石刻中にこの年號のものを求めると、

西曆六七五、上元二年、王仁恪造阿彌陀像記(錄文一六〇)

西曆六七六、上元三年、清信女王婆造觀音記(錄文一六一)

西曆六七六、上元三年、清信女王婆造觀音記(錄文一六一)

西曆六七六、上元三年、趙婆造觀音菩薩記(錄文一六三)

西曆六七八、儀鳳三年、清明寺比丘尼八正造像記(錄文一六二)——拱門右側雙觀音龕、このためにこの石窟は一名清明寺の名でよばれてゐる。

西曆六八七、垂拱三年、雍州三原縣薛□福等造佛菩薩記(錄文一六四)

西曆六八七、垂拱三年、雍州三原縣戴婆等造佛菩薩記(錄文一六七)

西曆六八七、垂拱三年、雍州涇陽縣蘇伏寶造佛菩薩記(錄文一六八)

西曆六九二、如意元年、丁君義造阿彌陀像記(錄文一七九)

垂拱三年のものについては數あるから、果してどれがこの石窟にあつたものか知りがたい。しかし、三つともいづれも雍州から來た人たちの造像で、同月同日の供養であるから、おそらく相接近してあること、思はれる。なほ右壁には西曆六九〇、載初元年張元福造阿彌陀像記(錄文一七〇)がある。

⁴⁾さて第七、第八洞、萬佛洞、獅子洞の造像年次を綜合するのには

第七洞は垂拱三年(西曆六八七)以前

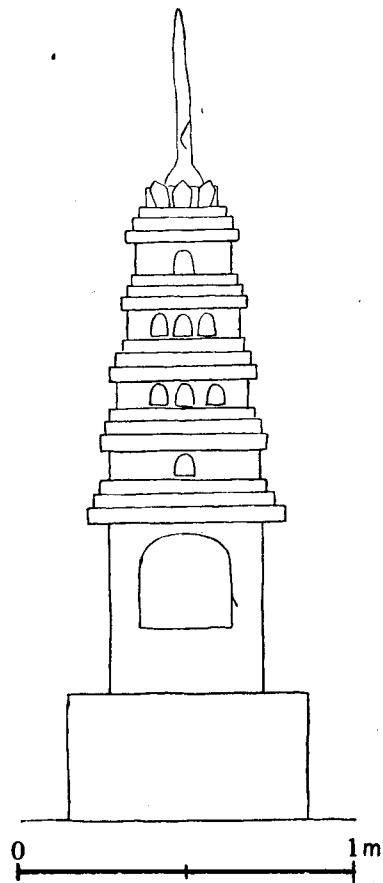
第八洞は天授二年(西曆六九一)以前

萬佛洞は永隆元年(西曆六八〇)

獅子洞は上元二年(西曆六七五)以前

惠簡洞は咸亨四年(西曆六七三)といふことになる。萬佛洞は上層にあり、そのほかの三洞は下層、つまり路邊にある。その所在からして、まつ下層の三洞ができ、

には、うけばなとおぼしき三つの突起があり、覆鉢がみえ、ほそい刹柱がたつてゐる。初層佛龕の下に李保妻楊氏の造浮圖并阿彌陀像記録文がある。年號はないが、初唐の作であることはあきらかである。



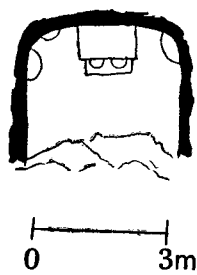
第三十五圖 (Fig. 35)
獅子洞外浮彫五層塔

つゞいて上層の萬佛洞におよんだとみられようか。第七、第八洞も永隆元年(西曆六八〇)以前と見る方が自然のやうに思はれる。そして獅子洞にすぐ南接する上層の千佛洞(號外)も、永隆元年(西曆六八〇)前後の造建であらう。要するにこの萬佛洞を中心にした諸石窟はほゞ永隆元年(西曆六八〇)前後に造建せられたとみられる。

惠簡洞〔第十一洞〕

圖版二八、二九

第十洞のすぐ南にある石窟で、道路より二三メートル高いところにその床の面がある。廣さ三メートル七九、深さ三メートル¹⁾。前面をひらき、完好な龕形をなすが、もとはなほ前方に門口があつたかも知れぬ。後壁の本尊は倚像の佛、左右に菩薩、羅漢が侍立するが、左方の羅漢は光背のみで像を缺き、その壁面に唐代の小佛龕がある。なほ脇侍菩薩のそとがはにも寶珠形の光背がある。それは菩薩像、羅漢像より小さく、あるひは神王像でもあつたらうか。²⁾ 圖版二七



第三十六圖 (Fig. 36)
惠簡洞平面圖

本尊は高い椅子に腰をおろし、足は小さい臺の上にのせてゐる。後壁には椅子の上に大きな後屏がほつてゐる。中央に蓮華文と化佛の圓形光背があり、後屏の上は凹んだ弧形の連續よりなり、兩はしにはね上つた獸形を配してゐる。ごく浅いほりであるが、かくのごとき椅子の形式はすでにグプタ時代よりインドにおこなはれたもので、支那では唐代に入つてさかんに使用された。龍門でも則天武后時代にできた擂鼓臺中洞後壁本尊にあり、またその他の小佛龕にもみとめられる。³⁾ 一七三影 頭髮は波狀で、頭部やゝ大きく、やゝ下ぶくれの顔である。眉目、鼻口は大きく端正で、神祕的な空氣をたゞよはせてゐる。頸部の三道はあざやかで、衣文は簡素にしてするどい肩幅があり、手はともに膝頭につけ、右はふせ、左は上に開いてゐる。面貌、衣文はなほだ萬佛洞、獅子洞本尊に似てゐる。萬佛洞門口の五百彌勒尊が倚像であらはされてゐることを思ふと、これも彌勒佛であらう。⁴⁾

脇侍菩薩はいま頭部をうしなつてゐるが、羅漢像とともに端正簡素な作である。その右方の羅漢像はそのくつきりと水平にひかれた眉目、ひきしまつた口もとは本尊と共通するところが多く、とくにみごとなできばえをしめしてゐる。

1) 支那佛教史蹟 第二册八五頁。

2) この種の椅子は大英博物館に藏せられるサルナート出土のグプタ朝倚像佛などにもその例がある。R. Chandra, *Medieval Indian Sculpture in the British Museum*, London 1936 Pl. VI. 椅子の兩側にあるイラン的獸形にその特色がある。

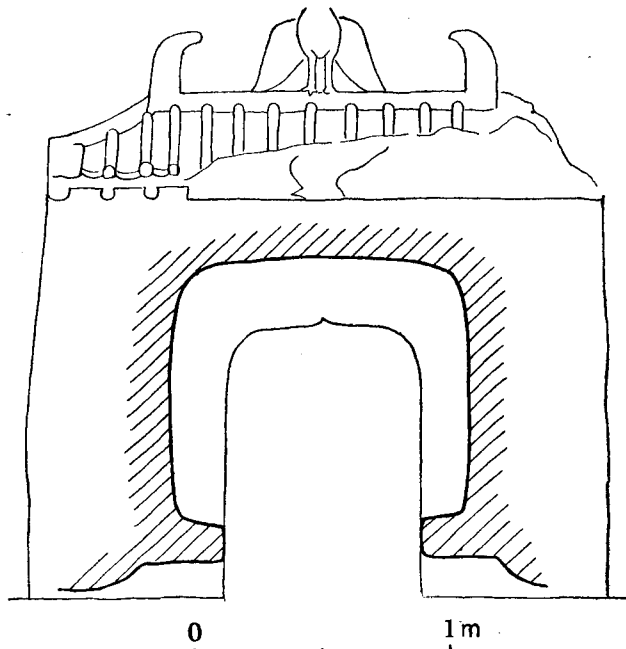
3) 陝西省西安寶慶寺の則天頃の浮彫にこの椅子があざやかにみとめられる。支那美術史彫塑篇 第八〇四圖。

4) 本書萬佛洞の項参照。なほ彌勒佛が倚像佛であらはされることは南響堂山の唐代佛龕に通例であり、北周王氏女阿等造四面佛にも通用する。近い例では龍門賓陽南洞左壁にある貞觀二十二年河南縣思順坊老幼等造彌勒像(錄文八〇四)はやはり倚像佛である。響堂山石窟三四頁註(6)参照。敦煌千佛洞の壁畫(松本氏)敦煌畫の研究圖像篇(圖版三〇・三一)敦煌萬佛峽第五洞(Langdon Warner: *Buddhist Wall-Painting, Study of a Ninth Century Grotto at Wan Fo Hsia*, Cambridge, Massachusetts 1938)など後代の壁畫にも彌勒佛は主として倚像にあらはされてゐる。

るが、佛と羅漢との相違も、そのわづかな面相のちがひにあらはされてゐる。^{二九} 圖版
 なほこの石窟の南壁東端には、咸亨四年^{西曆六七三}十一月七日の日付をもつた西京法海寺の僧惠簡の造像記^{一八}があるといふ。^五 それには皇帝、皇后、太子周王^七の奉爲に彌勒像一龕に二菩薩神王等をつくつたといふから、これこそこの第十一洞を造つた願文であらうと思はれる。もしさうだとすると、この石窟の造建は咸亨四年^{西曆六七三}であり、本尊は前に推定したとほり彌勒佛、うしなつた左右の像も神王像といふことになる。

「洞外屋形窟」 この洞の下に屋形の小石窟がある。^{圖版一}
^{三左下}

入口高さ一メートル〇八に幅七七センチ。たうてい入ることはできないが、ふかく彫つてあつて、後壁には五尊坐佛、右壁には半跏の三尊、左壁には五尊像が彫つてある。各壁の寶壇には香爐やそれを飾る唐草などがあり、この點は響堂山石窟に似る。^八 龍門では後述する路洞に近いもので、やはり北魏末のものであらう。窟外の屋根形はよせ棟、本瓦葺で、棟には鴟尾があり、中央に正面むきの鳥形を彫つてゐる。その意匠は雲岡石窟以來しばしばおこなはれたものであるが、かうした石窟に適用されたのは、これとのちにのべる唐字洞外壁のみである。軒端にはたるきがあり、門口左右には膝をあげて躍動せる力士像がある。



第三十七圖 (Fig. 37) 惠簡洞外屋形窟

老 龍 洞 (第十二洞)

惠簡洞から南にむかふと、小佛龕の多數群集してゐるあひだに、大きな洞窟が二つひらかれてゐるのをみる。そのひとつが老龍洞(第十二洞)で、その南が蓮華洞である。蓮華洞は路面より三メートルばかり高いが、老龍洞は路面とほ

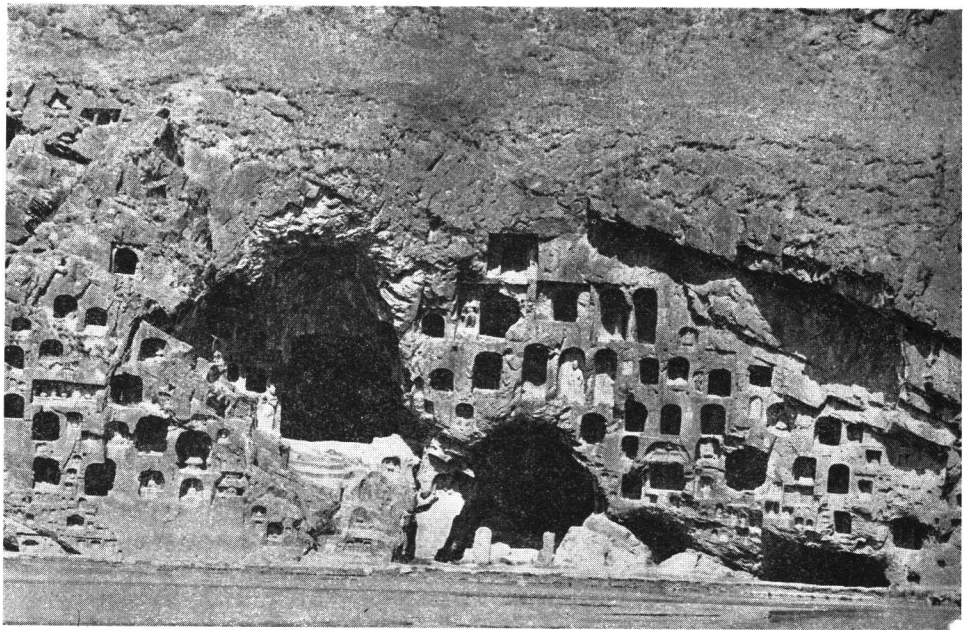
⁵ これも遡つていへば釋迦の脇侍、阿難像の形式であつた。いまこゝではたゞ佛に屬從する一聖僧といふだけで、阿難といふやうな意味はない。本書萬佛洞、三三頁註⁽¹⁰⁾參照。

⁶ この造像記の所在は『支那佛教史蹟』第二冊八五頁による。シャヴァンヌも獅子洞(一洞)南隣の石窟にありとし、『西京法海寺法僧惠簡』の文字は『西京法海寺惠簡』とよむべきであるといつてゐる。(E. Chavannes, *ibid.* p. 386) いれはもつとも、奉先寺造大盧舍那像記(錄文八〇六)にも法海寺主惠簡の名がみえ、また贊寧の『宋高僧傳』卷一八釋道英の傳にも法海寺主惠簡の名がみえてゐる。これも咸亨中のことである。龍門にはまた別に弟子惠簡造像記(目錄五二七)が一つあるが、果して同一人かどうか不明である。

西京法海寺は隋代からあり、慧琳などもゐたことがある。なほ本書石刻錄に敬善寺洞にいてゐるのは、本所々藏の拓本がそいふ所傳になつてゐるためで、他に根據があるわけでないのは『石刻錄』の序例に述べたとほりである。關百益の『伊闕石刻圖表』はこれを老龍洞の東隣の窟とあるが、漠然とこのあたり一帯のものをいれてゐるのであるから、これを敬善寺洞附近とするよりは當つてゐる。

⁷ このときの皇帝はいふまでもなく唐の高宗、皇后は武氏、のちの則天皇后である。太子周王は高宗の第七子、母は武后、のちに即位して中宗となる。顯慶元年十一月長安に生れ、明年周王に封ぜられたといふから、このときは十八歳である。

⁸ 『唐書』卷七中宗本紀)このときはまだ高宗の第五子代王弘が皇太子として監國となり、二月に妃を迎へ、七月に太子新宮をつくるといふありさまで、高宗も深く信賴してゐたやうにかいてある。(『唐書』卷五、卷八六)その皇太子をさしおいて、わざわざ太子周王を高宗武后とともにかぞへ、その奉爲にこの石窟をつくつたといふのは、これからだんだん武后が權力



蓮華洞 老龍洞 老龍窩
第三十八圖 (Fig. 38) 老龍洞蓮華洞附近

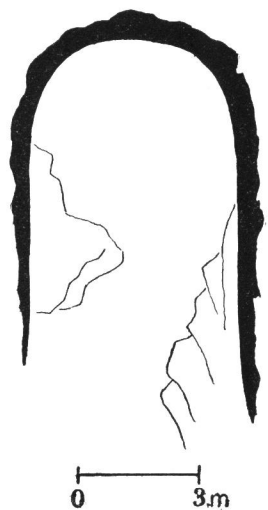
全く不規則である。後壁その他にもこの石窟の本尊といふやうなものではなく、全體が佛龕の不規則な集合である。始めに定つた意圖があつて、ひらかれた石窟ではないらしい。凡て唐代の佛龕である。¹⁾ 後壁中央にはやゝ大きい五尊坐佛の龕がある。下層に香爐をさしはさんで裸形の力士像と獅子像とをきざんでゐる。²⁾ 十圖その作りかたは賓陽南洞右壁の大龕によく似てゐる。その面貌や衣文の硬直した様子も賓陽南洞の諸龕と共通するものが多い。右壁には三尊佛立像の大龕があり、左壁には五尊坐佛の龕があり、そ

老龍洞(第十二洞)

とんど變らぬばかりか、いくらかひくいやうである。その北にまた埋没したかとも見える岩窩があり、これを老龍窩とよんでゐる。³⁾ 第三十八圖 第十二洞は老龍洞とよばれるほか、王公路洞、あるひは公路洞、また大洞とか郭愛洞の名でよばれてゐる。⁴⁾ 石窟は不規則な圓形平面、穹窿天井をなし、廣さ五メートル四〇、深さ九メートル四八、高さ約八メートル五〇ある。⁵⁾ 第三十九圖 入口はあら削りのまゝであるし、下部や床のあたりも、



第四十圖 (Fig. 40) 老龍洞後壁佛龕



第三十九圖 (Fig. 39) 老龍洞平面圖

を専らにするといふ事實とむすびつけて考へて相當に興味がある。武后專權のきざしはすでに顯慶(六五六—六六〇)以後高宗が風眩を病んだころからであり、この咸亨四年の翌年、すなはち上元元年には高宗を天皇、武后を天后と稱するに至り、時人はこれを二聖とよぶに至つた。⁶⁾ 響堂山石窟、圖版二四、三六、三七。⁷⁾ 木下李太郎氏、重版大同石佛寺、昭和十三年刊、圖版一四八、一四九。⁸⁾ 老龍窟については『伊闕石刻圖表』上冊に「山の根に窟あり、泉水湧く、俗に蟄龍あり、その中に居ると傳ふ、故に老龍窟と名づく、窟の内外に石刻多種あり、夏秋の間は毎に泉水漲漫たり、冬春の交、水落ち、寒退く時に至るに非ざれば、折を施すに易からず、慈香、韋利器、韓曳雲、司徒端等、皆その南隣の高處にあり、必ず雲梯を架して方に攀ち登るべし」といつてゐる。半分埋没してゐるやうに見えるが、埋没してゐるのではなく、これだけのものであるかも知れぬ。

²⁾ 本所々藏拓影の所傳では大洞といふ。『支那佛教史蹟』第二冊八六頁はこの名をとり、『支那美術史彫塑篇』は王公路洞といふ。それは王氏の公路修理の碑が入口にあるからだといふ。老龍洞といふのは『伊闕石刻圖表』による。岩田氏の覺愛洞は郭愛洞の譌であらう。洞内には郭愛洞の造像記が二種(錄文二四二、三一九)ある。

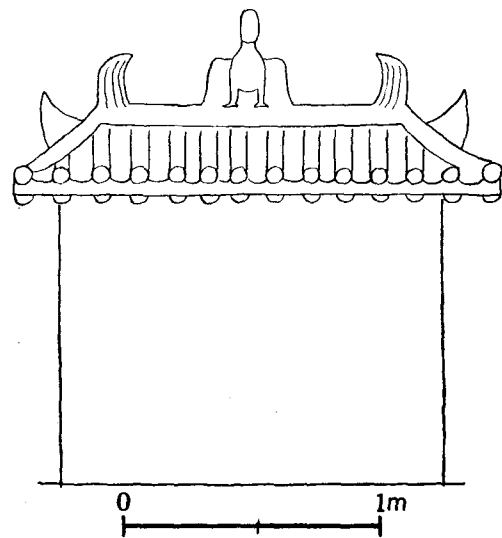
³⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊八六頁。

⁴⁾ 沙畹圖版一八八—一九四參照。なほシャヴァンヌ圖版一七七は賓陽南洞となつてゐるが、實は老龍洞北壁にほかならぬ。

の上に等身大の救苦觀音像の龕があり、それは永徽元年樊慶がその兄前
兗州參軍事樊玄道のためにつくつたものである。^{録文二三五} 要するにこの石
窟は貞觀二十一年^{録文二二三}にはじまり、永徽、顯慶の造龕が多い。だから、
この窟の主要佛龕は永徽顯慶時代になり、そのうち則天武后時代にかけ
てひきつゞき小佛龕がその間に開鑿されたのであらうと思ふ。⁵⁾

〔洞外屋形龕〕老龍洞外、老龍窟の直上に一個の屋形龕がある。^{圖版一 三右下}
よせ棟本瓦葺のやねで、大棟には鴟尾と正面形の鳥が彫つてあつて、惠
簡洞々外の屋形窟のごとくである。^{第四十圖} 龕の奥には左三分の二に二佛並
坐をつくり、のこりの三分の一に坐佛像を彫つてゐる。その作はあきらかに北魏の作である。

なほこの直上にながい佛龕があり、内部の佛像はさだかにみきはめがたいが、その兩わきに韓叟雲、司徒端等の優
填王造像記^{録文三三八}がある。文中にいふ龕とはこの龕をさし、北龕とはこの銘の北にある同形の龕をさすのであらう。



第四十一圖 (Fig. 41) 老龍洞外屋形龕

蓮華洞 〔第十三洞〕

— 圖版三〇—三九 —

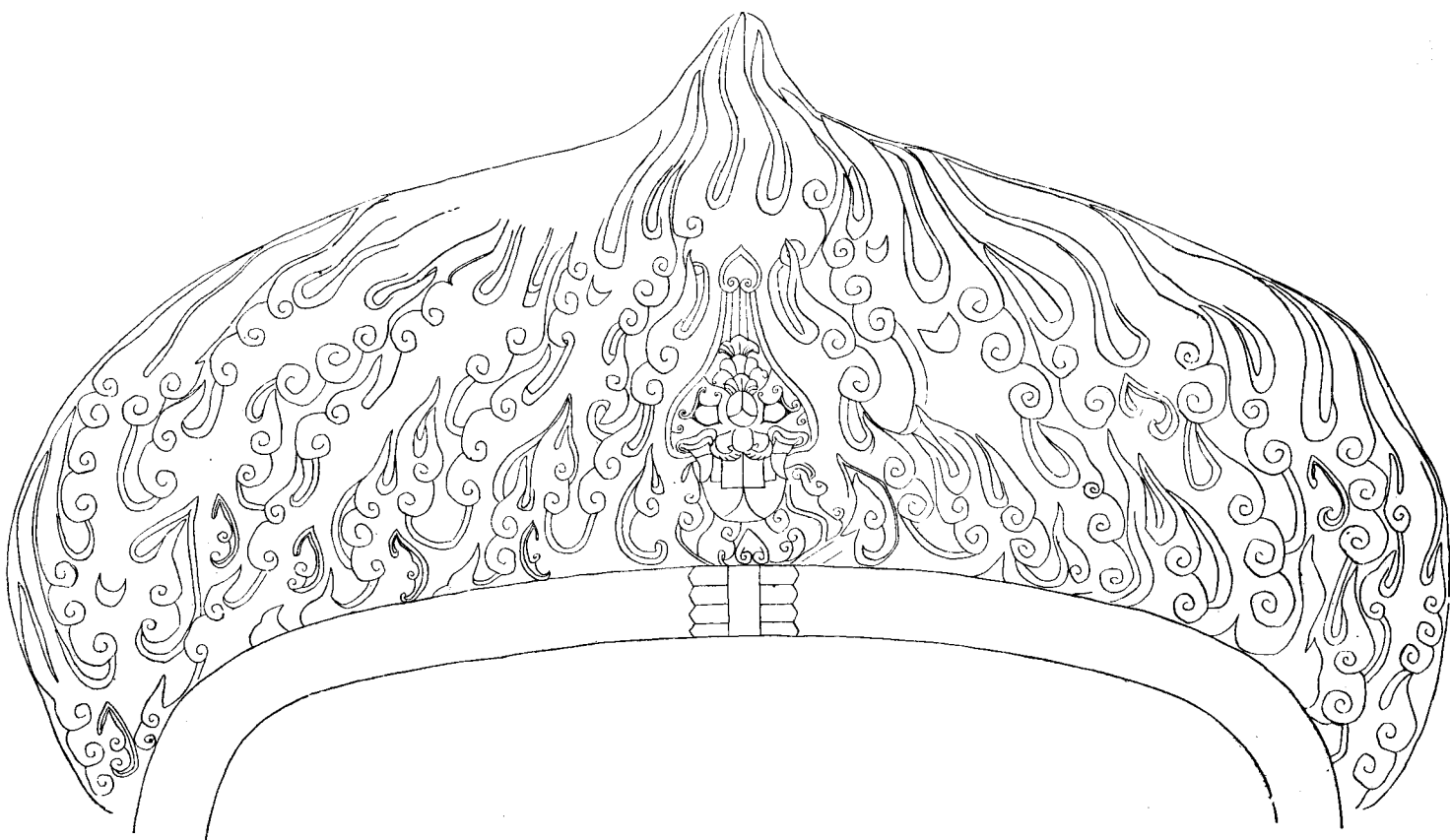
賓陽洞をはなれて伊水の西岸を南すると、まづ敬善寺附近の唐代諸石窟となり、さらに萬佛洞附近の唐代諸石窟と
なり、このあたりに至るまで北魏の石窟をみない。こゝに來ると、¹⁾北魏の石窟としてまづ蓮華洞があり、これを發端
として、第十四洞、第十七洞(魏字洞)の北魏窟が南につゞき、さらに奉先寺をすぎて、第二十洞(藥方洞)、第二十
洞(古陽洞)、第二十三洞(火燒洞)等の北魏窟が相連接してゐる。

〔洞外〕 洞外にはまづ左方、入口拱額のわきに、伊闕の二字を大きくほつてゐる。これは明の隆慶二年^{西曆一五六八} 春、

⁵⁾ 諸著錄によれば

- 貞觀二十一年のもの一種(録文二三三)
永徽元年のもの三種(二三四—二三六)
永徽二年三種(二三七、二三八、二四八)
永徽三年一種(二三九)
永徽四年(二四一—二四三)
永徽五年三種(二四四—二四六)
永徽□年一種(二四七)
顯慶三年二種(二五二、二五四)
顯慶四年一種(二〇九)
龍朔元年二種、二年、三年各一種(録文
二五五、一〇四三、二五六、二五三)
乾封二年二種(二五七、二五八)
總章元年三種(二五九、二六〇、二六一)
總章二年一種(二六三)
垂拱、永昌、載初各一種(二六四、二六
五、二六六)
天授二年三種(二六七、二六八、一〇一
七)
長安二、三年各一種(二六九、二七〇)、
開元五種(二八〇、二八一、八〇四、八
三〇、九〇一)

¹⁾ 伊水の西岸は岩山にそつて少しづつ、カー
ヴしてゐて、蓮華洞のあたりは一つの岬
といふべく、蓮華洞の第十三洞とその南
の第十四洞とは隣あはせではなく、むし
ろ岩鼻の兩側で、たがひにはみえない位
置にある。



第四十二圖 (Fig. 42) 蓮華洞拱門火焰額

河南巡按趙岩の題字である。²⁾その他左右に魏齊、および唐代の造像がすくなくない。³⁾すでに北魏末にあつても、左右側壁と同様な佛龕が拱額右方にひらかれてゐる。また北齊武平六年^{西曆五七五}、鞏舎といふものが同村人廿二名と共力して造建した龕もこの下にある。^{録文}それから、唐龍朔三年^{西曆六六二}楊□□の盧舎那像龕^{録文三七〇}がそのとなりであり、その下に北面して、唐貞觀廿年^{西曆五四六}張世祖夫妻兒子等の三尊坐佛^{録文三六八}があり、そのとなり王□慶の造菩薩像記^{録文四二七}の上には、その石刻の文にもかゝらず三尊坐佛の龕がある。⁴⁾そのほか、北齊かと思はれる覆鉢塔形の佛龕、初唐の作とみられる四體の佛菩薩の列像龕などもこゝで注意さるべきものであらう。⁵⁾

「拱門」 蓮華洞は現在の路面より四、五メートルたかく、そのうへに前岩壁より三、四メートル奥まつたところに口をひらいてゐる。⁶⁾間口三メートル九七、たかさ約五メートルの拱門。そのうへに先のとがつた尖拱額をいたゞいてゐる。^{第四十圖}この拱額にはいちめんに薄彫のうつくしい火焰をうめてゐて、その燃えあがる焰は、渦文の瘤節をつくりながら、上へ上へと上昇してつひに尖拱の先端にあつまつてゐる。⁷⁾このした、ちやうど中央に獅子頭のごとき獸面をほつてゐる。⁸⁾それは舌をだし、門齒と牙とをはみだした小さい獸面で、まるい獸眼がするどくきら

² 關百益氏『伊闕石刻圖表』上冊三。
³ 沙畹圖版二〇三をみよ。

⁴ 圖版三五、邑師僧寶の佛龕はふかく、一尊坐佛を安置し、楊□□の佛龕もふかく、五尊坐佛に供養者像をくはへたものである。張世祖の佛龕はすつかり唐式になつた供養者三人の浮彫が人目をひく、王□慶の佛龕にも記銘左右に坐つた供養者の浮彫像がある。

⁵ 沙畹圖版二〇三、むかつて左上。塔形龕は「龍門」石窟寫眞三をみよ。

⁶ 蓮華洞はさうたう大きな石窟であり、入口も立派なものだが、そこへ至るまでの岩壁には石階らしいものが残つてゐないの不思議である。

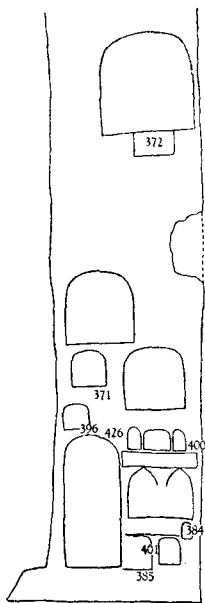
北魏の頃はあまり水位がかなり高かつたときであらうか。これは古陽洞についていはいはれうが、他の小洞はむろんより以上不便など、おかまひなしである。

⁷ 雲岡では火焰拱をみないやうにおもふ。こゝでは賓陽洞外壁にもあつたし、この洞にもあり、また小さい佛龕ではしばしばみる。

⁸ このやうな獸面は雲岡にも龍門にも他にみられないものである。しかし、滿洲國輯安縣の四神塚玄室持送りになが、れた獸面は比較的よくにてゐる。舌をだし、門齒と牙をはみだしてゐる。池内宏、梅原末治兩博士『通溝』巻下、昭和十五年刊、圖版八五）いちじるしいちがひは、これが前脚を缺くことである。

めいてゐる。額の下ばにある拱梁は扁平で、中央に花瓣のかざりをもつ。拱端には龍頭のかざりがあつたらしいが、今日では明瞭を缺く。拱門の兩側にはいま別に拱柱らしいものをみない。それは後世の追刻と破壊のためにわからなくなつてゐるのであらう。

拱門のわきには一對の力士像をほつてゐる。しかし、左方は拱門側壁まで破損してゐるので今日これをみない。右方の像は頭部と右手と足とを缺く。^{三三左} ながい下裳と腹の上でX字形にまじはる天衣とで全身はおほはれ、左手を胸にあげてひらき、右手に金剛杵をもつてゐたものらしい。全體の形式は賓陽洞外の力士像^四によつてほゞうかゞ



第四十三圖 (Fig. 43)
蓮華洞拱門右方側壁圖

へよう。腕、肩のはりぐあひには雲岡の彫刻を想起せしめるものがあつて、割合に古調をおび、特色のあるのはいくらか腹がでばつてゐる點である。首をうしなつて淋しいが、よくみると割合に優秀な作であることに氣がつく。

門口の床には幅一メートル三〇の闕をのこしてゐる。のこつてゐる右方の門口側壁にはたくさんの佛龕がひらかれてゐるが、そのうちのひとつには北魏末の様式をもつた龕がある。^九 圖版三五。その他はいづれも唐代の追刻である。そのうち年號のあるものをひろふと龍朔三年^{一〇} 西曆六六三 乾封元年^{一一} 西曆六六四 先天二年^{一二} 西曆七一三 乾化五年^{一三} 西曆九一五の四種がある。^{三四} 圖版七二。

「平面形」 この石窟は非常にふかい長方形の平面で、奥が特別に龕形をなさぬが、圓くなつて、天井も圓く、古陽洞の形狀に一番ちかい。幅は入口の近くで五メートル四八、奥で六メートル四〇、奥行は九メートル七五ある。大ききさもほゞ古陽洞と伯仲する。^{四四} 圖版四十

最奥にも何ら寶壇様のものなく、本尊も二脇侍も床の面に直接ほりだされた蓮座の上にたつてゐる。^{三二下} 圖版蓮座はいづれも直徑二メートルを越え、反轉した複瓣の蓮瓣はうつくしい。^{一四} この三尊の間に浮彫の羅漢形が二體ある。しかし、これには蓮座はない。

左右の壁は一面に列龕をみるが漸次開鑿されたもので、一時の造建ではない。しかし、それにもかゝらず、奥壁をふかくし、これだけの側壁をのこしたのは一に古陽洞の例になつたものと思はれる。

「後壁」 後壁中央の本尊立像は身長ほゞ六メートル、みごとな長身の像である。^{一五} 頭髮は額と肉髻の正面にある二

9 これはいま年號をもたない。圖版三五の右下にみえる六七センチ四方の龕で、まづ上には全體に對する天蓋があり、下には香爐を中心にして供養者の像を配した寶壇がある。中は二佛並坐であるが、寶座を別にし、おのおの二比丘をしたがへてゐる。そして全體に對する二菩薩が龕の兩端にたつてゐる。寶座を別にした二佛並坐像で、この簡單な龕の形式とともに割合にめづらしい佛龕である。なほ塚本靖博士のとられた寫眞によれば、この右下にみごとな力士像と獅子像があつたらしいが、いまはみられない。要するにこの形式のおこなはれた北魏末には、すでに内部の側壁が一應充滿したために、この佛龕は拱門側壁にきざまれることになつたのであらう。

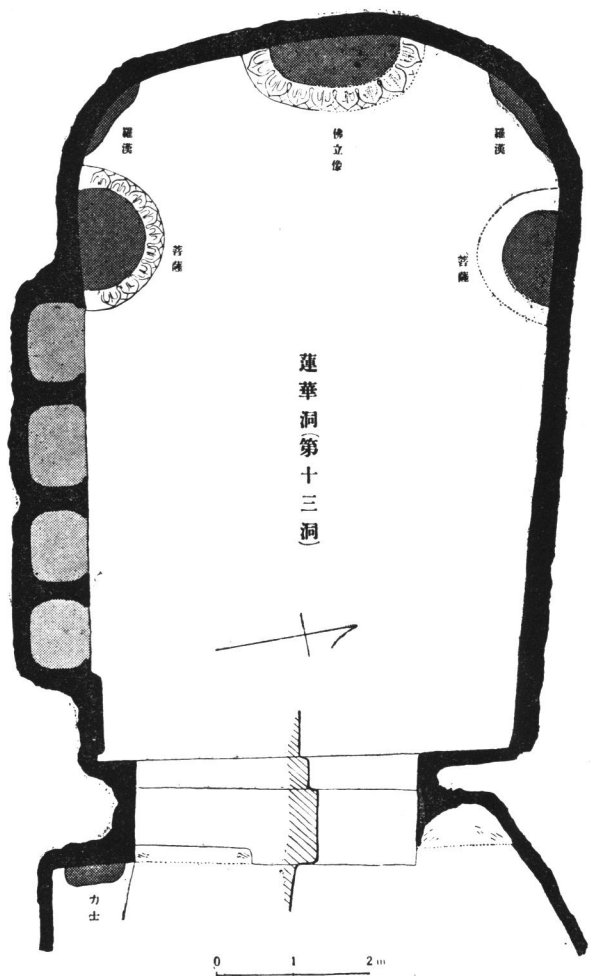
10 龍朔三年(錄文三七二)のは三尊坐佛の龕で、佛は重成の蓮座の上に坐してゐる。圖版三五の中ほど左にある小龕の右上にある。

11 圖版三五、乾封元年(錄文三七二)のも三尊坐佛龕であるが、銘文によると阿彌陀像である。八角形の臺座上に坐し、裳を一面に垂下してゐる。そしてそれは唐初の割合に、硬直した衣文からなる。

12 先天二年(錄文三八四)像は粗末な觀音立像の小龕である。圖版三五右下にある雙觀音龕の右上にある。

13 この後梁乾化五年の造像は五六十センチの觀音像であつた。いまうしなはれてみえぬが、塚本靖博士の寫眞にはみえる。

14 この蓮座の蓮瓣は賓陽洞に一番ちかい。しかし賓陽洞の方がもつと立體的である。雲岡石窟ではしばしばこの種の蓮座を見ることが、どれももつと立體的で蓮瓣もつよい。この蓮華洞の蓮座はわれわれが調査の際には、一様にこまかい砂土で掩はれてゐたので小發掘を試みねばならなかつた。この蓮華洞は前述のごとく路面より四五メートル高く、水面よりは六七メートル高いわけであるが、出水の際にはこまでつかることがあるらしい。



第四十四圖 (Fig. 44) 蓮華洞平面圖

個の巴形を中心に波状にあらはすが、全體として大きく、あたかも冠をいたゞいたやうな感がある。顔は肉髻をふくめて全體にかなり長手で、¹⁶⁾頸もまた長い。眉目は水平にちかく、賓陽洞諸佛のごときつよい弧線をゑがゝない。口脣もいくらか彎曲し、古拙微笑のかたちをとるが、賓陽洞諸佛のごときいちじるしくない。肩から胸、腰から裾にかけては平面的であり、筒のやうである。衣文は簡素にして、ゆつたりと流れ、左右への反轉もわ

¹⁵⁾『支那佛教史蹟』第二冊、圖版七三。山本寫眞場『龍門石窟』昭和十二年刊、寫眞二七。

¹⁶⁾この本尊の鼻は補修かとおもふ。

づかである。要するに賓陽洞諸佛にくらべるとこちらは幅がない。足部は水に浸つたためか、全體に壊れてゐる。いまでも損じてゐるが、これは前に出し、右の掌をあげ、左の掌をたれたものと思はれる。舟形舉身光は火焰をほり、圓形頭光には蓮華をほり、同心圓をほるが、衣文のごとく至極簡素である。賓陽洞の光背にくらべるとその好尚の相違がわかると思ふ。こゝでは焰のひらたい面、蓮瓣のひらたい面、衣裳のひらたい面、さういふものをよく生かしてつかつてゐる。これにくらべると賓陽洞のやりかたは線の強調にあるといへる。¹⁷⁾

奥壁は彎曲してゐるので、左右の脇侍菩薩はまつたく方向を轉じて南北面する。身長約四メートル。右方はまへで、わきだてをもつた高い三面寶冠をつけ、冠とともに頭部はやゝ長大である。眉目は秀麗、鼻すぢとほり、口脣には婉として古拙笑をたゝへる。瓜實顔の、頬から細まつた頤にかけての柔和さも、そのきずのない石肌とともに清純そのもののごとく感ぜられる。¹⁸⁾ 第四十五圖 蓮華洞右脇侍頭部



第四十五圖 (Fig. 45) 蓮華洞右脇侍頭部

¹⁷⁾舟形光背の先端はながくのび、後壁にそつて天井にあらがり、天井蓮華文にまで達してゐる。このことは賓陽洞光背も同じである。魏字洞本尊光背(本書圖版五〇)などになると、ほそく、ふかく蓮華文のなかへくひこんでゐる。まことに火焰の勢よくもえあがつてゐる感じである。それが北魏以後になると、こんな例はない。天龍山の魏末の第二、第三洞では後壁佛龕が獨立し、また天井蓮華と天人は框で仕切られてしまつた。しかし、下の尖拱頂がのびて、この框につきこんでゐるところは、やはりこの火焰光の遺意であらう。(『天龍山石窟』第十二、十三圖) 唐代になれば龍門萬佛洞(本書圖版二二)のやうに、いつでも分離してゐる。

¹⁸⁾『支那佛教史蹟』第二冊圖版七四。『龍門石窟』寫眞三〇。この首も大正の末年にはなくなつたらしい。岩田氏の寫眞にはもうみえない。

は右胸につけ、衣端をもつた左手はすこしかめて腰につけてゐるが、その手さきは美しく柔軟にみえる。すこしつきだした腹のあたりに璧環がみとめられる。その璧環を通じて、両肩から下つてきた天衣と連珠とが、X字形に交叉してゐる。さらに下にたれた衣裳は、兩足の間でくぼみ、兩足をうかせ、その衣端でおほまかな美しい波状をつくつてゐる。賓陽洞の諸佛ほど幅がなく、それだけどつしりしたところがないが、神経はこまかく、その衣端のさばきや寶冠の紐の翻轉などもみがしがたい。

この右方脇侍の光背は寶珠形で、うちより蓮華、唐草文帶、火焰縁飾といふふうになつてゐる。寶珠形の上縁にそうて何かせまい幅のかざりか、おほひのやうなものがついてゐるのは、こゝではほんの残存形式にすぎぬが、雲岡石窟の光背ではかなり顯著な裝飾である。¹⁹⁾

左方の脇侍菩薩の頭部は身體に比してやゝ大きく作られてゐたが、これもいまではなくなつてゐる。頭が大きく、下すぼまりの顔で、口脣の彎曲が特にきつかつた。寶珠光背はほゞ同様であるが、寶冠はちがつてゐた。これには一聯のたてものを左右までめぐらし、その内部にうつくしい、こまかいほりがあり、正面上端には新月形があつた。²¹⁾胸から腹にかけては地下水の浸透によつて、はこばれた石灰分が固著し、足もとは同じく水の浸蝕のために破損しつくしてゐる。しかし、その肩の優しい輪郭をみて、兩手さきのおどろくべき自然の表現におよぶと、われわれの眼はしばしこゝに凝集される。^{三〇}圖版 寶珠——あるひは蓮瓣であるかも知れない——をもつた右手は右胸につけられ、飾環——これも何だかよくわからぬものである——をもつた左手は左腰にそふ。その飾環をもつた指の柔軟さ、なめらかさ、あたかも血の通つてゐる皮膚をみるやうである。腕からひるがへつた衣のはし、また肩にかゝつてゐる衣のはしをみよ。こゝにもこの像の非凡な美しさが感得される。

本尊と兩脇侍菩薩との間にそれぞれ浮彫の羅漢像がある。身體約三メートル。右が阿難、左は大迦葉、したがつて本尊は釋迦牟尼佛といふことになる。迦葉像は額に皺をよせ、咽喉の皮膚をすぢだゝせ、肋骨の骨をあらはにして、その老人たることをあらはし、^{第四十}六圖——これに對照して阿難像はやさしい面貌に年わかい羅漢たることをしめしてゐる。²²⁾しかし、その眼窩をふかくし、鼻端をとがらし、口脣をひきしめ、額を大きくし、頤と頬骨の隆起をしめし、するどい面貌をあらはしたのは共通してゐる。阿難像には石灰分が凝著し、全體がいくらか模糊としてゐる。右手は肩のあ



第四十六圖 (Fig. 46)
蓮華洞 迦葉像

¹⁹⁾ 光背のうへのおほひのやうな裝飾は、たとへば雲岡の第十三洞本尊交脚彌勒像、第九洞左脇侍菩薩像等にみられる。龍門では古陽洞の古式の佛龕においてみとめられるが(本書第九十圖)、破洞、魏字洞間の路傍薩龍(第六十圖)はその一變形とみられよう。

²⁰⁾ 左方脇侍菩薩の頭部は大正末年まであつたらしいが、いまはない。關野博士、岩田氏寫眞には見える。

²¹⁾ 寶冠中央上部に新月形をつけることは雲岡石窟の造像にしばしばみる。しかし、こゝではほんのなごりとして行はれてゐるのみである。たとへば第十九洞左脇侍(木下李太郎氏「重版大同石佛寺」圖版八六)第十七洞右壁大龕右脇侍(同書圖版八一)第六洞明窓兩側半跏思惟像(同書圖版三四)に雲岡の例がみられる。

²²⁾ 『龍門石窟寫真』二八、二九。沙畹圖版一九七。『支那佛教史蹟』第二冊圖版七三、七四。本書一六頁註(7)參照。

たりにあげ、左手は左胸にあげ、なにかもつてゐる。迦葉像は右手に錫杖をつき、左手に衣端をとつてゐるが、どちらにも上膊を垂直にし、腕さを水平にして、一樣に本尊の方へむけてゐる。しかもそれにつれて、いくらか肩がはつてゐるところは、この像のな、め本尊の方へむいた顔とともに生々とした感じをあたへる。衣裳も上身において密著し、衣文も密接してゐるのに、下身においてはひろがり、おほまかな衣文をつくつてゐることは、またこの像をより活動的にみせる點である。とにかく、おほまかな衣文の流れと衣端の波状は、裾の彫りがあさく平面化したのにつよめられて、ことのほかうつくしい。光背はともに寶珠形で、圓形のそとに唐草文帯があり、そのそとに火焰がもえあがつてゐる。

さてひるがへつて、これら尊像周囲の壁面を観察するに、それは全體が龕狀に彎曲してゐて、天井の蓮華文にまでつらなつてゐる。左右の羅漢像の上には小さい千體佛の像をぎつしりとぎざみ、²³⁾その他には小さい佛龕をうめてゐる。その形式や彫法はまったく左右壁の諸龕と一致し、北魏末の追刻であることがわかる。左羅漢の上にやゝ大きな佛龕があり、そのかたはらに碑形をきざんでゐるが、その文字はわからない。文字のわかるものとしては、右羅漢の左足下にある二佛並坐の帷幕尖拱龕に對する碑形が唯一のもので、それは北魏終末の普泰元年²⁴⁾西曆五三一の紀年を有する。しかも、この佛龕はその場所からして、奥壁追刻龕の最後に位するものと考へられるから、奥壁の小龕追刻は、このころまでおこなはれ、またこのころを最後とするものであらうと考へられる。なほ右方脇侍の上、天井との間には五六の唐代佛龕がある。^{圖版三一上}

「天井」 何分細長い石窟であるから、天井は自然かまぼこ形となるが、奥壁も龕狀に彎曲して、自然に天井におよんでゐるので、やはり一種の穹窿狀とみることができ。そして窟頂の中心をなす蓮華もすこし奥の方により、本尊光背につらなつてゐる。かういふところも正しく賓陽洞のまねである。²⁵⁾

蓮華洞の名が由來した窟頂の蓮華は大きく、天井いっぱいひろがる。大きな中房、²⁶⁾簡素な單瓣の蓮瓣、それから外區のC字形忍冬をつないだ唐草文帯と、三段になつてふかく彫りだされてゐる。そのたかい彫りは、何のかざりもない平滑な蓮瓣の匙面とともに、明朗な感じをかもしてゐる。^{第四十圖}

なほ蓮華をさしはさんで、左右に六體の飛天がある。^{圖版三三二} 下肢をはねて空中を遊弋してゐる狀につくるが、上半身はかならずおこして、香爐あるひは果盤を捧じてゐる。上身と下肢のまげかたにいくらか無理があるが、かるくうしろへなびかせてゐる天衣のリズムがすべてを融合して輕快な姿になつてゐる。肢體も細長いが、面相もながく、すこ

23 この千體佛像も右方と左方でかなり配置に相違があるが、とにかく、奥壁尊像の造建後、間もなくつくつたものと思ふ。

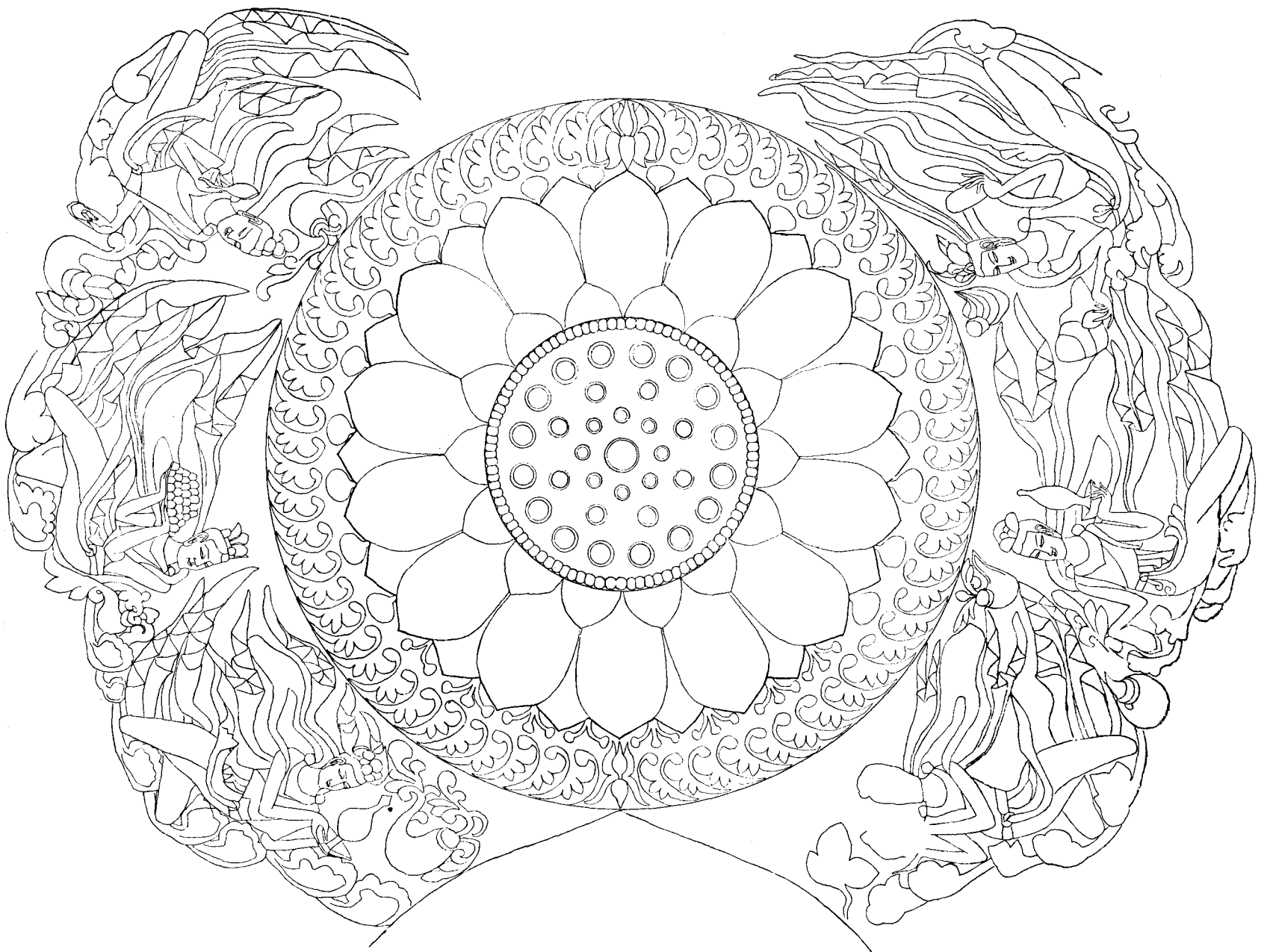
24 この千體佛のすぐ下に屋形佛龕がある。左右に一雙あり、千體佛についてつくられたものと思ふ。しかし、こまかくみると、その間に小異がある。

25 比丘尼道慧法盛等造多寶像記（錄文三五八）である。

26 この蓮華洞は前述のごとく、その平面形において古陽洞をまねてゐるのに、いま立面形においては賓陽洞になつてゐることがみとめられる。その若干の矛盾がこの天井にあらはれてゐるわけであらう。

27 この蓮華の中房には、中心にやゝ大きな蓮子があり、これをとりまいて小さい八個の蓮子がある、またこれをとりまいて中位の蓮子八個があり、さらにこれをとりにまいて大きな十六個の蓮子がある。中房周圍に圓珠をつないだせまい一帯がある。この中房周縁の連珠文帯は百濟の瓦磚にみる蓮瓣に往々みるところである。たとへば扶餘窺岩面慶寺址出土磚および瓦當（朝鮮古蹟研究會昭和十一年度古蹟調査報告）昭和十二年刊、圖版七三、八一）をみよ。

28 この種唐草文帯は雲岡石窟においてしばしばみるところである。たとへば第一洞東壁（大同石佛寺）圖版六八、第七洞、第八洞内部（同書圖版五二、五三）、第三十九洞拱門額（同書圖版百二）をみよ。敦煌千佛洞では第一二〇N洞にみられる。龍門ではこれ以外の一例として蓮華洞右壁中層第一龕の拱額があげられる。



第四十七圖 (Fig. 47) 蓮華洞天井蓮華飛天圖

ぶる氣品のたかい作品である。また肢體の面、衣の面、頬の面など、平滑な面をたくみに生かせて彫つたところは、前に指摘した本尊光背や、羅漢の衣文乃至蓮華の花弁のやりかたとともに、蓮華洞彫刻家の得意とする所である。²⁹⁾ なほ、どういふわけであるかわからないけれども、天井の前方部はあらけづりの壁のまゝにのこされてゐる。³⁰⁾

「右壁」 佛龕の配列は不規則で、左右の壁が相稱でない。³¹⁾ 右壁の方はいくらか秩序だつてゐるが、それでも完全とはいへない。³²⁾

まづ右脇侍のところ、高さ二メートル内外、幅一メートル一〇乃至三〇の佛龕を、上中下の三層

²⁹⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊圖版七七、一〇五。後者は誤つて鞏縣石窟寺の圖版となつてゐるが、實は蓮華洞の天井蓮華である。

³⁰⁾ 古陽洞の天井もあらけづりのまゝで、しかも、そのまゝ、洞口までのびて、洞口には何らこれをしめくゝる施設がない。蓮華洞はあらけづりでそのまゝ、洞口にまでびてゐるが、洞口にはちやんと大きな尖拱額があつて、石窟をひきしめてゐる。

³¹⁾ 沙畹圖版一九五、一九六、一九八—二〇二。

³²⁾ こんなに不規則だから、一龕一龕、氣ままに追刻していつたことはあきらかである。けれども、その彫り方は一樣で、統一があり、しかも、後壁本尊や天井ともその特色が一致してゐる。

にわけける。しかし、ほと同大の佛龕がならぶのは、下層では奥よりかぞへて第四龕まで、中層、上層はおのおの第二龕までである。下層はなほ門口までに一龕分ほど空間があつて、こゝに螭首の碑形をほるが、その螭首は中層にひこんでゐる。中層では第三龕がやゝ大きく、上層にくひ入り、第四龕やゝ小さく、第五龕ははるかに小さい。上層では第三龕が天井にくひこみ、そのかたはらに碑形があり、その上に第三龕の附屬佛龕があり、ついで第五、第六龕は同大で並列する。まづ下層から説明しよう。^{第四十}
九圖

下層第一龕は二佛並坐像で、段成の方座の上に坐す。方座の前には香爐を中心にして、一雙の獅子をほる。龕外には金剛杵をもつた力士、拱端が鳥頭になつた尖拱がある。尖拱の上には帷幕をしぼつて、弧形をつらねる。拱額とその上の空白には細密な飛天の飛翔してゐるさまをほり、拱端鳥頭の上には蓮華上に化生した天人をつくる。獅子像たてがみの面、體軀の面、坐佛垂衣の面、それぞれこの蓮華洞彫刻の特徴を把持してゐる。龕下に碑形あり、その中に北齊天保八年^{西曆五五七}つくとくところの釋迦五尊坐像龕がある。³³⁾ なほこのかたはらにほゞ同年代の五尊倚像、三尊倚像の方形龕、やゝ時代のおくれた五尊像、菩薩立像の龕がある。³⁴⁾

下層第二龕は三尊坐佛で龕形、像式ほゞ前者に同じであるが、段成の方座なく、香爐なく、獅子は腰をおとして蹲つてゐる。また拱額にはたゞ中央に寶珠形をほり、その上の空白には僧形、菩薩形をごくあさくほる。拱端の鳥頭、龕上の化生は同様である。特色のあるのは左右一對の金剛力士で、あさい平板なほりであるが、その肢體、その天衣が自由で變化にとんでゐる。左方力士が見下すやうに首をかしげながら、大きな金剛杵を前につき、その上に兩手を安じたかつかうは、まことにめづらしく、躍動してゐる。おそらく當時の繪畫における運筆にふかい影響をうけたものとみえる。中層上層の第三龕力士もこのやりかたである。龕下中央には二十一字十四行にわたる長文の造像記³⁷⁾ 録文³⁸⁾ がある。永熙二年八月廿日^{西曆五三二}の供養である。この左右に唐代の佛龕がある。³⁹⁾

下層第三龕も三尊坐佛。光背のほりがうつくしい。³⁹⁾ もかけ座の下には香爐があり、その左右の獅子は頭を下げ、腰を上げ、何かねらつたやうなかつかうに彫つてゐるのはめづらしい。⁴⁰⁾ 尖拱額の中には面彫りにて樂天の飛翔してゐるさまをこまかく彫り、その兩端に蓮上の化生を彫る。拱端には半肉彫になつた獸頭、その口からのびた蓮枝には小さい化生がある。拱額と帷幕との間には半肉彫の維摩經變をほる。右に文殊の屋舎あり、左に維摩の几帳がある。その下にいくつもならべられたコ字形の椅子は、維摩のとりよせたといふ八萬四千の椅子であらう。中間に配された多數の合掌像は文殊にしたがつて來た人々であらう。力士像は第二層とまつたくちがふ半肉彫であらはされ、頭上によせ棟本瓦葺の屋形をつくる。⁴¹⁾ 圖版^{三三右} またその力士の形式も、第一、第二龕のそれとまつたく異なり、顔はなゝめうちが

33 すなはち、この佛龕の左に天保八年十一月十日造釋迦像記(録文三六四)があるので、この佛龕をさすものと思ふ。なほ別にこの佛龕の右に、ほとんと同筆で比丘寶造造先量壽佛記(録文三六五)がある。どの佛龕をさすか不明である。あるひは龕一つに像名を二つ書いたのか、それともこの龕はそれより以前のもので、録文三六四はその左方の三尊倚像龕、録文三六五はその左方の五尊倚像龕をさすのではあらうか。

34 この方形龕とみえるのは上に天蓋のある天蓋龕であらう。この石窟拱門側の二佛並坐天蓋龕(圖版三五)参照。

35 五尊像龕は唐代か、時代不詳。菩薩立像龕は唐代。沙畹圖版一九八下、

36 みえてゐるところでは坐佛と羅漢との三尊である。しかし、佛と兩羅漢の三尊龕といふのはおかしいから、なほ菩薩立像があさい彫でほゞこされてあつて、五尊像龕かも知れない。これと同様なことは下層第二、第三龕、上層第二第三龕についてもみとめられる。

37 この造像記(録文三六二)には「法儀の衆、遂に廿餘人に至る、各家珍を竭し、竝びに一切を勸め、仰いで皇帝□□、法界有形の爲めに、敬しく石像一區を造る」といふ。石像とあるのみで、何の像かわからぬ。

38 右方は五尊坐佛龕、左方は三尊坐佛龕。これより第一龕の下に至るまでになほ若干の小龕があるが、そのうちに北魏末の様式をもつた菩薩立像の楣拱龕がある。沙畹圖版一九八下、

39 註(32)参照。

40 この獅子のねらつたやうなかつかうは、古陽洞中の一佛龕にもみられる。(第九十四圖)

41 圖版三三右の向つて右方の力士がそれである。この下に供養者列の見えるのはこの龕本來のものである。

はにむかひ、弁冠の布片はねあがり、身體をくねらせて、そとがはの膝をまげ、うちがはの足をふんばつて、躍動的な姿體をあらはしてゐる。龕の下には薄彫の供養者列像があつたらしいが、いまは後刻の佛龕によつて、その一部をのこすのみである。中央には螭首の碑形があり、その中には三尊坐佛像が二體ほつてあり、碑のはしには比丘惠感が无量壽佛をつくとある。⁴²⁾その硬直した體軀に特徴があつて、その右隣の帷幕五尊龕とともに東魏頃の作と考へられる。この碑の左方に小さい菩薩立像龕あり、北齊武平六年^{西曆五七五}の年號がみられ、碑形の像もおそらくこれ以前のものと推定される。なほこれらの間に若干の唐代佛龕がある。

下層第四龕は三尊坐佛⁴⁴⁾で、光背のほり、龕外の裝飾など第三龕によく似てゐる。維摩經變の浮彫をきざむところまで一致してゐる。たゞちがつてゐるのは拱額内部で、これには火焰がつくられてゐる。^{三六下}また拱門の彎曲がほとんど圓形にちかづいてゐることも、ちがひといへばちがひで、北魏龕にあまりみないところである。また金剛力士は前者のごとく半肉彫であるが、いかめしいこざねの鎧をつけたことはまつたくユニークな例である。^{四五)}

下層碑形は高さ二メートル五〇、幅一メートル二三。^{三四}簡素で力強い螭龍の形式やその彫りかたをみると、右の

諸龕と同時、おそらく北魏末に、この蓮華洞に對する造像碑としてつくられたものと思はれる。しかし、いまではそののちにつくられた數個の小佛龕によつておほはれてゐる。⁴⁶⁾いちばん古いと思はれるのは、向つて右下の五尊坐佛龕

圖版三
四右下で、その肩のはつて硬直した姿態と大膽なまでに平滑な素面と、それからおほまかな曲線とは、正しく北齊時

代の佛像を暗示するものである。しかもかくまで面を生かした彫刻といふのは、結局龍門蓮華洞の發展ともみられるものであるが、その實龍門においてはほとんどみられない形式であるから、この一例はめづらしい存在だといはなければならぬ。その他の三尊佛倚像龕二、三尊佛坐像龕、五尊佛坐像龕や、さらに小さい一尊佛倚像龕、菩薩半跏像龕、菩薩立像龕等はすべて初唐頃の作とみえる。そのうち上部中央に小さい一尊坐佛像の龕があつて、その上から右手へかけて長安□年^{西曆七〇一}の造像記がある。⁴⁸⁾この文字は、どうしてもこの坐佛の小龕よりのちにほられたもので、この佛龕に屬するものである。しかもこの小龕がこゝにほられたときを考へると、この碑面に對する佛龕の追刻もこの長

安頃^{西曆七〇一}を最後としたやうに察せられる。

中層第一龕は五尊佛坐像で、光背のほりはみごとである。帷幔があり、尖拱額にはC字形忍冬をならべた唐草文⁴⁹⁾をほり、その中間には維摩經變を浮彫にしてゐるらしい。力士像はない。

中層第二龕は五尊坐佛龕、前者に同じであるが、蓮額内は火焰がある。蓮端の龍頭は細緻で、蓮華洞拱門の龍頭もかうであらうかと思はれる。力士像は下層第二龕の式である。

42 錄文三九一、比丘惠感造无量壽佛記。沙畹圖版一九八下。

43 錄文三六七、遊達摩等造像記。沙畹圖版一九八下。

44 こゝのは三尊の脇侍が菩薩か羅漢かあきらかでないが、沙畹圖版二〇〇をみると菩薩立像のやうである。

45 こざねの鎧、つまり札甲はすでに漢代からおこなはれてゐる。(江上波夫氏および水野、内蒙古長城地帯第二篇綏遠青銅器六三頁)北魏時代にも土偶に札甲をつけた例がある。しかし、力士像に札甲をつけた例はきかない。やゝ大きな手杵のごとき金剛杵をもつてゐる。高句麗の壁畫にある札甲の畫像は有名であるが、その系統觀はしばらくおく。(通溝)下冊、圖版五三。

46 シャヴァンヌはこの碑に文字があつたやうに考へてゐるが、(Chavannes, ibid., p. 413)あるひははじめからなかつたのではなからうか。表面のぐあひがどうもあつたやうな形迹がない。またあつた文字をつぶして佛龕をつくることも尋常のことでないと思ふ。はじめこの石窟の完成をみたころ、碑形がつくられたけれども、何らかの事情でそのまゝになつてゐたのを、北齊ごろになつてやうやく小龕をこゝにほりだしたのであらう。

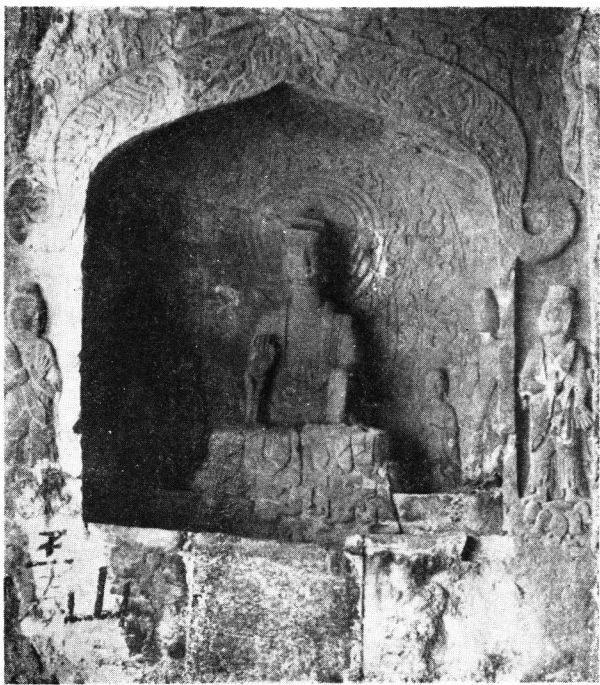
47 たとへば北齊堂山南洞諸尊像(響堂山石窟)圖版四六、四七)をみよ。

48 錄文三八三、長安□年陝州芮城縣陳昌宗造阿彌陀像記(西曆七〇一—七〇三)。本尊阿彌陀佛は手をまへにあはせ、蓮上に結跏趺坐してゐる。

49 正に雲岡第三十九洞拱門(大同石佛寺)圖版一〇二のごとし。

中層第三龕は五尊坐佛龕、上述諸龕より大きく、幅約二メートル、高さ約二メートル二〇、力士は下の第三龕と同じである。帷幔の弧線はあざやかに、維摩經變の彫りもこまかである、拱端は肉彫龍頭、拱額は線彫火焰（圖版三六上）。基壇には北魏の三尊坐佛龕がひとつ、唐代小龕が二三ある。

中層第四龕（第四十八圖）はやゝ小さく、そのため基壇の下に一個の北魏楣拱小龕をもつてゐる。五尊坐佛像で、光背はうつくしく、垂衣もうつくしくひろがつてゐる。鳥頭飾の尖拱で、その中には薄彫の奏樂飛天六體をおさめる。尖拱のうちばがとがつて切れこんでゐるのは例外的な特徴である。⁵⁰⁾帷幔の弧線はゆるく、その空白は多數の合掌せる僧形をもつてうめる。力士像は半肉彫であるが、金剛杵をとつて佇立するのみである。基壇中央には正光六年（西曆五二五）の造像記



第四十八圖 (Fig. 48) 蓮華洞右壁中層第四龕

録文がある。これによつてこの佛龕は蘇胡仁等合邑十九人が造建した釋迦像龕であることがわかる。なほこのつぎの空白中央三分の一に小さい北魏の坐佛尖拱龕があるが、完成してゐないやうである。他の三分の二はあらけづりのまゝである。上層第一龕は尊像がよくわからぬ。⁵¹⁾帷幔はふつうであるが、尖拱額は裝飾なく、力士像もない。基壇の兩隅に小さい北魏式の坐佛尖拱龕がある。中央は空白のまゝのこつてゐるが、文字をみないやうである。

上層第二龕は三尊坐佛龕で、かなり細おもて、瘦身の作である。舟形舉身光背をくつきりとほりだし、その兩わきに大きな圓形の蓮華文を附加してゐるのは龍門にはめづらしい形式である。拱額は細緻な火焰、拱梁ふとくあらはれ、その端は龍頭と忍冬唐草になつてゐる。帷幔は、さらにその上に鱗狀と三角形の天蓋があり、なほ垂下した華繩（ガランド）を附加してゐるのはめづらしい。⁵⁴⁾基壇には供養者の行列があるが、破損して全貌をうかゞひがたい。なほこの上に千體佛あり、その中央に坐佛の尖拱小龕があり、⁵⁵⁾またそのとなりには五尊交脚菩薩の楣拱龕、三尊坐佛の尖拱龕がある。交脚菩薩像はなほ上層第五龕にみとめられるが、この二例が古陽洞をのぞく龍門における交脚菩薩像の全部である。長身にして垂衣に特色あり、まつたく北魏末の様式になりきつてゐる。⁵⁶⁾

上層第三龕はまた、三尊坐佛像、中層第三龕にことごとく一致してゐるが、拱額には彫りなく、帷幔の上には十字

50 唯一の類例がこれに對應する蓮華洞の左壁にある。同じ頃の作であらう。天龍山石窟には、唐代の窟になると尖拱のしたをくひこんだ例がある。第十一洞、第十六洞、第二十一洞等。（天龍山石窟、第五十二圖、第七十四圖、第七十九圖）

51 龕がふかくてよくわからぬ。この右方の脇侍は半跏思惟の菩薩像のやうにみえるが、いまたしかめるべきでないで省略する。要するにこの佛龕の裝飾がこんなに簡素になつてゐるのは、この同大諸龕のうちでも最後のものだからではなからうか。さうすれば、この壁面はたとへ奥からはじめられたとしても、かならずしも一様にさうであつたとはいへないであらう。

52 註(36)參照、沙畹圖版一九九。

53 雲岡石窟の裝飾意匠にはこの種の圓形蓮華文を散らした例は諸所にある。たとへば第九洞、第十洞前室後壁『支那佛教史蹟』圖版三三。

54 雲岡第十一、十二龕外の小佛龕の裝飾にみるが、龍門ではあまりみない。

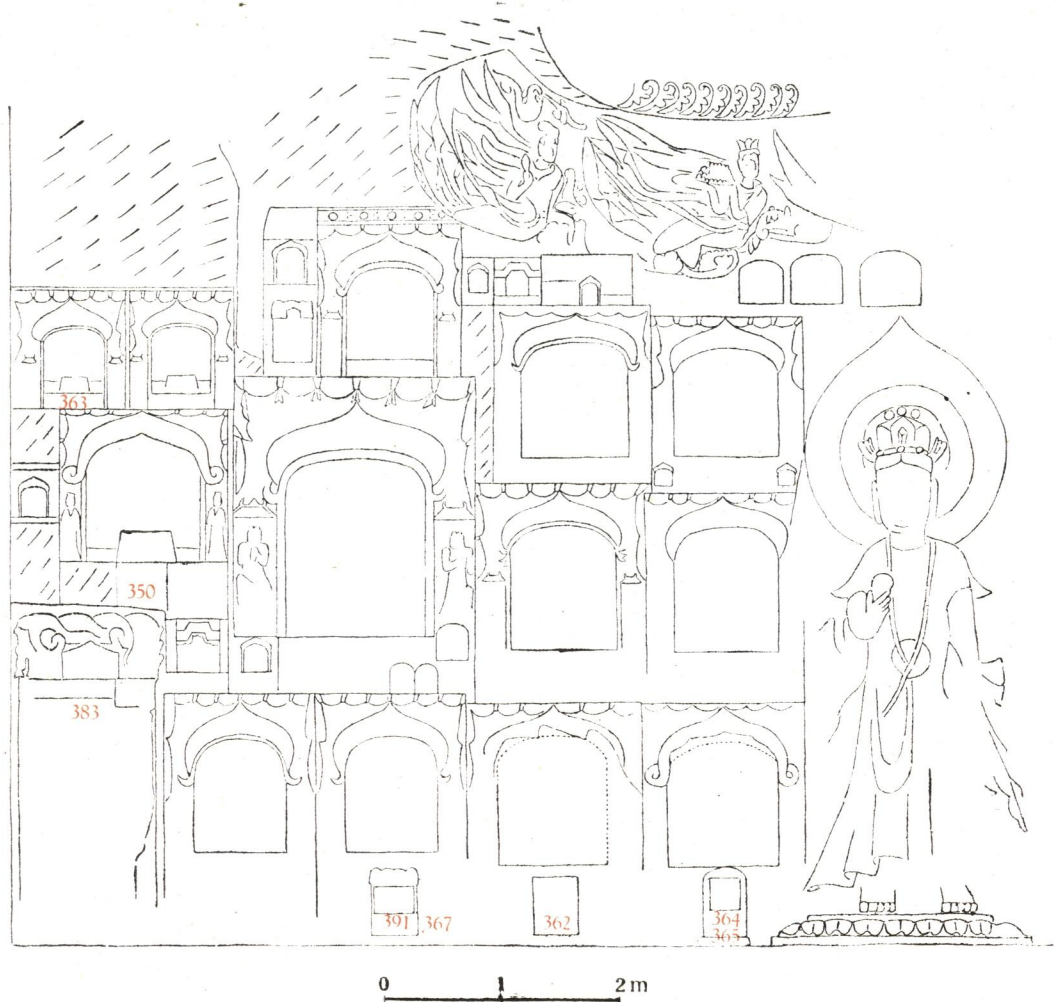
55 この小龕のかたはらに文字でもほるべき空白のところがあるが、いまのところ文字がありさうにみえない。

56 交脚菩薩像は雲岡では頻繁にあらはれ、龍門でも古陽洞には頻繁にあらはれる。これはこの上層第五龕とともに、その終末の二例である。蓮華洞ではまだ左壁に二三の例がある。

57 註(36)參照、沙畹圖版一九九。

と圓形とを交互に配した欄間のやうな一帯がある。かたはらにこの龕に對する小さい螭首の碑形があるが、文字はな
いらしい。碑の上に別に五尊坐佛の尖拱龕がある。⁵⁸⁾これも北魏式である。

上層第四龕は五尊坐佛像、第五龕は五尊交脚菩薩像、尊像以外のことはまったく共通する一雙龕で、またその形式



第四十九圖 (Fig. 49) 蓮華洞右壁壁面圖

は第三龕、ひいては中層第三龕に一致する。たゞ垂衣の兩側にそとむきの獅子像をほつてゐることがちがふのみである。第四龕の垂衣は整正でうつくしい。第五龕基壇中央には永熙三年^{西曆五三四}の比丘道仙造彌勒像記^{錄文}があつて、本尊の形姿と合致する。⁵⁹⁾

さて以上を綜合して右壁の成立を考へれば、正光六年蘇胡仁釋迦佛龕(中層第四龕)を最初^{西曆五二五}とし、永熙二年法義廿餘人像龕(下層第二龕)永熙三年比丘道仙彌勒龕(上層第五龕)を最後^{西曆五三三}として、一應全壁面の開鑿が終了したものらしい。翌^{西曆五三五}年^{西曆五三五}衰微しつゝあつた北魏の王室は二つに分裂して、彰德東北の鄴都^{臨漳縣}と陝西の長安とにうつり、いはゆる北魏王朝はこゝにほろび、

東西兩魏對立の世となつた。⁶⁰⁾したがつて龍門における石窟の造營も一頓挫したものと思ふ。これより上層の天井にかけた部分は、もはやあらけつりのまゝのこされ、東魏北齊の世になつて、近づきやすい下層基壇にのみ、若干の造龕をみることになつたのであらう。たとへば天保八年釋迦佛龕(第一龕下)、武平六年佛龕(第三龕下)のごときである。

⁵⁸⁾ この碑の螭首は下層の碑の螭首、乃至下層第三龕基壇の碑の螭首と互に類似してゐる。そしてその相互の關係や、彫法によつては北魏末の製作だとの判斷がつく。

⁵⁹⁾ 永熙三年(西曆五三四)といへば北魏の終末で、翌年東西魏に分裂するわけであるが、このときまで交脚菩薩像がつくられ、しかも、はつきりと彌勒菩薩であることが傳承されてゐるのは注意すべきであらう。

⁶⁰⁾ 比丘道仙造像記(錄文三六三)のできたのは永熙三年四月十三日であつた。この年二月永寧寺浮圖は焼けておちてゐる。『魏書』卷十一出帝紀、卷十二孝靜紀によれば五月丁酉、帝は華林園の都亭に至り、京畿都督及軍士三千餘人を慰勞してゐる。これはひそかに齊獻武王、すなはち高歡にそなへたのである。それから次第に四方の固めを嚴にし、七月己丑には帝親ら六軍十餘萬をすべ、河橋に次し、侍中斛律椿を前軍大都督として虎牢に鎮せしめ、荊州刺史賀拔勝をして汝水に陣せしめたが、高歡の軍に抗しがた。丁未、斛律椿等にせまられて帝は長安にむかひ、翌々日高歡が入洛する。十月丙寅、孝靜帝洛陽城東北において、即位し、永熙三年を天平元年とあらため、丙子、つひに洛陽から鄴に遷都した。

「左壁」 左壁の佛龕は右壁に比して一般に小さく、配置もより亂脈である。のみならず壁面すら凹凸がある。

下部にな、めの浸蝕⁶¹⁾があるのも、おそらく當初からのものと思はれる。したがってそのためか、入口にちかいところなどは、床を平らに調整するために當然切りとられてゐなければならぬ部分まで、不規則な凹凸のまゝでほつてある。おそらくかういふやうに石質がわるかつたために、當初から計畫的なものがつくられず、手あたりの個所へ、いまみるやうに不規則に、つきへつきへとほつていったものであらう。不規則ではあるが、奥のはしを基準として、下から

第一層、第二層とかぞへ、また奥から第一龕第二龕とかぞへすこしく説明してみよう。^{第五十圖}

第一層第一龕は高さ四十センチばかりの帷幔尖拱龕で、なかには二佛並坐の像をおさめる。これより入口の方は全部こはれてゐる。この上の第二層第一龕はやゝ大きく高さ九十センチ位。^{三九圖版}五尊坐佛の龕、左右屋形の下には半肉

彫の力士像がある。金剛杵をもたず、手をひろげてゐる。鮮明な帷幔の弧線がならび、尖拱額のうちには過去の七佛と二體の蓮上化生とをほる。拱端は獸頭、拱額の上はかなり略されてゐるが、維摩經變。基壇の刻文^{三五二文}は大魏

孝三年とあるが、あきらかに孝昌三年^{西曆五二七}である。本尊は釋迦像、通肩垂衣のふつうにみる北魏佛で、臺座の獅子

は丸彫にちかい。刻文の左に小さい帷幔と尖拱の坐佛龕が二あり、手はいはゆる定印の方式によつてゐる。つぎの第

二龕^{圖版三七下左}は三尊坐佛像の尖拱龕であるが、帷幔なく、拱額も素である。垂衣の下の香爐と蹲つた獅子とはうつくし

い。第三上下の二龕、^{圖版三七下右は上龕}第四龕、第五龕はいづれも高さ五六十センチの帷幔尖拱龕、なかは五尊か三尊の坐佛

像、龕のわきに力士像をつくるのは第五龕のみ、その他は合掌の菩薩像である。非常に習熟してゐたものらしく、ほ

りかたは單純で、うつくしい。またこのうち二つの佛龕には、やはり拱額の上に簡略にされながら、維摩經變がほつ

てある。とんで第六龕はやはり小さい坐佛尖拱龕であるが、石灰分が固著してよくわからぬ。基壇には建義元年^{西曆五二八}

の造像記^{錄文三五六}と供養者の浮彫がある。⁶⁴⁾

第三層第一上下の龕は一組のものであらうか、同大同手法、たゞ形式がちがつてゐる。上は三尊坐佛の楣拱龕、下

は二佛並坐の尖拱龕である。楣拱のなかにも、尖拱のなかにも過去の七佛をほつてゐる。基壇はそれぞれ中央に空白

をのこし、左右に供養者の列像を薄浮彫にしてゐる。第二龕、第三龕も同大の龕で、ともに三尊座佛の帷幔尖拱龕、

拱額にはともに過去七佛をほるが、第三龕のそれは非常に小さい。拱額の上にどちらにも浮彫維摩經變があり、龕の

左右には力士像、基壇左右には供養者列像がある。第二龕には比丘曇宗□洪智等の造像記^{錄文四〇四}があり、年號はない

があきらかに北魏のものである。第三層第四龕は五尊交脚菩薩像で、上に鴟尾のあるやゝねをいたゞき、つぎに楣拱がある。基壇はやゝ高く左右に供

⁶¹⁾ この浸蝕はのびて左脇侍の足もとから、左羅漢のすそ、本尊の足もとにまで至つてゐる。最初そこまで缺損してゐたか、どうかはわからない。たゞ、たとへ當初かうした浸蝕がなかつたとしても、のちにかくのごとくなるやうでは、石質がそのはじめからわるかつたにちがひない。

⁶²⁾ 過去七佛の尖拱龕は雲岡石窟に多いものである。龍門ではすくない。蓮華洞右壁では一例もなかつた。

⁶³⁾ 孝昌三年清信女宋景妃造釋迦像記(錄文三五二)は本尊は釋迦だが、文中には西方妙樂國に託生せんことを願ひ、また彌勒にあつて法を聞きたいと願つてをり、いろんな觀念が錯綜してゐる。

⁶⁴⁾ 建義元年比丘尼道慧造石浮圖記(錄文三五六)は石浮圖一軀をつくるといふが、これは上述のごとく、一尖拱龕である。これを塔にみたてたのか。

⁶⁵⁾ この造像記(錄文四〇四)は□□像二菩薩をつくることをいひ、あとに「恒に彌陀に侍り」云々の文句がある。しかし、これによつてたゞちに本尊を阿彌陀佛であると斷定するのは早急であると思ふ。たとへば孝昌三年宋景妃造釋迦像記(錄文三五二)のとき例があるからである。^{(63)參照。}

養の薄彫列像があり、中央に沙門惠詮と弟李興の造像記^{三五五}文がある。それによれば本尊は彌勒像であり、つくつた年は建義元年^{西曆五二八}である。本尊の形式は北魏末の彌勒像としては代表的なもので、顔は長手、身體は痩せがた、垂衣はくつきりとしてをり、交脚は目だ、ない。脇侍菩薩は龕外に正しく直立してゐる。本尊菩薩も脇侍菩薩もX字形にまじはる天衣がその體軀の主調をなしてゐる。楣拱の框中には過去諸佛と蓮上化生をほり、その上隅にはまた維摩と文殊菩薩とを薄彫にしてゐるのがみえる。

第三層第五、第六、第七龕はほぼ相似た帷幔尖拱龕で、第五は三尊交脚菩薩の龕、第六は坐佛と交脚菩薩の龕、第七は二佛並坐の龕である。^{三七上}拱額にはみな過去の七佛をいれ、拱額の上と拱柱の左右には合掌菩薩、合掌僧、合掌供養者をいれるが、第五龕のみはごく簡略にされた維摩居士と文殊菩薩の像がみえる。交脚菩薩と坐佛との並置はほとんどほかに例がない。當今の佛たる釋迦と將來の佛たる彌勒との並置で、雲岡石窟に頻繁にあらはれる彌勒龕、釋迦龕の組合せから簡略にされたものであらうか。⁶⁶⁾

これからわづかな未成壁面をへだて、第三層第八龕以下はひとつのグループになつてゐる。すなはち第八は三尊立像龕、第九は三尊菩薩立像龕、第十、第十一はその下の二小龕を加へて、いづれも合掌の二菩薩をともなつた坐佛龕である。^{三八上}その下の二佛龕は小さいものであるが、諸龕の坐佛がすべて右手を胸にあげ、左手を腹部に下げてゐるのに反し、この二龕の坐佛は兩手を脚の上でかさね、いはゆる定印の形式である。しかも、その右方の龕の下にある造像記^{三五一}文によると、孝昌三年^{西曆五二七}清信女黃法僧つくる无量壽像となつてゐる。⁶⁷⁾第九楣拱龕の本尊は正しく直立し、兩肩に反轉する天衣、前でまじはる天衣、下裳のひれなどすべてシムメトリックに彫られてゐる。^{三八下}北魏末における典型的な菩薩立像である。おそらく觀世音菩薩像であらう。⁶⁸⁾

第四層第一佛龕は高さ一メートルにおよぶ帷幔尖拱龕で、本尊は三尊形式の坐佛、龕外に躍動的な半肉彫力士像がある。帷幔には鱗狀三角形の天蓋裝飾を加へ、さらに華繩を附加してゐること、右壁上層第二龕に同じである。拱額には火焰、その上にはまた浮彫維摩經變をつくつてゐる。かたはらの碑形はこの造像記をほるためであつたらしいが、いまは唐の玄奘譯『般若心經』^{四三六}文をもつてうめてゐる。⁶⁹⁾碑形の上に小さいが、第二の佛龕があり、坐佛尖拱龕である。

つぎに第三龕上方は正光二年^{西曆五二一}つくるころの釋迦像十六區で、上下二段に十六の坐佛尖拱龕がならんでゐる。すべていはゆる定印の形式である。その下に長く造像記の題名^{三四九}文がある。⁷⁰⁾下方には三尊倚像佛の帷幔尖拱龕があり、小さいながらに左右には力士像、拱額のそとには維摩文殊の像をほつてゐる。左方長方形の膀白にある造像記^{三九二}文に年號はないが、大統寺の比丘道縁といふものが、⁷¹⁾无量壽像をつくつたといふ。⁷²⁾やはり北魏末の造像であらう。

⁶⁶⁾ 雲岡石窟では彌勒龕、釋迦龕の組合せのほかに、彌勒龕、釋迦多寶龕の組合せがある。過去の多寶佛を加へたのであるが、過去の多寶佛より、多寶佛を再現せしめた法華經をとり釋迦佛に重點があるから、その意味はほとんど同じである。あるひはこゝでも第六龕、第七龕を一組の造像とすべきかも知れぬ。この意味からいふと右壁上層第四第五の一雙龕は正しく一組のものである。

⁶⁷⁾ 无量壽像といふのは Amitayus に對する譯名で、阿彌陀佛に同じである。阿彌陀佛造像としては古い例である。なほ无量壽像造建のことは魏字洞(六七頁)、古陽洞(一〇八頁)にもある。

⁶⁸⁾ この菩薩立像が觀音像であることについては古陽洞一〇七、一〇八頁参照。
第八龕は石灰分の固著のためよくわからぬが、おそらく第九龕同様の菩薩立像と思はれる。

⁶⁹⁾ かくのごとく蓮華洞には碑形は多いが、無字の碑形が多かつたわけである。右壁入口にちかいた大きな碑形にもがんらい文字がなかつたであらうと想像する所以である。

⁷⁰⁾ この造像記には各一區ごとに造像記があり末尾には合して釋迦像十六區を造るといふ。

⁷¹⁾ 大統寺は楊街之の『洛陽伽藍記』卷三によれば宣陽門外一里利民里にあつた。おそらく御道の西側であらうか。大統寺云云の造像記はなほほかにも一二例ある。

⁷²⁾ 倚像佛の无量壽像はむしろ異例である。

第四龕の上方は未完成の小龕、下方は五尊坐佛の帷幔尖拱龕である。拱額には彫りなく、左右に過去佛の列龕をほり、また薄彫で維摩像、文殊像、力士像をほる。右壁下層第二龕の形式に同じく、すこぶる軽やかで躍動的である。

基壇には造像記なく、玄奘譯『般若心經』

録文が追刻されてゐる。⁷³⁾

第五龕はまた、すこしはなれて、上中下の三個あり、上は三尊坐佛尖拱龕で、拱額内のC字形忍冬つなぎがおもしろく、中と下とは五尊坐佛の楣拱龕である。⁷⁴⁾

第六、第七はそれぞれ上下になつてゐて、ほゞ同大の帷幔尖拱龕が四個ならぶ。第六上龕の尊容は不明であるが、他の三龕はすべて二菩薩をともなつた二佛並坐像である。



第五十圖 (Fig. 50) 蓮華洞左壁壁面圖

く、そのそこにはやはり維摩文殊像をつくつてゐる。第八下龕は二佛並坐の尖拱龕、その右脇には小さい帷幔だけの佛龕がある。それは三尊菩薩立像で、やはり觀音像であらう。⁷⁵⁾

⁷³⁾ 沙畹圖版一九六。『龍門石窟寫真三』、ここに南壁といふは北壁の誤である。

⁷⁴⁾ 沙畹圖版一九五、一九六。

⁷⁵⁾ 沙畹圖版一九五、このあたりの壁面の不整合をみよ。いかに姑息な經營であつたかといふことがわかる。

⁷⁶⁾ 註(68)参照。

第五層第一は七個の坐佛列龕、その左方の勝白には造像記があるらしいが、いまこれに應ずる拓本がない。おそらく下の釋迦十六區の列龕と同様なものであらう。⁷⁷⁾この上、この左にかけては北魏の未完成小龕がならび、第四層第四の未完成龕とも相連接してゐる。いまその間に初唐頃の一坐佛龕がひらかれてゐる。第三としては、下に五尊交脚菩薩の相拱龕がある。その上に三つの菩薩立像があり、さらにその上に二佛並坐の帷幔尖拱龕がある。交脚菩薩龕には武泰元年^{西曆五二八}の造彌勒像記^{錄文三五四}があり、二佛並坐龕には太昌元年^{西曆五三二}の造多寶佛記^{錄文三六〇}がある。⁷⁸⁾つぎに第四は上龕、下龕があり、下は永徽四年^{西曆六五三}造建の三尊坐佛^{錄文三六九}である。この上にまた小さい菩薩立像の帷幔龕がある。第五上下の二龕はやゝ大きく、力士をはべらした五尊坐佛の尖拱龕で、帷幔との間に浮彫維摩經變がある。⁷⁹⁾下の龕の半肉彫力士像は天蓋の下に立つてゐるが、その天蓋が拱端の獸頭から垂下してゐるのはめづらしい着想である。

最後に第五層第六の大龕であるが、その形式は全く右に述べた第六上下の龕と一致してゐる。なほ基壇下半に供養者薄浮彫があり、その中間に造像記と三尊菩薩立像の帷幔龕がある。この菩薩龕と大龕はその構成の上にほとんど脈絡がないのであるが、その供養像と菩薩龕と銘文の三者の相互關係は緊密であつて、いづれが後刻だともみとめられないのである。ところがいまこの銘文を見ると、これは普泰二年^{西曆五三二}比丘靜度のつくるところで、まづ釋迦像とその脇侍二觀音像をつくつたことを記し、つぎに「別に小觀音一龕を造る」といつてゐるから、この大小二龕が同時の造建であることがわかる。⁸⁰⁾

要するに錯綜した左壁も、正光二年^{西曆五一二}から太昌元年^{西曆五三二}に至る北魏末十數年間に、逐次開鑿されたことがたしかである。そののちも、なほ開鑿されつゝあつたが、兩魏分裂の騷亂に際し、その一部——第四層第四龕、第五層第一龕近傍——は未完成のまま放任されるに至つたものであらう。つくられた順序も非常にまちまちであつたらしく、最初の三つ、正光二年釋迦列龕(第四層第二列龕)、孝昌三年无量壽佛龕(第三層第十龕)、孝昌三年釋迦佛龕(第二層第一龕)もまつたく聯絡なく、とびとびにはじめられてゐるのである。

「石窟造營」さて左右壁を總括してみると、そのはじめは正光二年^{西曆五一二}ごろにあつたらしく、孝昌、建義年間^{西曆五一二—五二八}にはほとゞ今日にみるごとき壁面になつてゐたが、なほひきつゞき北魏最末の永熙三年^{西曆五三四}まで小龕の造建がおこなはれ、左壁の一部はその騷亂に際し、未完成のまま放任されたと思はれる。こゝにその紀年あるものをひろへば、つぎのごとくである。⁸¹⁾

⁷⁷⁾ あるひは七體あることから過去七佛とも解せられるが、かくのごとく單獨に過去七佛のみをきざんだものはあまり例がない。

⁷⁸⁾ この造像記(錄文三六〇)には「多寶佛兩區窟に在るをつくる」といつてゐて、兩方とも多寶佛と考へてゐるらしいのが注意される。しかも、末尾にはまた「その三途八難をはなれ、西方安樂の處に託生せん」ことを願つてゐる。

⁷⁹⁾ 上の龕のかたはらには碑形があるが、岩かげにあつて寫眞ではよくみえない。

⁸⁰⁾ 沙畹圖版一九五。この造像記では脇侍二菩薩をいづれも觀音像とみたてたことになる。

西曆五二一	正光二年	比丘尼清信士清信女等合造釋迦像十六區記	(錄文三四九)	左壁第四層第三上列龕
五二五	正光六年	蘇胡仁合邑十九人等造釋迦像記	(錄文三五〇)	右壁中層第四龕
五二七	孝昌三年	清信女黃法僧造无量壽像記	(錄文三五二)	左壁第三層第十下方龕
	孝昌三年	清信女宋景妃造釋迦像記	(錄文三五二)	左壁第二層第一龕
五二八	武泰元年	景隆寺沙門曇念造彌勒像記	(錄文三五四)	左壁第五層第三下龕
	建義元年	沙門惠詮弟李興造彌勒像記	(錄文三五五)	左壁第三層第四龕
	建義元年	比丘尼道慧造石浮圖記	(錄文三五六)	左壁第二層第六龕
五三二	普泰二年	比丘靜度造釋迦兩觀音別造小觀音記	(錄文三五九)	左壁第五層第六龕
	太昌元年	楊元凱造多寶佛記	(錄文三六〇)	左壁第五層第三上龕
	永熙二年	法儀廿餘人造石像記	(錄文三六二)	右壁下層第二龕
五三四	永熙三年	比丘道仙造彌勒像記	(錄文三六三)	右壁上層第五龕

その後、右壁下部には北齊時代にも若干の小佛龕が造建され、初唐になつては拱門側から兩壁にかけて小佛龕がつくられた。しかし、その時代は主として永徽^{西曆六五〇}から先天^{西曆七一三}にかけて高宗則天時代であつた。

なほこれらの事實から推して、この洞後壁本尊作成、つまりこの石窟開鑿の時代が正光以前、神龜頃にあり、すくなくとも正光初年^{西曆五二〇}にはすでにできあがつてゐたものと考へられる。⁸²⁾

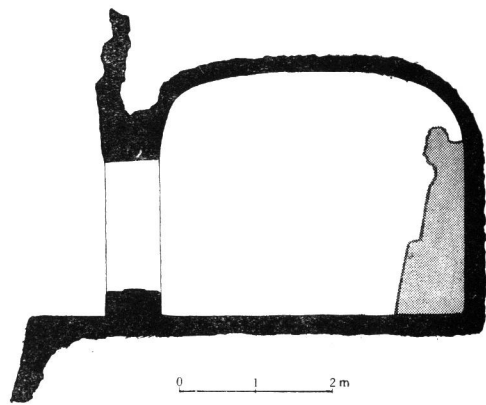
またその特色も帷幔尖拱龕が絶對的に多數である。楣拱龕も間々あるが、帷幔はかならずある。帷幔に華繩^{ガイランド}をとりつけたものは左右壁におのおの一例ある。また略式ともみえる帷幔のみの龕も二三みとめられる。拱額にはこまかな火焰や飛天を配したもの、過去七佛を配したものがふつうであるが、またかざりのないものもある。さういふものになると拱端の獸形、鳥頭も略されがちである。たゞし、過去七佛の拱額は右壁にはまつたくない。また左壁には龕榜に力士をいれたものすくなく、そのかはり天人とも菩薩ともつかぬ合掌像を配したものが多い。こんな相違は單なる偶然であらう。帷幔と拱額の間には維摩經變を浮彫にするものが絶對多數であるが、その表現には精粗いろいろある。また右壁の大龕はおほむねふかい。左壁でふかいのは第四層第一龕のみである。これは石窟側壁大龕の性質をそなへたもので、その例は北魏末期の第十四洞、魏字洞等の側壁にみられる。⁸³⁾その他の佛龕は一般にあさく、平面的になつてゐる。

「洞外」蓮華洞外を南にめぐると、東面して一基の浮彫塔がある。基壇ならびにやねの大きい、めづらしい木造

⁸¹ 本書石刻錄にはなほ孝昌二年造像記(錄文一〇三六)、孝昌三年比丘尼丘明勝造釋迦像記(三五三)、永安二年張歡國造觀音像記(三五七)、永熙二年劉景和造釋迦像記(三六一)等の北魏造像記がある。

⁸² これで、その造營年次から、この石窟も「釋老志」にいふ龍門三窟のひとつにぞへる可能性はあるわけである。本書一二六頁參照。

⁸³ 本書五七、六四頁參照。



第五十三圖 (Fig. 53) 第十四洞断面圖

しいものがあり、それより上の方はよくわからない¹⁾。基壇には母張氏の造塔記があり、年號はみえぬが、その形式からすれば唐代のものと思はれる²⁾。

「平面と天井」 入口にははゞ七五センチの闕がある。これを入ると、洞内はほゞ正方形である。^{第五十二圖} はゞ三メートル二〇、ふかさほゞ三メートル。奥にはたかさ九七センチ、ふかさ九〇センチの寶壇をのこし、その上に五尊形式の坐佛がある。左右壁には、それぞれふかさ八二センチの大龕を相稱的に對應せしめ、それぞれ五尊坐佛をおさめてゐる。こぢんまりした統一のある石窟で、後述する魏字洞によくにてゐる。天井のたかさは三メートル二〇、ほゞ平らで、たゞ周壁

にうつるところがゆるく彎曲してゐる。天井の中心には直徑約一メートル八〇の未完成蓮華を浮彫にし、まはりにも四方に飛天をきざむ豫定であつたとおもはれるが、やはり未完成で、左壁上方の一飛天だけが、あらぼりのまゝ、今日にのこつてゐる。

「後壁」 寶壇の上には兩手首を缺いた坐佛本尊をきざむ。鼻も近時の補修である。^{圖版四〇 左四一左} だいたい、魏字洞奥壁本尊と同一形式であつて、頸がやゝ短い。臺座に垂下した衣文の線は密で、すこしく左右にひろがつてゐる。

兩脇侍菩薩は身長一メートル六〇、^{圖版四〇 右} からだ小さく細いので、頭部をやゝ大きく感じさせるが、兩手の表情はいひやうもなくうつくしい。右手を胸にあげ、左手を腰のあたりにして、飾環をもつてゐる。胸かざりは大きく、寶冠からたれたひも、兩肩にはねたきれ、前でX字形にまじはつた天衣、左右にひろがつた下裳、いづれも大きなひだをシムメトリックにひろがへし、平板な感がふかい。光背は寶珠形、素文、蓮座は未完成であらぼりのまゝである⁵⁾。

第五十四圖 (Fig. 54) 第十四洞——唐字洞附近



8 (唐字洞) 17 (魏字洞)

16 (破洞)

15

14

³⁾ この洞は、河岸の通路から三メートルのたかさの崖上にほられてゐるので、土民の目につきにいたため、壁面も天井もよごれてゐない。おそらく龍門第一の清潔な石窟である。われわれが訪れたときには、ふかさ二〇センチほどの土砂が床一ぱいに埋つてゐて、調査にはまづ土砂の除去から始めねばならなかつた。

⁴⁾ この手は一度補修したらしいが、ふた、びなくなつたものである。

⁵⁾ かういふふうな衣文のとりあつかひはこの時代の特色である。鞏縣石窟寺にもその好例 (O. Siren: Chinese Sculpture, p. 105) があり、天龍山第二、第三洞の脇侍像はさらに一步すすんだ形式である。⁶⁾ 天龍山石窟 第九、十一、十七—十九圖。

羅漢は圓光圓形の臺座の上にたつ。その頭部はともに補修になる。肩は本尊のやうになで肩である。ほつそりした體軀は四〇左簡素なほりて、右方は香盒のやうなものをもち、左方は蓮の蕾のやうなものをもつてゐる。

左方菩薩の右わきに、二菩薩立像の帷幔龕がある。この脇侍菩薩によくにてゐる。その基壇には供養する薄彫の比丘像あり、その中央に普泰元年西曆五三一比丘尼道慧法盛造觀音像記四錄文がみえる。⁶⁾これはこの石窟における唯一の北魏年號龕である。とにかく、この造像記の存在によつてこの石窟諸尊、したがつてこの石窟が、すくなくともそれ以前にできあがつたものであることがわかる。しかし、脇侍蓮座や天井の未完成ぶりをみると、石窟自身もやはり普泰ごろにつくられつゝあつたもので、北魏の末路西曆五三四がこの石窟の終幕をなしたものと考へられる。

「左右壁」 左右壁は、それぞれ壁面いつぱいに大きな佛龕をほつてゐる。その規模形式は左右同様であるが、右壁前半は未完成のまゝのこされてゐる。⁷⁾第五十五圖

まづ、約二メートル九〇の方形壁面の兩端にはば約四〇センチの縦帶をのこし、中央に大きな楣拱龕をつくる。基壇は高さ四〇センチ餘、龕窩ははゞ約一メートル、高さ一メートル三、四〇。楣額の下には獸形を中心にした垂幕があり、⁸⁾その上の小列龕の上にも獸形を中心にした垂幕があつて、佛龕の輪郭をかたちづくつてゐる。⁹⁾圖版四たゞ左壁は上の列龕と垂幕とが混雜し、あたかも垂幕の場所へ列龕をあとからほつたやうになつてゐる。¹¹⁾

⁶⁾ 石刻銘文(錄文四五二)には觀世音像一軀となつてゐる。どうして二軀としなにか。ともかく、北魏末ではかくのごとき菩薩立像をもつて觀世音菩薩としたことは、すでに蓮華洞の註⁶⁸⁾といたところのごとくである。

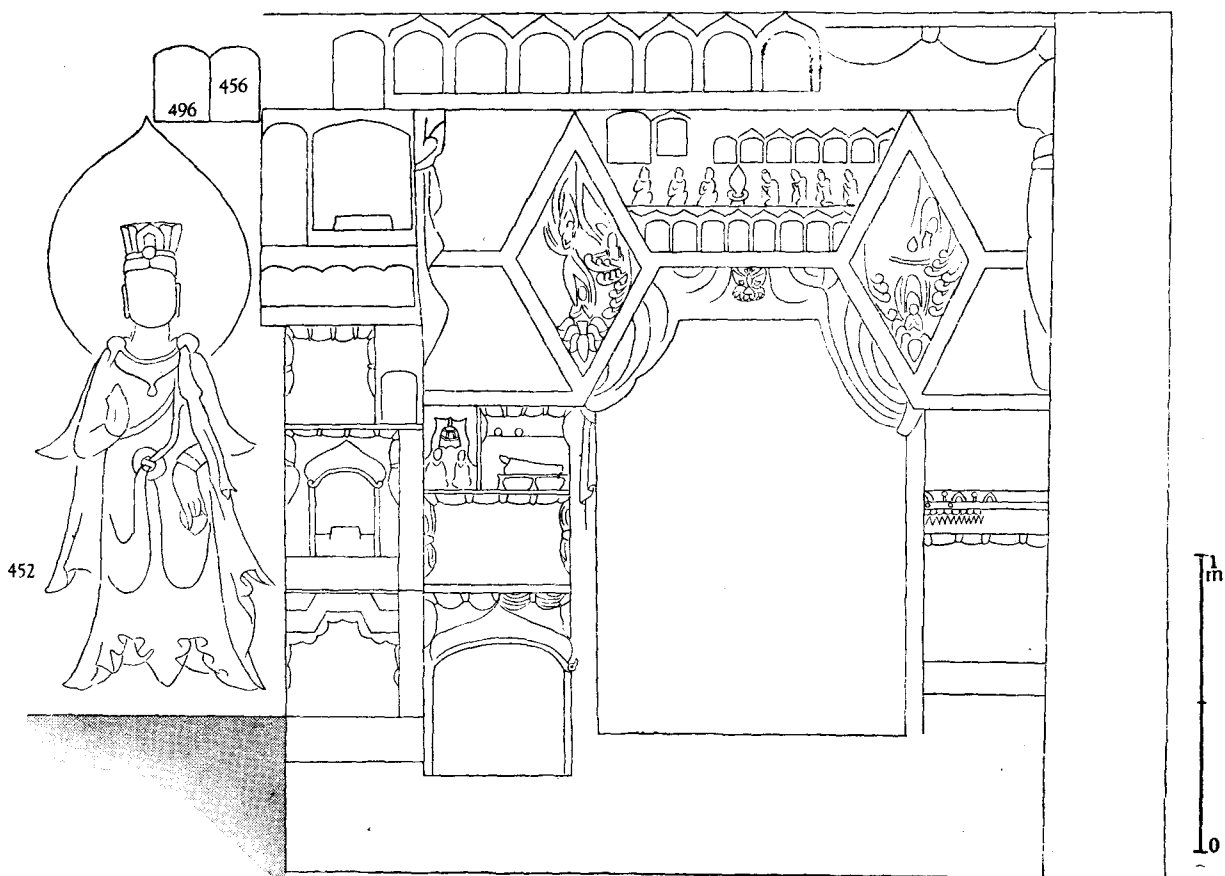
⁷⁾ 脇侍蓮座の未完成なありさまは圖版四〇右をみよ。天井の未完成は圖版四一左の上部をみよ。

⁸⁾ この獸形は蓮華洞拱額とはまつたくちがつてゐる。右壁のものは未完成か、こはされてゐるのか、不完全である。

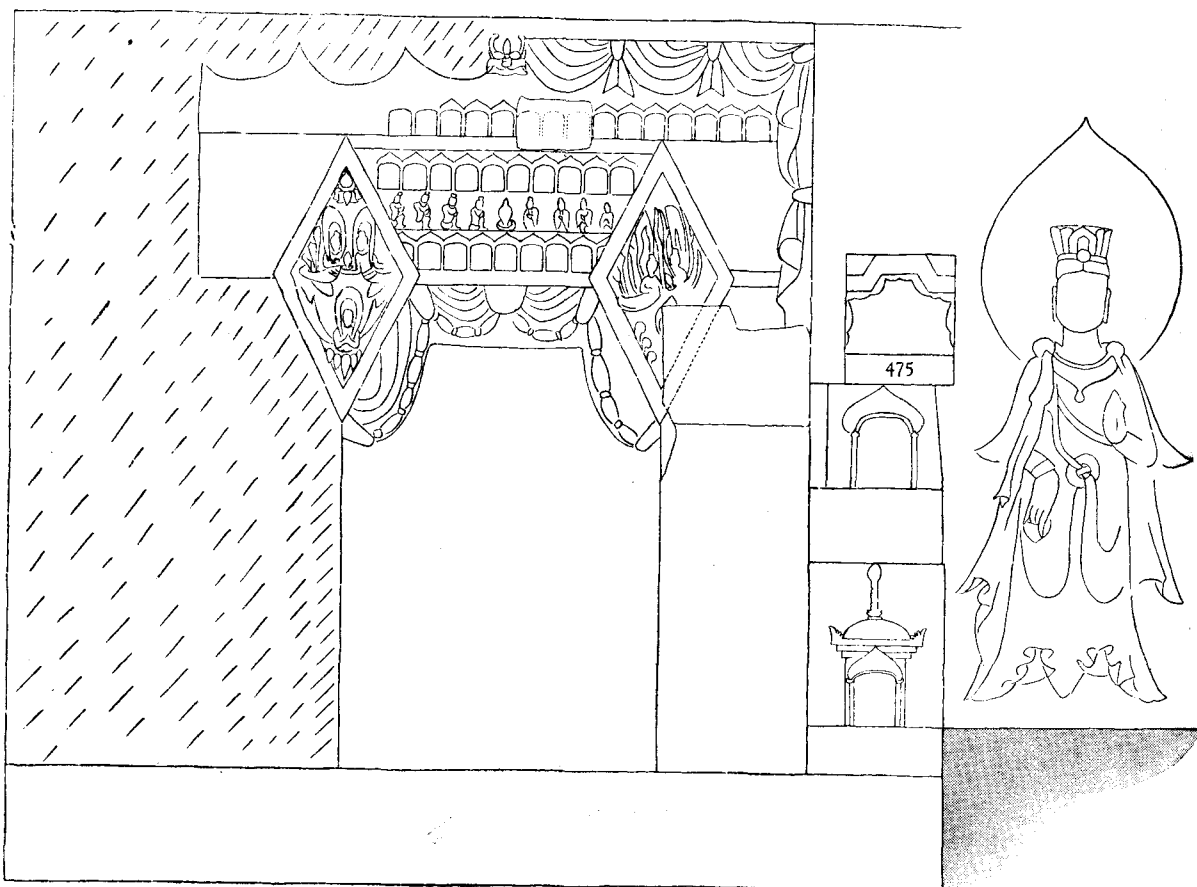
⁹⁾ 左壁の垂幕は幕をしばつたひだがあいまいであつて、やうやく形式的になつたあとかみえる。

¹⁰⁾ 右壁楣拱下の垂幕には華繩がほつてゐる。

¹¹⁾ 後述するやうにこの七佛列龕は唐刻である。錄文四五六參照。



第五十五圖 (Fig. 55) 第十四洞左壁圖



第五十六圖 (Fig. 56) 第十四洞右壁圖

相拱の中央、梯形部は三段にわかれ、上下に小
列龕、中央に香爐をさしはさんで跪いた供養者の
像をきざむ。左右の菱形部には下に蓮上化生と、
上に飛天を配し、さらに左右の翼部には樹下思惟
像と禮拜者の像とをほる。¹²⁾ 上、四、五、上、それから左右
翼部の上の空所には、それぞれ維摩像と文殊像を
ほつてゐる。その寛濶な面を生かした彫法は蓮華
洞諸龕とよく似るが、蓮華洞にはこれだけの相拱
龕はなかつた、また小さいことであるが、垂幕中
心の獸面もみられなかつた。

佛龕はふかさ四〇センチ餘、うちに寶壇をつく
り、高さ約一メートルの坐佛をほり、その垂衣を
うけた寶壇は左右にまはり、その上に二菩薩、二
羅漢をおく。¹³⁾ 簡略な彫像である。その前、
龕口に二軀の獅子をきざむ。¹⁴⁾ ほとんど丸彫
といつてよく、やゝ藥方洞の獅子ににる。

さてまた右壁のわきは一、二の小龕があるのみで
未完成であるが、左壁の佛龕兩側には、縦に小さ
い佛龕をならべてゐる。右壁左側には力士像をほ
らうとしたあとがある。これによつて、この左右
壁大龕の當初の計畫がうかがへるわけである。

左壁左側には三尊佛立像、一尊菩薩立像の垂幕
正に觀世音像であらう。¹⁵⁾ 右側には涅槃像の垂幕
龕があつて、これはめづらしい。枕頭に合掌の比丘あり、障屏のむかふには悲しげな比丘の頭がのぞいてゐる。枕の
方にさらに垂幕の龕あり、梵鐘をつるし、合掌して坐つた比丘僧二人をほる。¹⁶⁾ これらの下には三尊交脚菩薩像の

¹²⁾ 右壁相拱の翼部は未完成と破壊とでまづ
たくわからぬ。

¹³⁾ 石窟本尊よりもさらに平板な衣文からな
つてゐる。

¹⁴⁾ この龕は小さいながらによくできてゐる。
龕形もとのつてをり、佛像もしつかり
してゐる。身光は火焰をほり、基壇に
は香爐、供養者、二獅子を半肉彫的にほ
つてゐる。

¹⁵⁾ これは龍門における唯一の涅槃像である。
これに似た例は魏字洞左壁の龕側にあり、
(本書六七頁)、響堂山第五洞前壁にある。
響堂山の例では迦葉が佛足に敬禮し、摩
耶夫人がかたはらにある。(響堂山石窟
三二頁、圖版二八) 雲岡ではわれわれの
調査によると、第七洞前室、第十一洞、
第三十五洞、第三十八洞にある。敦煌で
は第一二六洞にこれを見る。蘆屋山口謙
四郎氏所藏の四面佛、開封博物館の隋四
面十二龕像(水野「開皇二年四面十二龕像
について」東方學報京都第十一冊一分)、
シカゴ美術館の西魏大統十七年碑像(C.
F. Kelly, *A Chinese Buddhist Stele
of the Wei Dynasty in the Collec-
tions of the Art Institute in Chicago*,
Chicago, 1927 Pl. 8, 9) などいれ
をみるが、梵鐘をつつた例はたゞ最後に
あげた大統十七年の碑像と魏字洞左壁の
一部のみである。

垂幕龕あり、その下に五尊坐佛の垂幕尖拱龕がある。¹⁶⁾ このあたりの像になると衣文の線がぎこちなく、肢體も不自然である。

左壁龕外の縦帯は、入口の方のは何もほらないが、奥の方のは下から五尊坐佛の楣拱龕¹⁷⁾、三尊坐佛の火焰尖拱龕をほり、その上に二菩薩立像の垂幕龕をほる。¹⁸⁾ 右壁龕外の縦帯も、奥の方には北魏の五尊坐佛楣拱龕があり、¹⁹⁾ 録文楣拱のすみには小さいながらに維摩と文殊の像をほつてゐる。またこの下の五尊坐佛尖拱龕は、その様式から北齊の佛龕と解せられる。²⁰⁾ 尊像の形はもとより、完好な尖拱、またその蓮華かざりや、左右の蓮上化生など北齊の特徴をよくあらはしてゐる。この下の覆鉢塔形の三尊龕²¹⁾ も、おそらく同じころのものであらう。これらは北魏窟の中におけるたつた二つの小龕であるのに、はつきりとその北齊の特徴をもつてゐるのが注意される。

かくのごとく、この石窟は北魏末にでき、一二北齊の小龕がひらかれたが、唐代に入つても若干の小佛龕がつくられた。それは左壁上部、右壁龕外縦帯、奥壁基壇などにみいだされる。特に左壁上部は貞觀十二年²²⁾ 西曆六三八の造像記²³⁾ があり、七佛二菩薩をつくつたことがわかり、左壁龕上の七佛列龕²⁴⁾ が正しく唐代の追刻であることが知られる。

「前壁」 入口拱門の兩側は各々一メートルたらずの壁面に不規則な諸龕形がある。左方にはたかさ一メートル六八の舟形光背中に三尊佛立像を浮彫にしてゐる。²⁵⁾ 本尊は頭部や、小さく、長身である。衣文はだいたいにいて靜かに垂直にたれてゐて、左右への反りはごく僅かである。

右側はこれと釣合つてゐない。大部分は粗壁のまゝに放置され、天井に接してたかさ五六センチ、はゞ六三センチの尖拱龕があり、兩力士を左右に侍立させた坐佛三尊をおさめてゐる。この前壁左右が不均齊であることは、この洞が最初の企畫どほり遂行されず、未完成のまゝのこされたからである。拱門の上方には高さ六四センチの尖拱龕を三個ならべてゐる。

趙客師洞¹⁾ 〔第十五洞〕

洞ははゞ三メートル一六、ふかさ三メートル六八、後壁全體が一つの龕形をなし、本尊、二羅漢、二菩薩をきざむ。²⁾

¹⁶⁾ この交脚龕と坐佛龕とは、これで組合せになつてゐるのかも知れない。様式、規模が完全に一致する。蓮華洞註⁶⁶⁾ 参照。

¹⁷⁾ この楣拱龕の菱形部には合掌せる蓮上化生があり、左右上部の餘白には文殊像がみえ、維摩像の方はこはれてゐる。

¹⁸⁾ この石窟内には二菩薩立像垂幕龕が二例あり、さらにこの上にも唐代の一例がある。一尊菩薩立像垂幕龕も二、三例あつて、この窟には菩薩立像垂幕龕が割合に多い。菩薩立像龕は蓮華洞の例をみてわかるやうに、かならず垂幕龕である。この二菩薩龕の上には、時代の降つた五佛列龕がある。左手に倚像佛龕がある。唐代であらう。

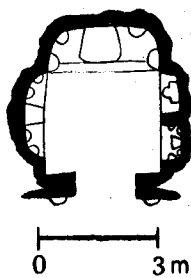
¹⁹⁾ 比丘尼道貞造釋迦像記。

²⁰⁾ けれども脇侍の二菩薩は未完成である。この龕の下に完好な唐代三尊坐佛龕がある。

²¹⁾ この名稱は録文四六三、顯慶五年劉造阿彌陀像記による。註(4)参照。平子鐸嶺氏および塚本靖博士のいはゆる微妙洞はこの洞をさすらしい。

²²⁾ この石窟は充分觀察の暇がなかつたので萬事『支那佛教史蹟』第二冊八八頁の記述による。それによれば後壁諸尊は南北朝時代の餘影を存すといふ。

³⁾ 「二年七月十日」の造像記はおそらく録文四七二、永熙二年陽烈將軍樊道德造釋迦像記であらう。研究所々藏の拓本も「二年七月十日」としかよめぬ。伊國石刻圖表は清明寺南小雙密としてゐる。小雙密とは第十四、第十五洞をさすのであらう。またもつてこの石窟の年代を限定することができよう。



第五十七圖 (Fig. 57)
趙客師洞 平面圖

第五十圖 左壁には二個の龕を並べてつくり、前方には坐佛、二羅漢、二菩薩の像、後方には佛の倚像をつくる。右壁には釋迦、二羅漢、二菩薩を容れた大龕がある。その他大小の佛龕が周壁の處々にある。入口南方の壁に北魏佛をほつた一佛龕があつて、「□□二年七月十日」云々の刻銘がある。³⁾ この一龕をのぞき、窟内の佛龕佛像はことごとく初唐の作である。左壁前方の五尊坐佛龕は、そのかたはらの刻銘により顯慶五年^{西曆六六〇}の作であることがわかる。⁴⁾

天井はゆるいドームをなし中央に蓮花、周圍に飛天を作るが、前方は未完成のまゝにのこつてゐる。要するにこの窟は北魏時代に開鑿をはじめたが、ながく未完成のまゝになつてをり、そののち、初唐の顯慶頃にさかんに佛龕がつくられ、今日のごとくなつたものらしい。

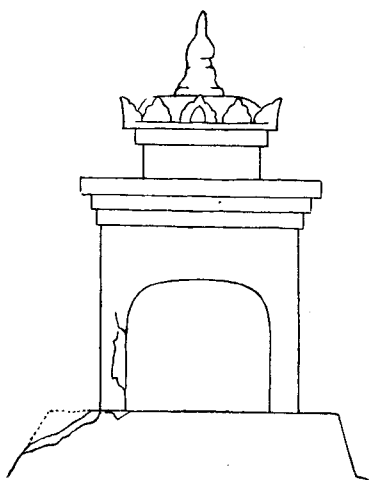
破洞〔第十六洞〕

この窟は完成せず、あまり整然とではないが、ほど長い馬蹄形をしてゐる。¹⁾ 本尊とてなく、周壁に大小さまざまな佛龕をつくるのみである。往々造像記があり、それによればいづれも唐初のもので、右壁に顯慶四年^{西曆六五九}龍朔元年^{西曆六六〇}總章二年^{西曆六六九}の造像銘があるから、だいたい窟の製作年代を推すことができる。後壁には彌勒佛倚像の龕がある。この洞の佛像はことごとく頭部を失ひ、いたましい。天井は未完成のまゝであり、床面も凹凸がはなはだしく、完全な石窟とは稱しがたい。



第五十八圖 (Fig. 58)
破洞 平面圖

洞外塔形 破洞々外にはたくさんの佛龕が密集してゐる。そのひとつに單層塔形龕がある。^{第五十九圖、やねは三層の段成で、下ほど小さくなつてゐる。その上に基壇を置いて、覆鉢形があり、その四方にうけばながある。相輪はみじかい。まづ}



第五十九圖 (Fig. 59) 破洞外單層塔龕

⁴ 顯慶五年で、五尊像佛龕にあてられるのは錄文四六三、唐劉□造阿彌陀像記であらう。これは顯慶五年二月十日の供養で、佛一、二菩薩、二聖僧、師子、香爐をつくつたとしてある。またこの銘によればこの第十五洞石窟を趙客師窟といつたらしい。なほ錄文四五八から四六四あたりの永徽末年、顯慶、龍朔初年のものはおそらく趙客師洞内の小佛龕の造像記であらう。もつておのづからこの石窟が今日の姿をとるに至つた時期が考へられよう。

⁵ 天井は穹形といふも、事實は第十四洞、魏字洞のごとくほとんど平らで、四周が彎曲して上つてゐるのみであらう。

¹ この石窟も主として『支那佛教史蹟』第二冊八八、八九頁による。

² 顯慶四年龕は、雍州鄠縣劉弘義造像記(錄文四五九)龍朔元年龕は李玄奘兄弟造阿彌陀像記(四六五)總章二年龕は孔士登造像記(目録五一三)をさすが、このほかに永徽五年一種(錄文四五八)、顯慶四年二種(一〇一〇、一〇一一)、顯慶五年二種(四六二、四六〇)、顯慶□年一種(四六四)、龍朔元年一種(四六六)等がある。

³ 單層塔形はすくなくない。浮彫では南響堂山第一洞右壁にあるものを参照せよ。これは北齊末か隋初であらうが、覆鉢基壇がなく、うけばなが直接やねの上にある。『響堂山石窟』圖版一一)また第六洞第七洞の中間にほりだした單層塔形があるが、これには基壇があり、うけばはないらしい。『響堂山石窟』第二十五圖)また東京帝室博物館所蔵二級塔、北

四門塔の形式である。第十四洞右壁の單層塔龕の一步變化して、覆鉢の基壇が添加されたものである。尖拱額をうしなつたところなども、この方がおくれた形式をしめす³⁾。おそらく初唐の作であらう。

龕内の三尊坐佛もこの年代觀に合致するし、その近傍にある初唐龕もこの見解をたすける⁴⁾。

路傍交脚菩薩龕 これからすこし南すると、路傍にひとつの佛龕がある。孤立

した佛龕であるが、その形式のふくむ遡るのに注意をひく。^{第六十圖} 三尊の菩薩交脚龕であるが、菩薩の兩側にうづくまゐる獅子の形は古陽洞諸龕に一致し、雲岡石窟の獅子を想起せしめる。諸像の形式もまたそれにちかい⁵⁾。光背もみごとで火焰のほりや、その上にある奏樂天人のまるみある姿態も、古陽洞の古い龕に似てゐる。圓光と火焰との間にある葡萄唐草文もめづらしい⁶⁾。とにかく、景明正始を下らない佛龕で、古陽洞以外におけるもつとも古い一例であらう⁷⁾。



第六十圖 (Fig. 60) 路傍交脚菩薩龕

魏字洞〔第十七洞〕

——圖版四六—五二——

「洞外」 魏字洞もやはり路面より三メートルばかり高く、唐字洞(第十八洞)にならんで口をひらいてゐる¹⁾。しかし、外壁は唐字洞に比較すると、いちじるしく貧弱である。上がすみまるになつた長方形の入口、その左方に力士像があるのみである。^{第六十圖}

この力士は高さ二メートルばかり、大きく足をふんばり、左手を左の腰に、右手を右胸につけてゐる。この右腰から右足にかけてな、めに衣の線がながくのび、左足では垂直に下つてゐる。莊重といふより強くて軽い、動的な姿勢

周天和二年石塔などのごとき北朝四面佛のうちに、この形式がすくなくからずみいだせる。(『房山雲居寺研究』第三十八圖)

4 これらの佛龕は上述した敬善寺附近にある永徽龕の像式に一致する。

5 交脚菩薩像の頭部はこのごろの補修である。塚本工學博士の寫眞には頭部がない。

6 龍門における葡萄唐草はこれが唯一の例であらうか。雲岡では第十二洞明窓、第十三洞天井、第十五洞天井にある。ことに第十三洞の場合、これと同じやうに交脚菩薩の光背上にあらはれるのであるから、あるひはさういふところにこれらの直接の源流があるのかも知れぬ。

7 E. Chavannes; *ibid.*, p. 440. またシヤヴァンヌもその寶冠が雲岡形式に一致することをのべてゐる。龕高二メートル七〇、幅一メートル四五。

1 第五十四圖の岩壁をみよ。第十四洞、趙客師洞が相ならんで一組であるに對し、これも唐字洞とならんで一組のごとき感がある。

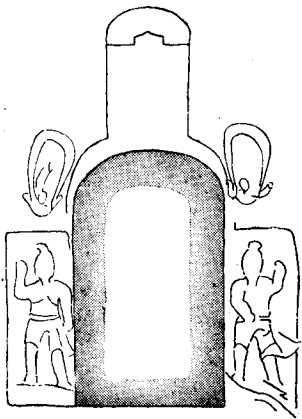
2 左方の力士像はいまこれをかく。

である。弁冠のひももたかくはね上つてゐる。

入口は何のかざりもなく、高さ二メートル四七、はゞ一メートル九〇、闕の高さは五〇センチに、はゞ六〇センチ。

洞外上方二メートルぐらゐのところ、すこし南によつてまた別に小さい石窟がひらかれてゐる。その外形がまったく後述する藥方洞に同じなので注意される。³⁾第六十圖 力士像によつてはさまれた完好な拱門は高さ一メートル七、八〇、その上に小さい碑形があり、その左右に小さい飛天がとんでゐる。これら配合の全體がよく似てゐるのみならず、力士像の形式も同じであるから、これも同様に北齊ごろの開鑿と解すべきであらう。窟内には蓮座上に坐する佛と二菩薩、二羅漢をもうけてゐる。⁴⁾

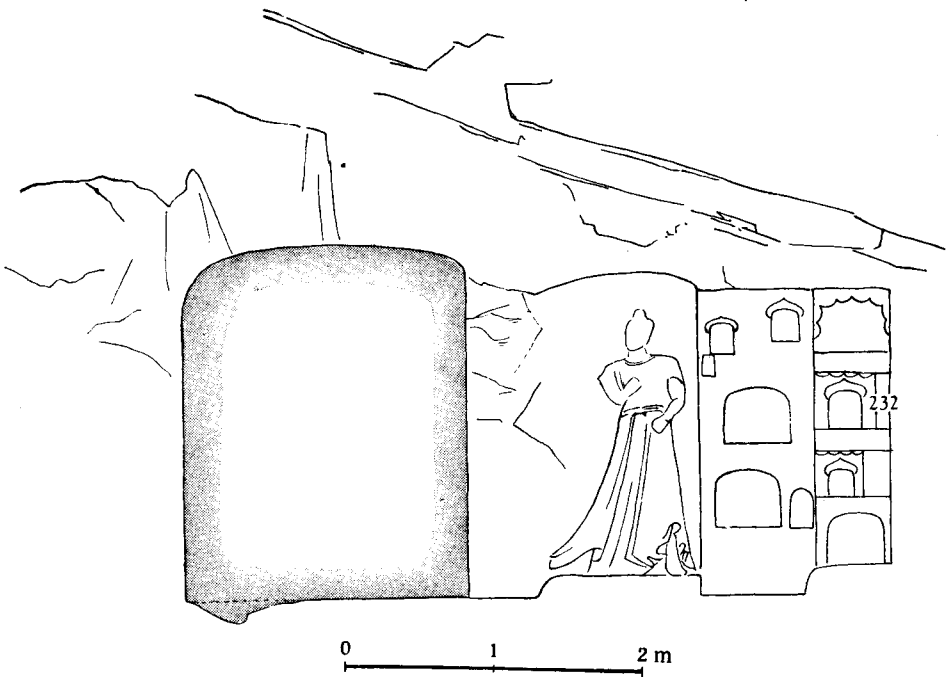
「平面形」 洞の内部ははゞ約三メートル九〇、奥行約三メートル二三、高さは約三メートル九〇。^{第六十圖}天井はゆるく彎曲して、中央に一つの平面的な大きな浮彫蓮瓣をほどこし、それを中心に飛天が左右に三體づゝ飛翔してゐる。奥壁にはふかさ一メートル〇五の寶壇をつくり、五尊をのせてゐる。左右壁には相稱的にふかさ八五センチの大龕をつくり、きはめて整然たる統一をもつた洞である。⁵⁾



第六十二圖 (Fig. 62)
魏字洞 外小洞

魏字洞 (第十七洞)

「奥壁」 奥壁寶壇はたかさ約一メートル、奥行約一メートル。本尊は坐佛、ひくい目だゝぬ臺座がある。^{圖版四七}前に舉げた左手をうしなひ、前にだした右手を破損してゐる。頭の大きな、面ながのやさしい顔であるが、鼻がこはれてゐる。^{圖版四六上}ほそい頸をへて、やさしい肩には、うつくしく平均した褶をもつたけさがおほひ、それが前にさがり、一端が左手にはねかけられて



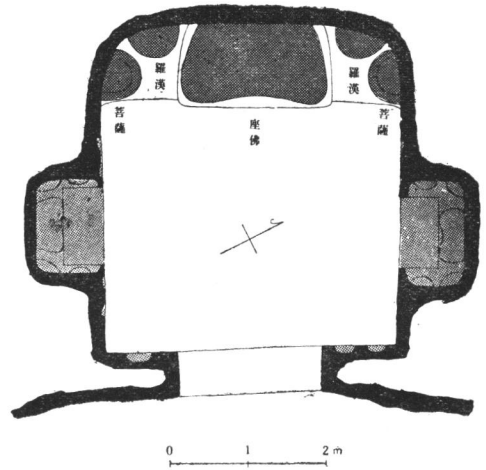
第六十一圖 (Fig. 61) 魏字洞 外壁圖

³ 本書七七、七八頁參照。かやうな例はほかにはまつたぐない。このあたりは外壁に非常に佛龕が多い。そのうちには少からず北魏の龕がみえる。左上に細長い五層塔の浮彫が二基あり、下方に圓首の碑形がある。文字はみえないが、唐以後のものであらう。

⁴ 塚本工學博士寫眞による。

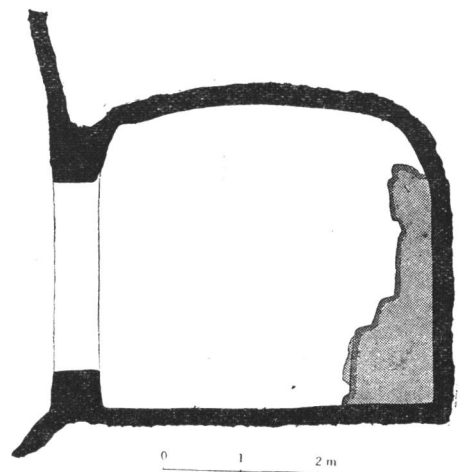
⁵ これが龍門北魏窟のもつとも代表的な形式である。これを襲うものに、第十四洞、火燒洞、石窟洞その他がある。そしてまた天龍山、響堂山等の石窟の基本形式となつてゐる。

⁶ これらははやくからこはれてゐるらしい。この後壁をつたへる澤村教授、岩田氏の寫眞にはすでにこはれてゐる。



第六十三圖 (Fig. 63) 魏字洞平面圖

ある。なほ衣は結跏趺坐の脚をおほうて、臺座の上にたれ、うつくしい褶をつくつてゐる。形式的によくとのつてゐて、すこしも破綻がない。垂衣の下には、そりかへつた蓮瓣が不明瞭ながらほられてをり、垂衣の兩側には二匹の獅子を半肉彫にしてゐる。痩せた身體とほそい脚、すこし間のぬけたからだつきが特色である。圖版四六下



第六十四圖 (Fig. 64) 魏字洞斷面圖

平子氏、塚本博士のときはもちろん、關野博士、岩田氏の時にもこの首はのこつてゐた。それらの寫眞をみると、簡略な三面寶冠をつけ、やゝ平たくなつた雄偉な面相をそなへてゐる。

六四

脇侍菩薩はともに首をうしなふが、天衣と下裳の大きな褶がシムメトリックにそろひ、ほゞ上から下へと走つてゐるのは北魏末期の特徴をよくそなへてゐる。⁸⁾ 下にひくい蓮華座があり、上に素文の寶珠形光背がある。第十四洞の脇侍菩薩^{圖版三九}によく似てゐるが、衣がそれほど躍動的にうごいてゐない。脇侍羅漢像はやくから首をうしなつてゐて、いまのは補修である。やはり同じやうな大きな褶のころもをつけて直立してゐる。右方は兩手で何かまるい盆のやうなものをいだいてゐる。第十四洞右方のもさうであるが、あるひは香盒のやうなものであらうか。

本尊光背はうすい彫りでよくわからない。中央に放射線の部分があるかと思ふと、つぎに同心圓の圓圈があり、つぎにせまい唐草文帶があり、全體はまた火焰光背になつて、彎曲して勢よく天井にあがり、天井蓮華の中心にまで突入してゐる。⁹⁾

「天井」 天井は平らで、本尊光背にしたがつてわづかに彎曲するのみである。中央に大きな蓮華文をもつが、うすいほりて蓮華洞の天井蓮華とは大いにちがふ。左右に各二體づゝの飛天をほつてゐるが、これもあさいほりて、そのうへ面にいくらかまるみをもたせてゐる。^{圖版五一} 顔は長手、腰はかなりに彎曲して、足をはねてゐる。衣裳はほそく、勢よくうしろにひるがへつて、はなはだ輕妙ではあるが、するどい線を藏してゐる。そのやりかたが蓮華洞とも賓陽洞ともちがひ、天龍山の東魏窟第二洞、第三洞¹⁰⁾の飛天にちかづいてゐる。蓮華は小さい中房に九つの蓮子をもち、そのそとに十六の單瓣があり、つぎにC字形忍冬唐草をかさねた一帯がめぐり、最後に複瓣の蓮瓣文となる。二重の蓮瓣は、すでに蓮華洞天井でみたところであるが、こゝではそれがより顯著になり、しかも蓮華洞ではそとにあつた唐

⁸⁾ 鞏縣石窟の諸尊に依る。腰壁の奏樂天人像(『支那佛教史蹟』第二冊圖版一〇七)大石佛右脇侍菩薩(同書圖版一一三)等をみよ。またこのことは、第十四洞の脇侍菩薩について、すでに注意したところである。五七頁註(5)參照。

⁹⁾ このことについてはすでに蓮華洞註(17)でいつた。

奥壁菩薩と羅漢との間にはかさねていくつかの佛龕をきざんでゐるが、その形式よりすればいづれも初唐の開鑿とみられる。左方羅漢の上、本尊光背のそとにはやゝ古いと思はれる楣拱小龕がある。

¹⁰⁾ 『支那佛教史蹟』第三冊圖版三四。第二洞第三洞は天龍山における最古の石窟で、おそらく東魏北齊初の作と考へられる。

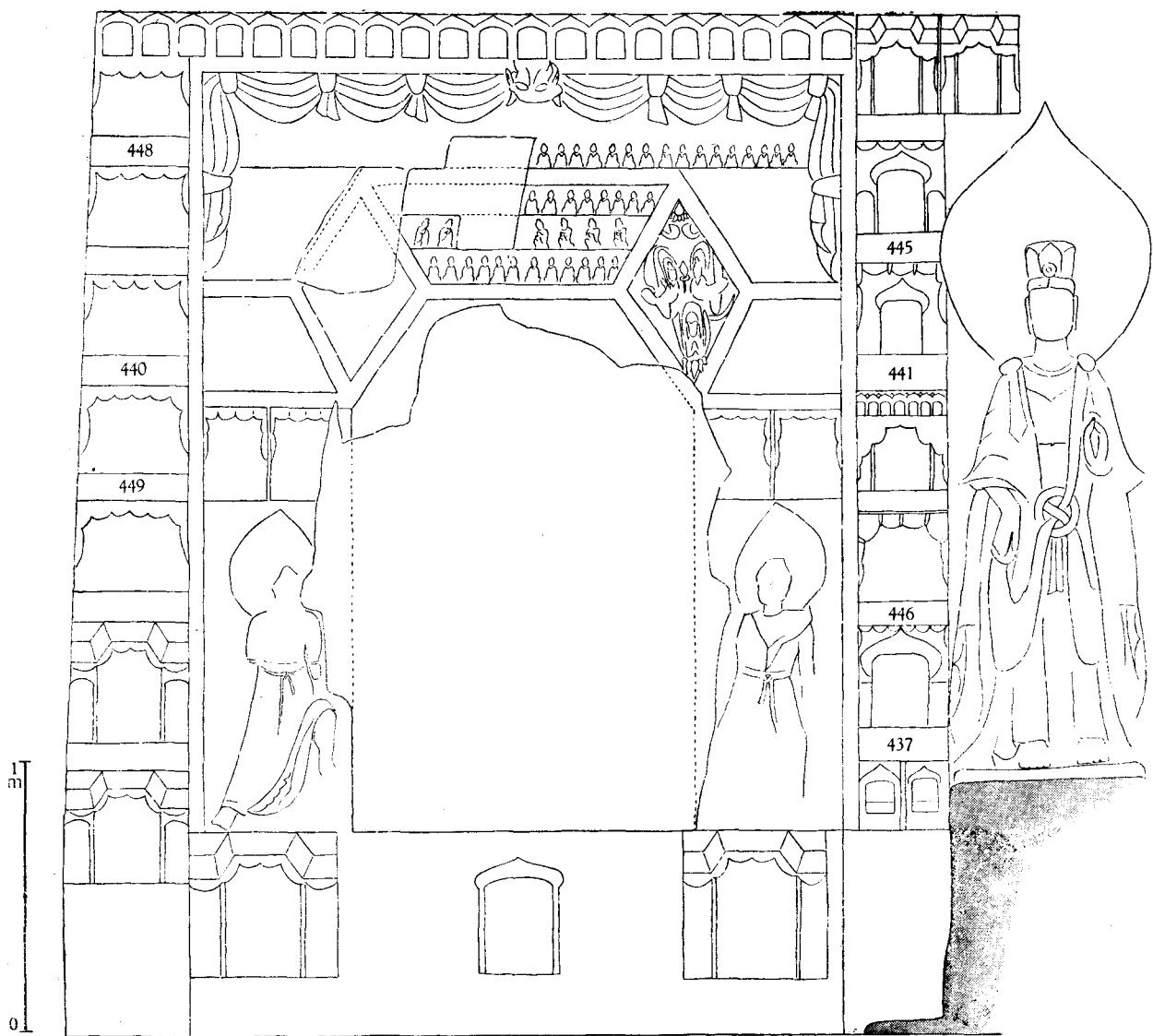
草文帯が、こゝでは兩蓮瓣帶の中間にある。¹¹⁾ 蓮華文のそと飛天の空白には流麗な唐草文をもつて充填してゐる。¹²⁾

「左右壁」 この石窟の兩壁は大體規模をひとしくするが、こまかい數字はちがつてゐる。まづ、破壊の程度の比較的小くない右壁から説明をはじめよう。

右壁は一つの大きな龕を中心としてつくられ、¹³⁾ そのそとに第十四洞と同様せまい縦帯をのこしてゐる。^{第六十} 五圖 龍門の北魏龕のうち、おびただしい數にのぼつてゐる楣拱は、かならずしも一定した形式にきまつてゐないが、この魏字洞右壁の大龕は現存するもつとも整備したものであつて、第十四洞左右壁よりも完好である。

まづ、このふかい龕の主體はたかさ三メートル四七、はゞ二メートル三〇の矩形で、この上には千佛小龕二十個の龕列がきざんである。^{第六十} 五圖 矩形區劃の上部には、中央に獸面をきざみ、その左右に垂帳をかざつてゐる。¹⁴⁾

圖版 五二上 その下に千體佛の列像があつて、主體たる楣拱と龕があ



第六十五圖 (Fig. 65) 魏字洞右壁圖

¹¹⁾ こんな蓮華はめづらしい。

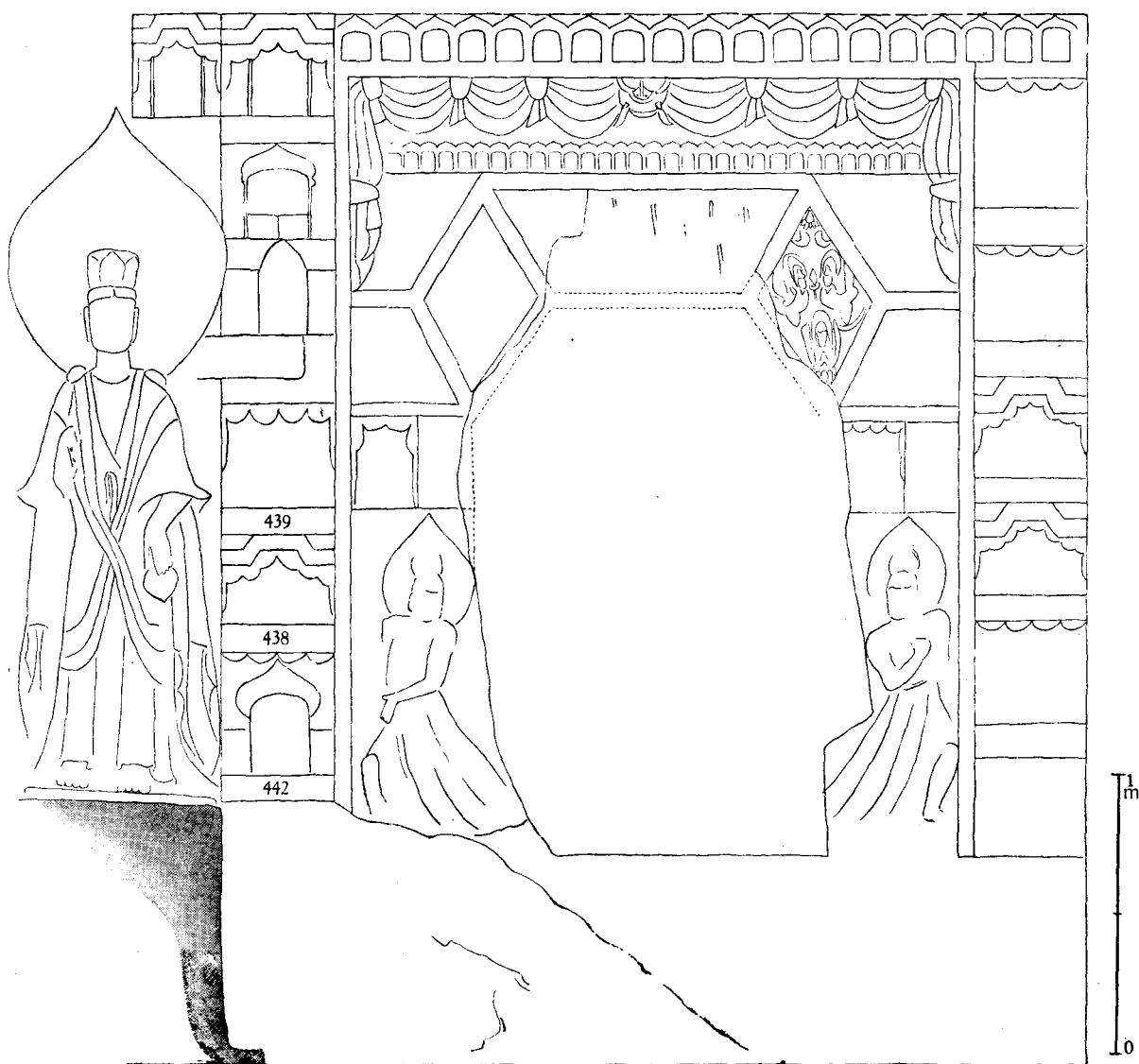
¹²⁾ この空白にとんでゐる唐草の中心になるものがあるが、環のごとく、袋のごとく、その實體が何であるかよくわからぬ。(圖版五二の飛天をも参照。) しかし北魏末から東魏北齊にかけて、飛天とともにしばしば使用された。たゞ北魏のものが流動的であるに對し、後のものはしだいに靜止的となり、つひに響堂山石窟にみるやうな寶花様となつたらしい。(響堂山石窟、圖版三五等)

¹³⁾ このふかい大きな龕にこの種石窟の特色がある。

¹⁴⁾ 右壁は保存よく、左壁は保存がわるい。基壇および龕高のうばがひどくこぼれてゐる。

る。佛龕の高さは一メートル九五におよんでゐる。

楣拱額の各區劃中には、いろいろの題材によつた美しい浮彫がある。すなはち、中央にある梯形の部分には、三段にわけられ、小坐佛の列像を上下の層にほり、中層には左右からむきあつた供養者の跪像群をきざんでゐる。¹⁵⁾ 図版 この左右にある豎ながの菱形部は下隅に蓮上の化生あり、中央に相對した二飛天があり、上隅に蓮瓣かざりのついた摩尼寶珠をおく。¹⁶⁾ この菱形部左右の



第六十六圖 (Fig. 66) 魏字洞左壁圖

兩翼部にはそれぞれ樹下思惟像と供養者像とがあらはされてゐる。¹⁷⁾ 圖版 またこの上の楣拱の餘白には左右にそれぞれ維摩像と文殊像とを彫る。¹⁷⁾ 圖版 五二 どちらも几帳中に坐してゐるが、文殊菩薩の几帳は正しい側面をしめし、維摩詰のそれはな、め角、しかもいくらか上からみたところをあらはしてゐる。兩者の前には合掌供養する諸像をほり、上に飛天その他をほる。空中に流動する飛天の天衣や、唐草文にみる曲線はするどく、うつくしい。諸像は小さいながらにうつくしいまゐるみを帯びてゐて、半肉彫となつてゐる。この楣拱額はあらゆる點において左壁とも一致し、また第

¹⁵⁾ 第十四洞左右壁大龕ではこの坐佛列像が龕にいられて、坐佛龕列であつた。(圖版四四、四五) 圖版五二は左右壁混淆であるが、全く同じ形式であるから、これを參照してさしつかへがない。上の垂幕部と中の維摩像が右壁のもの、その他は左壁のもの、圖版一頁のカットは右壁のものである。たゞ左壁の方は框の上に橢圓形と圓形の連續したかざりがあるが、右壁のものにはない。

¹⁶⁾ この點も第十四洞左右龕に同じである。もつとも第十四洞右龕は上隅の寶珠がない。

¹⁷⁾ こゝに維摩文殊像をほることは定式化してゐるが、樹下思惟像をあらはす例は第十四洞、魏字洞をのぞいて、あまりない。古陽洞、蓮華洞にもほとんどない。雲岡では第三十一洞d窟外壁にこれを見る。

十四洞左右壁の大龕とも合致する。しかし彫法はこの方がはるかに明快である。

楣拱額の下部にまた獸面を中心にした垂幕がさがる。こゝにはじめて龕が開いてゐるわけであるが、そのたかさ一メートル九五、はば一メートル二四ある。龕内にはまた寶座があつて周壁をめぐり、本尊はその上に坐し、四脇侍はその左右壁に立つ。いま首をうしなつてゐるが、古い寫眞によればいちじるしく細おもての顔で、これに細長い頸、細長い胴とを加へると、はなはだ細長い像であつたらしい。兩肩がなで肩で、衣の褶が垂直にたれてゐることも、またこの縦ながの感を強調する。しかし、結跏趺坐の膝がしらにまとひ、そこから臺座の上にたれてゐる垂衣は整然としてするどい。この像では身體のプロポーションよりも、こんな抽象的な線にするどい感覚がもられてゐる。脇侍はみな首をかき、光背は後壁本尊に似てうつくしい。

龕の兩側には片足をふんばつて、片足をまげ、力をいれてゐる躍動的な力士像があり、ほゞ外壁力士像の姿勢に一致してゐる。この上にそれぞれ菩薩立像の垂幕龕が二個づゝならび、拱額となる。¹⁹⁾

この大龕左右の縦帯には左側に六個、右側に七個の小龕が、だいたい、同等の規模でならべられ、あたかもこの大龕に對する側柱のごとき感がある。いま基壇にも二三の佛龕がみえるが、²⁰⁾要するに垂幕尖拱坐佛龕、楣拱坐佛龕と垂幕菩薩立像龕、垂幕二佛並坐龕とである。尖拱額はみな過去七佛をあらはしてゐる。めづらしいのは垂幕龕にある二佛並坐像である。いま造像記のあるものをあげれば左のごとくとなる。^{第六十}

左側

欠	錄文 445 孝昌二年 五月二十三日 无量壽像 (西曆526)	441 孝昌二年 四月八日 无量壽像 (西曆526)	欠
		446 孝昌二年 五月十五日 觀世音像 (西曆526)	437 正光四年 九月十五日 无量壽像 (西曆523)

右側

錄文 448 孝昌二年 五月廿九日 觀世音像 (西曆526)	欠	440 正光五年 七月廿三日 觀世音像 (西曆524)	449 孝昌二年 五月廿三日 像名 缺 (西曆526)	450 孝昌二年 五月八日 像名 缺 (西曆526)	欠
--------------------------------------	---	-----------------------------------	-----------------------------------	----------------------------------	---

これによれば坐佛定印はかならず无量壽像であり、菩薩立像は觀音像である。そのうち、无量壽像の多いのが注意をひく。²¹⁾年次は正光四年から孝昌二年の四年間^{西曆五二四—五二六}である。もつて右壁のつくられた時代、したがつて、また奥壁本尊のつくられた時代をも推測するに足りよう。

18 沙畹圖版二二。關野博士、澤村教授、岩田氏の寫眞にもこの首はみえる。脇侍の首はどれにもみえぬ。

19 力士像もいまではすべて破損し、頭部を失はぬものはまつたくない。

20 基壇の佛龕もほとんどみな魏刻である。いくらかおくれであるかとみえるものは中央の倚像佛龕であるが、これも唐よりは古い。

21 蓮華洞はあれだけの佛龕中无量壽像といふもの一二例のみ。しかも、その一例(錄文三五二)は孝昌三年である。古陽洞太和以來の造像記をみても、神龜二年(西曆五一九)になつてはじめて一例(錄文六三六)をみ、永熙二年(西曆五三三)一例(錄文六五四)をみるのみである。もつて无量壽佛信仰の興隆がみられる。

左壁は楣拱龕の中央上部から破壊され、本尊の首を失ひ、基壇の壁面過半剝離してゐる。すべての點で右壁に相應じてゐるから、右壁と同時に計畫されたことにまちがひない。^{第六十} 六圖 たゞちがつてゐるのは力士像の上にある小龕である。こゝでは垂幕の菩薩立像龕、すなはち觀音像龕がたゞ一つで、内側の垂幕龕には左方が涅槃像、右方が樹下懸鐘の浮彫をほつてゐるのはめづらしい。²³⁾ 力士像の姿勢、手足の表現がすこぶる興味あり、破損してゐるのがかへすがへすも惜しい。

右壁でこゝろみたやうに、兩側の小龕列にある造像銘をみるに左側壁はつまびらかでないが、右側から年號と像名とを記せば、左のごとくである。^{第六十} 六圖

右側

欠	欠	欠
録文 439	正光四年	
觀世音像	□月十日	(西曆523)
彌勒像	438 九月九日	(西曆523)
釋迦像	442 □月廿三日	(西曆526)

これによつてもまた右壁と同じ結果になる。この窟が正光末から孝昌初にかけて、つくられたことはほゞうたがへない。また石窟の整備された點からいつて、この石窟が第十四洞に先行することもあらそへない。この壁には无量壽像がなく、交脚菩薩の彌勒像が加はり、坐佛の釋迦像が加る。觀世音像は同様である。そして釋迦の坐像は右壁の无量壽像が定印坐佛であつたに對し、こゝでは兩手を前に出し、右手をあげ左手を下げた坐像としてあらはされてゐる。この孝昌二年釋迦坐佛龕はまた尖拱額にC字形忍冬唐草をかさねた文様を入れてゐてめづらしいが、^{第六十} 七圖 その下にはまた屋形の佛龕もあつたらしい。^{四八} 圖版

「前壁」 入口拱門の左右には幅一メートルたらずの壁面があり、いくつかの楣拱小龕がならんできざまれてゐる。また拱門のうへの、天井とのあひだにも、同形の楣拱龕が五個ならんでゐる。みんなおなじ規模、おなじ形式の楣拱龕である。^{第六十} 八圖



第六十七圖 (Fig. 67)

孝昌二年唐草尖拱龕 (魏字洞左壁右方下部)

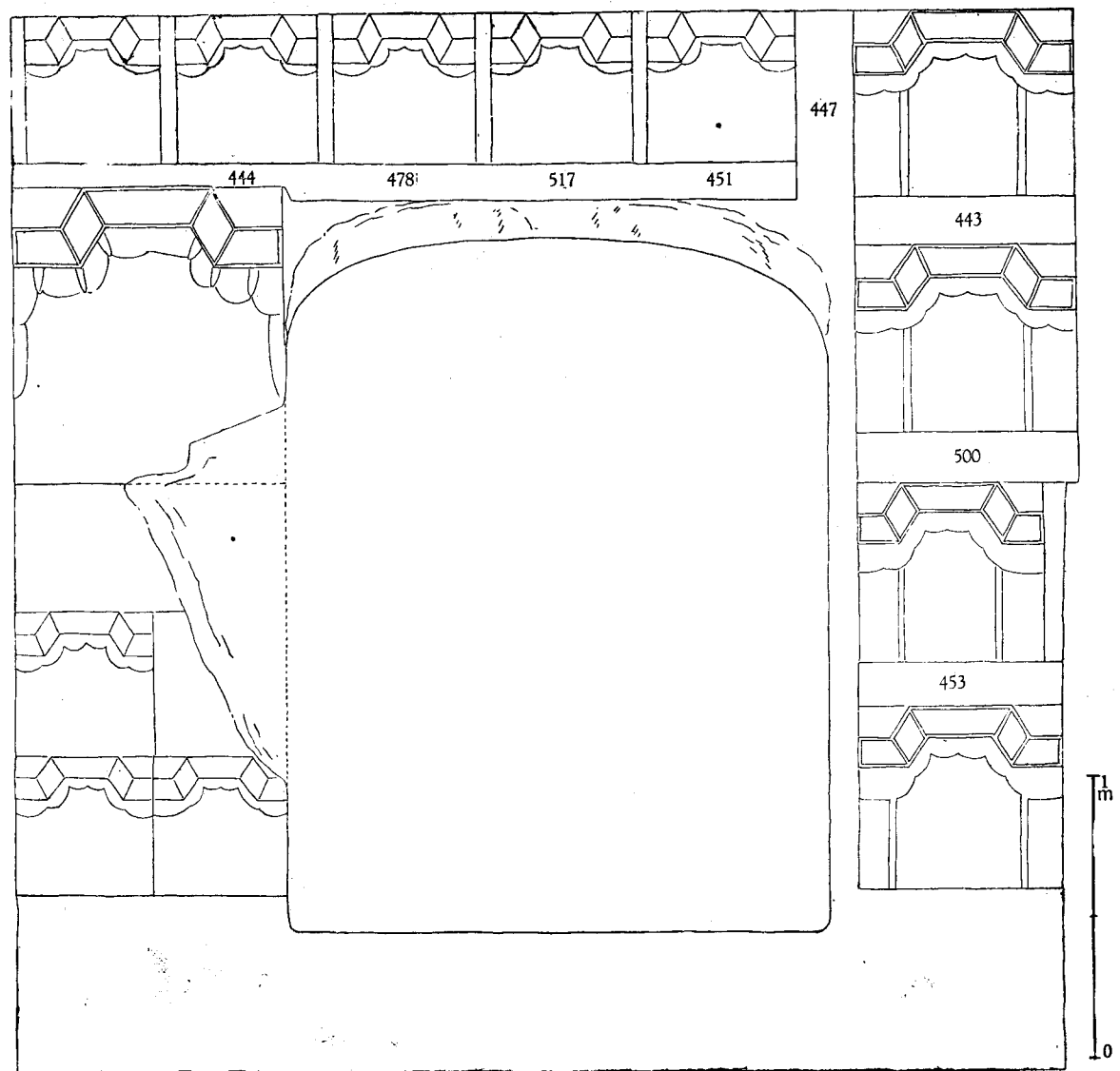
²² 沙畹圖版二二二。この首もシャヴァンヌ、塚本博士の寫眞にはまだみえる。

²³ この魏字洞左壁大龕の左右に相對してこの圖柄があることは、第十四洞左壁涅槃像(圖版四二)の源流を暗示する。この龕に對してこの二つの小龕がもつ關係ははなはだ緊密であつて、第十四洞のたゞ一方にかためられたのとは雲泥の相違がある。だからこれも魏字洞が第十四洞に先立つてつくられたことを示す一證であると思ふ。これでは涅槃像のむかふに二列になつた人物がある。樹下にはやはり靜坐した僧形がみえる。本書五九頁註⁽¹⁵⁾參照。沙畹圖版二二二。

²⁴ それぞれ獨立した佛龕であるが、そのやりかたが全く同じであるから、連續して同じ人の手によつてつくられたものとみえる。

造像記にはすべて孝昌二年^{西曆五二六}の年號があつて、その間に介在する判讀しがたい造像記^{石刻四四七、四}もおそらく孝昌二年であらう。この結果はまったく左右壁の造像記に一致するが、たゞほとんど總べてが彌勒像の造建であつて、孝昌年間にはすでに无量壽像の信仰がやうやく盛んになつてゐるけれども、なほ北魏一代は牢固たる彌勒像の信仰が持續してゐたことがみとめられる。²⁵⁾

魏字洞（第十七洞）

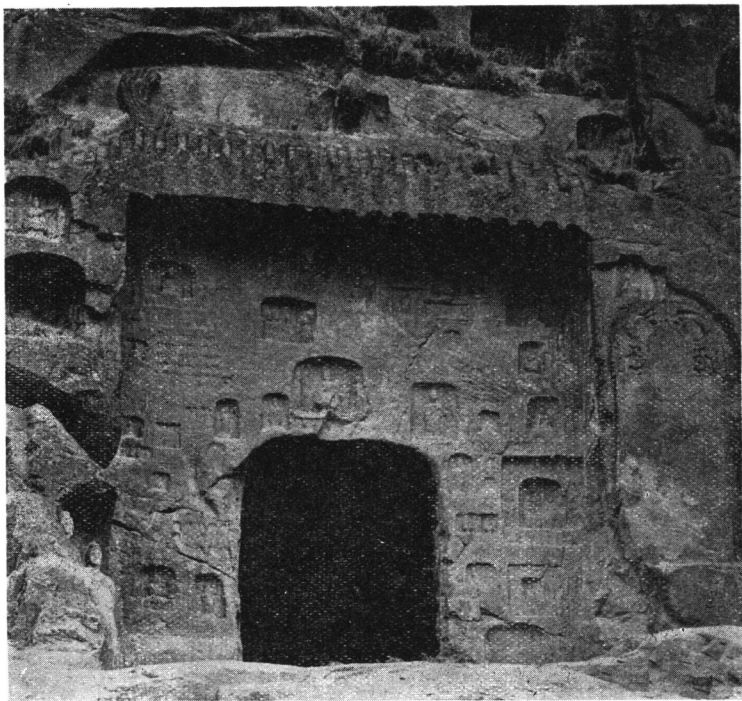


第六十八圖 (Fig. 68) 魏字洞前壁圖

錄文 444 彌 四月 孝昌二年 勒 廿三日 像 (西曆526)	478 彌 四月 □□□年 勒 廿三日 像	517	451 彌 四月 孝昌二年 勒 廿八日 像 (西曆526)	447 觀世音像 四月廿三日 孝昌二年	錄文 443 彌 □月 孝昌二年 勒 八日 像 (西曆526) 500 453 孝昌二年 (西曆526)
---	---	------------	--	---	---

唐字洞〔第十八洞〕

入口としてはすまゝの拱門をひらいてゐるが、その上に大きなやねがたを彫つて外郭をつくつてゐる。このやねがたはよせ棟、本瓦葺とたるきの軒をかたどつてをり、棟の中央には翼をはつた正面むきの鳥、¹⁾ 兩端には鴟尾、その間とくどり棟には三角形のかざりをおく。萬事、雲岡石窟などにもみる浮彫屋形のごとくにしてゐる。²⁾ たゞし、こゝでは軒のくみものはまねしてゐない。³⁾ 第六十九圖

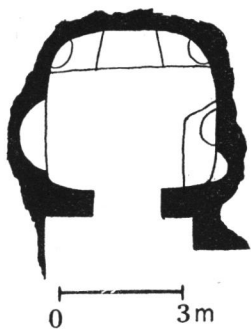


第六十九圖 (Fig. 69) 唐字洞外壁

しかし、この外壁にはその他の空所に一面小さい佛龕を彫りつけてゐる。それは北魏から唐代にわたる各種の龕である。入口左方に東魏天平四年造像記⁴⁾ 録文⁵⁾ があり、右方に唐上元六年造像記があるといふ。⁶⁾ 左方に一段と大きな螭首の碑形が方趺の上に彫りだされてゐる。しかし、どんな文字が彫つてあるかは不明である。⁷⁾

石窟平面はほぼ方形で、はゞ四メートル五〇に、ふかさ三メートル五〇ある。天井は高さ約三メートルで、未完成である。後壁には坐佛二菩薩、二羅漢を刻してゐる。⁸⁾ 沙畹圖版二二約

二メートルの實座に對し、本尊の坐高はわづかに一メートルあまりで、その大きさがつり合つてゐない。作も凡作で、その年代の推定にくるしむが、臺座



第七十圖 (Fig. 70) 唐字洞平面圖

も未完成のまゝであるから、とにかく當初のものでないことは明瞭である。臺座の前に香爐をさしはさんで獅子の像を彫つてゐるが、それは初唐を遡らぬものゝやうである。

1 おそらくこの棟の上の正面の鳥は金翅鳥すなはちガルダ Garuda といはるべきものであらう。しかし、こゝにはもちろん漢以來の朱雀の思想がはたらいてゐる。
2 たとへば雲岡第九、第十洞前室側壁の上層龕(大同石佛寺)圖版五八、五九)
3 龍門石窟では小さい佛龕のほかに、おほむね、どの屋形龕でも軒のくみものを略してゐる。第十一洞附近の屋形龕、老龍洞上の屋形龕でもくみものはなかつた。
4 『支那佛教史蹟』第二冊九〇頁による。この上元六年の造像記はまだみあたらず。
5 おそらくこれも無字の碑か。それにしてもその年代は初唐頃か。
6 沙畹圖版二二八に北壁とするは南壁の誤であらう。
7 もつぱら『支那佛教史蹟』第二冊九〇頁(E. Chavannes, ibid., pp. 446, 447)による。なほ諸著録によれば唐代紀年造像記には永徽五年二種(目錄三三二等)龍朔元年二種(錄文四六七等)龍朔二年一種、三年二種(錄文四六八等)麟德一種等がある。
8 この位置については『支那佛教史蹟』第二冊九〇頁による。
9 これは洛州靈巖寺、つまり龍門靈巖寺の僧磔の造像記である。しかし、これがこの石窟の開鑿を意味するか、單に一佛龕の造建を意味するかはわからない。おそらく後者であらうが、それにしても、この石窟の北魏末、西魏初の開鑿たるはあきらかである。
10 西魏の造像記はすくない。龍門全山において七種、大統四年六月より大統七年四月に至る。當時の情勢をいへば、大統四年河橋の戰で、東魏の軍をしりぞけてより、大統九年邱山の戰ひで敗退するまで

右壁には大きな佛龕があり、彌勒倚像と兩菩薩像とをきざみ、その下に『傳法師石龕彌勒像讚』^{録文}四七六がある。紀年はないけれども、初唐の作であることはあきらかである。左壁には觀音立像をきざみ、その他の壁面にも大小さまざまな佛龕を彫つてゐるが、すべて初唐の造建である。⁷⁾たゞ前壁入口の右方に西魏の一佛龕あり、⁸⁾「大魏大統七年太歲辛酉正月十五日訖」との造像記^{録文}四五四がある。⁹⁾それであるから、ほゞ第十四洞、魏字洞に似たこの石窟はすくなくとも魏の大統七年^{西曆五四一}までに開鑿されてゐた。¹⁰⁾たゞこの時には未完成であつたとみえ、その後、唐代にかけてつぎとつぎと造刻され、つひに今日にみるごとき面目をとるに至つたものらしい。この點は第十五洞の成立とほゞ同じである。

奉先寺洞〔第十九洞〕

—圖版五四—六七—

いままでの諸石窟とことかはり、龍門西山の中腹中央に、豁然とひらかれた大洞こそ奉先寺洞である。山腹をきりひらくこと約三十メートル四方、大像をもうけること九體、^{圖版五四}中央の大佛は東面し、その左右に兩羅漢、兩菩薩像を彫刻し、左右側壁には供養者、神王像、力士像を刻してゐる。さうたう大きな列像だから、比較的廣いその前の廣場からでも、全體の概觀はむづかしい。むしろ伊水をわたつて東岸にゆき、そこから西山を背景に遠望する方が、はるかに壯大にみえる。まづ龍門の大觀はこゝにありといへよう。

本尊大佛は重層蓮瓣の八角臺座の上に坐してゐる。^{圖版五五}高さ約十三メートル、臺座の高さ約三メートル、光背の頂から地盤までの高さはほゞ十六メートルある。たゞし、いま臺座の下部は地に埋つてゐて、ほんたうの高さを知ることとはできない。また下部の蓮瓣のすがたもいまみることはできない。上部もかなり破損してゐるが、とにかくその腰部は八角形でその隅角に立つた裸形の力士像、その間に坐つた甲冑の神王像のあつたことがわかる。たゞしその正面がどうであつたかについてはまつたくわからない。^{圖版五六}北面した一面に大盧舍那像記^{録文}八〇六および開元十二年十二月五日の牒を刻してゐる。それから上に四重の持送りをだし、三層になつた仰蓮華をうけてゐる。そして蓮瓣のひとつひとつには『梵網經』による千葉千佛の坐佛をきざんでゐるのである。²⁾

本尊は頭髮の部分がやゝ大きいこと獅子洞や萬佛洞本尊に似てゐる。面相は比類なく端正である。^{圖版五五}頸をまつすぐに立て、目だけはやゝ下に向き、脚下にあつまる衆生の讃仰に答へるかのやうである。目を下に向けるためか、上

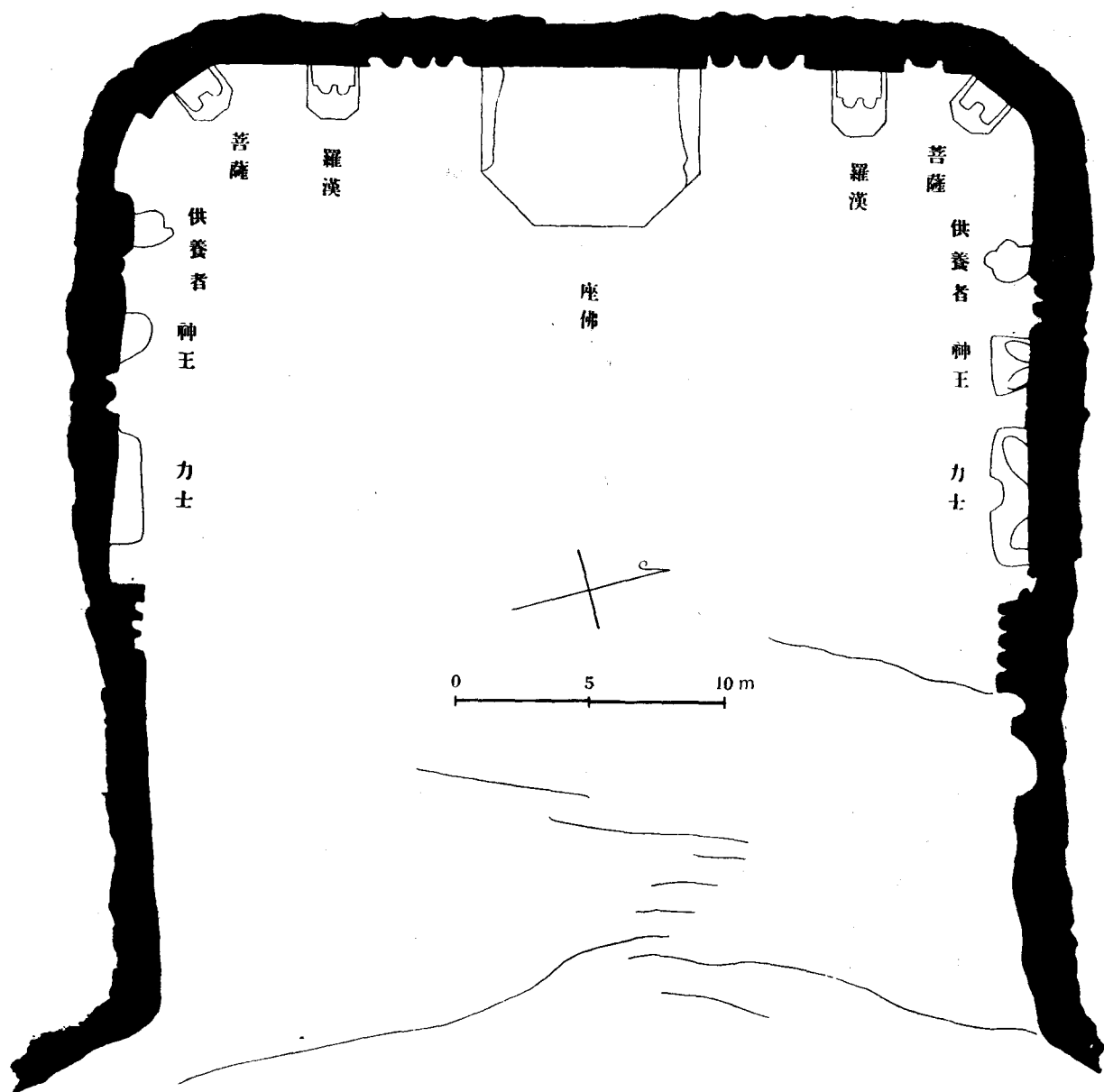
この附近は西魏の手中にあつた。『周書』卷二「また東魏の造像記も天平元年より元象二年などが十五種あり、武定三年以降が三種あり、元象二年（西曆五三九）の一種は西魏の占領中に東魏の年號をつかつたことになるが、そのほかは、てうど西魏の大統十年（西曆五四四）に至るまでが缺けてゐて、文獻上の事實とよく合致する。

1 こゝに九體の大像あるをもつて、俗に九間房といふ。『藝風堂金石文字目』には九龍洞となづく。大盧舍那造像記（録文八〇六）によれば、本尊は光背寶座を通じて八十五尺、二菩薩は七十尺、その他の像はおのおの五十尺、なほこの場所は縦廣おのおの百二十尺、高さ百四十尺といふ。もちろん唐尺によつてゐる。もし唐の小尺はほゞ八寸として（藤田元春氏『尺度綜考』三七—三八頁）計算すれば本尊六十八尺、菩薩五十六尺、その他の像四十尺、場所は方九十六尺、高さは百十二尺といふことになる。これを現狀にてらして考へれば、みなほゞ當時の實數をいつたものと思へる。

2 盧舍那佛千葉の釋迦はわが東大寺の盧舍那大佛にその例がある。盧舍那佛の造像は北齊ごろからやうやくさかんになつた、そして『華嚴經』もおこなはれたが、一葉一釋迦の説は鳩摩羅什譯『梵網經』卷上にみえてゐるのみである。

3 もつともこの後壁はひろくて平たいから光背も左右に展開してなほのことひろくみえるのである。

4 いま足下までみえるが、臺座はこの下に



第七十一圖 (Fig. 71) 奉先寺洞平面圖

方からたれてゐる。なんといつてもこの像の端正と莊重とはこの口にあり、それをたすけるものはやゝつり上つた目であり、さらにこれを増幅するものはその大きな頭髮であらう。肉髻をふくむかつらのやうに大きな頭髮は唐代特有の大まかな波狀のひだをとつてゐる。さらにこの像の肩から腕にかけた張り、そこから垂直に二三の衣線がさがり、

臉をおもくつくり、下臉

は薄くかるく彫つてゐる。

したがつて横からみると

目は前方を凝視するとい

ふより、深く沈思觀想す

るといふ役割をはたして

ゐる。しかし、目尻はす

るどく、やゝつり上つて

ゐて強く嚴かである。眉

の彫り方は唐代特有のま

んなかを高くしたみごと

な半月形であつて、その

はしは上臉の線に接して

ゐる。左脇侍菩薩にみら

れるやうなカーヴでなく、

崇高な美しさをもつたも

のである。あまり大きく

ない鼻とひきしまつた唇

とにはいひしれぬ優しさ

がたゞよふ。頤には頤の

わが入り、頸には三道の

すぢあり、耳は大きく兩

埋つてゐるのであらう。

⁵ 寶石の璽珞をつけた菩薩像も、はやくは古陽洞の脇侍にある。(本書圖版七七)し

かし、さかんになつたのは北齊、隋代で

ある。たゞ天龍山、響堂山石窟ではあま

りみなない。(O. Siéu; *ibid.*, Pl. 307, 308, 310—316)

⁶ 華美な寶冠についてまづ想起されるものは雲岡第三洞の脇侍菩薩であり、つぎは

青州雲門山第二洞の脇侍菩薩で、前者は

遼代、後者は隋代の作である。(O. Siéu; *ibid.*, Pl. 292, 349)

⁷ この臺座のやりかたはめづらしい。右方脇侍の臺座は全く埋没してゐる。

⁸ 『唐書』卷四五、輿服志には「いまだ元服しなければ雙童髻」といふ文句がある。

漏刻生、漏童の「總角髻、青髻髻」も同じものとおもふ。(原田淑人博士「支那唐代の服飾」大正十年刊四六頁)。

⁹ 『隋書』卷十二、禮儀志には「三禮圖」を引いて「ふたへ底を烏といひ、ひとへ底を履といふ、夏は葛製、冬は皮製」といふ。烏と履との區別はたゞ底のひとへと

ふたへにあつたらしい。皮でつくつて頭がはね上つてゐるから、わが國ではこれを鼻高履といひ、僧侶などのつけるところであつたといふ。(『箋註和名抄』卷四)

¹⁰ 緊縛する皮甲の寫實的な表現は唐代の人

人によつてこばれたとみえ、皮甲の神王像はさかんにつくられた。石像はもちろん土偶にもつくられたことは人のよく知るところである。

¹¹ 毘沙門天 Vajrapana は四天王の一にして、北方を主宰し、諸鬼の主領である。

鬼形を踏んだ作例はもつぱら唐代以後に多い。

¹² E. Chavannes; *ibid.*, Pl. 356.

¹³ この八角重成蓮座の下方蓮座によつて、埋れてゐる脇侍菩薩臺座の下部を推想すべきであらう。

その腕にはさまれて大きな胸と腹、そしてわれわれはそこにうつくならべられた衣文の大きな弧線が垂下してゐるのを見るとともに、そのうすい衣の下に起伏してゐる巨體をみとめるのである。兩腕は右手をあげ、左手を下げたものであらうと思ふが、いまはすでにこはれてみとめられぬ。膝のあたりも無残にこはれて、もとの様子をうかゞふことはできぬ。いま下半身の破壊のため、この唐代第一の巨像も全體の印象がいくらか稀薄になつてゐるかと思ふとかへすがへすも遺憾なことである。

本尊は大きな寶珠形の光背を背負ひ、そのうしろに舉身光がある。^{五八}圖版 寶珠光は舉身光の内區外郭に一致してかきなり、外區一帯は特殊の附加物のごとくそこにはみだしてゐる。それだけに特に幅ひろい舉身光と感ぜられる。³⁾この外區外郭をたどつて上つてゆくと、寶珠光背とはその先端が合一しない。舉身光はたゞ内區と外區にわかれてゐて、内區には平たい面であらした大まかな火焰がゆらいでゐるが、外區にはやゝこまかく樂器を奏してゐる飛天をほり、その空白を天衣と飛雲とでうめてゐる。^上圖版五七 寶珠光背の中心は瓣のそりかへつた蓮華、つぎは七佛をもつた唐草文帯がある。七佛はそれぞれ二脇侍をしたがへてゐるのがめづらしく、こまかい、したがつてあまりめだゝぬ唐草文様の地の上にうき上つてゐる。それからせまい蓮瓣帯があり、そのそとに下の舉身光内區と同じ火焰があり、その先端にむかつて彎曲してゐる。火焰の中心には小さい三尊坐佛の龕がある。

脇侍兩羅漢のうち、左方の迦葉像は頭からからだまですつかり破壊し、わづかにもすその一部をみるだけである。右脇の阿難像は左頬、右肩、兩手をうしなひ、胸に龜裂をもつのみで、ほど完好である。⁴⁾圖版 惠簡洞の阿難像にもつともよく似てゐるが、この方がはるかに精作で、彫法がするどい。しかもその頭や頬のこまやかなモデリングは實に微妙な變化に富んでゐる、とにかく、この奉先寺の諸像を他からひきはなす特徴は、この面貌の微妙なモデリングにあると思ふ。これは若い比丘像である。柔和な面ざしとゆたかな體軀、それをつゝむ衣のひだが誇張なくおだやかである。右手をたれ、左手を腰にあげ、衣端をこれにかけてゐる。光背は二重の圓環を彫るのみで、まったくかざりがない。

脇侍菩薩は右方が右腕を損してゐるほかは、左右ともほど完全に存してゐる。ともに緻密な唐草の寶冠をいたゞき、寶石をつゝつた華麗な璣珞を胸からたれてゐる。寶石の莊嚴も北齊以來の傳統であるが、そのもつとも寫實的になつたものといへる。華美な唐草の寶冠⁵⁾はすでに隋代にその先蹤をみるが、この大像に至つて細緻の極點に達したものと

いふことができよう。圖版六
〇、六一

右方は右手をたれ、左手を腰のあたりにつけ、左方はその反對である。左方はつよくまがつた眉をつけ、險の線は

14 これらは左壁と後壁左半にあり、ほど十六體ある。後壁右半から右壁にかけてはどうしたわけかこれをみない。左右相稱でないところをみると、任意の後刻らしい。しかし、後刻にしてはあまり大規模なやりかたである。

15 この奉先寺やねがけ想像圖は平子鐸嶺氏の推定するところであるが、これは現地にみても、寫真にみても、そのほゞまちがひのないことがうなづかれる。

16 この造像記が左行であるのは臺座の左側にあるためで、正面から奥へとよめるやうにしたのであらう。

17 奉先寺造像に關しては松本文三郎博士「龍門奉先寺に就いて」(『佛教史論』昭和四年刊所收) 參照。實際寺善道についてはこれを淨土教の善導大師と解するものがもつとも自然である。なほいくらか積極的證左に缺くところがあるやうであるが、この説が一般にみとめられてゐる。

なほ善導のことについては松本文三郎博士「善導大師の傳記と其時代」(『佛教史論』所收) 等をみよ。法海寺主惠暕は第十一洞の供養者たる法海寺主惠簡と同一人であらう。暕は簡と音通である。三八頁註(6)參照。

18 草機は太宗、高宗頃の人である。貞觀中、左千牛胃曹として西突厥に使し、同俄設をたて、可汗としたが、たまたま石國の反に會ひ、抑留されること三年、その間裳を裂いて西域諸國の風俗物産を録し、歸國後、西征記一篇としてこれを太宗に奏した。顯慶中、司農少卿を拜し、東都營田を兼知し、上元中、司農卿となり、園苑を檢校し、上陽宮を造つたり、中橋を移建したり、營構の才をみとめられてゐる。則天武后の永淳頃に卒したらしい。

(『唐書』卷一八五上)

19 『佛祖統紀』卷三九および卷五三にも「咸亨三年、高宗勅して洛陽龍門山に石龕盧舍那佛像を鑿る、高さ八十五尺」といふ。

20 こゝに阿難迦葉を明記したのはめづらしい文獻である。金剛神王は、シャヴァン又は四人のdevataをさすものとしてゐる。しかもそれについて「四人のdeva

さう長くはないがするどく、しかも波動をつけ、半眼にひらいてゐる。とゞのつた鼻といくらかゆるんだ脣が右方脇侍に比していくらか女性的な表情をとる。^{六〇} 右方は大體似てゐるが、眉がやゝ平らかであり、鼻と脣とがやゝ大きく、下頬が多少ともふくれてゐるといふ點がちがつて、男性的な表情をしてゐる。^{六一} しかもどちらも額せまく、寶冠の下に頭髮がつよくふくれ、寶冠の上に大きな寶髻がのぞいてゐる。耳はながく、それにそうて寶冠のひもと頭髮は兩肩にたれさがつてゐる。頸は太く、肩は大きい。これに對して胸がほそく、足もとがすぼみ、下半身がまけてゐる。下裳にはこまかいひだがさがり、天衣は兩肩から前にU字形にたれ、これに瓔珞の交錯してゐる整然たる諧調は正しく唐代彫像の精華といへよう。肉體の表現はかなりデリケートであつて、自然主義的なものがある。腰をすこしひねつてゐるので、そとがはの脇にあらはな肉體の線がみえる。

光背は寶珠形で、圓形のそとにせまい蓮瓣帶あり、つぎに唐代特有の靈芝雲の文様帶あり、最後に本尊光背にみた火焰帶がある。臺座はやはり八角形で、軸部全面に簡單なかうざまがあり、上には數段の持送りがあり、單瓣の仰蓮華と複瓣の俯蓮華とをさへ、下にも數段の持出しがあつて、いまは埋れてみえない蓮華の座があるらしい。^{五七} 圖版

菩薩像から左右の壁へまはつて、そこに小さい供養者の像がある。^{五六} 右方は下半身が破壊と埋没のためにみえず、左方は上半身がこはれてゐる。右方の顔は雙角髻の童子形である。^{五八} 左方の衣裳も膝にちかい上衣の垂下、袖つきなどをみると、やはり童子であつたらしい。足にはさきのはね上つた舄履をつけてゐる。^{五九} 臺座はみえない。

左右壁はすこしくぼんで龕のやうになり、こゝに神王像と力士像とを彫つてゐる。ちやうど像のもり上り方は龕のふかさに相應する。左壁の神像^{六三}は大きな顔を左なゝめにむけ、腰をひねつて右脚をまげ、左脚をふんばり、邪鬼の上に立つてゐる。右手には小塔をさへ、左手は腰にのせてゐる。指さきの表現はこまかくうつくしい。顔が大きく肩幅が張つてゐる割合に、腰から下がほつそりとして、さみしい。幅のひろい顔は眉目が左右につりあがり、眉間に皺をよせ、鼻は大きく、口がひきしまつて凜々しく、いかにも神將らしい。額には細密なかざりをつけた冠があり、身體には華美な裝飾の皮甲をつけてゐる。^{六〇}

脚下の邪鬼^{六二}は腰をおとし、膝をたて、右手をつよくつぱつて、頭上と膝頭の上に大きな神王像をさへへてゐる。輝ひとつの裸形で、頸輪と腕輪とがみえる。隆々たる筋骨をあらはし、頸をちぢめ、齒をくひしばり、眼をむいてゐる。その顔面の肉付けはこまかで變化に富む。こゝでは神王にふみつけられたといふより、力をこめて支へてゐるのである。その點、八角臺座の周圍にある力士像と一致する。かなり無理な姿勢であるが、些の破綻もなく、よくまとめあげられてゐる。^{六一}

20 つまり四天王は、佛の保護神で夜叉 Yakṣas の首領たる金剛力士 vajrapāṇi を二倍にし、四倍にしてきたといふ記憶を支那人がもつてゐることを證するこゝとであるといつてゐる。(ibid. p. 44, note 4) しかし、こゝでは金剛は金剛力士で裸形の力士像をさし、神王は四天王をさす。たゞしこの場合は惜しむらく金剛杵をもつてゐないので明瞭をかくが、神王は四天王もそのうちに入り、この左壁の像は毘沙門天である。右壁の像についてこれを知りえぬのは遺憾であるが、とにかく二體をもつて四天王をあらはしたものであらう。敦煌萬佛峽第五洞の唐代石窟では後壁に盧舍那佛をさき、入口兩側に力士像をさき、外壁左右に神王像、一は毘沙門天 Vajrapāṇi 一は廣目天 Virūpākṣa をさかくといふ、またもつて參照すべきであらう。(Langdon Warner, *Buddhist Wall Paintings: A Study of a Ninth Century Grotto at Wan Fo Hsiu, Massachusetts* 1938, pp. 13, 14)

21 大盧舍那像龕記末尾の頌銘につゞいて「進士都仲容記」とある。『中州金石記』卷二にはこの記を股仲容の撰とする。『金石萃編』卷七三もこれにしたがふが、股仲容は則天の時の人であるから、開元十年まで生きてゐたかどうか不明である。あるひは像龕記を書いたのはすでに調露二年の建寺の際にあり、石に刻したのは開元十年牒をえたのであらうといつてゐる。しかし「進士都仲容記」の數字は字體を異にし、後刻の疑がある。また頌銘のあとにある「縱廣十有二丈矣、上下今百卅尺耳」をおそらく寺僧の附加した文句と解してゐるのは正しいと思ふ。たゞそれにしても像龕記とこの二句は一筆であり、また開元十年牒ともほとんど一筆であるから、その全文の成立にはいくたの段階があるとしても、これを石に刻したときは同時であつたらうと思ふ。

22 龍華寺とは藥方洞にある北齊天保四年龍花寺□造像記(錄文五二四)にその名が

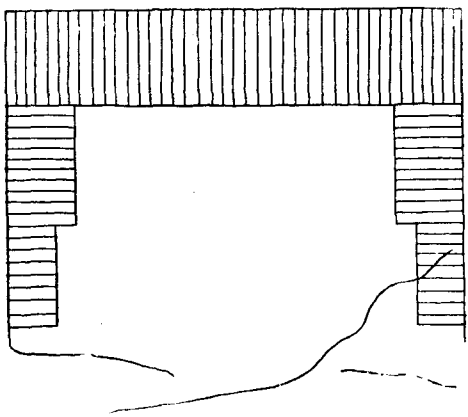
左壁力士像の顔はもつと前方にむかひ、ほとんど側面形にちかい。^{四、版六} 左脚をふんばり、上半身をひき、左肩に力をいれてゐる。下裳は脚をふんばつた勢にうしろになびき、璽珞もゆらゆらと音をたてゝゐるやうである。腹の上のまるい飾からたれた玉のゆらぎ、またそれをつつた左のひもの緊張に對し、中央のひもはやゝゆるみ、右方のひもはやゝたるんでさへゐる有様は、いかに寫實的に觀察されてゐるかゝわかる。うしろへひいた右肩から上へのぼつてゆく頸筋の緊張は、頸の筋肉の緊張とともにみごとに表現されてゐる。たくましい顎、齒なみをみせた口、鼻翼のはつた鼻、ふくれた顴骨、まるい眼と皺のよつた額は力士の勇猛形をあらはして餘蘊がない。裸形の上半身や四肢にあらはされた筋肉の緊張もあまり誇張がなく、よく調和をたもつてゐて、まづ力士像中の傑作といへよう。髻は小さく、冠も小さい。脚下の座は岩座であるらしい。

神王像も力士像も光背は單純に二つの圓形である。頭冠のひもはその上にはねかへつてゐる。

これに對する右壁の神王と力士像は全く破壊して今日ではみることができない。¹²⁾

これで奉先寺諸尊像の記述を終つたわけであるが、これら諸像の間にはなほたくさんのかたがたの龕が彫つてあつて、小さいのは一尊、大きなのは四尊五尊におよぶ佛の立像がおさめてある。どれも同じ形式で、大きさも同じ七尺ぐらゐである。圓滿な顔たち、とゝのつたからだつき、簡素な衣文に圓熟した技法をとめてゐる。寶珠形の光背も本尊にちかく、臺座はまったく脇侍菩薩のそれに一致するが、こちらにはそのかうざまのなかに何か小像が刻してある。¹³⁾ 圖版六、おそらく本尊諸尊にひきつゝいて造建されたものであらうと思ふ。¹⁴⁾

さてかうした諸尊像がならんでゐるが、こゝには天井がない。嚴密な意味で石窟といふことはできない。西壁、北壁、南壁がそれぞれ垂直に岩を斷ち切つてゐる。^{五、版六} その垂直の壁面を鑿つて、後壁に五尊、左右壁にそれぞれ二尊の龕をひらいてゐる。そしてその前の廣場にかけだしをつくつたのである。その迹は歴々としてのこつてゐる壁面の枘穴によつてうかゞへる。それによると後壁のかげだしは龕の下ばかり出て、神王像の中心くらゐに至つてとまり、その下には四架の桁がとほり、六個の梁がとほつてゐたらしい。したがつてこれを尋常の建築になほすと九架七間の建物があつたことになる。これに對し左右の壁は後壁のやねの下ばを棟として、これから若干のやねがけをつくつたらしい。そのやねの、ではわからぬが、間は三間あつたらしい。そしてこのやねの東につくるところ、その床に一段の基壇があつたやうである。



第七十二圖 (Fig. 72) 奉先寺屋根がけ想像圖

みえる。また『洛陽伽藍記』にもすでにある寺である。が果してこの龍華寺とどう關係してゐるのだらうか。そのひとつの想像は北魏末の洛陽擾亂に際し、洛陽の龍華寺は廢墟と化し、當時未完成であつた洛南の藥方洞に移轉し、今日の藥方洞が造營され、それが唐代、この時に至つてこの上の奉先寺に合併されたといふのである。だが、これはほんの推測にすぎない。

²³ 楊思勳、高力士といへば玄宗朝におけるもつとも有力な宦官である。『唐書』卷一八四、『新唐書』卷二〇七、高力士(西曆六八四—七六二)は本姓は馮、宦官高延福の養子となり、開元初右監門衛將軍、知内侍省事となる。玄宗の信任をえ、權一世にふるつたが、謹慎にして大過がなかつた。天寶初に冠軍大將軍右監門衛大將軍となり、渤海郡公に封ぜられ、天寶七載に驃騎大將軍となる。寶應元年卒して年七十九歳。楊思勳(西曆六六〇頃—七四〇)は本姓蘇、腕力があり、宦官楊氏の養子となり、内侍省に入り、景龍元年(七〇七)李多祚の討滅に参加し、銀青光祿大夫行内常侍を拜し、景雲元年(七一〇)韋氏誅滅に参加して功あり、右監門衛將軍に任ぜられた。開元初安南を討伐し、開元十二年單行璋の叛亂を平定し、軍功によつて輔國大將軍となり、のち東封にしたがひ、驃騎大將軍となり、また十三年十一月玄宗の泰山封禪にしたがつて、號國公に封ぜられた等、軍功少からず開元年間に重任された。開元二十八年卒、年八十餘とある。

²⁴ E. Chavannes, *ibid.* p. 458 をみよ。

また同書 Pl. 354 のむかつて右端の碑形がそれである。この紀年については『寰宇訪碑錄』卷三は開元三年、『金石萃編』卷八四十八は十八年、『支那美術史影繪篇』四八六頁は十三年とする。高力士の官「右監門衛將軍、知内侍省事」は開元初よりさうであつた。また「渤海郡公」も開元初からで、これを天寶初にかけた列傳の紀事は誤つてゐると思ふ。といふのは天寶初ですでに楊思勳が歿してゐるから

そしてそこからまたはるかに低いところに小規模なやねがあつたらしい。そのやねがけの想像圖はほゞ第七十二圖のごとくである。¹⁵⁾

さてこの奉先寺の造建については盧舍那佛臺下に銘文¹⁶⁾録^{八〇六}文がある。それ

によれば、この石窟は高宗の造建で、皇后武氏も脂粉錢二萬貫を出して、その

造營をたすけたといふ。勅によつて長安實際寺の僧善道禪師、法海寺主惠疎

法師が工事を檢校し、營構の大使には司農寺卿韋機、その副使には東面監上

樊元則がえらばれ、支料匠には李君瓚、成仁威、姚師積等¹⁸⁾があてられ、咸亨

柱國三年四月一日^{西曆六七二}工をおこして、上元二年十二月三十日^{西曆六七五}をもつ

て落成をみた。¹⁹⁾この三年九個月かゝつて竣功したものは實は石龕の大像、す

なはち盧舍那佛、二菩薩、阿難、迦葉、神王、金剛²⁰⁾のみで、銘文によればい

まだ奉先寺の名はなかつたらしい。しかるに調露元年^{西曆六七九}八月十五日にな

つて、また勅があり、この南つまりこの前庭、實は東に大奉先寺を置くこと

になつて、同二年の正月十五日に親筆の寺額を賜つたといふから、このときにその前面にあつた木造建築がつくられ

たものと思ふ。正面佛殿と左右兩廡の三棟である。そして行解兼備の高僧十四人をえらび、別に十六人の僧をあらた

に度して、こゝに奉仕せしめたのであつた。かくてこの銘の末尾にいふ縦横百二十尺、上下百四十尺とは、正にこの

建築物の寸法である。しかし、この大盧舍那像龕記がいつつくられたかはわからない。²¹⁾たゞこの末尾にあはせ刻され

た開元十年十二月十二日の河南縣から奉先寺への牒によつて、開元十二年より後に刻されたことがわかる。またこの

牒は勅によつて龍華寺を奉先寺に合作すべきことを命じたものである。²²⁾いふまでもなく奉先寺はすでに存在してゐた

のであるから、龍華寺を合作するといふことは、正に龍華寺を奉先寺に附設するといふ意味である。しかし、この岩

を切りひらいた空地にはもとより特別な餘裕はない、したがつて、左右兩廡の前方、基壇の下左右につくられた小

い兩廡こそはこの龍華寺にあたるものであらうか。

奉先寺の壁面にもなほ若干の後刻佛龕をみとめるが、基壇より東の左右壁には非常に多い。中には小さい石窟をな

すほどのものも二三ある。^{第七十三圖}そのうち造像記の方から逸することのできないのは内供奉高力士等一百六人造無量

壽像記^{石刻}八〇八で、これは玄宗の御書、しかも高力士、楊思勗等宦官が名をつらねてゐることとてめづらしい。²³⁾これは左



第七十三圖 (Fig. 73) 奉先寺洞外無名窟

である。列傳の天寶初のころには、右監門衛將軍に任じたことがふたゝびみえてゐる。おそらくこのときは冠軍大將軍を拜したのみで、渤海郡公は右監門衛將軍とともに開元初のことが錯入したものと思ふ。ところが楊思勗の「銀青光祿大夫行內侍省內侍」は景龍元年以來のことである。「弘農郡公」についてはわからぬが號國公以前とすれば開元十三年以前といふことになる。しかるに開元十三年にはあはせて驍騎大將軍、その前年開元十二年には輔國大將軍に任ぜられてゐるからこの官名をいれぬ楊思勗は一應、開元十二年以前と考へられる。大村氏は玄宗の開元十三年二月龍門行幸(『唐書』九)にむすびつけて、これを十三年にかけたのはこの碑のすくなくとも、一部玄に宗の御書があるのをあはせ考へると、非常に可能性が多い。しかし、それにしても漠然と開元十二年とする方がよくあたつてゐるものと思ふ。西安寶慶寺より將來の號國公楊花臺銘并序には「輔國大將軍號國公楊等」といふ。またもつて參考にすべきであらう。

²⁵⁾外壁左右に力士あり、上に飛天あり、ひくい圓拱の門口あり、内部には寶壇があり、三尊像佛を彫つてゐるやうである。その石窟の外形はつぎの二龕もほゞ同形式である。沙畹圖版三五四。

²⁶⁾ E. Chavannes, *ibid.*, p. 456 をみよ。

また同書 Pl. 54 のむかつて左端の碑形がそれである。張九齡(西曆六七三—七四〇)は『唐書』卷九十九、新唐書』卷一二六にその傳があるが、開元十年三遷して司勳員外郎となり、十一年中書舍人となり、それが後次第に重用され、二十一年には中書侍郎同中書門下平章事を拜し二十二年には中書令となり、二十四年尙書右丞相に遷つたが、李林甫の讒にあつてやめられ、二十八年壽六十八をもつて卒した。したがつて禮部員外郎のごとき卑官にあるは開元十年頃で、大村氏はこれより、この碑の造建を開元八九年乃至十年頃と解した。(『支那美術史彫塑篇』四

壁の最東端にある蟠首をもつた立派な碑形である。²⁴⁾ おそらくこれに對する造像はその右方にある小石窟をさすのであらう。²⁵⁾ これにつづものは牛氏造龜碑記^{八〇九}文で、左壁や、西方に入つた龜趺の碑形である。趙氏の子等が母牛氏のために造建したものらしいが、文は禮部員外郎張九齡の撰である。²⁶⁾ この碑の下になほ號國公楊思勗造像記^{八〇七}文がある。²⁷⁾ 最後の一行「騎都尉直集賢院張、」とあるのはこれも張九齡であらうか。この二つの造像記に對する佛龕ははつきりしないが、おそらくこの左方にある上下の二龕がそれであらう。これらの造像記はどれも明確な紀年をかくが、要するに開元十年前後、つまり龍華寺合作の機運に乗じて、なれるものであつて、この奉先寺洞外の諸龕窟もほゞこの頃において營建せられたものといはざるをえない。また右壁東端にもやゝ大きな石窟一個所あり、その形式は上記高力士窟とほゞ同様で、外壁に裸形の力士像がある。その肉付けなどやゝ誇張され形式化されてゐて、空疎な感が深い。

藥方洞〔第二十洞〕

— 圖版六八—七四 —

「外壁」 西山の奉先寺からやゝ南寄りのところにあつて、川ぶちより二三メートル高く、東面してアーチ形の入口をひらいてゐる。^{六九} 圖版 すなはち高さ六メートル七〇、幅五メートル二三の切りこんだ岩壁があり、その下中央に高さ二メートル九〇、幅一メートル六五の尖拱形門口がある。

入口の兩脇には八角柱を彫り出し、柱には等間隔で四個所に蓮華かざりを施してゐる。^{第七十} 圖版 この蓮華かざりは北齊、北周から隋時代にかけてさかんにおこなはれたものである。¹⁾ この八角柱の左右には力士像があり、上にはひくい拱額があり、その頂上には寶珠をおく。寶珠の左右には足を踏んばつて、手をさしのべた二體の侏儒像を對蹠的に彫つてゐる。しかしこの侏儒像と寶珠形とは風化のために甚しくあれてゐて、はつきりとした姿はとらへがたい。この二體の侏儒像のさしのべた手の上には高さ三メートル、幅一メートル二〇の碑形が浮彫にされてゐる。この碑には、おそらく造窟の由來が書いてあると思はれるが、わづかに文字をみるのみで、²⁾ どこにもこの拓本は見出せない。

この碑形の兩側、つまり力士像の上方には大きく飛天が浮彫になつてゐる。^{六八} 圖版 飛天はその顔をやゝ斜前にむけ、うちがはの手を挙げ、なにかを捧げ、そとがはの手はそれに合ふやうにそとがはへのび、掌にはやはり何かまゐる

八四、四八五頁)

²⁷⁾ E. Chavannes, *ibid.* p. 457. をみよ。

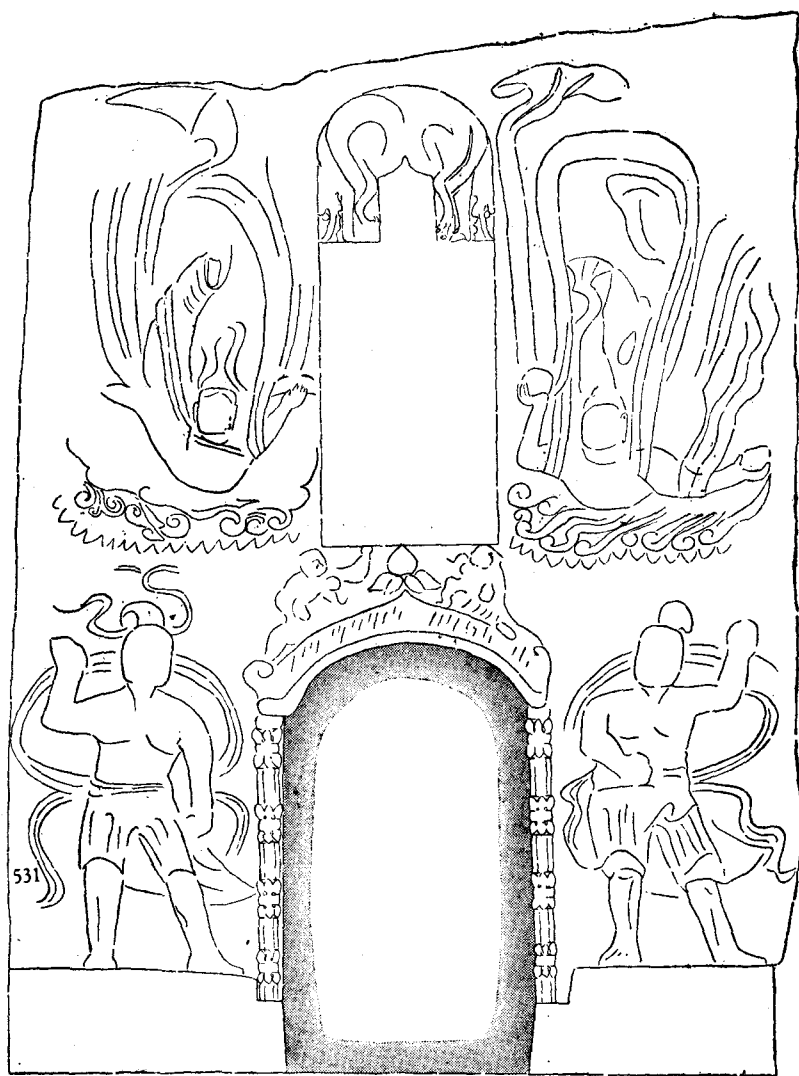
なほ同書 Pl. 354 のむかつて左方碑形の下の横位置長方形の部分に碑である。楊思勗が號國公に封ぜられたのは開元十三年十一月玄宗が泰山に封禪してより後である(七五頁註²²⁾參照)から、この碑の造建はそれ以後といふことになる。(授堂金石三跋「二跋卷二」)

²⁸⁾ もし號國公楊思勗造像記(錄文八〇七)高力士等造無量壽像記(錄文八〇八)、牛氏造像記(錄文八〇九)について右のごとき年代の推定が成立するとすれば、牛氏造像記はもつとも早く開元八九年か十年頃、すなはち龍華寺合作以前につくられ、開元初年よりその後開元二十三年頃に高力士等造無量壽像記がつくられ、號國公造像記がもつともおそく、開元十三年以後、牛氏造像記の下にわりこんで彫られたとみられる。故にこの左方上下の窟を牛氏造像と號國公造像にあてるとしても、下窟はさきにできた牛氏窟、上窟を號國公窟としなければならぬ。大村氏は『支那美術史彫塑篇』四八四頁になほ開元三年韋利器等造阿彌陀像記(錄文八〇五)を奉先寺窟外にありといふが、『伊闕石刻圖表』によれば大洞にある。大洞にあるといふ方が正しい。

¹⁾ その例は響堂山第五洞、第七洞、『響堂山石窟』圖版二〇、三〇)天龍山第十洞(O. Siren, *ibid.*, Pl. 221)敦煌千佛洞第一一八D洞(Touen-houang, Pl. CCXXXV)などみえ。

²⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊九六頁には無字の碑と解してゐるが、文字のあることは、寫眞でも歴々とこれとみとめることができる。

ものをもつてゐる。³⁾ 身體は胸の部分をはり、腹部はきつく折りまげて、うしろから上へ下肢がはねあがつてゐる。ちやうどダイヴィングのやうな姿勢で、胸を張り足をおどらしたのを、ま正面から寫したものでらしい。それは不自然ではあるが、しかし生き生きとした飛行の姿である。兩肩から上方へ天衣が大きくなびき、そのはしは蓮の葉のやうにひろがつてゐる。飛天の面相はゆたかであつて、殊に左



第七十四圖 (Fig. 74) 藥方洞外壁圖

の飛天では、臉、頬、顎に北魏から一歩進んだ暖か味があらはれてゐる。それは、兩肩から兩腕にかけて、また胸の弧線のふくらみにかけて、感じられる同じゆたかさである。⁴⁾ 日光を上からうけて、明るく輕やかにみえる天衣、頭部、顔面、肩に對して、下部の陰影をつくれる胸部から兩腕の下部にかけてのきりつとした波狀輪郭の緊張感、やはり北魏以來の傳統的な飛天形式であるといふものの、また非常に自由で、ゆたかな表現は全く別の印象を感じさせる。のみならず、兩飛天の對置も嚴正な相稱形を破つて、まったく自由な構圖をしめすのである。なほ、兩飛天の下には靈雲がうすく浮彫にされてゐる。⁵⁾

この飛天の自由さに比べると、その下の力士像は多少硬直した彫像といへる。^{九〇圖版} この兩力士像は腰布だけの裸形で、破損こそしてゐないが、かなり風化のあとをとめてゐて、ブロックのやうな大きな顔は面相がよくわからない。顔はともに中心の方にむかひあひ、そとがはの腕を直角に肩の方へあげてゐる。肩の線がほぼ水平に一直線をつくり、それにそのそとがはの腕が垂直にふりあげられてゐる形からして、この兩彫像はいくらか硬い姿勢となつてゐる。また腕や胸、または足にみられる筋肉のもりあげかたもぎこちない。ふり上げない腕は左右像それぞれに異なる

³⁾ おそらく蓮華であらう。飛天が空中から散華してゐるところをあらはすのであらう。

⁴⁾ このまるみある表現は天龍山第九、第十六洞の北齊窟、北齊堂山北洞等の彫刻に共通してゐることがみとめられよう。圖版六九にみえる胸かざりの唐草文も、たしかに魏齊の形式をもつてゐる。『天龍山石窟』『響堂山石窟』等参照。

⁵⁾ それは火焰のごとき渦文である。しかし、こゝでは飛雲をあらはしたものであらう。そしてこの下は蓮華で縁どつてゐる。瑞雲とも稱すべきであらう。

が、足を開いて立つた姿はまったく同様である。しかし、膝頭の上で横にはねた裳は、わづかにひねられた體軀とともに、この像に躍動的な感じをあたへる。冠のひもと天衣は力士像の浮彫とちがひ、ごく薄い浮彫として、あたかも背景のごとくに刻まれてゐるが、その尖端が自由に浮游してゐるさまは、この力士像に潑刺たる生氣をあたへてゐる。要するに藥方洞の力士像は賓陽洞や蓮華洞その他の衣をつけた北魏の力士像と全くちがつてゐて、四肢はますます自由であり、肉付けはよりこまやかで、一步すゝんだ形式であるといへる。

このやうに裝飾的な、また彫刻的な藥方洞の外壁は、北魏諸洞とはなはだちがつた外貌をして、まづ往訪者にふかい印象をあたへるとともに、また隋唐石窟にまつたくみられない外觀を有することが注意される。龍門ではこれとまつたく同じやうにしたものが唐字洞の上の小窟にみいだされる。第六十二圖

「拱門側壁」

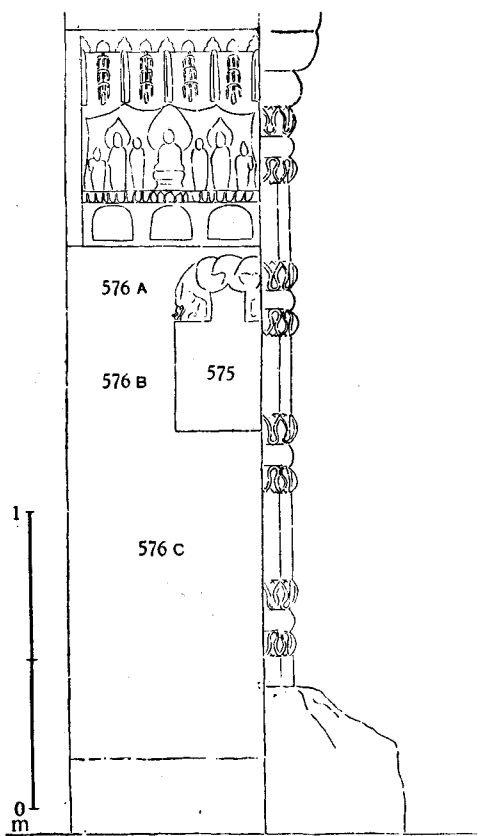
拱門には闕がなく、その間隔は割合にひろい。拱門側壁のはゞは左右とも約六十五センチ。下方二十五センチはあらけづりの壁で、その上約一メートル八十センチにわたつていはゆる藥方の刻文がある。さらにその上、尖拱の下ばに至る間に、左側には高さ六十九センチの七尊坐佛龕があり、右側には高さ四十センチの三尊佛立像龕がある。第七十五圖 七尊龕といつても力士像を内部に入れたのみて、普通の五尊龕と尊像はかはらない。上にみごとに垂飾をもつた天蓋をいたゞき、基壇にはふかい龕窩をもうけ、ひとつには香爐、左右には獅子像をいれてゐる。内部には大きな仰蓮の臺座をつらね、本尊釋迦はその上にさらに重成蓮座のごときものをおいてゐる。みな豐滿な作ゆきで、外部の裝飾と合せて北齊式の像龕とみとめられる。この佛龕の直下、藥方の壁面にひとつの碑形がある。その碑

文錄文五七五によれば都邑師道興が邑人を勸請して、この上に釋迦七尊の龕をつくり、あはせて藥方錄文五七六を刻したものであることがわかり、その末尾には

大齊武平六年歲次乙未六月甲申朔

の年號がある。藥方はこの碑形の横からはじまつて三段になり、下におよんでゐる。しかし、よくみるとなほつぎの二つのことが注意される。

- (1) 外壁の拱門柱を切りだすため、碑形の前方をけづりつつてゐること



第七十五圖 (Fig. 75) 藥方洞拱門左側

6 しかし、これを天龍山北齊の力士像とくらべると、またかなりのちがひがうかがはれる。『天龍山石窟』第六十、六十一圖。

7 外壁の年代はかういふわけで、その中間の年代なる北齊と推定される。しかるに『支那佛教史蹟』第二冊九六頁に、これを永徽顯慶の作とするには、したがひがたい。

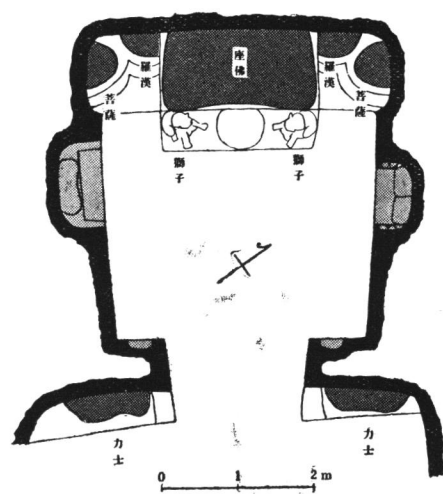
8 石窟外壁の裝飾的なことは北魏時代にはあまり、北齊時代を頂點として、隋唐時代には簡略になる。

9 この龕の寫眞はあまりない。岩田氏撮影のうちたゞ一葉あるのみである。これに比較するべきものは北齊靈山にある武平三年唐邕刻經記(西曆五七二)の佛龕であらう。『靈山石窟』圖版四九その龕の裝飾的なことは並び稱するべきものであらう。

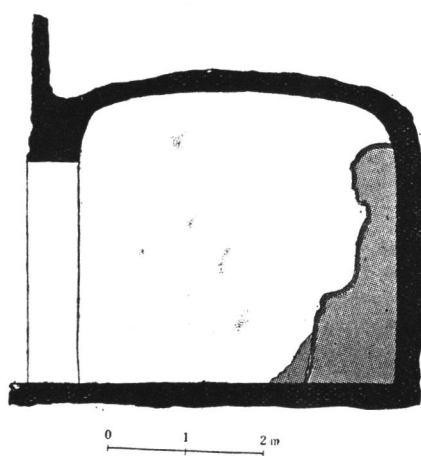
10 藥方(錄文五七六)は、こゝで三段になり、右側にはたゞ一段となり、また前壁左方下部にもこの一部がおよんでゐる。その前後をきめることはむづかしいが、いまはかりに左側上(A)、中(B)、下(C)、前壁左方下段(D)、右側(E)と配列した。

(2) 碑形のある面よりも薬方の刻面は一段とけづり下げられてゐること¹⁰⁾

前者からすると、拱門わきの八角柱をふくむ拱門構築は、當然都邑師道興造像記よりのち、つまり北齊の武平六年^{西曆五七五}以後につくられたことになる。もともと八角柱左右の力士像や上部の碑形、飛天像はこの柱の表面とほぼ面をひとしうしてゐるから、その手法の一致すること、相待つて拱門構築と同時の作とみられる。それにしても、拱門裝飾の各部は力士や飛天像の面貌體軀などとともに、天龍山石窟や響堂山石窟との比較から、北齊の様式であることはうたがひがたいのであつて、この薬方洞の外壁は武平六年^{西曆五七五}以後



第七十六圖 (Fig. 76) 藥方洞平面圖



第七十七圖 (Fig. 77) 藥方洞斷面圖

の北齊時代^{西曆五七五}につくられたものとみるのをまづ至當とする。しかれば、第二の事項は何を意味するかといふに、これははなはだ難解である。しかし、薬方の面を碑形よりひくゝしたことは、どうしても碑形と薬方とが同時の刻でないといふ風に解せられる。¹¹⁾ たゞこの場合にも、道興の造像記は薬方と同時の刻であることはいふまでもないから、つまり無字の碑形がまづあつて、のちに造像記と薬方とがぎざまれたとせざるをえぬ。かうすれば、つぎに外壁拱門柱の工事、ひいては外壁全體の工事であるが、それは果していつのことになるか。

なほこまかく、碑形のところを見ると、なるほど、外壁工事にあつて碑形の左端は削られてゐる。¹²⁾ しかし、その造像記の文章は現存してゐる左端から起つてゐる。もし、普通に碑の左端から文章をはじめてゐたとしたら、當然その冒頭の一部は削りとられてゐると思はれるのに、事實はそのことがない。これはまづ無字の碑形があり、¹³⁾ 外壁工事で削られ、その後この造像記がぎざまれたと解釋するほかないのである。したがつて、薬方も碑形よりは後から追刻されるわけであるから、何かの事情で、その面が削り下げられたと解してもよさうである。かうなると、外壁工事を必ずしも武平六年以後としなければならぬことはない。むしろ、それ以前の北齊時代^{西曆五五〇—五七五}であるとしてもよからう。

かういふわけで、こまかくいへば、なほその營造時代について疑義をのこすが、しかし、どちらにしても、外壁と碑形と薬方とは相接してつくられたものであることはうたがひがたい。

¹⁰⁾ 『支那佛教史蹟』第二冊圖版八六、八七参照。

¹¹⁾ さうかといつて造像記の刻を古く、薬方の刻を新しくすることは、造像記の文から絶対に不可とかがへられる。

¹²⁾ 約三分ほど削られてゐる。それにもかかはらず造像記の文章は完全である。

¹³⁾ 無字の碑は古陽洞、蓮華洞内などにその例が少からずある。

「いはゆる藥方」この第二十洞が藥方洞と一般によばれてゐるのは、門口兩側に刻された藥方^{五七六}文による。これを藥方と稱するのは通稱にしたがつたまで、石刻自身には「治疾方」と明記されてゐるといふ。¹⁴⁾この治疾方は約四十項百二十方あり、純然たる藥方、つまり藥の處方のみでなく、灸法があり、その他の治療法もある。藥方よりむしろ治疾方の名稱が内容にふさはしい。

藥方の文字は都邑師道興の造像記に比較するといくらか大字肉太であるが、一筆と思はれるほどよく似てゐる。また造像記のなかには「自ら璫を傾けて像を建つるに非ざるよりは、焉ぞかの遺光を熾んにすべけんや、もし藥樹を栽うるに勤めずんば、以つてこの聾瞽を療することなけん」といふから、かたがた都邑師道興の意圖はあきらかである。かれはこゝに藥方を刻し、萬人の所用に供せんとしたのである。

藥方を石窟内に刻した例は安陽縣南孫登石窟中にもあつたといふが、龍門藥方洞の例はもつとも古く、また著名である。たゞ石に刻まれたといふ例はなほほかにも數例ある。¹⁶⁾

しかし、これがいかなる藥方かといふことについては、まつたく見當がつかない、たゞ、孫思邈の「千金方」でないことは、すでに王昶のくはしく辯じたところである。¹⁷⁾あるひはこの石刻をつくるにあたり、治疾の療法を適宜に諸書から採録したものかも知れない。もしさうだとすれば、たゞ都邑師道興の「治疾方」といふよりほかないわけである。しかし、もししひて既存の書物にこれを求めれば、灸法その他をいれる點から、また各項の見出しが「療、方」となつてゐる點から、『隋書』經籍志の「雜療方」十三卷、『唐書』經籍志の徐叔和撰「雜療方」二十卷などの遺文ではなからうかとおもはれる。

「平面形」さてかくのごとき造構をもつた北齊の外壁および入口に對して、石窟の内部はどうであらうか。石窟内部は、まづ幅三メートル二八、奥行三メートルの方形で、あまり大きくない洞窟である。^{六圖}入口は東にむいてゐて、幅一メートル九〇。後壁にはひくい寶壇があつて、龕のやうに彫りこまれてゐる。深さ約一メートル餘。本尊は別に高い寶座の上に坐し、前にはごくひくい座があつて獅子と香爐とおく。本尊のわきには二菩薩と二羅漢がそれぞれ獨立した蓮座の上に立つてゐる。



第七十八圖 (Fig. 78) 藥方洞本尊光背

¹⁴⁾この藥方(錄文五七六)の第一行には「都邑師道興造石像記并治疾方」との表題があること、王昶の『金石萃編』卷三五にみえる。しかし、研究所々藏の拓本にはこの一行をみぬ。いまの碑形にも、これぐらゐの一行は、あればみえるだらとおもはれる餘地をのこしてゐるが、どうも文字がありさうにみえぬ。おそらくこの一行は『金石萃編』の錯簡のやうに思はれる。さうすればこの「治疾方」の名もうたがはしいことになる。

¹⁵⁾曹學佺『大明一統名勝志』卷五、「安陽縣南孫登石窟中に小碑をえたり、藥方數十通」といふ。時代不詳。

¹⁶⁾第一は褚澄雜藥方 (『褚氏遺書』序) 唐代以前

第二はいはゆる孫思邈千金方

陝西省耀縣五臺山孫真人祠

(王昶『金石萃編』卷三五)

これは龍門藥方洞の藥方に一致し、存字闕文に至るまで同じであるから、後世龍門の拓をとつて、それから刻し、孫祠のかたはらにおいて、故意か知らずにか、孫真人の千金方に假託したものだらうといふ。おそらく宋以後か。

第三は齒藥方 陝西省華陰縣華山蓮華峰

(葉昌熾『語石』卷五)

第四は陳文忠公刻藥方 廣西省桂州驛舍

(李元綱『厚德錄』卷四、『語石』卷五)

第五は范曼刻療病方書 廣西邕州諸廳舍

(曹學佺『大明一統名勝志』廣西卷八)

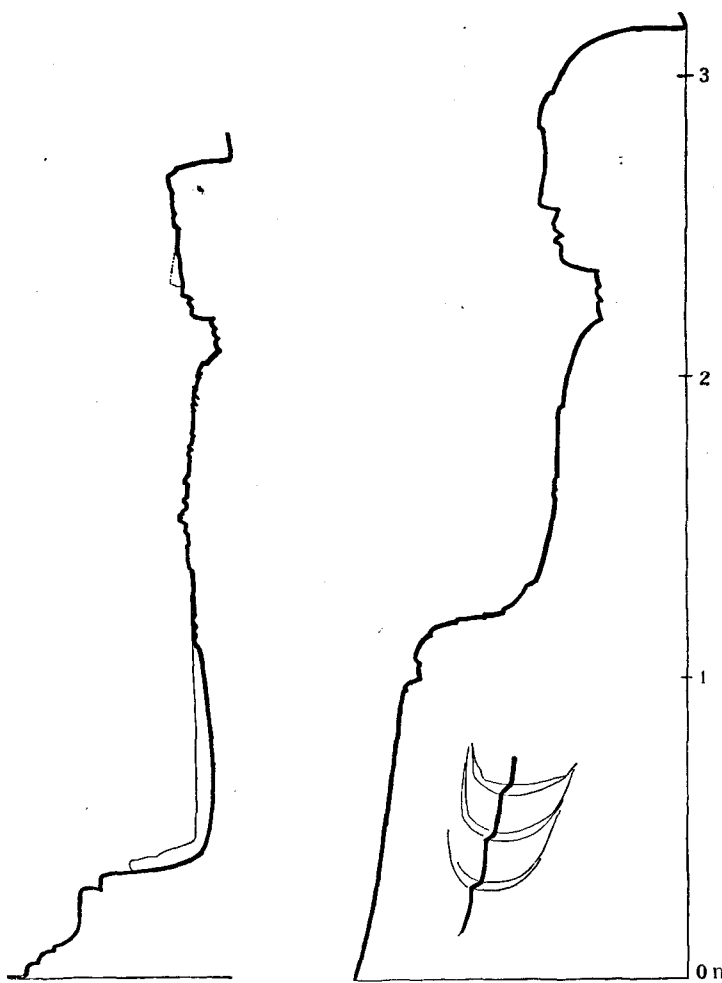
第六は宣和四年呂謂刻養氣方

廣西劉仙巖 (『語石』卷五)

¹⁷⁾『金石萃編』卷三五

左右壁にはおのおの大龕一つづゝを鑿つてゐるが、その大きさは同じでなく、またその位置は、奇妙にも、後壁に偏してゐる。これはこの石窟が、大體において第十四洞および魏字洞と規模相類しながら、ちがつてゐる點である。

天井もいくらか彎曲するが、ほと平らといつてよい。高さは約三メートル八五で、この點も第十四洞、魏字洞と伯仲してゐる。^{第七十}
七圖



第七十九圖 (Fig. 79) 藥方洞後壁本尊脇侍斷面圖

「後壁」正面の本尊坐佛は肥満したからだに、大きくやゝ角張つたまるい面相をしてゐる。^{七二} 頸は太く、三道がある。右手を失ふが、左手は前にだして、掌を下にむけ第三指以下を折つてゐる。衣は通肩で裳は高い臺座に垂れおほうてゐるが、しかし、それは北魏式の垂直の襞でなく、にぶい弧線をかさねたものである。¹⁸⁾ この本尊は脇侍、羅漢ともにまつたく北魏式の様式をしめさず、唐式の圓満さもしめさない。面相が四角張つてゐることや、肩のいかついことによつて、隋式ともいひうるであらう。¹⁹⁾ プロフィールをみてもその鼻、頤がまるく、腹がくぼんでゐないのも、北魏式といへない。^{第七十}
九圖 本尊光背は大きく、彎曲をして天井にまで達し、兩羅漢をつゝんでゐる。^{第八十}
八圖 光背の意匠また北魏式でなく、一段と曲線的な火焰や唐草、小坐佛などを配して華麗であるが、その刻線には北魏式の鋭い速度がなく、丸味があつて、ゆるやかである。

兩端の脇侍菩薩は高さ二メートル四七ある。左右壁の表面をさらに深く彫りこみ、そこに高く彫りだされてゐる。この脇侍の作風は本尊より綿密にみえるが、角ばつた丸顔といかつた肩とは本尊に全く共通である。兩足をどつしりとふみ、その裳の線がおもく垂れさがつてゐることは羅漢像に同じである。しかし、面相やからだつきに、どこかやはらかさのあることは見逃せない。胸や腹、腰に種々の垂飾をたれ、うつくしく飾つてゐる。このやりかたは北齊隋唐式で、いろいろな點を参照にいれると本尊同様隋式といふところが無難らしい。²¹⁾ 光背は寶珠形で、周縁に火焰があり、

18 『支那美術史彫塑篇』(三二頁)は武平六年都邑師道興造釋迦像記をもつて、この窟の本尊にあててゐるが、もとより誤である。同じもかけ座でも、北魏のものは膝からすそまでひとつになり、垂直のひだが流れてゐる。北齊隋唐では膝と臺座との間に段ができ、ひだもおほむね水平にならぶ。

19 衣の形式において特に青州駝山第一、第三洞の隋佛に似てゐる。(O. Siren, *ibid.*, Pl. 334, 338—340)

20 後述するごとく本尊が阿彌陀像と解されるが、この蓮枝上につらなる諸佛は、七體で、やはり過去の七佛をあらはすものであらう。過去七佛をともしめものは形式的には釋迦像であるべきだが、阿彌陀信仰の興隆にあたり、阿彌陀像にもつけやうになつたものとみられる。これに似た、しかしこれよりも嚴正な光背が響堂山第二洞本尊にある。(響堂山石窟圖版六四) これをみただけでも、この方が年代のおくれであることがわかるであらう。

21 身體莊嚴の豊富な點において齊隋どちらにもあてはまる形式(O. Siren, *ibid.*, Pl. 305, 307—316)であるが、その面貌のゆたかさ、肩のはり具合からいふと隋代とおもはれる。しかし、寶陽南洞、寶陽北洞の脇侍とはかなり形式がちがつてゐる。

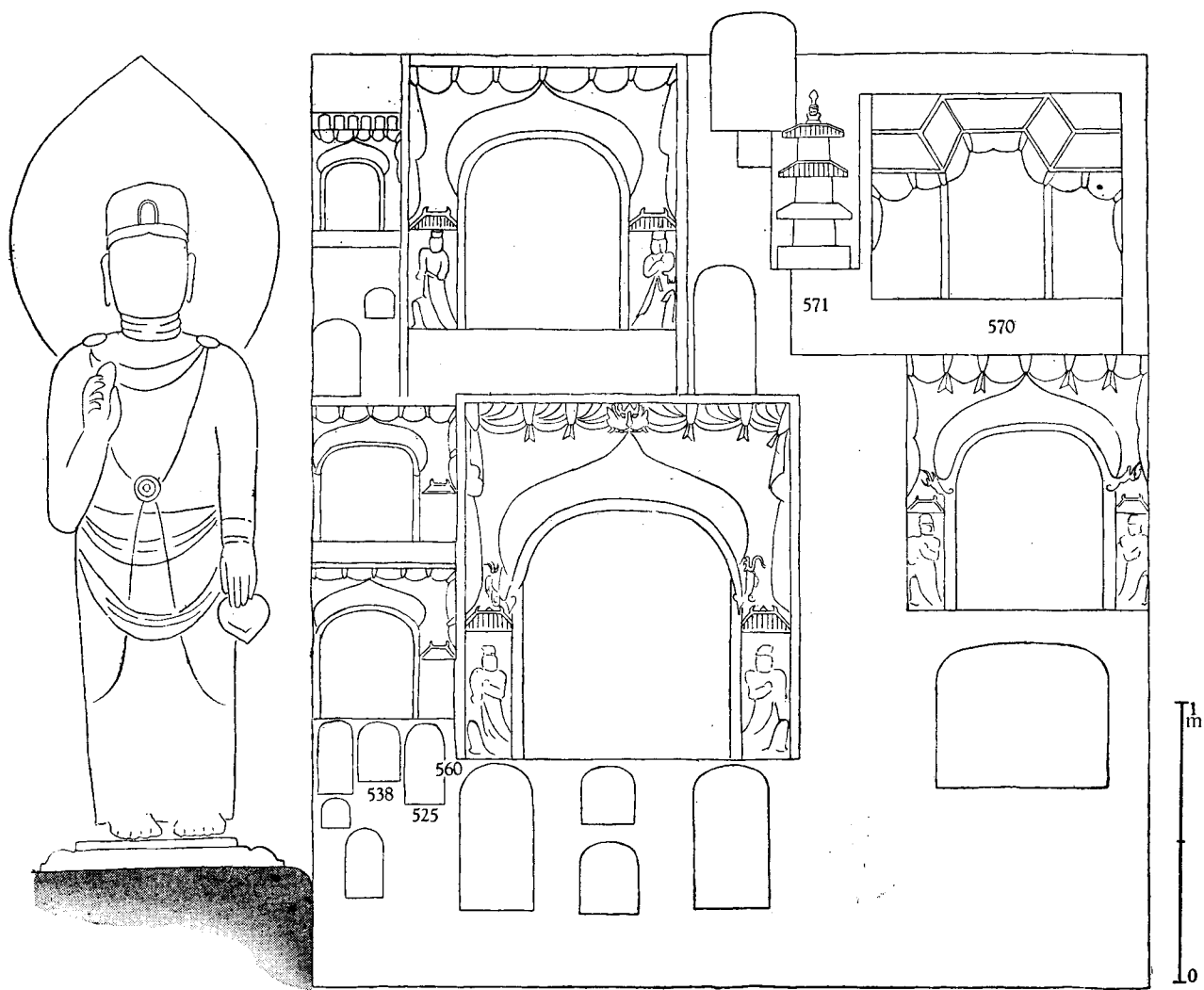
中央に蓮華があり、その中間の一帶には小さい方形と菱形とをいれてゐる。左の菩薩には寶冠中に化佛がみえる。右の菩薩が手に水瓶をもつてゐることと相参照して、觀音と大勢至菩薩とをあらはすものと解せられる。もしさうだとすれば本尊は阿彌陀像であらう。羅漢像の彫法はまた非常によく菩薩像に似てゐる。^七圖版 角ばつた顔、角ばつた肩、ブロックのやうな直立像ははなはだ特色があるといへる。眼をほそくし、兩手を胸のあたりで合掌してゐる。²²⁾

本尊臺座の前には左右に肥大な獅子がうづくまり、まんなかの蓮座の上には香爐があつた。^{七三}圖版 左の獅子と香爐はすでに破壊し去つたが、右の獅子だけはなほ完好である。からだをもかけ座によせかけ、おそろしく齒をむきだし、爪をおこしてゐる。魏字洞左壁大龕の獅子にもつともよく似てゐる。

「左右壁」 さきに述べたごとく、左右壁の大龕は奥壁の方に偏して刻まれてゐるが、左壁と右壁との位置は相稱的でない。²³⁾ 諸佛龕の配置は兩壁ともまったく任意である。

「左壁」 左壁の大龕は高さ一メートル三〇、はゞ一メートル一九。線刻の飛天をうめた尖拱額をつくり、拱端には龍頭を彫る。^{第八}十圖 拱額の上には獸

藥方洞 (第二十洞)



第八十圖 (Fig. 80) 藥方洞左壁圖

²²⁾ 右の羅漢は阿難であらう。左の羅漢はいま頭部を缺くが、塚本、關野兩博士の寫眞にはこれがみられる。それはあきらかに大迦葉である。これは面貌をちがへたのみならず、いかり肩にやゝやせた腕をあらはしてゐる。これもやはり過去七佛をつけたとおなじやうな事情で、こゝにつくられたのであらう。萬佛洞三三頁註(10)參照。

²³⁾ 左壁大龕の中心は後壁寶壇の縁からはかると一メートル一〇、それに對して、右壁大龕の中心は九一センチである。大きさもまたちがつてゐる。

面を中心とする、しぼつた幕を刻し、その間には維摩と文殊の對問像をその扈從者の群像とともに、こまかくきざんでゐる。²⁴⁾ あひかはらず維摩は羽扇をとり帷幕中にあり、文殊は如意をとりよせむねの屋中に對す、すべての手法形式が蓮華洞の壁面佛龕によく似てゐる。内部には二佛並坐をあらはし、その下裳は臺座の上に垂れ下つてゐる。臺座の下部には香爐を中心にして二匹の獅子を浮彫にしてゐる。獅子は腰をおとし前肢のひとつを空にもちあげ、可憐な姿をしてゐる。この大龕の上、く



第八十一圖 (Fig. 81)
藥方洞三層塔形(左壁上層)

ひちがひにやゝ大きな尖拱龕をつくり、また前壁にちかく楣拱龕と尖拱龕とを上下にならべてゐる。奥の尖拱龕はまつたく下の大龕に同じであるが、内部に五尊坐佛をおさめたところは相違してゐる。²⁵⁾ 前方の楣拱龕は模糊としてゐるが、その形式はまつたく普通みる北魏式のものであつて、彫りの非常にあさいことが注意される。基壇には邑師僧道俗卅八人等造龕記とその題名^{録文}五七一とがある。この龕のかたはらには浮彫三重の塔があり、割合に簡素な形式をとめてゐる。²⁶⁾ 第八十一圖

前壁によつた下の尖拱龕も、左壁中心の佛龕によく似てゐるが、なほ左壁奥のはしに、まつたく同様な、しかしいくらか小さい佛龕が上下に三個ある。したがつて、そのつくられた年代も蓮華洞諸佛龕に併行して、北魏の末期をくだらぬものであるが、ふしぎなことにはこの三個の佛龕はすべて右翼をなす力士像の部分をつなつてゐる。²⁷⁾ これはとりもなほさず、後壁の龕形、特に左脇侍菩薩を彫るときに切りとつたことを意味し、後壁諸尊がこれら北魏末の諸佛龕よりあたらしく造建されたことを明證してゐる。そしてその切りとられた年代は、諸尊の形式がしめす隋の時代と考へられる。

なほこれら北魏龕の間には小さい唐代佛龕が不規則につくられてゐる。そのうち紀年のあるものは貞觀廿三年楊君雅造菩薩像記²⁷⁾ 五二五 顯慶四年馬伏陀及妻劉婆造阿彌陀像記²⁸⁾ 五三八 がある。

「右壁」 この壁の大龕をおさむべき區劃は縦一メートル九二、横一メートル八三のほぼ正方形に近く、これが後壁寶壇の縁に接して施されてゐる。²⁸⁾ この區劃は左右に三四センチの幅をとつて力士像をきざみ、のこりの中央一メートル一五を下縁として、高さ一メートル四〇の龕を削りぬく。拱額はその端に獸形をもつ無地の尖拱で、その中央部には細長い唐龕が四個彫られてゐる。²⁹⁾ 拱額の上方には中央に獸面があるが、破損してはつきりしない。獸面の兩側にはしぼつた幕をきざみ、その下の空隙には維摩と文殊の對問像があつたらしい。その形式は全く左壁の北魏龕と

²⁴⁾ 沙畹圖版二二九參照。

²⁵⁾ 楣拱の下に垂幕がある。楣拱額中央梯形部には香爐を中心にした二飛天、菱形部には蓮上の化生、兩翼部にはおのおの坐佛小龕をほる。上の空所に維摩、文殊對問像をつくる。中央は三尊坐佛龕、左右の部分にはおのおの二體の合掌供養者像とその下段に力士像があり、そのうちに獅子像がある。沙畹圖版二三〇參照。

²⁶⁾ 沙畹圖版二三〇をみよ。

²⁷⁾ 一尊の菩薩立像龕である。龕は何の裝飾もない馬蹄形のものである。沙畹圖版二二九。

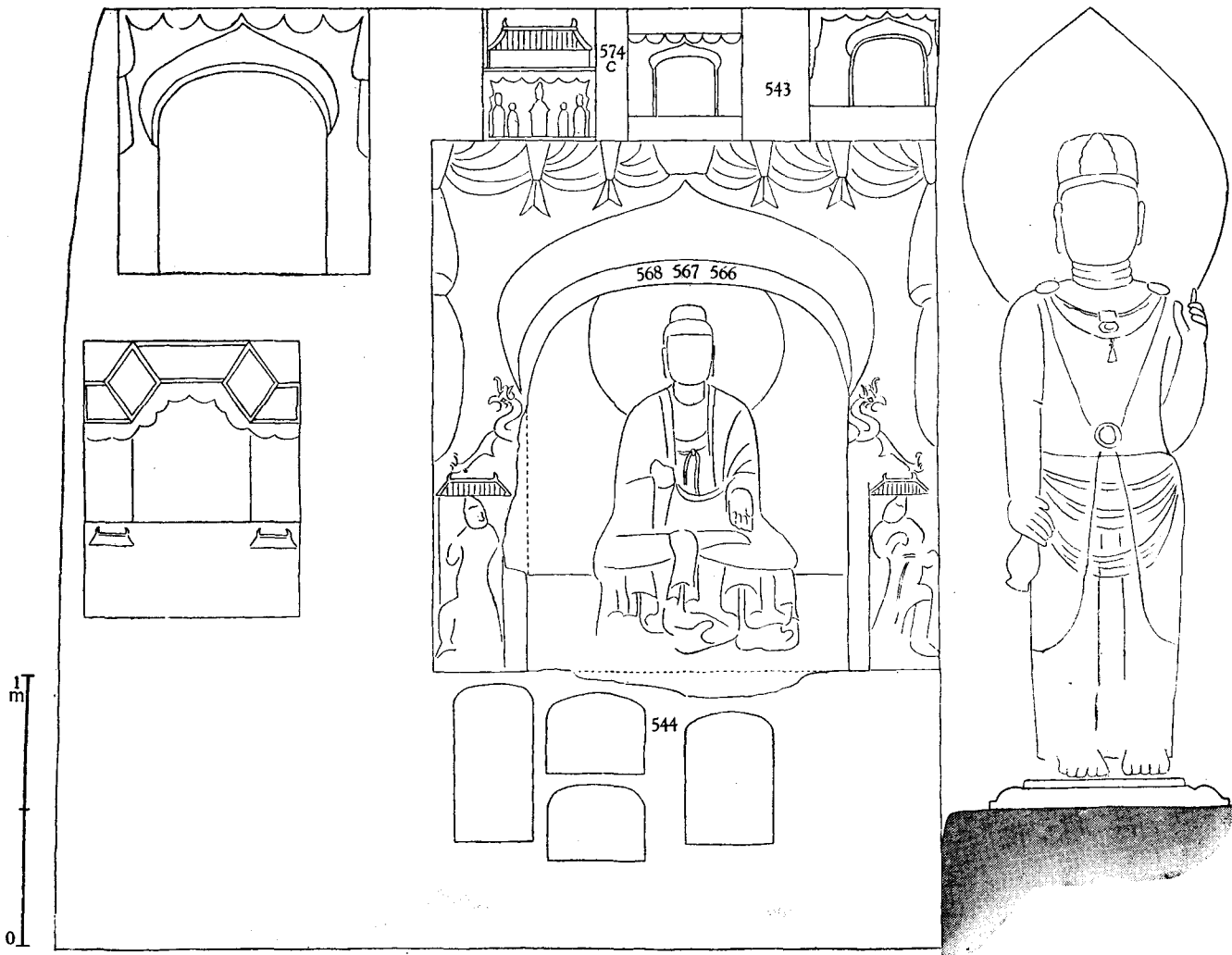
²⁸⁾ 三尊坐佛龕である。前に獅子と香爐とを彫る。龕は無裝飾の馬蹄形龕である。沙畹圖版二二九。

²⁹⁾ いづれも觀音菩薩の立像龕である。造像記は拱梁の上に刻してあつて、つぎの三種である。(第八十二圖)

五六六、王□妻陳氏造觀世音菩薩記
五六七、永徽四年造觀音菩薩記
五六八、爲妻陳母□息□造像記

一致する。このふかい龕の本尊は坐佛で、左右壁の寶壇上に菩薩と羅漢の立像がある。羅漢像は小さいながら、きはめて寫實的な優秀作であつて、菩薩も首を缺いてゐるが、長い天衣をX字形にたれ、すらりと直立した像である。本尊はやゝ面長で頸もいくらか長いが、よくとゝのつてゐる。兩肩にかゝつた衣は胸に流れ、左の手にかゝり、膝がしらから寶壇の上へたれ下つてみごとなまとまりをみせてゐる。^{七四}圖版 衣のひだは大きく、簡明な彫りである。とゝのひすぎでいくらか形式化したきらひがある。^{三〇}光背は無地の寶珠形で、龕の彎曲にそつて頂上にまで上つてゐる。^{三一}龕底に一二唐代の佛龕をみるが、これといふ重要なものもない。

この龕の上には三つの小さい北魏龕があり、右方にも二つの北魏龕がある。^{第八十二圖}それらはまつたく北魏末期の形式をもちこの藥方洞左右壁は北魏末において、すでにほゞ今日にみるがごとき状態であつたことがわかる。上層三龕の右方はめづらしい屋形龕で、よせ棟の屋形と垂幕の間、つまり軒にあたるところに小さい坐佛の列龕があるのはほかに類例をみないと思ふ。^{第八十三圖}尊像は菩薩立像を中心にした五尊形式で、やはり觀音菩薩像であらう。^{三二}上層三龕の中央は垂幕尖拱の三尊



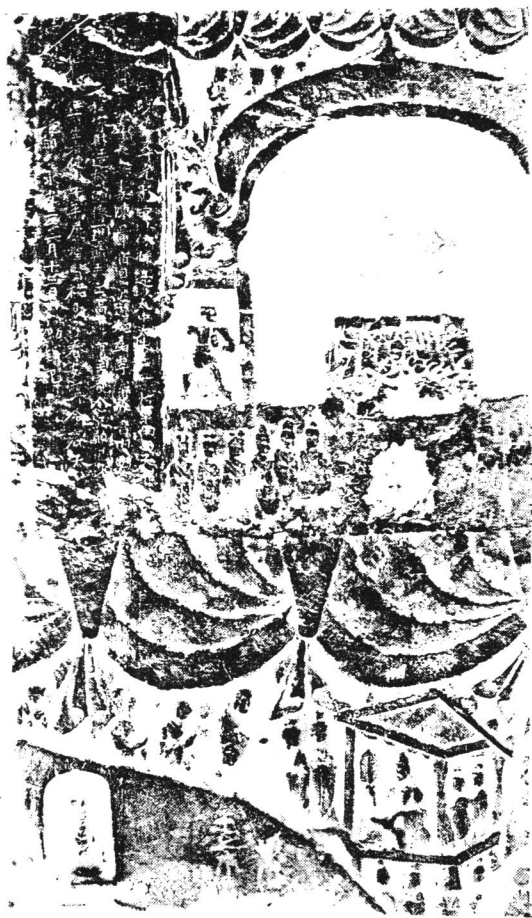
第八十二圖 (Fig. 82) 藥方洞右壁圖

³⁰ この本尊は顔面がひどくあれてゐるし、右手を缺いてゐる。

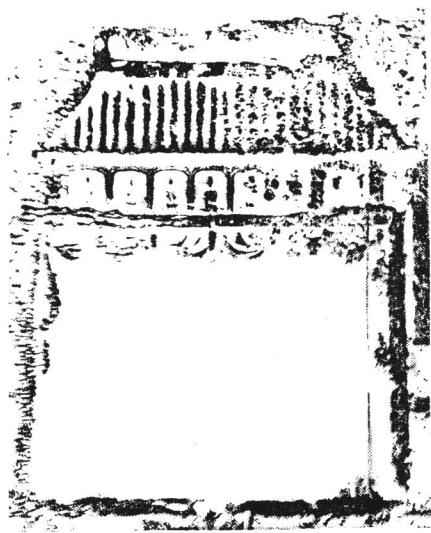
³¹ 光背の下には左右におのおのひとつつゝの唐代佛龕がある。右は三尊坐佛、左は二佛並坐の龕である。

³² この龕の左方には比丘靜造像記（錄文五七四C）がある。しかし、尊像銘がないから、その左右龕いづれをさすか不明である。（第八十二圖）

坐佛龕で左右に力士像がある。左端はやはり垂幕尖拱の五尊坐佛龕で、そのとくに力士像、下に供養者列像がある。^{第八十圖}これにはその左方に永安三年^{西曆五二九}の李長壽妻陳氏の造像記録^{五四三}文^{三三}があつて、その造建年代を知ることができるのであるが、ふしぎなことにはこれも左端の力士像のところが缺けてゐる。^{第八十圖}このことは正しく左壁の右端佛龕の場合と事情が一致する。つまり北魏末においては左右ともなほ奥へもう少しひろがつてゐたのである。それがいつの世にか後壁諸尊の造建にあたつ



第八十四圖 (Fig. 84)
藥方洞右壁上層龕(永安三年李長壽妻陳氏佛龕)



第八十三圖 (Fig. 83)
藥方洞右壁上層屋形龕

て、けづりとられたとみられる。

右壁にもこれら北魏龕の間に、小さい唐龕がひらかれてゐる。そのうち大龕下方の四龕はやゝ大きく、そのひとつには□惠造彌陀像記録^{五四四}文^{三四}がある。^{三四}

「前壁と天井」入口兩側の薄暗い場所には、縦に小龕がならんでゐる。左壁にちかい方には北魏の年號をもつた造像記が二つ見られる。すなはち、この部分は床に接して、

拱門側壁の藥方がつき、その上に普泰二年清信士路僧妙造釋迦像記録^{五二二}文^{三五}と、永熙三年清信女孫姬造釋迦像記録^{五二三}文^{三五}とが刻まれてゐる。^{三五}

拱門上方には三尊菩薩立像の小龕を横に五つならべ、その上中央から天井にかけて、二佛並坐の塔形龕をあらはしてゐる。^{七四圖版}めづらしい圓屋根單層の塔形で、上に三つの相輪がみえ、基壇中央に階段がある。まったく類例のない形式であるが、その佛の豐滿な面相姿勢や、そのまる味をおびた彫法などが外壁の彫り方とすこぶる一致してゐるから、そのつくられた年代もほゞ推定できよう。この刹柱の頂は天井中央の蓮華に接し、その蓮華をとりまいて數體の樂天がある。これらも彫り方からかんがへて、上述の塔形龕と同時の造營であることがひない。

³³ かく左右壁のうちはがけづりとられ、佛龕の一部が破損を被つてゐるのに、右壁大龕が左端いづまいのこつてゐるといふのは、これを基準に以後壁擴張の設計がおこなはれたためであらう。

³⁴ 沙畹圖版二三一參照。この造像記はどの佛龕に對するものかあきらかでない。右手に五尊坐佛龕がみえるのは、それかも知れない。まつたく、おなじやうな龕が、その下にもある。この造像記の下には、方形のなかに浮彫で可憐な供養者像がほつてゐる。先頭の婦人は坐して栴檀爐をもち、つぎの婦人も蓮枝のやうなものをもつてゐる。そのあひだ、そのあとに子供の立像がみえる。

この下にまた別に婦人の供養者像がある。やゝ大きく、蓮枝をもち、坐つてゐる。この左方に柳枝をもつた觀音菩薩の立像が鮮明に彫つてゐる。もちろん唐代の龕である。また右手の供養者像に對稱して、なほ左手に合掌の供養者像がある。

³⁵ 支那佛教史蹟第二冊九六頁による。

³⁶ もちろんこれは立體的にすれば五本の刹柱になる。これに似た形式のものは雲岡にかなりあるが、こまかくいへばみなちがつてをり、殊にこのやうなまる味をおびたばかりのもののはまつたかない。

「石窟造營」われわれはこゝに至つて、この複雑な洞窟について最後の結末をつけたいと思ふ。

まづこの石窟の大體の規模が、北魏末永安三年^{西曆五二九}頃にはじまつて、北魏の最後^{西曆五三三}に至る數年間にできあがつたものであることは、前壁、左右壁の北魏龕からうたがふことはできぬ。その點は趙客師洞、唐字洞に同じである。このとき後壁本尊はどうなつてゐたか、そのことはわからない。しかし、その前の獅子や香爐はすでにでき上つてゐたらしい。北齊の時代になつて道興の藥方がきざまれるやうになつて、外壁や天井の造築がおこなはれた。このときに至つて、本尊はどうであつたか。それもよくわからない。けれども外壁や天井にこれだけの造築がおこなはれたからには、やはりまがりなりにも何か本尊らしいものがあつたことであらう。だが、それが不充分なものであつたことは、つぎの隋頃に至つて、これを改築する必要を感じたことによつてわかると思ふ。とにかく、隋頃になつて、左右壁の一部をきりおとし、賓陽北洞や賓陽南洞のやうにふかく龕をきりこんで、五體の本尊をきざんだのである。第十四洞、魏字洞に比し、後壁寶壇のひくいことも、まさしく、あとからの改作を暗示してゐるやうに思ふ。

これでほゞ今日にみる藥方洞ができ上つたわけであるが、小さい佛龕はなほ唐代にも洞の内外にわたつてつくられた。いま藥方洞と稱せられる造像記には貞觀二十三年をはじめとして、永徽、顯慶のもの二十數種あり、龍朔、麟德から則天時代に至つては減少してゐる。³⁷⁾ また洞外北面南壁の細長い七層塔形も注意される。

古陽洞〔第二十一洞〕

——圖版七五—七九——

龍門西山における主な石窟のうち、もつとも南のはしに位するものが、この古陽洞である。俗に老君洞ともいふ。伊水の河ぶちから、やゝ高く、やゝ奥まつて位置してゐる。入口には後世つくりたした塼築の前壁があつて、なかはうす暗い。天井までの高さほゞ十一メートルあり、幅は入口のところ六メートル弱。天井は圓天井をなしてをり、間口の割合に丈のたかい石窟である。

この千年の塵埃にまみれたうす暗い石窟は、今日龍門二十品¹⁾と稱する拓本を製造する工場となつてゐる。われわれが訪れたときも、十人ほどの男たちが、床から天井まで數段にかけわたした簡單な丸太の上で、カンカンと耳を聳するばかり石ずりの音をひゞかせてゐた。十メートルにあまる天井にちかく、枝にとまつた鳥のやうなかつかうで拓を

³⁷⁾ 藥方洞唐代造像記はつぎのごとくである。

貞觀二十三年一種（錄文五二五）

永徽元年一種（五二六）

永徽二年三種（五二七、五二八、五六九）

永徽三年二種（五二九、五三〇）

永徽四年四種（五三一、五三三、五六二、五六七等）

永徽五年一種（五三二）

永徽六年一種、永徽〇年一種（五三四）

顯慶元年二種（五四八、五三六）

顯慶二年二種（五三五）

顯慶四年一種（五三七、五三八）

顯慶〇年二種（五四一、五四五）

龍朔二年二種、麟德元年一種（五三九）

調露二年一種

垂拱三年一種（五四〇）

景龍四年一種（八九七）

このうち、五二七、五二九、五三〇、五三一の四種は外壁右方にある。外壁はおほむね唐代の佛龕であるが、北魏の佛龕もある。

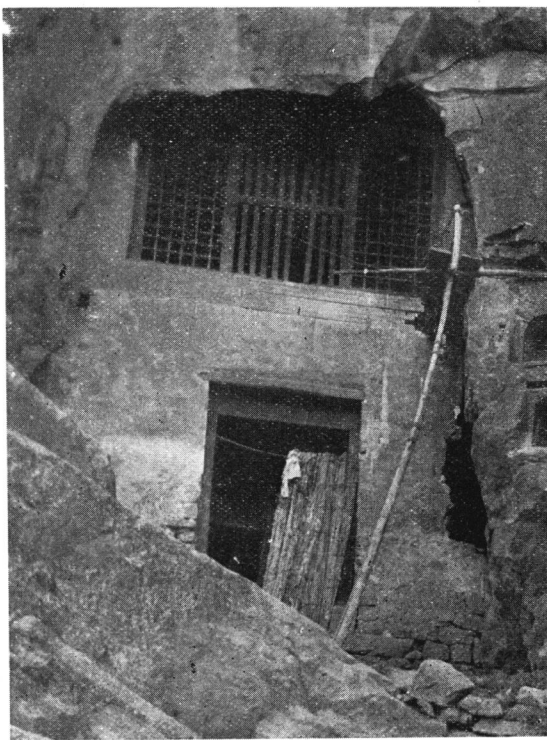
¹⁾ 龍門二十品のことはずでに序説註⁽⁹⁾に

いてのべたが、このほか、龍門五十品、あるひは龍門續拓二百五十品といふものがある。それは洛陽縣知事曾炳章のえらぶところであるといふ。いづれも魏齊の刻で、唐刻をふくまないものである。（顧燮光『石言』卷二、許同華『崇洛遊記』參照）。古陽洞の壁面には別に龍門十品をえらんだといふ刻（同治九年）や、拓して千五百種をえたといふ記事（光緒庚寅）がみえる。

とつてゐる拓工たちはすりあげた拓本をぬれたまゝ、一枚一枚、上からおとしてゐた。ぬれた重い紙はばさりと音をたて、まつすぐに落ちてくる——途中で丸太にひきかゝつてゐるものもある。下にはそれを悠々とひろつて二十種一組の商品にしあげる男がゐる。トントンと墨壺をつゝいて、墨をつぶしてゐる男がゐる。ピストルを腰につけた用心棒がゐる。隅にはうすいよごれた蒲團とアンペラがまいてあつて、炊事の鍋が湯氣をたてゝゐる。洛陽からついできた巡査が、この窟へは一人ではいるな、はいるときにはおともをしますといつて、左手の拇指をだして注意した²⁾。

これが、今日の古陽洞の姿であつた。

しかし、この落莫たる佛洞のなかは、その全空間が輝きわたるほどの美術作品に溢れてゐることを、いくたりの人が注意したことであらう。それは塵にまみれ、打ちかゝれ、拓本の墨でよごれながら、なほ一寸の壁面、一分の凹凸にも、そのかつて魂を傾倒せられた線と面との世界があらはされてゐるのである。本尊のある後壁から、その臺座から、左右壁の床から、その天井の頂點に至るまで、北魏人の燃えさかつた信仰の火は藝術する腕につたはり、眼におよんで、一寸の壁をも空虚に残すことなく、壓倒的に全空間を造形世界につくりかへたのである。それはあたかも一分のすきもなく鏤刻された容器に似てゐる。われわれは、この美術の寶庫から、ごくわづかしな寫眞をとることができず、ごくわづかしな拓本をつくることのできなかつた。この洞の傑出した美術製作はおびただしい數にのぼる釋迦、彌勒の造像のみにとゞまらず、一本の唐草、一個の華繩ガランドにもおよんでゐる。おなじ天然が生んだ岩壁からなりたつてゐながら、それがいかに多くのかたさ、やはらかさ、つよさ、やさしさ、とゝのひを示すかはことばで到底いふことができない。われわれは、せまい觀察ながら、ゆるされるかぎりいろいろの點を述べてみようと思ふ。



第八十五圖 (Fig. 85) 古陽洞外壁

「構造」 奥行十三メートル、幅六メートル七五、やゝながい馬蹄形である。入口が開放されたまゝのこされてゐることは蓮華洞に同じである。しかし、蓮華洞のやうな拱額は外壁にみつからぬ。^{第十八五圖} 外壁については何の加飾もないやうであるが、すこしうちに入つたところに、現在は土壁をもうけ、上に格子入りの明窓をつくつてゐる。³⁾

²⁾ 龍門あたりの人氣のわるいことは、われわれにも充分感ぜられたが、崔盈科その他の旅行記をみればそのだいたいがうかがはれる。本書五頁註(23)参照。

³⁾ この現在の土壁および明窓の造構は全く北魏の古陽洞に關係のないものである。第八十六圖の平面圖でもわかるやうに、それは左右壁の一龕を無鐵砲にふさいでもうけられてゐる。

後壁には二段の丈たかい寶壇がある。^{第六十圖} 手前のものは現高七五センチ、奥行一メートル七〇で、左右に一對の獅子を彫りだす。つぎはさらに二メートル九〇のたかさがあり、一メートル九〇のふかさがあ

る。左右に菩薩の立像があり、中央に本尊の坐佛がある。本尊臺座はなほ一メートル三〇の高さがあり、幅は四メートルである。

左右壁はたゞ列龕がならび、天井はそのまゝ穹隆頂になつてゐる。^{第七十圖} 床はなほかなり土をかぶつてゐるのであるが、それでも天井までは十一メートルを越えてゐる。これに對し、幅はわづかに七メートルにたりぬのであるから、

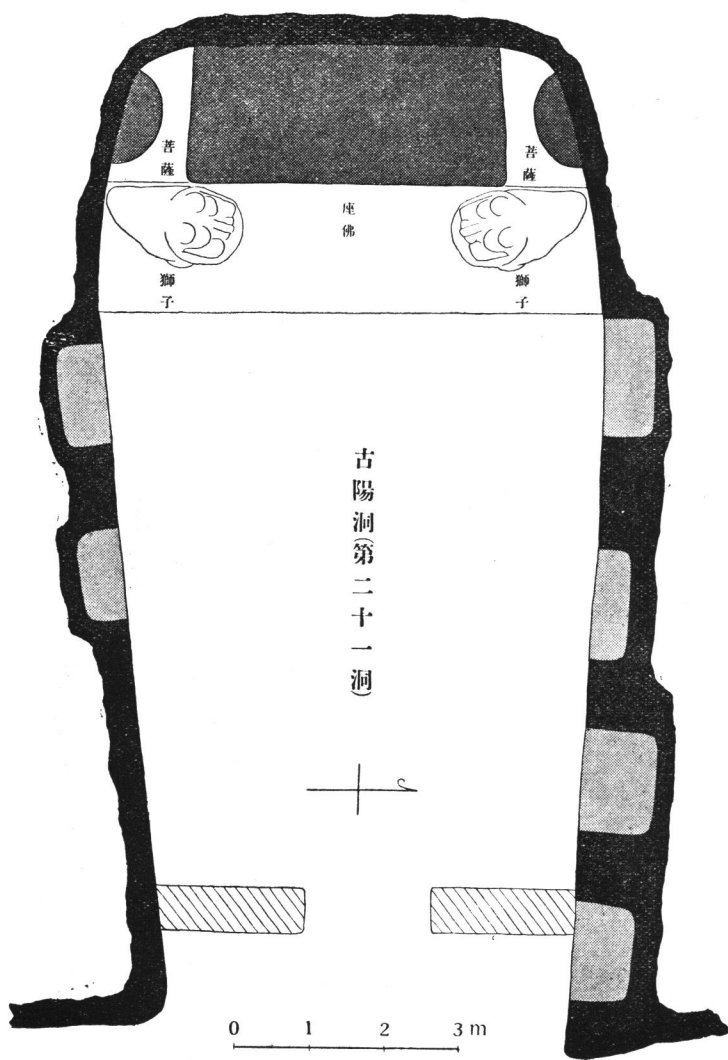
兩壁はせまり、天井はそゝりたつた感がふかい。

〔後壁〕 後壁には前述のやうに二段の寶壇があり、獅子像も高く、三尊像もみあげるほどの高さに拜せられる。

本尊は面相のみならず、體軀にもすべて俗惡な粉飾がくはへられ、しかもいまは道教にいふ老君の名で尊崇されてゐるのである。⁵⁾ しかし、その全體を注意してみると、ほゞ北魏佛の形式をつたへてゐるといふことができる。細おもての、割合にしつかりした顔つき、ことに鼻、口、耳のあたり、そして肩から肱にかけてほつそりした輪郭、それから坐つた膝と臺座との關係、ことに左端一帯のひだはよくもとの形を保存してゐる。それで表面の粉飾をはなれて考へると、ほゞむかしのすがたが推測でき、かなり優秀な作であつたことがわかる。⁶⁾ 手はかなり修理されてゐるが、前でかさねたいはゞ定印の手は原形をつたへてゐるものと思ふ。⁷⁾

光背は舉身光で、龕底全部をおほひ、たかく窟頂にのびあがつてゐる。彫りは細緻をきはめ、中央の圓光はあさい彫りの蓮瓣、つぎはこまかい坐佛の列像帶、そのそと舉身光の内

部もまた坐佛の列像帶、それは上方では一條であるが、左右では三條におよんでゐる、外區は細緻な火焰で



第八十六圖 (Fig. 86) 古陽洞平面圖

4 床はかなり埋没してゐるから、この高さはほんたうのものでない。ほんたうの床をだせば、この洞はより高いものに感ずるであらう。

5 このためにこの石窟は老君洞といはれてゐる。

6 さらに左壁第三層第一龕本尊と比較すれば、なほさら當初の姿を髣髴することができよう。

7 面貌は脇侍菩薩によく似たものであつたらしい。それでも本尊には大きな破損がある。ことに臺座中央部から寶壇にかけては大破損があるらしく、これにつゞく右の獅子はまったく消滅してゐる。

焰のさがながく、こまかく波動してゐる。賓陽洞の光背にくらべると、裝飾の要素が單純で細工がこまかい。⁸⁾

脇侍菩薩

右脇侍は顔のまんなか破損してゐるため、左脇侍の完好ななおよばない。

左脇侍菩薩は左壁の延長上にあつて、本尊の方をむいて立つてゐる。⁷⁾ 圖版 七

には圓い複瓣の蓮座⁹⁾があつて、それは二つ目の寶壇の上にある。頭にはひくい冠をいたゞいてゐるが、兩側にある花形は大きく、これをむすんだ紐のあまりは、

うしろの壁に折れかへつてうすく表現されてゐる。やゝ細おもてだが、ゆたかな

面相をなし、眼鼻たちに氣品がある。耳はながく、頸はのび、そこには一條のす

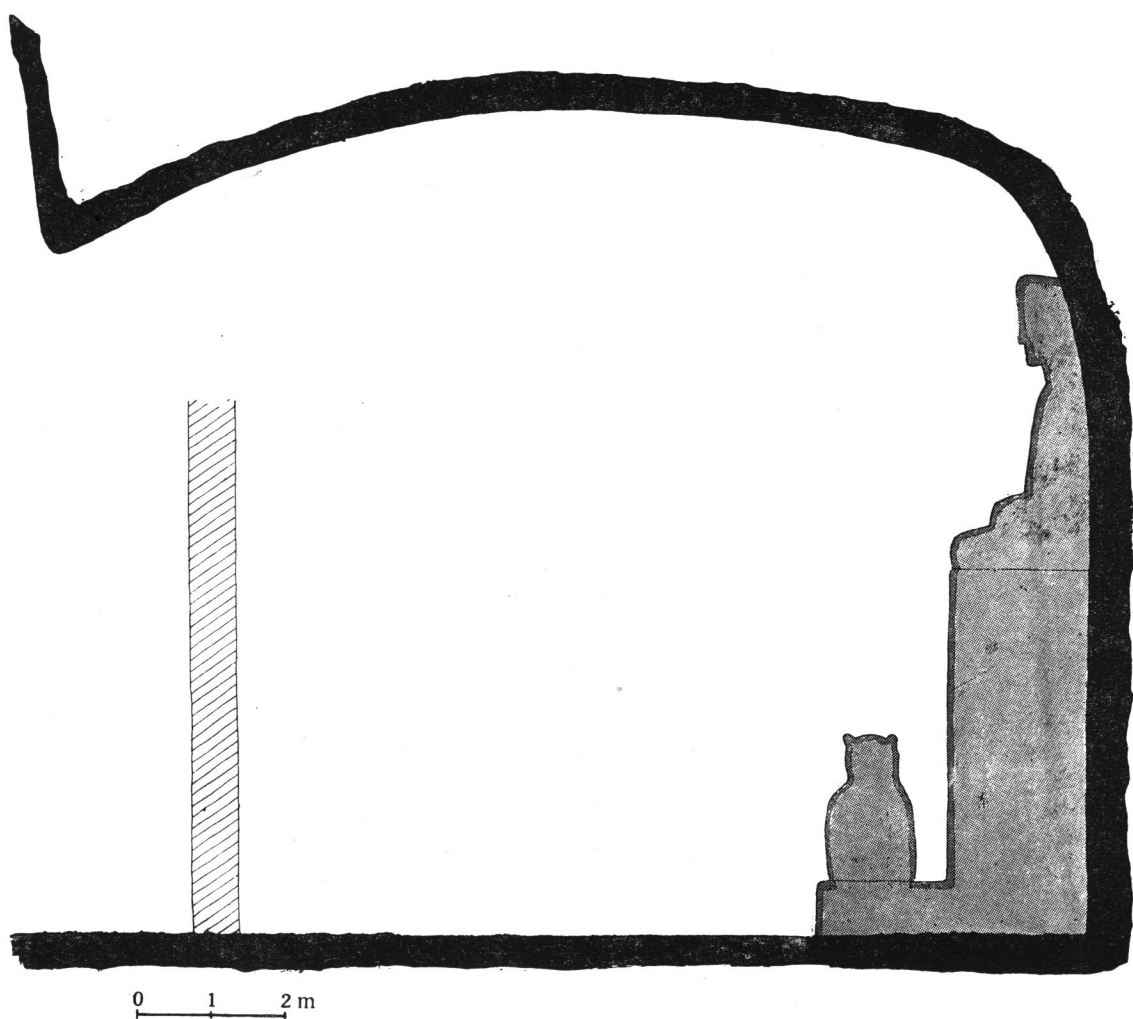
ぢがある。胸はやゝうすく、腹がはり、その腹を中心にして瓔珞と天衣とがX字

形にまじはつてゐる。天衣の上端は鰭のやうに兩肩でひるがへり、こゝになだら

かな肩とゆたかな上膊の肉つきとが、しづかに呼吸をしてゐる。天衣の下端はかるく左の腕にかゝり、すこしかゝめた手にそつて波形をして下へながれる。下裳はきちんとした襞をあらはし、左右相稱的に下垂し、うつくしい。しか

し、平面的な波文の裾をつくり、やはり鰭のやうにとがつた先端を左右へのばしてゐる。腹にあげた右の手はいま破

損し、たれた左の手には寶瓶がもたれてゐる。¹⁰⁾ 光背はやゝ長手の寶珠形である。中央にこまかい蓮華文、つぎに纖細な飛天帶、そとは火焰のふち、やりかたは本尊光背に同じく、それと調和して、後壁の彎曲した壁面いつぱいにひろ



第八十七圖 (Fig. 87) 古陽洞斷面圖

⁸⁾ 龍門石窟寫真四八。『支那佛教史蹟』第二冊圖版八八。

⁹⁾ それは『龍門石窟寫真四八』などにわづかにみえてゐるが、かなりしつかりした蓮瓣で、雲岡石窟の蓮瓣をおもはすものがある。

¹⁰⁾ 山本氏、岩田氏の寫真にはなほ完全に見える、その手には未だの蓮華をもつてゐる。『龍門石窟寫真四八』。

¹¹⁾ 寶瓶は佛像によくみるやうに、長い頸で丸い胴、それに大きな口と圈足とがついてゐる。その頸と胴との直角的なつながりぐあひが、はなはだ素樸にみえる。

がつてゐる。

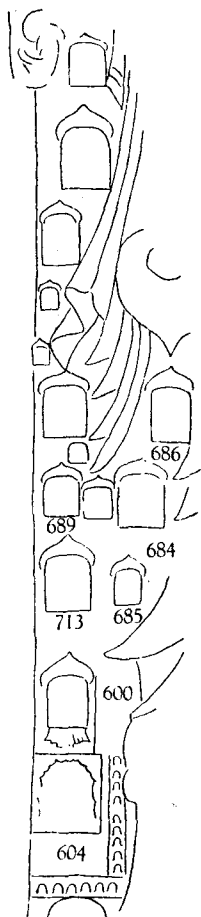
後壁にももちろん多數の追刻された小佛龕がある。ほとんどみな北魏龕であつて、光背のあひだから、菩薩の天衣のあひだ、あるひは寶壇の側面におよんでゐる。左脇侍の上には屋形龕があるが、それは繊細なつくりで注意される。圖版やねはよせ棟、軒下の斗拱と叉手はきやしやで、柱もほそい。めづらしいのは斗拱のまんなから雲斗木のやうなものを軒下へつきだしたとこと、垂幕の上に飛天を彫つたこととである。うちの佛像もかはつてゐて、三尊形式の交脚菩薩像三組をおさめてゐる。佛像はほそづくりで、きやしやな屋形づくりに一致し、基壇の僧形、俗形、力士形の薄彫も細緻にして輕妙である。¹³⁾

これに對する右方のほゞ同じ位置にある屋形龕は入母屋づくりの三尊坐佛龕である。斗拱や柱はきやしや、佛像もほそづくりで、左方の屋形龕によく似てゐる。この基壇の中央には造像記があつて、正始四年^{西曆五〇七}安定王元燮のつくつた釋迦像であることがわかる。

左方屋形龕の上には正始元年比丘道仙の像龕^{目錄西曆五〇四}があつて、それは後壁におけるもつとも古い佛龕である。左脇侍衣端の鰭の間には正始三年^{西曆五〇六}孫大光の釋迦像龕^{文九七}があり、右脇侍の鰭の間には正始四年、永平元年^{西曆五〇八}の像龕^{文六〇}があり、^{第八十圖}本尊の左脇には永平四年の彌勒像記^{錄文六一三}がある。つまり後壁には正始元年より永平四年に至る八年間^{西曆五〇四—五〇一}の紀年像がわかつてゐるから、この本尊三體は景明末年、もしくは正始初年の造建といふことになり、したがつてまた、本尊のできたときをもつて、この石窟の完成とみるならば、この石窟の成立はほゞ正始初年といふことになるであらう。

獅子像

獅子のあるところは三尊の寶壇より一段ひくい。賓陽洞でも、魏字洞でも、藥方洞でも、みな本尊もかけ座のわきにあつた。しかし、こゝではもかけ座のすそより、なほひくいところにある。いま右の獅子をうしなつてゐるが、左の獅子は丸彫で、ずんぐりと太く、頭も大きい。^{圖版七五}そのたくましい上顎と下顎とをかすかにひらき、小さい牙をみせ、わづかに舌をたれてゐる。胸の鬚は翼のやうに左右から上へとのへられてゐる。前脚をはり、腰をすゑ、賓陽洞内の腰をうかした獅子像とちがひ、マツシーヴな點において、はるかに古式をおびてゐる。がしかし、どうしたことか、脚から腰にかけて下半部はあらけづ



第八十八圖 (Fig. 88)
古陽洞後壁一部
龕配置圖

¹²⁾ この力士形は蓮華洞右壁下層第二龕のそれに一致する。

¹³⁾ 基壇中央には造像記を刻する方形の部分があるが、いかなる刻字があるかまじらからでない。

¹⁴⁾ 錄文五九九。大中太夫安定王元燮は『魏書』卷一九にその傳がある。世宗初、安定王となり、太中大夫を拜し、征虜將軍華州刺史に除せらるゝとあるが、こゝには華州刺史の名はみえぬ。なほ古陽洞左壁第二層第二龕も安定王燮の造建であるが、この記(錄文六一九)には永平四年十月十六日(西曆五一二)とあり、征虜將軍華州刺史の名がみえる。正始四年(西曆五〇七)を去る五年目である。すこしおくれでこれらの官についたのであらう。双方の造像記に亡祖、親太妃、亡孝、太傅靜王、亡妣將妃等のために造像したといふことがみえる。亡孝は安定王休で、太傅となり、死して靖王の諡號を賜つたことが、同じく卷一九にある。亡祖は景穆皇帝晃であり、親太妃は景穆帝の椒房孟氏を指すものである。

圖示すれば

椒房孟氏——安定王燮——安定王超
太武帝壽——安定靖王休
景穆皇帝晃
賀夫人——文成帝壽——獻文帝弘——孝文帝宏
皇后郁久闕氏

なほ古陽洞中には安定王が女嬀閼散騎の冥福を祈つてつくつた觀音二體龕がある(錄文七〇〇)。安定王燮とすれば延昌四年(五一五)に薨じてゐるからそれ以前のものであることがわかる。

¹⁵⁾ もちろんこれはわれわれの知りえただけの造像記である。なほくはしく現地でしらべたならば、もつとたくさんあることとおもふ。

りの鑿あとがいちじるしく、完成されてゐないことをものがたつてゐる。

この左獅子の背後、寶壇の壁面には正始五年^{西曆五〇八}、永平三、四年^{西曆五一〇—五一四}、延昌三年^{西曆五一四}、神龜二年^{西曆五一九}等の像龕¹⁵⁾があり、左壁の延長には永平三、四年^{西曆五一〇—五一四}の像龕があり、獅子像の刻が正始中にあつたことが考へられる。右獅子像の背後、右壁の延長にあたる部分には延昌二年の像龕^{録文六二四}がある。

總じてこの獅子像の背後にあたる左右壁延長の部分は、それだけで縦長の一區劃をなしてゐる。これは獅子像の背景といふことから、後壁の一部と解されてもしかるべきものである。これを上までみるとなほ正始二—五年^{西曆五〇八—五一四}、永平二—四年^{西曆五一〇—五一四}、延昌二、三年^{西曆五一四—五一五}、熙平二年^{西曆五一七}の像龕が開鑿されてゐることを知るのであつて、この部分は上から下へと造龕が進行したものらしい。¹⁶⁾

「左右側壁」 左右の側壁には、入口から左右脇侍光背の上に至るまで、ぎつしりと大小の龕形が開鑿されてゐる。それは床に接するところから、ドーム形の天井にまでおよんでをり、他の洞のごとく左右壁と天井との區別がない。¹⁷⁾ここでは、天井のドームはまつたく左右壁の延長である。

しかし、かゝる雜然たるなかにもある統一が存してゐる。すなはち、左右獅子の段から奥の部分を除いてみると、左右壁ともに床から數へて、第一層、第二層、第三層、上層の四層を、あきらかに區別することができる。¹⁸⁾

第九十五圖
第九十六圖

その各層については、左右壁ともこまかい點をのぞけば、大體同様の作風を示すのであつて、あきらかにこの各層は左右を通じて統一的な企をなしたことが知られる。つまり、第一、第二、第三各層は左壁右壁とも同式なる大形龕形を數個づゝならべてつくるから、きはめて建築的構成的な美觀を呈してゐる。左壁は第一、第二、第三各層ともに四個づつの大龕をならべ、右壁の第二、第三層は左壁と同じく四個づゝ大龕をならべるが、第一層は奥から二個だけつくつて、入口に近い個所を雜多な小龕でうめてゐる。しかるに、上層は千佛龕を主として、そのあひだに多くの小形龕を不規則な配列法をもつて、ドームの頂點に至るまで、ほとんど隙間なしにぎざんでゐる。したがつて構造上からみれば、第一、第二、第三層と、それより上にある上層とは別々に考察するのが便利であらう。¹⁹⁾

【左壁（北壁）】

第一層

並列してゐる四大龕は大體幅一メートル五〇内外であつて、それが一メートル内外の間隔を置いてならんでゐる。

¹⁵⁾ このあたりは小さいながらに手法が一致してゐる。隅の方が不規則に切りとられたまゝになつてゐるのは、この部分が小龕造刻とともに切りひらかれたやうに見える。獅子像の基部の未完成とともに、この洞の造窟經過をものがたるやうである。

¹⁶⁾ 紀銘佛龕の配置については一〇六、一〇七頁のあひだに挿入した別表第一を参照されたい。

¹⁷⁾ 第十四洞、魏字洞のごとく天井と側壁が別の面になつてゐるのは大いにちがふ。寶陽洞、蓮華洞のドームになつてゐるのはほゞ同じだが、それでもそれらのごとく蓮華とか飛天などの天井特有の裝飾方式といふものがない。またその上寶陽洞のごとく天蓋で仕切られたのもちがふ。

¹⁸⁾ 第九十五、第九十六圖左右壁面圖の作製は、短時日のわれわれの調査旅行ではもちろん不可能なことであつた。それで、われわれの手にいるかぎりの圖録や寫眞によつて組み立てたもので、上層部や天井部、さらに入口の轉壁内外の部分は不完全であるが、いまのところやむをえない。これに別表第一の紀銘佛龕分布表を参照され、古陽洞壁面のだいたいは推察できようとおもふ。

¹⁹⁾ 龕は下からかぞへて第一層、第二層といひ、奥からかぞへて第一龕、第二龕といふ。たとへば第一層第一龕、第二層第二龕とよぶ。沙畹圖版二三—三三、三八は左壁第一層、二二—二四、二五は第二層、二四—二八は第三層、また二四—二五、二六—二八は第三層と系統的に圖版にしてゐるから、それぞれその圖版を参照されたい。

第八十九圖 古陽洞坐佛龕（左壁第三層第一龕）



（塚本博士撮）

(Fig. 89)



比丘道匠造像六區記(六八一)

步舉郎張元祖造像記(五七八)

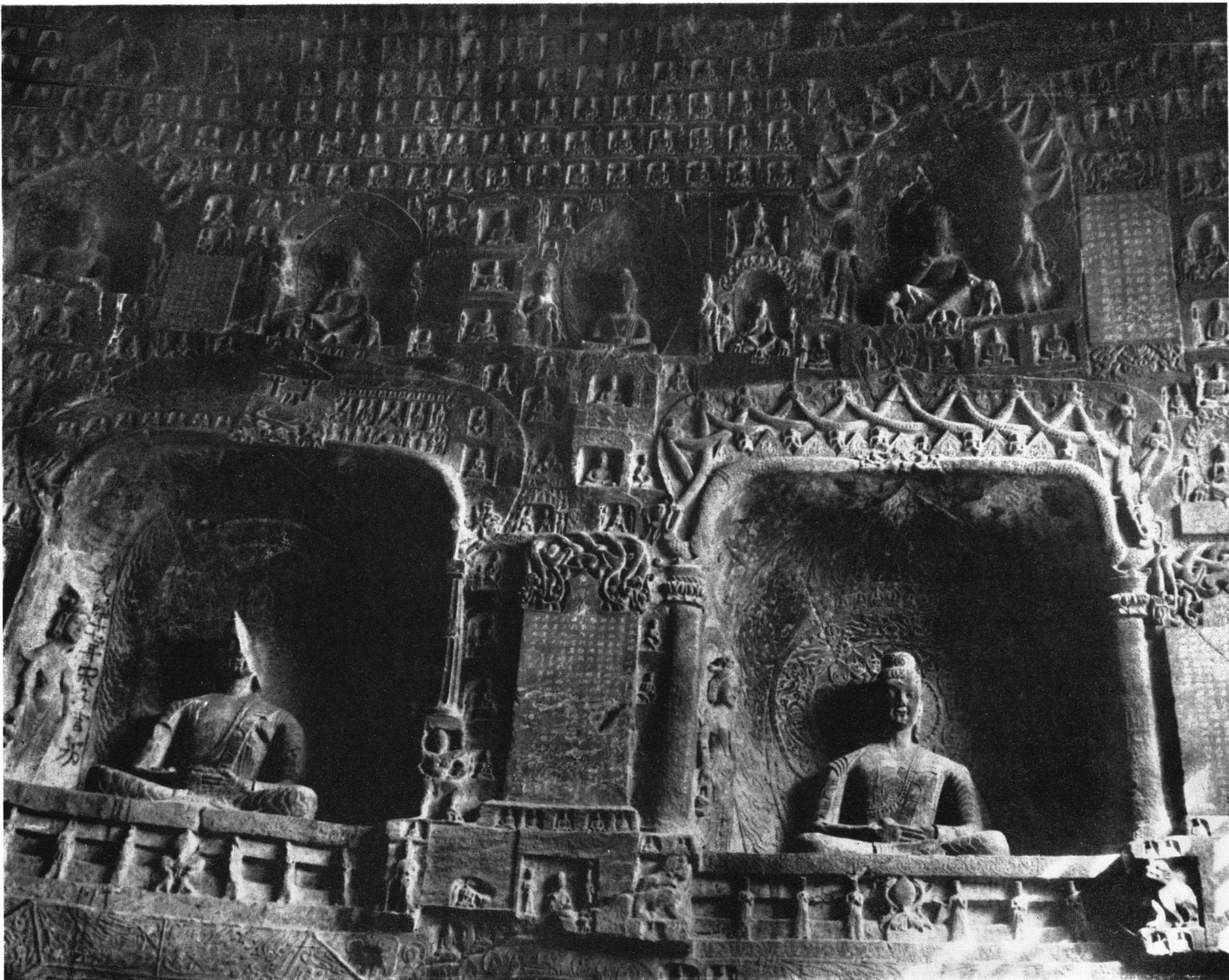
高樹等卅二人造像記(五八五)

遊激校尉司馬解伯達造彌勒像記(五八一)

(關野博士撮)

(Fig. 90)

第九十一圖 古陽洞左壁上層



(Fig. 91)

第九十二圖 古陽洞右壁上層



(Fig. 92)

第九十三圖 古陽洞交脚菩薩龕（右壁第二層第三龕）



（塚本博士撮）

(Fig. 93)

なにぶん、洞窟の床に一尺以上の泥土が堆積してゐるので、龕の高さはあきらかでない。入口に近い一龕、すなはち第四龕は近代の塼築壁によつて、なかばおほはれてゐて詳細はわからない。

四大龕の龕形はすべて大きい楣拱よりなり、楣拱の下には垂幕があり、華繩があるが、同一形ではない。ことに奥からかぞへて第三龕は、楣拱の上に尖拱がかさなつてゐる。それにほどこされた装飾もきはめて細緻で、優れた作である。²⁰⁾ 拓影^{二一} この龕形は、もとより、代表的な北魏式の龕であるが、佛像は唐式である。すなはち、奥から第三龕は

唐式の椅子に倚坐した唐式の佛像であり、その龕壁にはこまかい萬佛がきちんと刻まれてゐる。第二龕の楣拱はいはば未完成で、楣の框が彫つてない。²¹⁾ たゞ下方に獸口から垂下連接した華繩があるのみである。下は堆土のためにわからないが、現在のところ坐佛はなく、龕壁には第三龕と同じく萬佛を刻してゐる。²²⁾ 第一龕はみごとに楣拱で獸口から垂下する華繩もみごとであるし、その下にみえるしぼつた幕もとのつてゐるし、楣拱框内の細緻な飛天像はまた第三龕のそれに匹敵して、輕妙をきはめてゐる。脇侍の羅漢と菩薩はやゝ小形で、北魏式の像である。しかし、本尊の倚像佛はあきらかに唐佛である。たゞし、こゝには龕壁に萬佛の像がない。^{七八} 圖版^上

この四大龕の間には、大小さまざまな北魏式の小さい龕がぎつしりつまつてゐる。そのうち紀年のあるものは延昌元年劉洛眞兄弟の彌勒像龕²³⁾ 錄文六二三 正光四年比丘尼法陰の釋迦像龕²⁴⁾ 錄文六五一 永熙二年陵江將軍政桃樹の無量壽像龕²⁵⁾ 錄文四、西曆五三三 等であつて、この層の大龕がこの年代より古くつくられたことだけは確實となるが、どうも未完成におはつてゐるらしい。なほ、これらにまじつて西魏平東將軍蘇萬成の造像龕がある。²⁶⁾

第二層

第一層の上部にすぐ接して、第二層四大龕の寶壇部分がくる。その高さ約五〇センチ。しかし、實際は寶壇をのこさず、この部分も小龕でぎつしりつまつてゐる。並列してゐる四大龕はだいたい第一層と同じく、幅一メートル五〇内外であつて、高さは約二メートル三〇、一メートル内外の間隔をおいてならんでゐる。この層の四大龕と第三層の四大龕とはまったく同じ大きさ、同じ位置で、上下たがひに相照應してゐる。奥より第四龕は相變らず塼築壁になかばかくれてゐる。第三龕より第一龕にいたるまで、



(左壁第二層第三龕)
第九十四圖 (Fig. 94) 古陽洞浮彫羅漢像

²⁰⁾ 左壁第一層第三龕は、尖拱の下に楣拱がくりこまれてゐることも、はなはだ特色があるが、その楣拱の框のなかには獸面と蓮上化生とを交互において、こゝから華繩をたれてゐる。尖拱額には平たく彫りだした佛と菩薩の畫象がならび、せまい上縁には唐草文帶がある。拱額外は左右に細微輕妙な飛天があり、唐草形の飛雲があり、また日月の象がある。

²¹⁾ 左壁第一層第二龕の楣拱上は平坦で、唐代の小龕開鑿によい壁面をあたへてゐるが、北魏のときからすでにかくのごときものであつたことは、そこにみえる若干の北魏龕の存在によつてわかる。要するに未完成龕であつたかも知れないとおもふ。

²²⁾ 龕壁萬佛の中心にはやゝ大きな坐佛龕がある。それは縦横にそれぞれ小佛六體分の面積を占めてゐる。

²³⁾ 錄文六二三延昌元年劉洛眞兄弟龕は楣拱垂幕龕をならべ、ともに五尊の交脚菩薩で、左右脚下にみごとに獅子像がある。

記に彌勒像二軀といふ文がある。なほ別に無紀年だが、第一龕の右に羅漢月等十人造彌勒像龕(錄文六九五)があり、やはり交脚菩薩像である。

²⁴⁾ 錄文六五一楣拱垂幕の釋迦佛龕で舉手の佛坐像、左右の柱の外に一佛、一菩薩の立像があるのはめづらしい。

²⁵⁾ 錄文六五四。これは垂幕尖拱龕で、中には定印の坐佛二菩薩がある。これを無量壽佛といふは魏字洞における北魏末の慣例に合す。また別にこの上に無紀年文雅造無量壽像龕(錄文六九八)あり、やはり北魏式の尖拱龕であつて、定印の坐佛である。

²⁶⁾ 錄文六六〇。これは舉手坐佛尖拱龕で、年號はない。しかし古陽洞にはなほ平東將軍蘇萬成夫妻等の造釋迦像龕記(錄文六五九)があり、大統六年四月廿八日(西曆五四〇)の日付があるから、これもそのころのものであらう。

上層

III

II

I

後壁左翼

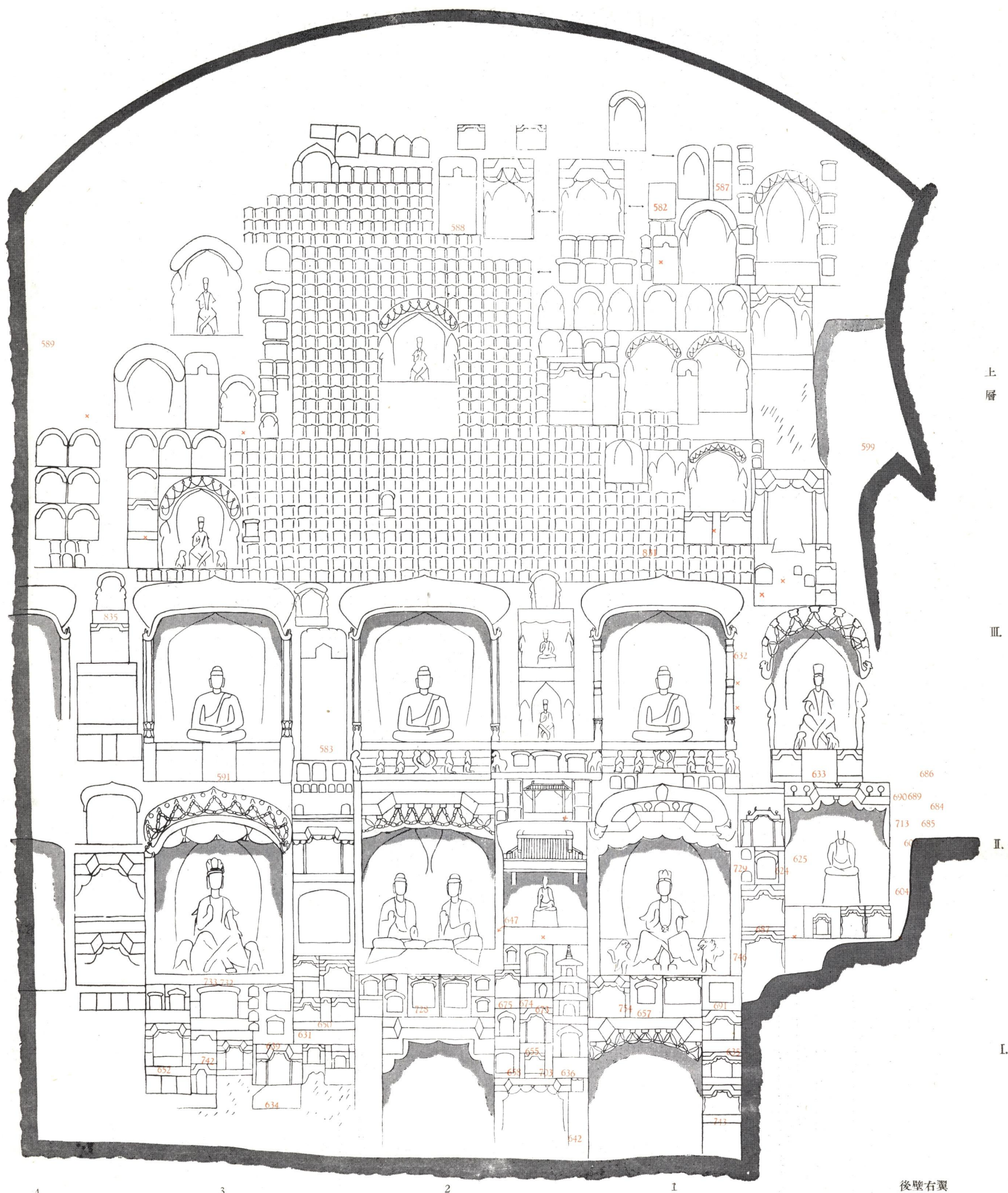
1

2

3

第九十五圖 (Fig. 95) 古陽洞左壁圖





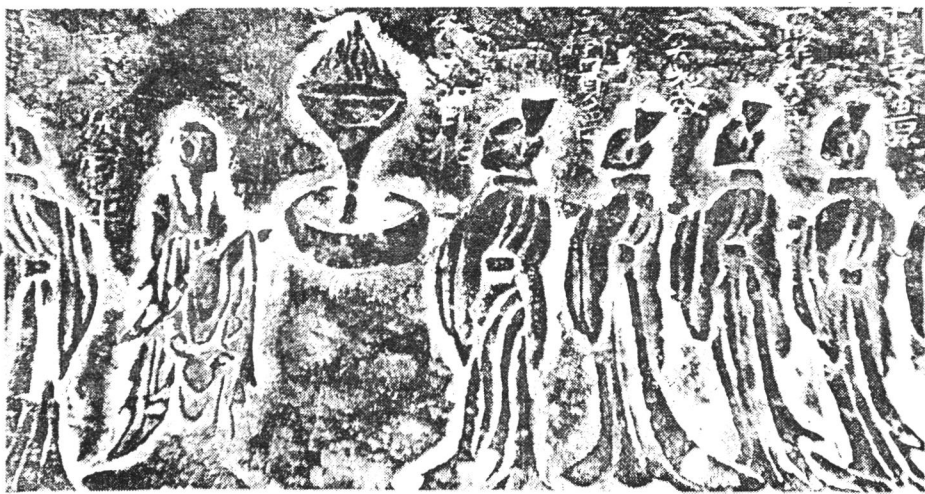
第九十六圖 (Fig. 96) 古陽洞右壁圖

同形の楣拱龕をくりかへし、それに安置してある本尊もすべて二獅子をしたがへた、同形式の交脚菩薩像である。これらの本尊はすべて、今日では頭部を缺き、醜い補修の泥首がつけられてある。しかし、シャヴァンヌの圖録、塚本博士の寫眞にはまだうちかゝれない頭部がみとめられる。²⁷⁾

第三龕の交脚菩薩は下すぼまりの細面に、中央に花瓣形、左右には圓形の飾りをつけたたけ高い冠をいたゞく。額はせまいが、眉の弧線は大きく鼻梁につながり、龍門特有のするどいとゝのつた鼻をつくる。眉と目の間はひろく、鼻翼や口脣は小づくりで、頸もほそく、眼が大きな凹みのなかでやはらかく、ふくらみ、靜かに瞑想してゐる。細い頸からきやしやな肩口につゞき、それが細い兩腕へとながれる。手は筋肉の誇張のない、やはらかい棒状をしめし、右手をあげ、左手を膝の上において、衣端をとる。胸板はうすくて、平板であり、童女の姿態を思はせる。腹部に大きな環があり、こゝでX字狀に交叉する天衣は、胸でやゝひらき、兩肩をおほうてゐる。胴はほそいが、交脚の姿勢のため膝をひろげ、つまさきでせままる。肉體的感觸のうすい兩足は棒のやうにのび、それからこまかい襷をとつて衣端がひれ狀にひろがり、そのはしに二匹の獅子が待す。獅子は正面像であるが、首だけはうちがはにむかつてゐる。^{第九十}
^{三圖}

光背はみごとに火焰の舟形である。²⁸⁾ 羅漢と菩薩を脇侍とする五尊形式であるが、羅漢はあさい薄彫、菩薩はたかい肉彫である。それに羅漢^{第九十}の姿態はうつくしく、自由である。面貌に個性的な表現がしめされ、手指に微細な神經があふれてゐる。楣拱は框のうちにうつくしい飛天像をいれ、その細緻輕妙のやりかたは、よく第一層第一龕に一致してゐる。またその下、垂幕の上に獸口から垂下した華繩をあらはすことも第一層第一龕に同じである。

第一龕と第二龕もほとんど第三龕に一致する。たゞ第二龕の基壇には造像記があつて、それには永平四年十月十六日華州刺史安定王のつくつた石窟、靈像であることが銘記されてゐる。したがつて、この造像記に根據をおけば第二層の四大龕は永平四年^{西曆}五二二ごろに開鑿されたものといふことになる。³⁰⁾ もしこの安定王變を同じ供養者とする正始四年^{西曆}五〇七の佛龕が、後壁右脇侍の上にあることに注意すれば、後壁の完成以後、この壁第二層の造像が着手されるまでに



第九十七圖 (Fig. 97) 古陽洞□智祐等供養者列像(左壁第二層第一第二龕間下)

²⁷⁾ 沙畹圖版二三九、二四二をみよ。

²⁸⁾ 第九十三圖。特に圓光外縁と舉身光内區の流麗なる波狀唐草に注意されたい。

²⁹⁾ 錄文六一九、圖版一三二四。いまこの造像記の部分は破壊され、その斷石は蘆屋山口謙四郎氏の所藏に歸してゐる。

³⁰⁾ 第三龕のそとがはには一個の碑形がある。文章はあるけれども、年號はない。姓名をかくべきところは空白になつてゐて、役名ばかりがならべてある。(錄文六七九)が、そのわけはわからない。

は明らかに年代のひらきが、あることをものがたつてゐるのである。

なほ、これら第二層四大龕の間には稠密に北魏の小龕が彫つてある。³¹⁾ いま、その紀年あるものを検すると、第一龕の周囲には正始五年^{西曆五〇八}天平三年^{西曆五三六}の像龕³²⁾があり、第二龕、第三龕の間には永平二、三、四年^{西曆五〇八—五二〇}の像龕³³⁾があり、第三龕下方には延昌四年^{西曆五一五}正光二年^{西曆五二二}の像龕がある。第二、第三龕間の小龕が、かならずしも第二龕^{永平四年}よりおかれてゐないことは注意すべく、この小龕の紀年を参考にすれば、この壁第二層がほぼ正始末より永平年間^{永平四年}にでき上つたといふ點は、ほぼあきらかであらう。

第三層

第三層以上については、ますます、われわれの短い調査期間が不充分であつたことを痛感するのであるが、四大龕の幅と高さとは第二層と大差ないと考へてよい。しかし一見して、この第三層の大龕は第二、第一層のものと、その佛像形式ならびに龕形が幾分趣を異にしてゐることがわかる。第四龕は依然として塼壁におほはれてゐる。

第二、第三龕は下部でひきしめられたせまい尖拱額をもつが、^{第九十圖}これは第三層のすべての龕形に共通してゐる。しかし、この拱額内部のかざりは、おのおのちがつてをり、第三龕はもつとも統一ある美しさをしめしてゐる。すなはち、第三龕の拱額上縁には小さい天人を十一體並列し、それぞれ華繩のはしを手にしめる。そこに弧線をえがいたうつくしい華繩がかさなり、その最後は拱端にある龍口におさめられてゐる。その華繩裝飾の下部、拱梁の上部には坐佛をおさめた三角形をならべ、その間に、また合掌した小天人を配してゐる。拱梁には中央に龍頭を相反置し、鱗を彫るこれらのかざりは深い浮彫からごく薄い浮彫までいろいろの變化があつて、きはめてみごとである。第四龕の拱額はこれに似てゐるやうである。第二龕のものは拱額中央に、よせ棟の家形をきざみ、その下に絡龍をおき、その他の部分にはごくうすい彫りでこまかい菩薩列像を彫る。なほ壁面には小さい後刻とおぼしい佛龕が不均整に散在してゐる。³⁴⁾

第一龕は拱額中心に二佛並坐の小龕をほどこし、左右にごくうすい浮彫



第九十八圖 (Fig. 98) 古陽洞天平三年比丘尼曇會等佛龕基壇(左壁第二層第一龕下)

³¹⁾ 第九十七圖の拓影は第一龕と第二龕との中間の下層龕基壇部にある供養者列像の一部である。その像のかたはらにそれぞれ題名がある。もすその長くひいた表現はこの種列像に典型的である。香爐を中心にし、右方に僧形を一體その他は俗形をならべてゐる。な、めうしろをむけた姿態はすこぶる輕妙である。この個所は今日破壊してゐて、みるをえない。(録文七二六)。第二層の供養者薄彫はおほむねこんなものである。

³²⁾ 第九十八圖は天平三年比丘尼曇會阿容のつくつた觀音龕(録文六五六)であるが、その基壇の獅子香爐にその時代の特徴がよくあらはれてゐる。比丘像もおもしろい。北魏龕ではあまりこのやうな裝飾はみとめられない。第九十九圖はすぐそのとなりにあるやはり東魏の佛龕であるが、これには造像記がない。常選人と忠州刺史の二刻(録文七二三)は傍の唐代小佛龕に對するものである。この東魏龕の動きをあらはす獅子像は興味があふかい。

³³⁾ 拓影二一四二の二層拱額はこゝにある。むかつて右は上にあり、刻文をうしなふも、左は下にあり、永平二年の造像記(録文六〇六)をもつ。

³⁴⁾ これらの小龕が、この龕像の造建者の意圖するものであつたかどうかについては今日わからないが、おそらく當初からつくられたものとおもはれる。右方下縁に七佛列龕があり、左方に五尊坐佛の帷幕龕と交脚菩薩龕、坐佛龕がある。前者は幕の下に小佛龕をならべ、その下を五區に分ち、中央に坐佛、右方に定光佛、交脚菩薩像をおさめ、左方に佛立像、獅子のある佛立像を配し、その組合せがめづらしい。下には香爐と獅子を中心にした供養者列像がある。

を密畫風に刻してゐる。それは菩薩列像と維摩、文殊の像らしい。³⁵⁾

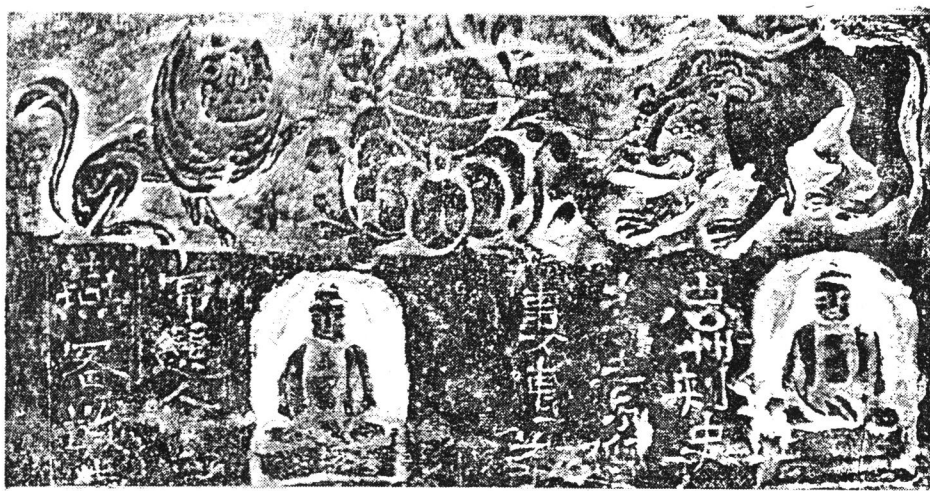
第三龕の左右にはまるい柱が立ち、それにはこまかい彫りがある。圖様は縦にはしる波狀忍冬文である。なかほどに彫りのうすい蓮華かざりがあり、柱頭に肉の厚い蓮華をつくり、拱端の龍をうけてゐる。第二龕はフリューテイングのある八角柱があり、またその下にそれをさゝげる童子がある。第一龕には龕柱なく、第四龕は拱端の獸の下に大きな方板があり、それを童子がさゝげてゐる。

第二龕、第三龕には五成の基壇がある。基壇の上と下段にはこまかい唐草文を配し、中三段には中央に博山香爐、左右におのおの三人の合掌供養者立像をつくる。左右の柱下は前へつくりだし、第二龕は菩薩立像、第三龕は獅子像をつくる。³⁶⁾ 第九十一圖

さて四大龕の本尊であるが、これは第二層の交脚菩薩像とはまったくちがつてゐる。第三龕の佛は偏袒右肩、結跏趺坐してゐる。頭髮には渦文を彫り、ほそい顔には明確な、するどい目鼻たちをつくつてゐる。頸はほそく、肩はやゝなで肩であるが、肩幅はひろく、胸を大きくはつてゐる。兩腕はほそいが、身體に密著せず、やゝ左右にひらき、脇下にふかい影ができる。ゆつたりとくんだ足の上にしづかに兩手をおいてゐる。この像が全體ほそづくりの、まつたく龍門式の像でありながら、つよく雲岡佛をおもはすのは、その雲岡式の衣文と肩幅のやうすにあるだらうとおもふ。³⁷⁾

第二龕の佛像もこれと同様であるが、また右壁第三層の大龕諸尊とも一致し、かへつて後壁本尊とちがつてゐる。³⁷⁾ これらの諸尊はすらつとした二菩薩をしたがへた三尊形式である。光背はみごとに火焰舉身光である。圓光の部分には飛天とか、坐佛を彫つてゐるが、かなりふかい丸味をもつた彫りである。光背外の龕内にもやはり飛天、僧形などを彫つてゐる。第二層の僧形は釋迦の十大弟子であらう。第三龕にはこゝに維摩と文殊の對問像があり、その上に僧形の群像がある。³⁸⁾ すべて變化にとみ、生々としてゐる。³⁹⁾ 拓影二三

第一龕の佛像が、第二、第三龕のそれとちがつてゐることはすでにいつたとほりである。頭髮に彫りなく、衣は通肩の坐佛である。顔はかなり面ながで、後者のごとく、額と眉とがせまつてゐない。頸ながく、襟の高い衣をきてゐる。



第九十九圖 (Fig. 99) 古陽洞東魏佛龕基壇(左壁第二層第一龕下)

³⁵⁾ これはめづらしいことである。維摩、文殊を拱額のそとに彫ることは多いが、拱額のうちに彫ることはほかに例がない。これはまだ拱額のそとに彫るといふ定式のできぬ早い一例とおもふ。

³⁶⁾ 第四龕も童子形の下につくりだしの獅子を彫つてゐる。佛龕中央にはいまわからぬがやはり五成の基壇があるらしい。

³⁷⁾ 第四龕本尊はその龕形より察してほゞ同様の形式とおもふ。

³⁸⁾ これは第三層第一龕が拱額中に維摩文殊の對問像を彫つたとともに異例である。まだ拱額外に彫るといふ方式がさだまつてゐなかつたからとおもふ。

³⁹⁾ 雲岡石窟などにくらべると龕の割に佛像が小さいことがわかる。龕がこんもりとふかいのである。それに光背は割に大きい。第三龕は圓光をすぐ頭のまわりにもつてきたから、火焰部の間にせまい新月形をつくらねばならぬことになり、こゝに七佛列像を配してゐる。第二龕はその空所をあまさなかつたために圓光が上にあがり、その中心は頭からはなれ、こゝに別に三尊の化佛を彫つてゐる。ともに頭の蓮華は小さく、あまり目だぬ。かうした自由なやりかたは後壁本尊光背の自由なやりかたともあはせて考へるべきであらう。

⁴⁰⁾ こゝにはまだ迦葉、阿難の意圖はなく、明確な五尊像の意識もないであらう。しかし、形からいへばあきらかに五尊像の形式をとつてゐる。おそらく、かういふものをその最初のすがたとして、五尊形式はしだいに明確な姿をとつてあらはれてくるものとおもふ。したがつて、もう一つ前の段階をなすものは、となりの第二龕の十大弟子像であり、雲岡第十八洞の十大弟子像であらうとおもはれる。

⁴¹⁾ 楊大眼の傳は『魏書』卷七三にある。武都氏難當の孫といふから、氏羌族の出身である。景明元年正月、豫州刺史裴叔業が壽春をもつて内附したとき、奚康生とともに先づ入り、功があつたので、安戎

る。胸のはりも少く、肩に肉つきがない。さらに、第二、第三龕とちがつて兩腕が脇からいちじるしくは離れてゐない。兩肩の衣は垂直のひだをつくり、それが脚から臺座にかけてたれさがり、左右にひろがり、そのすそはみごとな曲線をつくつてゐる。もかけ座の兩端には第二層諸龕と同様な獅子像がある。兩手は脚の上でくんで、他の諸佛と同様である。このやうな肉體のきやしやな姿にかゝはらず、表現はなほだ自然であつて、第二、第三龕のやうな異邦的な誇張の形式はまつたく克服せられてゐる。この佛像にたいふ氣品は、肉體の露はな表現を最初からすて、むしろ、いちづにあらはさうとした精神の高邁さにある。またこの佛坐像は、その全體の形式比例がもつともよく後壁本尊に似てゐるので注意される。座の高いこと、左右の獅子像など、まつたくよく似てゐる。いまこの像によつて、破損された本尊の姿を推察するとともに、この本尊の設計經營のできたときを、この石窟竣功の時機と考へるべきであらう。^{第九十} 脇侍も本尊に似てほつそりした像である。そのうちがはに寶珠を手にした僧形がそれぞれ一體づゝ線刻であらはされてゐる。⁴⁰ 光背は細ながく、細緻な火焰光で、内部の圓光は馬蹄形をなし、列佛の一圈のうちには新月形の化佛區と蓮華とがある。光背のそこにはあさい面彫りて輕妙な飛天と寶珠とがある。^{拓影二二四五}

第二、第三、第四の龕はそれぞれ左わきに一個の碑形をもつてゐる。螭首方趺のりつばな碑形で、ほと五角形をなす碑額がある。第二は楊大眼爲孝文帝造石像記⁴¹ 拓影一四七 第三は魏靈藏薛法紹等造釋迦像記⁴² 拓影一〇二八 第四は太和廿二年比丘慧成造石窟石像記⁴³ 拓影一五九 である。楊大眼碑を景明初年の造建とすれば、この第三層諸龕は太和景明の交になるものとしなければなるまい。たゞし、第一龕はその形制を異にするのであるから、すぐあとより追加してつくられたものとするを妥當としよう。^{第九十 一圖}

この層には佛龕の間に碑形があるので小佛龕の追刻は少いが、それでもいたるところに小さい佛龕がある。そのうち紀年のあきらかなものは第三龕碑の上にある太和年解伯達の彌勒龕⁴⁴ 拓影一五八 一と景明三年比丘惠感の彌勒龕⁴⁵ 拓影一五八 四とであらう。それはともに三尊の交脚菩薩龕で、特に龕形をなさず、舉身光とその上に華繩の圓拱があるのみ。その點は前述した破洞外路傍の交脚菩薩龕に似てをり、またこれから上層の諸龕とも共通し、龍門における最古の形式を代表する。華繩は天人がさゝげ、交脚の膝の左右には獅子像がひかへ、交脚の足は侏儒がさゝへ、方趺があつて、こゝに造像記を刻してゐる。尊像の形式も第三層大龕に似て、雲岡のおもかけを多分に藏してゐる。

最上層

第三層より上は、前に述べたごとく、天井のドームの頂上まで漸次カーヴしてをり、その曲面に雜然と小ささまざまの佛龕形がある。^{第九十 十圖} しかし、そのうちでも、やゝひろい面積を占めてゐるのは千佛であつて、これをさかひとし

縣開國子に封ぜられ、直閣將軍に除し、輔國將軍、游擊將軍を加へられる。碑の「輔國將軍直閣將軍安戎縣開國子」は正にこの時である。『魏書』の安戎縣は碑の安戎縣を正しとすべきであらう。安戎縣は略陽郡に屬し、いま陝西秦安縣の地である。『魏書』卷一〇六地志に文中には南方討伐を了へて、歸途石窟にたちより、「先皇の明蹤を覽、盛聖の麗迹を觀て」感じ、こゝに石像一軀をつくつたといふ。これはもとより景明の初年であるが、このとき、すでに古陽洞の本尊などできあがつてゐたのであらうか。

⁴² この龕は陸渾縣功曹魏靈藏と河東の人薛法紹の二人が合力してつくつたものである。比較的微官の人が共力してこの一龕をつくつてゐるのは興味がある。これには孝文帝の奉爲といふことが、すこしも述べられてゐない。

⁴³ これは世に始平公造像記といはれてゐるもので、めづらしい陽字である。太和廿二年九月十四日の日付があり、龍門ではもつとも古い造像記のひとつである。供養者は比丘慧成で、その父、使持節光祿大夫洛州刺史始平公の薨後、その供養のために石像をつくるといつてゐる。だからこの第三層第四龕は亡父始平公のための造像である。始平公については、大村氏は景穆帝の子、汝陰王天賜の第五子元修なるべしとの考證をされた『支那美術史彫塑篇』一九六頁が、なほ確定しがたい。しかし、比丘慧成はこの文の前半において、國のために石窟をつくらうと別にのべてゐる。これはこの龕のあり場所から考へて、古陽洞造像をいつたもので古陽洞第一次造像はおそらく比丘慧成の勸進によるものとみてさしつかへないであらう。

⁴⁴ 都館關口遊激校尉司馬解伯達の造像はこの伊闕の警備隊に屬する人のものとしておもしろい。このほか關口關官吏の造像例も同じく古陽洞内に四五ある。（録文九八〇、九八三、九八四）

て、上の部分と下の部分とにわかれる。⁴⁵⁾

下の部分は、第三層のすぐ上に接する一區であつて、四大龕の二分の一にたらぬ大きさの龕を六個ばかりならべ、その中間にまたより小さい佛龕をはめてゐる。この六個の龕は大小まちまちで、形もいろいろとかはつてゐる。すなはち、前述解伯達の彌勒龕のごとき圓拱龕あり、また尖拱龕あり、また光背だけからなる佛龕もある。そしてどれもあさひ。佛像は交脚菩薩像と釋迦坐像で、すべて三尊形式である。交脚菩薩像は、すべて、その左右に正面にむかふ獅子像がある。この部分には數個の造像銘がみられるが、いまその判明してゐるものは左のごとくである。

太和十九年北魏長樂王丘穆陵亮夫人造彌勒像記 錄文 五七七

景明三年北魏高樹解伯都等卅二人造石像記 錄文 五八五

大和廿年北魏步舉郎張元祖妻一弗造像記 錄文 五七八

これらの造像記によつて、この層が古陽洞におけるもつとも古い佛龕をふくんでゐることがわかる。^{第九圖}

丘穆陵亮夫人尉遲氏の龕は古陽洞におけるもつとも古い造像で、ひいては龍門でいちばん古い造像といふことになる。北魏の國都が平城から洛陽にうつた太和十八年^{西曆四九四年}の翌年にあたつてゐる。龕制は前記解伯達彌勒像、比丘惠感彌勒像に一致し、やゝ大規模で、要するにそれらの原型をなすものである。ひとたび、こゝにこの龕制がはじめられてからは古陽洞上層の諸佛龕はほとんどこの制を採用し、破洞外路傍の一龕もこの形式である。⁴⁶⁾しかし、古陽洞下層、またその他の場所ではこの龕制は使用されなかつた。この龕の左わきには碑形がある。上は螭首だが、下に獸面を中心にした二侏儒像があつて、この碑をうけてゐる。藥方洞外壁がさへるところの碑の形制が案外ちかいところにあつたわけである。^{第九十圖}

高樹解伯都等卅二人の石像龕は本尊が三尊の坐佛で、第三層第二、第三龕の本尊に似てゐる。⁴⁷⁾龕制は華繩圓拱のあさひもので、丘穆陵亮夫人龕に同じである。記銘は左わきの方形板の上にある。妻一弗の像龕は、この高樹等の龕にはさまれた小さい尖拱龕で、手をくんだ三尊坐佛像である。⁴⁸⁾^{第九十圖}

千佛のあるのは、ほゞ第一龕と第二龕の上で、中間にやゝ大きな三尊交脚菩薩龕がある。千佛の小さい尖拱龕は左右それぞれほゞ十體、十段ぐらゐあるが、かならずしも左右が均整でない。龕傍にはそれぞれ張雙仁、王僧會、畢法興、宋繼伯、楊消運、楊方秀、黃安興、范天明など供養者の姓名を刻してゐる。^{八三〇}この中央の大龕はやはり唐草文圓拱、⁴⁹⁾左右に獅子を配した彌勒龕で、なほそのまはりに大小の佛龕を置いて一區劃をなしてゐる。そのうち二佛並坐の尖拱龕があり、その方趺に比丘道匠造像六區記^{錄文 六八一}がある。この六區とは彌勒大龕をもふくんだこの一區劃の

⁴⁶⁾この路傍の龕とこれといつれが古いかについては明確な答へはできぬ。しかし、しひていへば路傍龕の方がより雲岡式であるといへよう。それは雲岡大窟經營の終末期の第十三洞の形式に一致する。光背の上のかむりもの、またその葡萄唐草のごとし。丘穆陵夫人の龕は光背の上に華繩の圓拱をつくつて、また別に一龕制をはじめてゐるのである。この奇妙な華繩の圓拱は、雲岡佛龕にある龕外尖拱額上にある華繩などの制から由來したものであらう。

⁴⁷⁾この解伯都とはさきの解伯達龕にいふ都官闕口遊獵校尉司馬解伯達その人であらうか。伯と伯、達と都の字のちがひは通じうるのはないかとおもふ。この龕にはなほ列名中に解伯勳といふのがある。兄弟であらう。もし、解伯都が解伯達と別人ならば、おそらく兄弟か何かであらうから、解伯勳が參加した場合に、解伯達も加入したであらうとおもはれる。

⁴⁸⁾これより奥の二龕は、この部分ではいくらか様子がかはり、むしろその下にある第三層第一龕の表現にちかひ。これはやはり幾分この部分の成立の時期を暗示するものであらう。なほこの部分には少からぬ造像記があるやうであるが、いま遺憾ながらみさだめることはできぬ。

⁴⁹⁾それはさきの路傍龕から一轉したばかりの形式である。また華繩圓拱龕に至らぬものである。これはもはや光背のおほひではない獨立したものである。それにはさきの葡萄唐草文のやうな波狀の唐草がみえる。

諸龕をさすらしい。⁵⁰⁾第九 太和二十二年北海王元詳の造像^{五八〇}文もこの段のそとの方、丘穆陵亮夫人の彌勒龕の上にある。⁵¹⁾千佛より上の部分、つまり天井のドームをなす部分には、またそのカーヴにそうて不規則に佛龕がある。いづれも圓拱のあさい龕で、左右に菩薩を配し、かならず獅子をはべらした交脚菩薩龕である。しかもその大部分は未完成であつて、あら彫りの像をのこしてゐるが、また、諸佛龕の間にのこされた空白にも、あらい鑿あとを歴々とのこしてゐる。そのうちドーム左半で記銘のあるものは北魏北海王妃高氏造像龕^{六八〇}文である。⁵²⁾

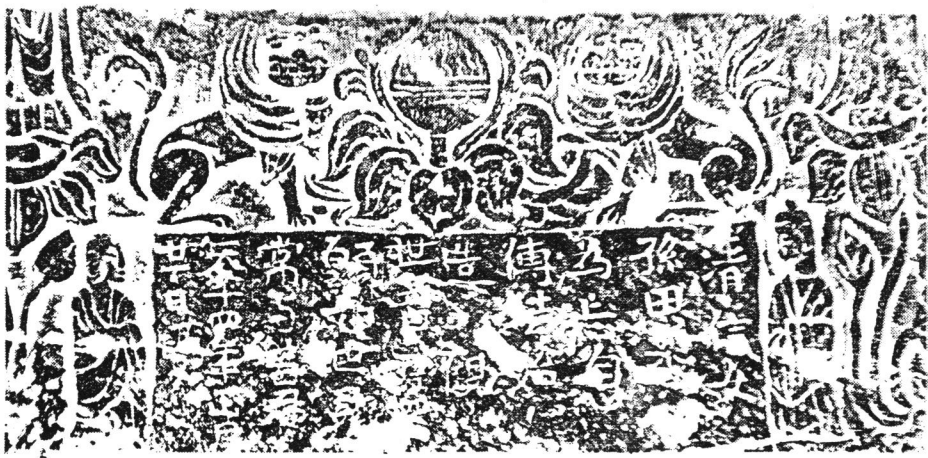
「右壁（南壁）」

第一層

この層には大きな龕は二つしかない。奥に第一、第二の大龕があるのみで、前方には小さい佛龕が不規則に刻まれ、また一部はあら壁のまゝにのこされてゐる。二大龕は左壁第一層に照應してひとしく楣拱額をもつが、第二龕は垂帳を附し、第一龕はそのかはりに華繩がある。

第一龕は五尊坐佛、第二龕は十一尊坐佛で、光背はともにみごとであり、別に力士像がある。本尊の形式はほぼ一致し、ともに北魏式のものである。頭部は破損してゐる。衣の裳は臺座の前に垂下してゐるが、よほどまる味をおびてゐる。通肩の衣文が、垂直からやや水平にうつりかはつてゐることをみると、第二龕の方が一歩進んだ形式である。⁵⁴⁾こゝに北魏式の坐佛が彫られてゐることは、北壁第一層と異なるが、拱額はかへつて劣つてをり、殊に第二龕のごとく、千佛⁵⁵⁾をうめたものになると、楣拱の印象は稀薄になつてゐる。第二龕右わきには碑形がつくられたらしいが、文字はなく後世の小佛が彫つてある。⁵⁶⁾その他はまったく不規則な小龕である。いまそのうち紀年のあるものをひろへば、第一龕周圍に神龜二、三年^{西曆五一九}の龕と東魏天平二、四年^{西曆五三七}の龕があり、第二龕周圍には天平四年の龕があり、第三龕にあたるところ、およびその附近には熙平二年^{西曆五一七}から神龜、正光、孝昌元年^{西曆五一八}に至る諸龕がある。

これによつて右壁第一層小龕が熙平、神龜、正光、孝昌初および東魏天平年



第百圖 (Fig. 100) 古陽洞天平四年孫思香龕基壇 (右壁第一龕附近)

50 すなはち、交脚菩薩龕、二佛並坐龕、倚像龕、坐佛龕をさすものとおもはれる。

(研究所資料岩田龍門一三九)

51 この龕についてはつきりした記憶はないが、いろいろな事情から綜合して、華繩圓拱の交脚菩薩龕であらうとおもふ。

52 これも三尊彌勒像である。北海王はのちにとくやうに北海王元詳である。「龍門石窟」寫真四九。

53 この十一尊像といふのはめづらしいが、菩薩らしいものが八體、それに二聲聞一佛であるらしい。第一龕上の鄭司旦等題名のある坐佛龕は七尊坐佛の上に、さらに左右に半跏思惟像があつて、めづらしい形式をとつてゐる。七尊龕にしても、この龍門では非常に例の少ないものである。これは東魏北齊時代にさかんにおこなはれ、隋代にまでおよんだものである。(沙畹圖版二五三)

54 これらの點からいへば、かならずしも北魏のおほりにつくられたかどうか疑問である。あるひは東西魏のころにつくられたのではなからうか。(沙畹圖版二五一)

55 この千佛は小さくてよくわからぬが、定印坐佛でみな尖拱額をもち、北魏式のものであることはあきらかである。(沙畹圖版二五一)そして楣拱額の中央梯形區には二段にならび、またその下、菱形部の中間に二段あり、さらに菱形部にも三段あり、さらに兩翼部の下に三段の列龕を配し、その下にわづかに帷幕をつくつてゐるので、いままでの楣拱帷幕とはかなり形式がちがふ。兩翼部には文殊維摩の對問像があつたらしいが、その額外上隅にもまた維摩文殊の對問像らしいものが見える。また碑形に點在する小佛龕はこれよりおくれた唐代のものであらう。碑形の上方には樹下思惟太子像がある。

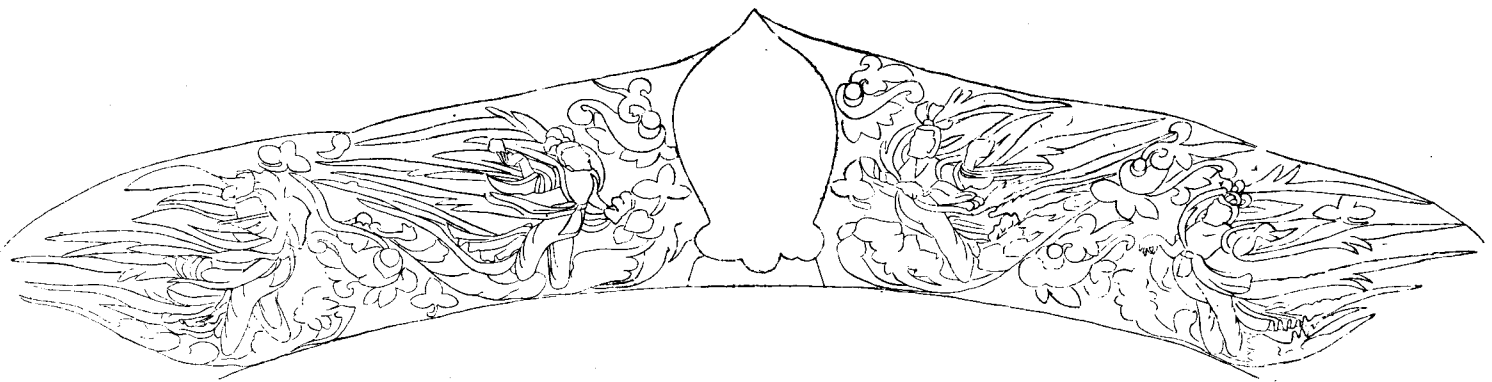
56 第百圖は、天平四年孫思香造觀音像記(錄文六五七)の基壇であるが、香爐を中心にした獅子にその時代の特徴がよくあらはれてゐる。

間につくられたことを知つたわけであるが、第一、第二の大龕はまたこの神龜以前西一八層につくられたもので、左壁第一層の延昌頃西二層につくられたと推定されるのよりはいくらかおくれをり、しかも注意すべきことは神龜元年西一八層にはすでに、第一層に四大龕をきづくといふ意圖は破棄されてゐる。⁵⁶⁾したがつておもふに、左右壁を通じてやゝ組織的な造營は少くとも熙平二年西一七層以前に、左壁諸尊を未完成に、また右壁前方をも未製作にのこしたまゝ、中止される運命にたち至つたものとみなければならぬ。⁵⁷⁾そしてこのころから、やうやくさかんになつてくる蓮華洞佛龕の造營にその位置をゆづつたやうにみえる。

第二層

第一層の上にある小龕について、第二層があり、四大龕が鑿られてゐることは、すべて左壁の場合とひとしい。第四龕は外壁に被はれてよくわからぬが、第三龕は尖拱形の龕で、龕拱額の上縁には九體の天人がならんで華繩のはしをもち、天人の間にはそれぞれ一莖の蓮枝がある。拱梁は彎曲して兩端に龍頭があり、全面に鱗形を彫る。拱梁の下にはまた別にしばつた帷幕を附加するが、それにはこまかい獸面や飛天の彫りがある。第二龕は相拱龕で、その下に華繩と帷幕がさがり、その上に天蓋やうのかざりがあり、そのはしからは流蘇が垂下してゐる。⁵⁸⁾第一龕は尖拱と相拱の複合形式であつて、その點は北壁第一層第三龕と同一である。⁵⁹⁾しかしこれは相拱の下に華繩なく、天蓋の垂飾のごときものと、帷幕とがあり、また楣拱龕の上も少し彫りこんで葱臺と花瓣のかざりがある。なほ尖拱額、拱框内の畫象もきはめて繪畫的なものがあつて、注意される。⁶⁰⁾尖拱額の兩端もはや獸形をなさず、構造とは關係なく、別に一匹の飛龍をみる。そしてその飛龍の口から蓮枝がで、化生の童子形をその上にみる。

このうち、第三龕と第一龕とは同形式の交脚菩薩であつて、北壁における同層の交脚菩薩に相應するものである。ほそい、きやしやな體軀をするどい並行線の衣文につつんでゐる。兩わきに獅子を侍べらしたと、脇侍をあまり顯著にしめさないことも



第百一圖 (Fig. 101) 古陽洞尖拱額飛天畫象 (右壁第二層第一龕)

⁵⁷⁾ この下層四大龕の開鑿を中止したことが、すでに神龜以前にあることは、もしこの大龕開鑿が繼續したならば、大龕が鑿られたであらうその個所に神龜元年杜遷龍、神龜二年橋善常龍、孝昌元年尼僧□龍の存することによつて、あきらかである。沙畹圖版二四九。本書第九十六圖参照。なほすゝんでいへば、その熙平二年拱額の拙劣と異例、また佛像のやゝ變化することなどより、いま現在みられる右壁の二大龕も、組織的造營中絶のちにつくられたのではなからうかとさへおもはれる。

⁵⁸⁾ 流蘇はすでに雲岡第十四洞西壁佛龕(沙畹圖版五三三)にこれをみるが、一般に少く、龍門ではほとんどみない。こゝにあるのはむしろ異例に屬するが、これが兩魏、齊周時代にさかんになることをおもへば、その先驅とみられぬことはない。なほ『響堂山石窟』六三頁註(1)参照。

⁵⁹⁾ 本書一二二頁註(4)参照。

⁶⁰⁾ この飛天とか騎獸の天人は、高句麗の壁畫など、くらべらるべきものであらう。(池内、梅原兩博士『通溝』四神塚圖版七九—八二、八四—八六)尖拱額中央の飛天にはさまれた坐佛のごときは、開皇二年四面十二龕像では眞坐佛とよばれてゐる。(水野『開元二年四面十二龕について』東方學報、京都第十一冊第一分昭和十五年刊、一三二頁)

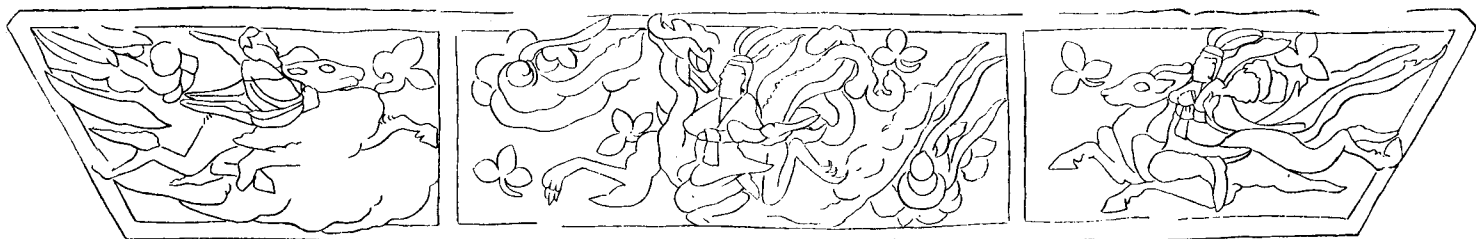
だいたい左壁にならつてゐる。龕のかたはら、下方には小さく活動的な力士像をきざみ、その下にその脚をさへた怪獸形の侏儒像をつくつてゐるのはめづらしい。⁶¹⁾ 第二龕本尊はそれらと異り、二佛の並坐像をおさめてゐる。龕はふかく、二佛はななめ位置においてゐるが、その一端からは衣末を垂下せしめてゐる。光背はいづれの龕も、繊細な唐草文帯や火焰縁帶からなつてゐる。⁶²⁾

第一龕と第二龕との間にやね形の龕があり、その下に三尊の坐佛をおさめてゐる。高い臺座の上に坐し、垂衣が繁縷である。やねは入母屋づくり、鴟尾、鳥形があり、ふつうのものであるが、軒の斗拱はめづらしく、又手にもまんなかに束があり、平組の斗拱も二重になつてゐる。⁶³⁾ 図版七九下 その左下には三重の塔形を浮彫にしてゐる。なほこれら四大龕の間には、別に小龕を刻んでゐることは左壁に同じである。

いま第二層の造像記を検すれば、紀年のあるのは第二龕わきにある正光二年の王仲和龕^{西曆五二二}西曆四七六のみであるが、第一龕にすぐ接續して、獅子背景の壁に延昌二年比丘尼法興龕^{西曆五二四}西曆四七六がある。紀年龕がすくないので、第二層造營の適確な年代を知ることが困難であるけれども、すくなくとも延昌二年^{西曆五一三}より以前とみてよからう。またこれに照應する左壁第二層がほゞ永平中の造建とすれば、これもその頃にできたものと推定して大過ないであらう。たゞし、單に形式の上の比較をすれば、右壁の方がよりすんだ形式であることを、みとめないわけにはゆかない。⁶⁴⁾

第三層

第三層はやはり四大龕をならべる。龕形はいづれも尖拱龕、五成の基壇をつくり、龕のうちには手をくんだ結跏趺坐の佛像を安置する。その佛像はだいたい左壁第三層の第二、第三龕に一致し、また左右に同じ脇侍菩薩像がある。⁶⁵⁾ 第一、第二龕もつとも近く、光背も彫りがふかく、その天人の形式は豐滿、自在にして、雲岡の天人像を想はせるものがあり、左壁第三層第二、第三龕より古式である。^{拓影二二四} 図版七九上 この點は第一龕においてもつとも顯著であつて、この龕があらゆる點において舊來の格式になつてゐるのみならず、またもつとも精美をきはめた佛龕である。古陽洞における、したがつて龍門全體における第一の佛龕と稱してさしつかへないとお



第百二圖 (Fig. 102) 古陽洞楣拱額飛天畫象 (右壁第二層第一龕)

⁶¹⁾ 沙畹圖版二五三。法隆寺金堂四天王の邪鬼によく似てゐる。

⁶²⁾ まづ蓮華を中心にし、同心圓があり、つぎに唐草文帯があり、そのとに大きな火焰がある。北魏、東西魏にかけてさかんにおこなはれた形式で、火焰、唐草文よりも、その中心にある同心圓がかなり目立つものである。

⁶³⁾ 塔身がや、高く、プロポーションのめづらしい塔である。第一層は定印坐佛、第二層は二佛並坐、第三層は交脚菩薩で、各層左右に双方から供養してゐる天人薄彫がある。沙畹圖版二五二。

⁶⁴⁾ たとへば造像衣文、光背、脇侍などの形式がかなり形式化したこと、獅子も左右にとびだして初期の緊密嚴格さを失つたこと、また流蘇天蓋の龕制のごとく一歩す、んで、ますます華美な龕になつてゐることなどをみればわかる。

⁶⁵⁾ この第三層第四龕の形式については埴壁にさまたげられて、まつたくみることができない。

⁶⁶⁾ これにくらべると第二龕ははるかにおとつてをり、また左壁第三龕もやゝゆるみがある。

⁶⁷⁾ 布片でつんだやうな柱頭は雲岡第七、第八洞の諸龕にしばしばあらはれる。また第十四洞西壁佛龕(沙畹圖版一三三)にもある。左壁第三層第三龕のごとき蓮華の柱頭もこゝにみいだされる。

もふ。この佛の基壇は五成の方壇で、下縁には小さい佛龕があり、第二層佛龕の尖頂がくひこんであるが、上縁にはみごとな唐草文様を彫つてゐる。その中央に双龍のからんだ博山香爐があり、左右に合掌跪坐せる供養者像がある。尖拱額はつよいはりのある曲線をなし、拱梁は鱗状の龍身、中央に二頭相背し、兩端にも龍頭がでる、その下に柱があるが、柱頭には籠やうのものをしぼりつけ、これで龍をうけてゐる。⁶⁷⁾中ほどには蓮華をむすびつけ、柱の全面には斜格子にこまかい唐草文をうめてゐる。⁶⁸⁾柱基には方板あり、それをうけた童子形があり、またその臺下にうづくまつた獅子像がある。拱額のうちは、十三の定印坐佛を下端にいれ、その間に蕾の蓮華をはさみ、上部に跪坐した合掌の天人をいれ、その中央に侏儒のさへげた博山香爐をおく。⁶⁹⁾また拱額の上縁は繩状により、をかけるなど、その裝飾は非常にこまかいところまで注意されてゐる。

第二龕はだいたい第一龕に同じであるが、たゞ柱だけは蓮華頭飾の八角柱である。またこまかいへば拱額上部の天人も、こゝのはみな飛翔して手足をのばしてゐる。^{第九十二圖、沙碗圖版二五九}

第三龕では三尊の形式ほど前と一致するが、基壇は三成で、中央に刻銘の方板があり、上縁に唐草文様があり、中區には供養者の行列を彫つてゐる。尖拱の曲線もかなり變化し、拱額の中には三尊坐佛、四體の坐佛、四體の供養者をひらく彫つて、拱額の上縁には弧線をあがいた幕がある。光背も細密なばかりで、第一、第二龕だけの生彩にとぼしい。^{第九十二圖、沙碗圖版二五八}

第三龕の方板には景明四年^{西曆五〇三}比丘法生造像記^{錄文五九一}があり、第二龕に對してはその右側に碑形があつて、景明三年^{西曆五〇二}孫秋生等二百人造石像記^{錄文五八三}が彫つてある。したがつて、この第三層の造營が景明三、四年の頃であつたことはうたがひない。

第三龕の拱額のわきには、あまり大きくない三尊交脚菩薩像があり、天井に多い華繩圓拱龕であるが、その方趺に記銘^{錄文四九八}があり、太和二十二年^{西曆四九八}高慧の彌勒像であるといふことがわかる。これが右壁最古の佛龕である。⁷¹⁾

最上層

最上層は、左壁が千佛區を中心として上下三區にわかれたるのに對し、こゝは千佛區を中間として内外の三區にわかれたれてゐて、左壁と、かならずしも相照應しない。

外區は圓拱華繩の交脚菩薩龕が多く、その點は左壁と同様である。そして、それはまた第三層の太和二十二年高慧像龕にすぐ接續してゐる一區であつて、左壁最上層太和年間造建の下區に照應する。

中區は千佛がならぶ。みな尖拱龕の定印坐佛であるが、上半と下半で大きさを異にしてゐる。とにかくそのひろが

⁶⁸⁾ これは敦煌千佛洞第一一洞側壁列龕をみれば、このもとづところかわかるやうにおもふ。つまり中亞乾燥地帯における龍細工の龕のなごりであらうか。
(P. Pelliot, *ibid.*, pl. CXLIII, CXLIV)

⁶⁹⁾ 雲岡石窟では尖拱額中に何もいれないのをふつうとするが、また坐佛列像をいれたものも多い。その上縁に華繩をいれたものは第三十三洞附近にあるのみである。(沙畹圖版一五四) また跪坐供養者群像をいれたものもこゝにある。(沙畹圖版一五五) しかし、もつと立體的である。跪坐供養者に坐佛列像をこんなふう配したものはこゝの創意であらう。

⁷⁰⁾ この記は「大代太和七年、新城縣功曹孫秋生、新城縣功曹劉起祖二百人等、石像一區を敬造す」の文句ではじまり、最後に景明三年五月廿七日の日付がみえる。大村氏はこれをもつて龍門開鑿の太和七年に遡るべきをみとめられるやうである(『支那美術史彫塑篇』一九六頁)が、太和七年はたゞ造像勸進の由來をのべたもので、決してこのときより龍門の造像に著手したものとはいへない。すくなくとも、景明年間までは著手されてゐなかつたのであるから、龍門開鑿の最初を太和七年にまで遡らすことはできないとおもふ。

⁷¹⁾ この四大龍列の奥、後壁右獅子像のうへにある齊郡王祐の像龕は、かなり大きい龕であるが、それは異例にも圓拱であつて、大きな華繩がその拱額をおほうてゐる。(沙畹圖版二六二) 三尊形式の交脚菩薩で、細づくりのうつくしい像である。光背の上には飛天を彫つたおほひがある。銘は基壇中央にある。齊郡王祐については『魏書』卷二十にその傳がある。

李思皇后
孝元皇后 孝文帝
文成帝 獻文帝
沮渠夫人 齊郡王簡 齊郡王祐
蒸郡王常喜 齊國太妃氏

りはまったく不規則で、諸佛龕のあます餘白を順次うめていったやうである。⁷²⁾ 下半中心には、第三龕上方にあたつて、小さい華繩圓拱の交脚菩薩龕があるが、上半の中心にはほゞ左壁のそれに應ずべき、やゝ大なる同形式の佛龕がある。また各小佛龕のかたはらに父趙思祖、趙龍廣、宋老明等の造像者題名^{八三}がみえる。

内區にはまた多數の華繩圓拱交脚菩薩龕がならび、まゝ楣拱龕もあるが、とにかく交脚像が絶對多數である。しかし、いづれも一見粗製であつて、なかには未完成ではないかとおもはれるものもある。紀年のあるものは景明二年^{五〇一}西曆鄭長猷造像龕^{五八二}文、景明三年^{五〇二}西曆尹愛姜等廿一人造彌勒像龕^{五八七}文、景明四年^{五〇三}西曆廣川王太妃侯自造彌勒像龕^{五九〇}文、景明三年廣川王祖母太妃侯造彌勒像龕^{五八八}文があつて、左壁最上層の上區とつらなつてをり、この窟頂全體が景明二、三、四年、つまり第三層の大龕造營に呼應してつくられたものであることを知るのである。

「造營次第」さて以上を綜合すれば、⁷⁴⁾ 後壁は直接三尊の背景になる部分と獅子の背景になる部分とからなり、後者は後壁の一部であるが、實は南面、あるひは北面し、左右壁の延長上にある。左右壁はおの三層、層ごとに四分して大佛龕をいれ、上はまるい天井になつてゐる。

このうち左壁上層下部、右壁上層前方部はもつとも古く、太和十九年から二十三年に至る太和の末年につくられた。それは小規模のもので、配列も不規則であり、ことに左右壁が照應しない。したがつて、いまの石牛溪のごとく自然の裂隙を利用して小龕のきざまれた程度のものであつたとおもふ。

これにもとづいて、大石窟の造營が企圖された。それは太和のごく末年か景明初とみてよいとおもふ。左壁第三層のもつともそこにある比丘慧成の造像記にいふ石窟一所は、⁷⁵⁾ これをさすものと考へてもよからう。しかし、このときの計畫は第三層諸龕に圓天井と後壁本尊とをふくめたものであつたとおもふ。本尊垂衣のすそあたりに水平の床の面を想定すれば、第三層諸龕の下にひくい腰壁がのこる。これが第一次計畫の内容で、第二層諸龕は、もちろん、その計畫のうちになかつた。ちやうど、さういふ石窟は細部の意匠にも非常に關聯の多い敦煌千佛洞第一一洞においてみいだされる。⁷⁶⁾

これが慧成の佛龕をひらいた太和二十二年^{四九八}西曆から景明三、四年^{五〇三}西曆にかけてのことであつて、第三層の諸龕はでき、天井部の千體佛の諸龕もでき、それから同じ天井部にある完成、および未完成の諸龕がつくられたのである。おそらく後壁三尊もこのとき完成したものとおもふ。

しかし、いま天井におけるかずかずの未完成龕をおもふと、景明末において何か造營上の變動があつたものと考え

⁷²⁾ 圖版七九上をみてわかるやうに、第三層第一龕の拱額に接するところは、大龕に適應するやうに多少變形してゐる。

⁷³⁾ これらはみな三尊交脚菩薩像である。ただ廣川王祖母太妃侯像龕のみ楣拱龕、この他はまた華繩圓拱龕である。廣川王太妃侯自造龕のみ方趺に銘あり、他はかたはらに碑形がある。廣川王については『魏書』卷二十四傳にある。

太妃侯氏 ○雲道

文成帝 廣川王略 (十九年薨)

曹夫人 (太和四年薨)

廣川王略は延興二年に中都大官になつたことをしるすのみであるが、これによれば(錄文五八八)侍中使持節征北大將軍になつたことがわかり、また略といふ漢名のほかに賀蘭汗の鮮卑名のあつたことがわかり、興味があふかい。また景明四年の太妃自造像記(錄文五九〇)によれば「早頃片體、孤育幼孫、以紹蕃國、永薄之心、唯歸眞寂」といつて、太和四年賀蘭汗の死後、太和十九年諸の死後、幼孫をまもつてさみしく暮してゐたやうすが、目にみえるやうである。こゝに彌勒像をつくり、自分の安穩解脱をねがふとともに、また「孫息延年、神志速就、胤嗣繁昌、慶光萬世」といふことをねがつてゐる。

⁷⁴⁾ 造營次第については第百三圖主要佛龕配置圖と別表第一參照のこと。第百三圖の龕内橫線は坐佛、交脚線は交脚菩薩をあらはす。

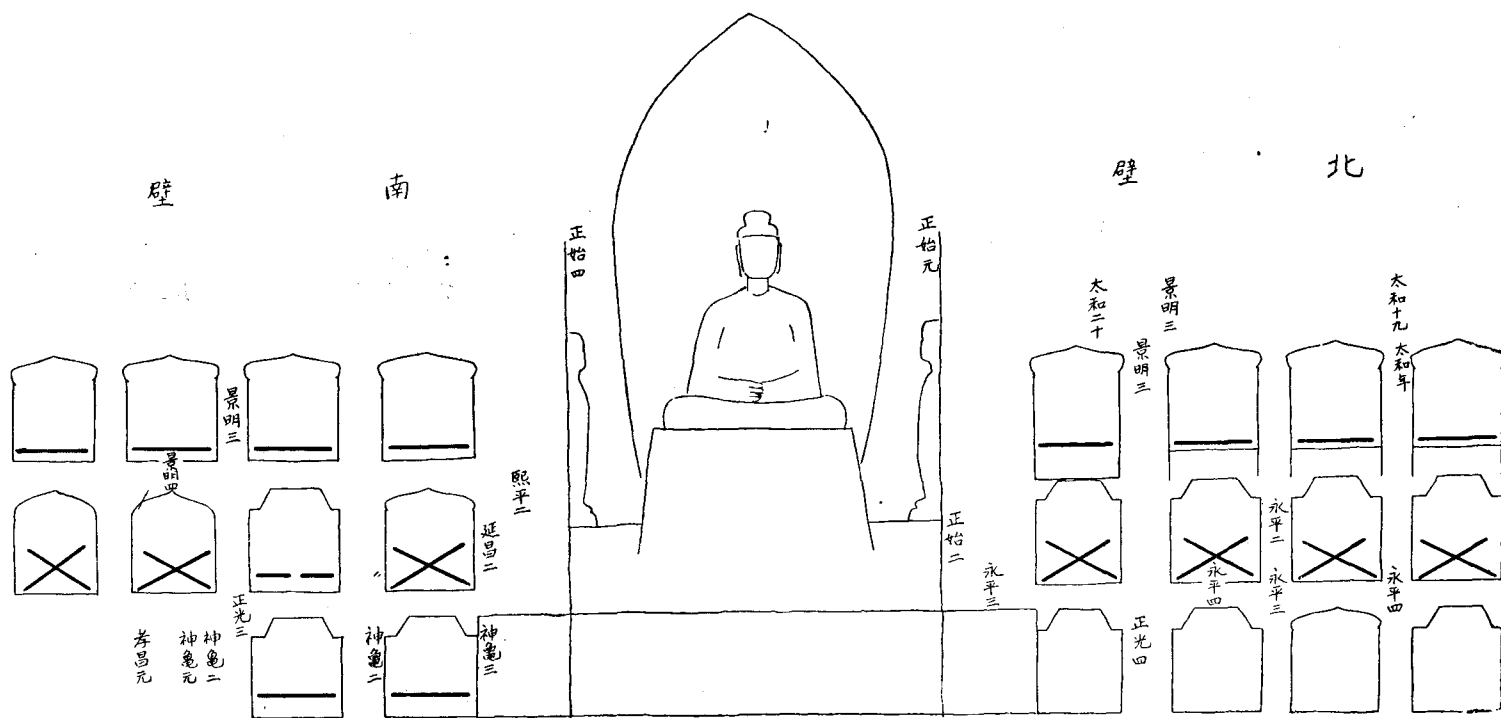
⁷⁵⁾ 錄文五七九。この造像記は劈頭に「國のために石窟をつくる」といふ文があり、終りに附加して「亡父始平公のために石像一區をつくる」といふ文句がある。後者が第三層第四龕の開鑿をさすものとするれば、前者はこの古陽洞の開鑿を意味するものと解されよう。

⁷⁶⁾ P. Pelliot, *ibid.*, Pl. CXLIII, CXLIV.

られる。これにひとつの手が、りをあたへるものは、左壁第三層第一龕の特異な像龕の制である。いまこゝで問題にしたのは、そのながい垂衣と左右の獅子であるが、この龕が他の諸龕からはなれて、なぜ、こんな像制をとったかといふやうなことはわからないにしても、とにかくこの石窟草創の最初からこゝを風靡してゐた交脚菩薩像の垂衣と獅子がふかい影響をあたへたことはみのがせない。⁷⁷⁾この第一龕が後壁三尊よりまへにできたか、あとにできたかわからぬが、とにかく後壁本尊、それから右わきにある同制の龕が⁷⁸⁾時を同じうしてつくられたことだけは疑へない。もしかういふ像制が古陽洞の工匠たちの頭を支配してゐたとすれば、一旦完成をみた後壁三尊の垂衣のすそより⁷⁹⁾なほ下に獅子像をつくらうとするのはきはめて當然のこと、考へられる。このために古陽洞をなほ一段鑿りさげる必要にせまられたと解せられる。そのときの床は獅子像の床にちかいもので、これで水平の床をつくと第二層の列龕ができ、なほその下に若干の腰壁をあますことになるのである。

この第二次計畫の遂行されたのは正始、永平⁸⁰⁾西曆五〇四のころであらう。なかんづく、第二層左右壁は永平年間につくられたらしい。三尊の後壁では餘白の佛龕も主として正始年間西曆五〇四につくられたが、獅子像の背後はさらに永平より、^{五〇八}延昌、熙平^{五〇八}にかけてもひきつゞき佛龕がつくられた。それと獅子像自身が下背部に未完成の鑿あとをのこしてゐるのとはどうした関係にあるのだらうか。⁸¹⁾

この獅子像の工事進捗中、すでに第三次の擴張計畫が企圖



第百三圖 (Fig. 103) 古陽洞主要佛龕配置圖

⁷⁷⁾雲岡石窟ではこれほど垂衣は發達せず、また獅子像を配することもほとんどない。これを機會にして賓陽洞、魏字洞をはじめ垂衣と獅子像は一般化されるが、こゝほど垂衣がなくなると、獅子像も變化する。こゝの形式はもつとも交脚像式にちかい。

⁷⁸⁾これと同じ形式は右壁第二層のおくになほ一個みられるが、かなり相異があるから、すこしおくれるものであらう。

⁷⁹⁾他の二龕は垂衣のわきに獅子像があるが後壁本尊は垂衣のすそより下にある。これは第二次的な附加であるためかうなつたのかも知れない。

⁸⁰⁾この第二次計畫があまりはやく進行したために、洞窟はたかくなり、自然天井部の造龕が不便になり、未完成のまゝ、正始以後の造龕を天井にみない結果になつたものと解されよう。

⁸¹⁾第二層第三龕の碑形も文字は完成してゐない。(録文六七九)「國のために像一區をつくる、願はくは帝祚量隆、」の造像記はあるが、人名は「保張貴、」とあり、また別に「尼僧道、道安法」とあるのみで、その他は維那とか都維那とか、典座、唄匿、香火等の肩書がならぶのみで姓名がない。これは寄進者をえて記入するつもりであつたが、そのまゝになつたのであらう。天井の未完成諸龕も、まづあらづくりしておき、寄進者のあるにしたがつて、仕上げてゆくべきものでなかつたらうか。

別表第一、古陽洞紀銘佛龕分布圖

[illegible]

されたとみえる。それはさらに下へ鑿りすすんで、今日みる床にまで達し、第一層諸龕をつくる計畫である。そしてだいたい、永平末から正光年間におよんだものとおもふが、それも右壁前方二龕に著手せず、左壁諸龕の内部を未完成にのこしたまゝ、おそくとも熙平二年^{西暦五二七}には中止されたものらしい。

このうち西魏の洛陽占領中にも若干の佛龕開鑿があり、また東魏北齊になつても、いくつかの佛龕ができた。唐代になると、左壁第一層諸本尊をはじめとして、あまり重要でない小佛龕が洞内下部の空所に彫られたのであつた。

これが今日から推定しえられる古陽洞開鑿のだいたいである。⁸²⁾

「龕制」 古陽洞の開創期には主として華繩圓拱龕がつくられたが、その尊像は獅子を侍べらせた三尊の交脚菩薩像にかぎられてゐる。⁸³⁾ そのうちには華繩のかはりに唐草文様をうめたものもある。これは古式をつたへるものである。ぐわんらい魏字洞附近の路傍交脚菩薩龕のごとく、唐草文のある光背のおほひであつたものが、こゝでは龕の境界を明確にするために顯著な華繩をつけた圓拱になつたもので、古陽洞獨特の龕制である。つくられたのも太和から景明年中^{西暦四九五—五〇三}にかぎられてゐる。熙平二年^{西暦五一七}齊郡王祐の像龕がこの制であるのは最後の例であらう。

尖拱龕もはじめからおこなはれてゐるが、それは坐佛をおさめてゐる。もつとも華々しいのは第三層大龕で、それぞれその精美をきそつたことはすでにのべたが、それは太和、景明のことである。小さい龕には終始もちひられ、楣拱龕の影響によつて、すこし形のあるものはその上下に帷幕をとりつけるやうになつた。これが蓮華洞ではもつとも盛行した。帷幕のある尖拱龕で、紀年のあるものは永熙二年^{西暦五三三}と天平三、四年^{西暦五三六—五三七}で、みな新しいものばかりである。

楣拱龕も雲岡以來古くからあるが、龍門でもつともさかんになつたのは正始以後であらう。それは洞内下部において壓倒的である。楣拱の下に帷幕と華繩を附加したのは古陽洞における獨特の形式で、蓮華洞にもこの例はない。

このほかに屋形龕が三四あつたが、それにはよせ棟も入母屋もある。

古式の龕はおほむねあさい。特に華繩圓拱龕はさうであるが、側壁大龕はふかく、したがつて左右脇侍が側面をしめすほどである。

「尊像」 佛像は交脚菩薩、菩薩立像、佛立像、坐佛、二佛並坐等の別があるが、これを造像記に照してその尊像名をさぐると、彌勒像⁸⁶⁾の名がみえるもの二十九例はすべて交脚菩薩である。すなはち、交脚菩薩はすべて彌勒像とみ

82) これが古陽洞造營のだいたいの次第であるが、くはしくしなくてはゆけば、まだまだ古陽洞にはいろんな問題がある。それは古陽洞内の問題にとゞまらず、ひろく支那美術史の問題をふくんだものであるとおもふ。しかし、それにしても、とにかくわれわれの調査の不備をますます痛感するしだいであつて、他日の調査を期待すること切なるものがある。

83) 龕制、尊像の關係については別表第一参照のこと。

84) さらにさかのばれば雲岡第十三洞にさかのぼることはすでにいいた。本書四四頁に註参照。

85) 雲岡でも尖拱龕に併行してさかんに使用された。その形式の起源は中亞にあり、さらに印度にあるが、かういふふうには佛龕拱額に固定した意匠としてもちひられたのは支那獨特である。

86) シャヴァンヌの報告にもとづいて支那に於ける彌勒像の圖像學的研究をした人がある。Max Wegner, *Iconographie des Chinesischen Maitreya* (Ostasiatische Zeitschrift 1929) s. 171—178.

てよい。觀音像の名が見えるもの十一例は、すべて菩薩立像である。すなはち菩薩立像はみな觀音像と考へられる。

釋迦の名あるもの二十四例、そのうち舉手八例、合手十六例ある。⁸⁷⁾合手の釋迦坐像が多いことは古陽洞の特徴であるとおもふ。⁸⁸⁾しかし、それも永平二年^{西曆五一七}までで、それ以後は合手の釋迦はなくなり、舉手の釋迦がこれに代るやうである。舉手の釋迦が永平以前にないのは古陽洞の特例であるとおもふ。こゝで一般化されてよいことは神龜以後の釋迦像がすべて舉手であるといふことである。これは無量壽像の出現と關係がある。

無量壽像の紀年例は神龜二年、永熙二年^{西曆五一九}、^{五三三}の二例であるが、無紀年の二例を合して、すべてが合手の坐佛である。つまり神龜ごろから無量壽像を坐佛であらはすことがおこつたため、これを合手にてあらはし、自然、釋迦坐像は、これと區別するため舉手坐佛であらはすやうになつたのであらうと解せられる。このことは蓮華洞、魏字洞の觀察とも合致するところである。

定光佛二例、一は佛立像で、かたはらに童形を彫つてゐるのは儒童であらう。他は菩薩立像でこれは供養者の誤記とかんがへられる。

なほ多寶佛一例は佛の並坐像にてあらはされ、ともに舉手である。なほ藥師佛の一尊は孝昌元年^{西曆五二五}の一例があり、それは合手の坐佛である。

⁸⁷⁾ 合手といふのは足の上で兩手をあはせたもの、舉手といふのは片手をあげ、片手を下げたものをさす。特に印相の名をもつてよばなかつたのは教儀的意味の加はることをさけたためである。

⁸⁸⁾ そのうち紀年あるものをひろへば、

	合手	舉手
正始二年(五〇五)	1	
三年(五〇六)	3	
五年(五〇八)	3	
永平二年(五〇九)	1	
三年(五一〇)		1
四年(五一一)	1	
延昌四年(五一五)	1	
熙平二年(五一七)	1	
神龜元年(五一八)		1
正光二年(五二一)		1
正光四年(五二三)		1

王祥洞〔第二十二洞〕

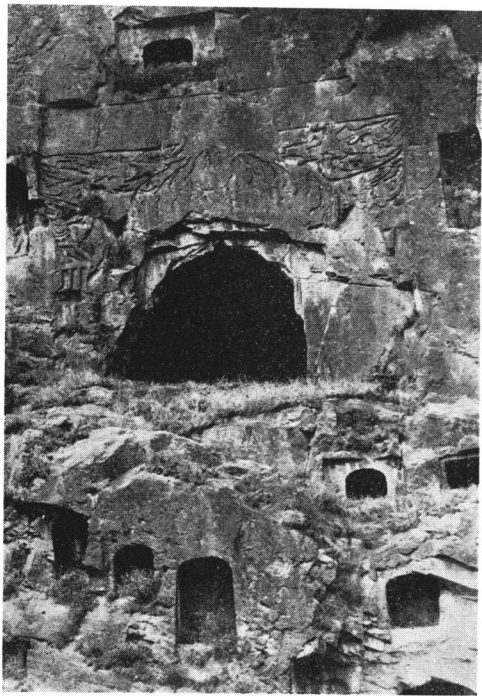
古陽洞のやゝ南方には、あまり高くないところに、裸形の金剛力士を左右に配した唐代の石窟がある。沙畹圖版 一六三—四古陽洞の上にも同様な、しかしやゝ小さい唐窟の二三がみえる。關氏のいはゆる王祥洞は、このうちどれをさすのかよくわからない。内部に石の臺があるといつてゐる。¹⁾紀年造像記では垂拱四年、天授二年、天寶十三年等あるといはれてゐるが、²⁾もとよりこの洞附近のものをもふくんでゐるから、これによつて適確な年代をおすことはできない。たゞ則天頃の石窟とみるほかはないであらう。

火燒洞〔第二十三洞〕

古陽洞より南へ岩壁の斜徑をすゝむと、地上約十五メートルのところ^三に大きく洞口をひらいた石窟がある。沙畹圖版 一六四下これを火燒洞といふ。¹⁾外壁には大きな火焰尖拱をつくり、その兩隅には飛雲の浮彫がある。なほ、このまはりには矩形の區劃があつて、もとかかけだしの建物があつたやうにおもはれる。第百四圖

この洞の本尊は結跏趺坐で、古陽洞の本尊に似てゐるといふが、はなはだしく破壊されてゐて、ほとんど何物ものこさないらしい。²⁾

王祥洞、火燒洞



第百四圖 (Fig. 104) 火燒洞外景

¹⁾『伊闕石刻圖表』上冊、十八王祥窟では、古陽洞直上の高所にあり、内に石橋があり、王祥なるものがこゝに隱居したので、この名があるといふ。

²⁾垂拱四年(錄文七七二)、天授二年(七七四)、天授四年(七七五)、天寶十三年(錄文七七七)。

¹⁾火燒洞の稱呼は一般に支那人の箸錄にみえる。雷火に遭つて全洞がまる燒けになつたからだと傳へてゐるといふ。『伊闕石刻圖表』上冊、石窟表十九)しかし、關氏は別に大統寺の名でよんでゐる。それは正光三年大統寺比丘惠榮の造像(錄文五五七)があるからである。もとよりこれはこの窟の名でなく、北齊楊街之の『洛陽伽藍記』卷三にみえる洛陽南郊の一佛寺であらう。平子氏はまた別に危險洞とよんでゐる。『支那美術史彫塑篇』二二三頁)

²⁾この洞は調べる餘裕がなかつたので關氏上冊石窟表十九と大村氏二三三頁の記述と塚本工學博士の寫真とによる。

³⁾錄文五五六、正光三年六月李要□造像記(左壁西龕)

五五七、正光三年七月十七日大統寺比丘惠榮造像記(右壁西部)

七五九、正光四年三月二十三日王伯集供養記(右壁西部)

七六〇、正光四年二月二十三日比丘惠榮造像記(右壁最南部)

七六一、正光四年三月二十三日陽景元供

しかし、造像記のある像龕は少くないらしい。まづ大統寺比丘慧榮の造像をはじめとして、正光三、四年西曆五二二—五二三の像龕が五種ある。³⁾ 北魏最後の天子孝靜帝の名がみえる清信女□□胡智造像記^{七八五}もこゝにある。これには紀年がないが、即位した永熙三年^{五三四}以前數年間の作とかがへられる。⁴⁾ おそらく、古陽洞の造營のおはつたところ、つゞいて開かれた石窟であらう。

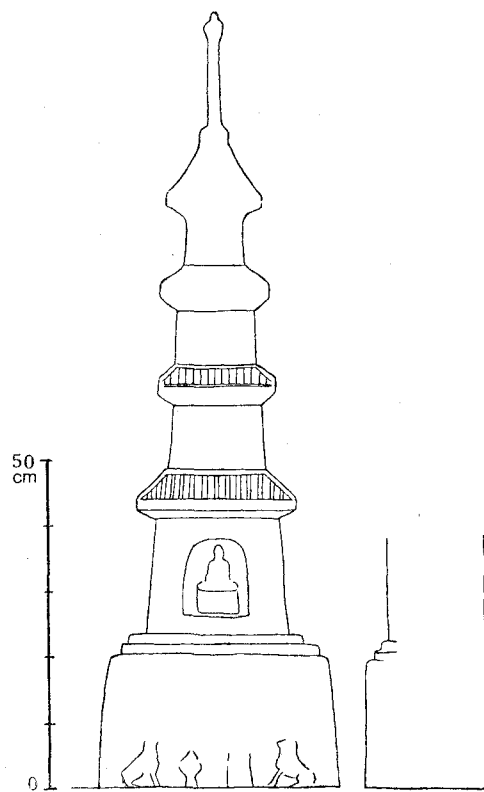
洞内右壁東部にある四級塔は北魏の浮彫である。塔身ながく、やねはいちじるしく遞減してをり、基壇は三成で獅子と香爐の彫りがある。^五^{第百五圖}

石窟洞〔第二十四洞〕

火燒洞のやゝ南方すこしひくいところにひらかれた石窟である。¹⁾沙畹圖版一六四下 洞口には火燒洞のやうに尖拱の額があり、その上に唐字洞のやうにやね形が彫つてある。洞外南方にある碑形に孝昌三年皇甫公石窟碑²⁾の刻文があるので、^{關氏圖版一七}石窟寺ともよばれてゐる。正しく、この碑こそ、この石窟の造營をものがたるものであらう。

構造はだいたひにおいて魏字洞に似てゐるらしい。後壁寶壇の上には七尊の坐佛があり、本尊のながい垂衣は寶壇をおほうてゐる。本尊はほゞ寶陽洞本尊の形式をおふが、³⁾その迫力と量性においてはおとつてゐる。左右の脇侍菩薩像はその輪郭といひ、手のぐあひといひ、衣文のさばきかたといひ、もつとも魏字洞菩薩に似てゐる。七尊最外の二尊は半跏思惟の菩薩像である。菩薩立像と同じくほつそりした像で、その全面を鰭のやうな衣裳がおほうて、裳ははねかへつてゐる。たれた片足の下には大きな蓮華座がある。雲岡石窟ではさかんにつくられ、ことに交脚菩薩の脇侍像としてしばしばあらはされたが、龍門にあつてはめづらしい。⁴⁾ 本尊垂衣の左右には、また寶陽洞の獅子に似た獅子像がある。^{第百六圖}

左右壁には、大きな龕をそれぞれ一個づゝひらく。右壁は相拱帷幕龕、左壁は尖拱龕で、拱端に龍頭がある。右壁



第百五圖 (Fig. 105) 火燒洞浮彫四層塔圖

等の所在は平子氏の調査にもとづく。七八一、王永安造觀音記、七九六、楊道長供養記等も右壁西部にあることが知られてゐる。(『支那美術史彫塑篇』一二二三頁) 錄文七五五、正光二年比丘尼道□造四釋迦像記、七五八、正光三年□相合妻公孫興娘造無量壽佛記、目錄一二八、正光四年比丘僧安造像記、一七六、普泰二年比丘尼□安造像記、錄文七六二、比丘尼□達造釋迦像記などもこの洞内にあるといはれてゐる。

4 本書塚本氏「龍門石窟に現はれたる北魏佛教」一七二頁参照。

5 なほ火燒洞およびその附近には、咸亨二年(錄文七六八)儀鳳四年(七六九)垂拱二年(七七〇)三年(七七一)永昌元年(七七三)神龍二年(七七六)等の唐代紀年造像があるといふ。

1 『支那美術史彫塑篇』二二四頁にはこれを危險下洞といふ。關百益氏の『伊闕石刻圖表』上冊、石窟表廿に石窟寺と稱するはこれにあたる。この石窟の記述も關氏大村氏の記述と塚本博士の寫眞とによる。

2 關百益氏は、單にこの造石窟碑があるために、この石窟を『洛陽伽藍記』卷五の伊闕石窟寺と解する説を排し、『伽藍記』の石窟寺はいまの寶陽洞である旨を述べ、その理由として、この石窟の規模があまり大きくないといふ點をあげてゐる。(『伊闕石刻圖表』上冊、石窟表廿) しかし、碑文には石窟とあつて、石窟寺とないことに注意すべきであらう。

3 塚本博士の寫眞にも、すでに首をうしなつてゐる。

4 もつとも相拱の間に彫られた樹下思惟像の浮彫はほかに二三ある。

の龕は五尊形式の菩薩坐像でめづらしい⁵⁾。垂衣がながく寶壇のまへにたれ、そのわきに獅子がある。その形式が交脚菩薩像をおもはすのみならず、獅子もちやうど、その交脚菩薩の獅子のやうに正面にむかひ、前脚を左右にひろげてゐる。しかし、その獅子頭部および鱗のやうな髣髴はまったく賓陽洞の獅子である。したがつてこの窟の開鑿を洞外の碑によつて孝昌三年とすれば、賓陽洞の完成がこれにちかひころまで、降りうるものであることをものがたつてゐる。菩薩寶冠、面貌、および上身の諸形式も古陽洞第二層交脚菩薩像や賓陽洞菩薩像に似てゐる。

左壁は二佛並坐像をおさめ、そのそとがはに二菩薩像をつくり、その中間に二比丘像を彫るが、その羅漢の面貌は賓陽洞の羅漢そつくりである。坐佛はなゝめに相ならび、衣は通肩、垂衣がひろく須彌座の上をおほうてゐる。その形式は古陽洞右壁第二層第二龕の二佛並坐像に似てゐる。

どちらも細緻な光背を負うてゐる。龕の柱にはそれぞれ蓮座があり、龕のかたはらには博山爐をさゝげたり、蓮枝を捧持したりした供養者の浮彫をほつてゐる。その彫刻の様子は賓陽洞の浮彫行列像をおもはし、はなはだ特色がある。特に左壁の供養者は素文の寶珠光をつけ、頭に螺髻をいたゞいてゐる。しかし、こゝにも別に供養者の行列像があつて、それは左右大龕の基壇にみいだされる。たゞし、賓陽洞のそれにははるかにおよびない。またその像の背後後壁との境目には、うすく彫つた蓮華、蓮葉の花瓶一個があつて、めづらしい。蓮華、蓮葉の表現はかなり寫實的にできてゐる。

さて右に述べたごとく、この石窟の各部はよく調和がとれてをり、しかも、追刻の小佛龕をみない。したがつて、その孝昌三年九月十九日太尉公皇甫公石窟碑⁷⁾は、この石窟の造建を記したもので、その計畫は一手にいて、その造營も一手になつたものとしてよいであらう⁸⁾。したがつて古陽洞、火燒洞よりもおくれ、また賓陽洞よりもおくれ、魏字洞と相前後してつくられたものであるとおもふ。



第百六圖 (Fig. 106) 石窟寺洞左隅部

⁵⁾ おそらくこれも彌勒菩薩像のつもりであらうとおもふ。これは龍門におけるほとんど唯一の例といつてよい。

⁶⁾ 『支那美術史彫刻篇』二二四頁。

⁷⁾ 皇甫公石窟碑については沙畹、吳式芬、關百益諸氏にその目があるのみで、その文を録したものはない。その所在については沙畹の古陽洞とするより、關百益氏の石窟洞々外とする方が正しい。沙畹 (p. 506) によれば、碑には「太尉公皇甫公石窟碑」と題し、文中には「左光祿大夫中領軍將軍司空公」といひ、「大魏孝昌三年歲次丁未九月辛酉朔十七日」といふ日付があり、文は袁譙、書は王實、刻は張文であるといふ。司空公皇甫公とはシヤヴァンヌのいふやうに皇甫度のことである。皇甫度は『魏書』に傳はらないが、卷九本紀、正光三年十二月「癸酉左光祿大夫皇甫度を以つて儀同三司となす」とあり、孝昌三年の條に「春正月甲戌司空公皇甫度を以つて司徒となす」「戊子司徒皇甫度を以つて太尉となす」とある。孝昌三年九月はすでに太尉になつたのであるから、太尉公と題し、文中の左光祿大夫領軍將軍司空公はその歴官をのべたものであらう。なほ皇甫度が儀同三司になつた正光三年十二月の前月には衛大將軍儀同三司皇甫集といふ人が薨じてゐるから、あるひはその人の子でもあらうか。袁譙は『魏書』卷六にその傳があり當時に文名の高かつた人である。

⁸⁾ 大村氏は古陽洞の神龜正光龕に似るといふ理由から、神龜正光説を出されたが、『支那美術史彫刻篇』二二四頁) いまは皇甫公石窟碑によつて年代をきめるべきである。

路 洞 〔第二十五洞〕

藥方洞、古陽洞、王祥洞、火燒洞、石窟洞はほぼ一群をなしてゐるが、これをはなれて道路を南下すると、すこし山のすが西にまはりかゝつたあたり、あまり高くない路傍に一所の石窟がある。^{沙畹圖版一六四上}諸書にいふ路洞とは、おそらく、これをさすのであらう。^{關氏圖版一八}洞外には火燒洞のごとく、火焰尖拱がある。

石窟内はひろさ四メートル一〇、ふかさ三メートル九三あり、後壁につくりだした寶壇には、坐佛を中心にして七尊像を彫刻してゐる。坐佛の方座は寶壇の上にあり、垂衣も寶壇の上でとまつてゐて、寶壇の正面には香爐をさしはさんで獅子像がある。脇侍の二體は破損して全くわからぬが、つぎに羅漢像があり、そのそとに菩薩立像がある。その石窟の構造、および像制は石窟洞に一致してゐる。しかし、その様式はかなり變化し、第十四洞などよりも以後ではないかとおもはれる。特にその後壁の空白に彫つた寶華の花葉は、大きな平たい面からなり、東魏北齊のやり方を暗示してゐる。²⁾

なほこの石窟でめづらしいのは、入口の左右にある侍衛の土、もしくは供養の土とみられる浮彫像である。それは力士とか、神將のすがたでなく、まつたく普通の俗體であらはされてゐる。³⁾

また左右の壁には佛龕があるが、それはいままでに例のない遠近法によるなゝめからみた屋形龕である。それがいくつもならんでゐる。^{第七圖}やねはよせむねで、大棟のはしには鴟尾があり、中間には寶珠と葱臺とがある。⁴⁾のきには叉手と三つ斗がならび、基壇には欄杆と四出の階がある。本尊は三尊形式、合手の坐佛であるが、なほ左右の空所に合掌の供養菩薩像を彫つてゐる。また屋形の背後には樹木がみえる。



第七百圖 (Fig. 107) 路洞側壁佛龕

¹ 平子鐸嶺氏は、脇侍菩薩の丈が高いのでこれを長身觀音洞とよび、大村氏はこれにしたがつた。(『支那美術史彫塑篇』二四九頁) いま記述するところはその記事による。場所の記載はないが、拓本と塚本博士の寫真から、どうしてもこの石窟であることが推定される。沙畹圖版一六四上の右下にみえる石窟で洞口に壁をつくつてゐるのがそれであらう。しかし、いまはこの土壁もない。關氏圖版一八、路簷には、もと左半の缺所を磚石で補つてゐたので、乞食がこれに住つてゐたが、いまは治安がわるく、乞食も安居できないといつて居る。

² 響堂山石窟の寶華を想起されたい。しかしこの花葉のくみあはせの方がより植物的で、その點は石窟洞の花瓶中の花弁、賓陽洞光背の植物にちがついてゐる。

³ 漢代墳塋、また壁畫にみる侍衛の土をおもはす。

⁴ 『鄴都故事』(歷代宅京記所引) 太極殿の記事に「諸蕃入朝すれば、殿幕に流蘇をたれてこれをおほふ、殿上には金葱臺十三枚あり、おのおの一石を受ける云云」といひ、昭陽殿の記事にも「殿上に金葱臺十三枚あり、おのおの七斗を受く」といふ。葱臺は形からきた名稱で、殿上のかざりとみえる。形がねぎの花に似てゐるところから、こゝにみるごときものをさうよんだのであらう。

この窟左壁第一龕には、東魏武定七年^{西曆五四九}の報德寺比丘法相の造像記^{録文七六三}がある。その他の箸録によると、これより十年古い東魏の元象二年^{西曆五三九}劉大安造像記をはじめとして、北齊天統元年朱高陵造像記^{録文七六四}、武平三年造像記、武平三年義州皂服從事張子紹造像記^{録文七六五}等がある。ほゞこの石窟開鑿の年代を推定するに足りよう。⁵⁾

浄土洞〔第二十六洞〕

路洞の南、すこし高いところに一所の唐代石窟がある。¹⁾沙畹圖版一六四上 あまり大きくはないが、後壁にはせまい寶壇がありその上に須彌座があつて、佛の倚像が彫りだされてゐる。完好な、圓熟した彫法をしめしてゐて、奉先寺の並列した佛立像にちかい。^{沙畹圖版一八六左} 左右壁には比丘、菩薩、および邪鬼の上に立つ甲冑の神王像等がある。^{沙畹圖版二六三}

シャヴァンヌによれば、外壁左右に石刻の文があるといふ。そのひとつは歲次甲午八月三十日の王寶泰趙玄勣等造西方浄土佛龕記とその題名^{録文八一}で、文中には西方浄土といふ文句がみえ、また佛像三鋪と侍衛惣じて□十一をつくつたといふ。尊像の数はこの石窟とあはないが、その位置からいへば、當然この石窟の造營記とかがへられる。本尊もおそらく、西方浄土の主たる阿彌陀佛であらうか。また一方の石刻は姚秦鳩摩羅什譯の『佛說菩薩呵色欲經』とその題名^{録文八二}である。³⁾ 前者は則天武后制定の文字があり、則天の延載元年に推定されるが、後者にも則天文字あり、ほゞ同時の刻であることがわかる。したがつてこの石窟も延載元年の開鑿と推定される。

第二十七洞

これから山の斜徑にそうて、西へまはりつゝ山をのぼると、大いに破壊した北魏の石窟がある。^{沙畹圖版一六四上} 本尊は魏字洞等のごとき垂衣の坐佛であるが、その他の點はつまびらかにしなかつた。¹⁾

⁵⁾ 大村氏はこれによつて武定七年（西曆五四九）の開鑿たるを推定した。（『支那美術史彫塑篇』二四九頁）しかしやはり北魏末のものであらう。

¹⁾ シャヴァンヌのいはゆるY洞である。この記述は主としてシャヴァンヌによる。（E. Chavannes, *ibid.*, pp. 523—5）われわれもたゞ二葉の寫眞（研究所資料Ⅺ三四六、三四七）をとるにとましかなかつたのである。

²⁾ 一般にはすでにのべたごとく、倚像佛はおほむね彌勒佛であつた。しかし、唐代における阿彌陀信仰の流行は、倚像佛まで、つひに阿彌陀とよぶに至らしめたものとみえる。

³⁾ なほこの二種の石刻について、支那の箸録はみな路洞となつてゐるが、それは路洞附近のものをふくむわけで、くはしくいへばシャヴァンヌのY洞にあり、路洞そのものではないのである。路洞は前述のごとく北魏の窟である。

¹⁾ 研究所資料Ⅺ三四八

極南洞 〔第二十八洞〕

極南洞は北魏窟、第二十七洞のすぐ南上にある。¹⁾これが西山諸石窟の最南である。^{沙畹圖版一六四上}このあたりにくると、もう洞口は正確にいつて東南面してゐる。^{關氏圖版一九}だいたい方形の區劃をつくり、それに長方形にちかい拱門をひらいてゐる。

内部はひろさ四メートル七一、ふかさ三メートル四五、天井までの高さ三メートル七九ある。²⁾後壁には須彌座の上に趺坐する本尊があるが、下半は磨滅してゐる。面貌は圓滿にして、力強い。頭上が螺髪になつてゐるのはめづらしい。左右の二羅漢、二菩薩もよくとのつてゐる。尊像は一般に第二十六洞に似てゐるが、やゝ形式化してゐる。延載以後開元までにつくられたものとおもふ。³⁾菩薩のそとになほ神像を彫つたが、果して完成せるものかどうかかわからない。

¹⁾『伊闕石刻圖表』上冊、石窟表廿二には龍化寺といひ、龍花寺の訛であらうといつてゐる。

²⁾この洞外の記述は主として、『支那佛教史蹟』第二冊一一三、四頁による。なほ同書圖版一〇〇参照。

³⁾同書には南壁小龍に□□八年の紀年あるものがあるといふ。或は開元八年か。

⁴⁾なほ同書には本尊の左に小七重塔二基、左羅漢の左に小七重塔一基をきざむといふが、どんなものか不明である。博士の寫眞（研究所資料塚本二六三、二六四）にはこれにあたる小七重塔の寫眞があるが、極南洞とはおもへぬ。あるひは縣志大村氏の香山寺雙塔洞はこれをつたへるのではなからうか。